

重傷を負ってから艦娘が過保護すぎる件

青ヤギ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

提督として世界を守るべく指揮を執らなければならないのに、一度重傷を負ったことですからっかり心配性になってしまった艦娘たちに過保護に甘やかされる。そんなお話です。

本作はPixiv様でも掲載しています。

目次

生きねば	1
信じて帰ってきた鎮守府が……	8
決意とサラトガの柔らかかバスト	19
貫禄と衣笠のハグ	31
背伸び山風、提督を甘やかす	45
ビスマルクだってお世話がしたい 前編	62
ビスマルクだってお世話がしたい 後編	68
忠犬、初月	85
謎の艦娘《S》を探せ！	
明石「できました！ 艦娘に甘えたくなるお薬です！」①	98
明石「できました！ 艦娘に甘えたくなるお薬です！」②	112
天使、涼月①	128
天使、涼月②	142
陽炎の包容力	156
明かされる《S》の正体	166
不知火の思惑①	175
不知火の思惑②	184
そして提督は艦娘に甘える	198
甘く穏やかな日々	
ヴェールヌイと子作りしよ？ 前編	221
ヴェールヌイと子作りしよ？ 後編	229

優しくなった霞はなんでも言うことを聞いてくれるそうです

魔性の春雨	前編	264
魔性の春雨	後編	276
鈴谷のおしやれ講座		291

生きねば

「提督。もう頑張らなくていいんですよ?」

とても優しい声色で艦娘の少女たちは言う。

思わず身をゆだねてしまいそうな慈愛に満ちた囁き。

しかし、それは甘い毒である。

「いや、だが俺は提督として使命を果たさなければ……」

「いいえ、あなたはもう充分、使命を全うしました」

頭を撫でられる。

子どもの頃でも滅多にしてもらったことがない行為。

それを、いい大人になった歳でされる日が来ようとは。

いけない、情けない、と思いつつも抗えない。

とても気持ちがいいから。

「大丈夫です。提督のことは、私たちが守ります。何があっても」

艦娘たちに抱きしめられる。

とても柔らかい感触。とてもいい香り。優しい優しい声。

何もかもが心地いい。

このまま心が幼児に戻ってしまいそうだ。

どうして、こうなった。

俺は提督として深海棲艦から海の平和を取り戻さなければならな

いのに。

このままでは……

「提督。私たちに、いっぱい甘えていいんですよ♪」

艦娘たちにダメにされてしまいそうだ。

提督である俺は一度、生死の境を彷徨さまよった。

深海棲艦の猛攻が本拠地である鎮守府まで及んだのだ。

幾度にも渡る大規模作戦で常に勝利を手にしてきた我が艦隊。

だが敵のチカラは激戦を繰り返すたび凶悪さを増している。

艦娘たちが日々死に物狂いの訓練で練度と装備の強化をしても、まるで努力を嘲笑うかのように敵は予想を越える進化を果たしている。それでも海の平和を取り戻すという大義がある以上、自分たちに敗北は許されなかった。

何より、今度の大規模作戦は「かつてない戦いになるかもしれない……」と大本営が戦慄するほどの大決戦だったのだ。

ならば一層、気を強く持たなければならない。俺も艦娘たちも、そう覚悟していた筈だった。

……だが、まさか鎮守府に侵攻を許してしまうほどまでにチカラの差を見せつけられるとは。俺たちも、そして大本営すら予想していなかった。

鎮守府は瞬く間に地獄と化した。

もちろん艦娘たちは鎮守府を守るために必死に戦ってくれた。

だが敵が繰り出す破壊の一撃は、一瞬で鎮守府を半壊させるほどの威力を秘めていた。

艦娘たちは俺に「避難して」と言った。せめて、あなただけでも生き延びてと。

だが艦娘の皆が命がけで戦っている中で自分だけ尻尾を巻いて逃げ回るなんて……そんなことをしたら、男が廃るってものだ！

「俺は提督だ！ お前たちの上官だ！ 何があろうと、この鎮守府で指揮を続けるぞ！」

彼女たちを見捨てて生きるぐらいなら、いつそ腹を切ったほうがマシだった。ならばこの命は生死をかけて戦う艦娘たちのために捧げよう。

軍人として、そして男としての誇りを貫くため、俺は最後まで艦娘と共に戦った。

なにより、艦娘たちのチカラは提督が指揮することによってその真価を十全に発揮できるのだ。

比喩ではない。妖精を視認できる特殊な才を持つ人間との強い絆が艦娘の中に眠る超常のチカラを引き出すのである。

その条件として、提督が鎮守府という土地に『着任』している必要

があつた。だから俺が鎮守府を離れてしまうと、艦娘たちは弱体化し、満足に戦えなくなってしまう。

俺は、己に与えられたこの使命を死力を尽くして発揮した。意識が朦朧とする中、すべての艦娘たちを思い、指揮を執り続けた。肉体はひどく負傷していた筈なのに、もはや痛みすら感じなかった。

自分が相当危険な域にあるのはわかっていたが、それでも意識だけは手放すまいと闘志を燃やし続けた。

あの戦いは艦娘たちとの絆が最も強く結びついた瞬間だったと確信している。

だからこそ——勝てた。

敵軍のボスである深海棲艦が、おぞましい断末魔を上げて消滅するのを確かに見届けてから……俺の意識は闇に落ちた。

目が覚めると、俺は『英雄』として称えられていた。

——鎮守府陥落ノ危機ヲ覆ス、皇国一ノ名将！
などと御大層な新聞記事まで書かれていた。

気恥ずかしさを覚えつつも、その記事からどうやら作戦が無事成功したことを知り深く安堵した。

後から見舞いにやってきた軍の報告によると、艦娘たちも全員無事とのことだった。何事もなくて、なによりだった。

担当医師は俺の回復に心底驚いていた。

「さすがは提督の素質を持つ選ばれた武人ですな。正直に申し上げますと、意識が戻られる確率は限りなくゼロに近かったです。いやはや、とても強い生命力をお持ちだ」

昔からカラダが丈夫なのが自慢だったが、確かに今回は助かったのが不思議なぐらいの重傷を負った。

それでも無事目覚められたのは……きつと艦娘たちのおかげだろう。

何となく覚えている。意識が落ちた闇の中で、艦娘たちが必死に俺に呼び掛けてくれていたのを。

死なないで提督！

私たちにはあなたが必要なの！

お願い生きて！

帰ってきて、提督！

そんな痛切な祈りが奇跡を生んだのかもしれない。

艦娘たちの超常能力が提督との『絆』に深く関わっているというのなら、ありえない話ではない。

そう話すと、医師と、そして軍の人間たちはホロリと涙を流した。

「なるほど。そういうことも、あるかもしれませんな。貴方ほど艦娘たちと信頼関係を結んだ人間ならば」

こういうスピリチュアルな話は日本人特有の感性を刺激する。

いい大人でありながら彼らはすっかり涙腺を刺激されてしまい、オイオイと泣き出した。

俺もこのエピソードだけなら男泣きをしていたと思う。

だがしかし……。

実を言うと俺を現世に繋ぎ止めたのはもちろん艦娘のおかげもあるが、根本的な部分はもつと別の要因があったのだ。

それは、消えかけていた命の火を再燃させるほどのものだった。

人は死に向かう間際、やり残したことが走馬灯のように浮かぶ。

俺にもひとつの未練があった。それを果たすまでは死ねないと思っただ。

暗闇の淵で、俺はひたすらひとつのことを考えていた。

それは……

「嫌だ！ 童貞のまま死にたくない！ ドスケベなことしてから死にたい！」

その執念が俺を生き返らせた。

我ながら「しようもねえ……」とは思った。

だが本当に嫌だったのだ。

一度も女性を知らずにポツクリ逝ってしまっただなんて。

そんな人生あんまりではないか。

男の一生は鬪い。名誉ある死を遂げられたのなら本懐——という

精神は確かにカツコイイし、男として領けるものがあるが……

やっぱり一回くらいスケベなことは経験しておきたい。男^{オス}として。

そりや偉人の中には生涯童貞を貫いて逝ってしまった者が何人もいるが、彼らだって立派な格言の裏の本心では『女とエロイことしてえなく俺もなく』と涙目で思っていた筈だ。

そんな偉人たちの無念は後世の人間が果たさなければならぬのではないか!?

……とってはいるものの、俺も長らく軍人として生きてきたから、これまで出会いがまったくなかったわけですが。とほほ。

艦娘がいるじゃないかって？

たわけ。彼女たちはあくまで大切な部下だ。

そりや皆アイドル顔負けの美人だし、スタイル抜群な娘ばかりで正直イケナイ気持ちになったことは数えきれないほどあるが……艦娘たちには艦娘なりの人生や未来があるのだ。

仮にこの戦いが終わった後、彼女たちがどんな道を歩むのか。それはまだ想像もできないが、世界のために戦ってくれた彼女たちは誰よりも報われて幸せになる権利がある。それは間違いない。

ならば尚のこと、俺のいつときの性衝動で彼女たちの将来に影響を及ぼすわけにはいかない。

信頼関係を崩さないためにも、俺は常に誠実な提督を貫いてきたつもりだ。

種族の壁を越えた恋愛というのは、それはそれでロマンがあると思うが……やはり嫁を貰うなら、ちゃんと人間の女性から選んだほうが順当だと思うのだ。

……そう。俺には、その夢がある。

美人な嫁さんと結ばれて、毎日幸せにそしてエツツツツツ口いことをして暮らすという夢だ。

そのために必要なのは、深海棲艦に脅かされない平和な世界！

子どもたちが安心して育つことができる穏やかな未来！

それを作るのだ！

だから自分が提督の素質を持った人間と判明したときは天命だと思っただ。

俺は誓った。

必ずやこの世界の平和を取り戻し、未来の嫁さんと幸せになつてみせると！ 子作りしまくると！

それを果たすまでは、俺は絶対に死ねないのだ！

……なんてことを力説して、しんみりした場の空気を壊す勇氣は当然なかった。

よもや「意識の中で艦娘たちの声が聞こえてきたときですね、なぜか彼女たち皆全裸で現れたんですよ」という雑談もできそうにない雰囲気だった。

ほら、アニメーションとか漫画でよく見るあの演出である。しかも謎の光なし。

率直に言おう。最高の光景だった。

そのおかげで生命力（意味深）がたんまりと満ち溢れて「嫌童貞死！（嫌だ童貞のまま死にとうないの略）」と息を吹き返せたのだ。

だがそんなこと、口が裂けたって言えやしない。「台無し！ 感動エピソード台無し！」にも程がある。

なので、俺も周りに合わせて感慨に浸った態度を取りながら口が滑らないよう注意した。

途中から入って来た記者が「イイハナシダナー」と号泣しながら記事を書き始めたので、尚のこと慎重に口を噤んだ。

——英雄、童貞ヲ捨テルタメ、生還果タス！

なんて書かれたら、たまったもんじやない。

まあ、なにはともあれ。

こうして無事に生き延びた。

作戦も成功した。

万々歳である。

あとは一日でも早く完治して、艦娘たちを安心させなければ。

きつと、こうしている今も心配してくれていることだろうからな。

……俺のその予測は間違ってはいなかった。

信頼で結ばれた艦娘たちは、このとき確かに俺のことを心配してくれていたのだ。

提督冥利に尽きる話だ。

しかし俺は舐めていた。

艦娘たちの想いの度合いというものを。

俺のこの負傷が、まさか彼女たちを、あそこまで追い詰めてしまうだなんて……。

信じて帰ってきた鎮守府が……

俺が療養している間に敵がまた鎮守府を攻めてきたらどうするか、という不安があったが、とりあえずその心配は杞憂に終わった。

やはりあの戦いで敵勢力も相当消耗したらしく、脅威と呼べる深海棲艦はすっかり鳴りを潜めたらしい。近海に出現するのも、残存兵らしき弱小の駆逐艦ばかりとのことだ。

練度の高い艦娘ならばその程度の敵、艦装がなくとも拳ひとつで倒せる。

なので当面は病院でゆっくり過ごしても問題はなさそうだった。

激戦の後の休養のようなものだった。

おかげで、重傷だった怪我也も順調に治すことができ、俺は無事に退院した。

「うくん、やっぱり外の空気はうまいな」

片腕のギプスはまだ外れていないが、提督業に復帰しても支障はない程度には回復した。

今日からまた世界の平和を守るべく、そして未来の嫁さんとの幸せな（エロい）生活のため、提督業再開だ。

いつまでも上官が不在では、艦娘たちも気の毒だからな。

「長い間、鎮守府に帰ってこられなかったからなあ。アイツらには悪いことをした」

とは言っても、俺の回復スピードは医師が「本当にありえん回復力だ……」と驚くほどだったので、予定よりは早い復帰なわけだが。

もちろん、もう少しゆっくりしてもいいのではないか、とは言われた。

不肖ながら、あれほどの大戦果を残した後だ。確かに大本営に多少ワガママな希望を出しても、融通は効いた筈だ。

しかしそれならば、もっと別の方向で助力を求むことにした。

半壊した鎮守府の再建や、俺の帰りを待つ艦娘たちの支援などだ。

おかげで艦娘たちはあの戦いの後、不自由なくいつも通りの生活に戻れたらしい。

あとは俺の無事な姿を見せれば、完璧に元通りの鎮守府だ。

「おおつ。本当に直ってる」

鎮守府の門を通って、俺は感歎の声を上げた。

敵の攻撃であれほど蹂躪された建造物は、まるで時を巻き戻したかのように修復を果たしていた。

さすがは大本営だ。見事な仕事ぶりである。……実際凄いのは修繕作業を引き受けた妖精さんだが。

「ん？ あれは……」

入り口の近くで箒を持って掃き掃除をしている艦娘の姿を確認する。

あれは霞かな？ こんな朝早くから掃除をしているのか。感心か
んしん。

……でも気のせいか、ちよつとしょんぼりしているように見える。
気が強い霞にしては珍しい。ここはいっちょ声をかけて元気づけ
てあげるか。

「お〜い霞〜！ いま戻ったぞ〜！」

俺の声に霞は掃き掃除の手を止めて、ピクンと反応する。

「司令、官……？」

まるで信じられないものを前にしたかのように、霞は目を見開く。
真面目な霞のことだ。長らく鎮守府を留守にしたことを怒ってい
るかもしれない。

改二になってから少しは性格が丸くなった霞だが、こりやまたこつ
びどく「このクズがあ！ さつさと戻ってきなさいよ！」と叱られる
かな。

「司令官！」

「ん!？」

霞の説教に身構えていると、何と彼女は箒を放り投げて俺に抱き着
いてきた！

「よかった……やつと帰ってきてくれたのね」

「か、霞さん？」

予想外なことで、思わずさん付けしてしまう。

霞は温もりを確かめるように、ぎゅつと俺にしがみつく。

「もう、どんだけ心配したと思ってるのよ、このバカア」

いつもの強気な言葉遣いにも、覇気がない。

まるで捨てられた子猫のように、その声は弱々しい。

「バカ、バカッ！ 本当に、心配したんだから……うっ、ぐすっ」

霞はそのまま潤んだ瞳で、こちらを見上げてくる。

「よかった……司令官が無事で」

……え？ なにこのカワイイ生き物。

本当にあの霞か。いや、霞はもともと凄くカワイイけど。普段の数
百倍カワイイぞ、いまの霞。

「え、ええと、そんなに心配してくれてたのか？」

「あ、当たり前じゃないの！ このクスウ……」

んく、なんだろ。いつもどおりの「クス」がやたらと甘ったるく聞
こえる。

と、とりあえず。

「か、霞。わかったから少しチカラ緩めてくれ。ちよつと痛い」

「あつ、ごめんなさい！」

さらに意外。あの霞がこんなに素直に謝ってくるだなんて。

どうやら本気で心配してくれていたらしい。

あんなにも俺への当たりがキツかった霞がだ。

なんだよ、ちよつと照れるじゃないか。

思わずそう感慨に耽っていると……

「まさか、いままで傷が開いたの!? 死なないで司令官！」

「いや死なないよ!? これぐらいのことです！」

なに大袈裟なこと言つとるんだ!? いくらなんでも心配し過ぎで
すよ!?

「せつかく治つたのに、私のせいで……」

「か、霞？」

「ごめんなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ちよ、ちよちよつと落ち着けて霞！ 大丈夫だから！ ほら、ギプ
スは着けてるけどピンピンしてるから！」

目から光を消して錯乱し始めた霞を落ち着かせるべく、折れてないほうの腕をブンブンと振る。

すると霞はまた目の色を変える。

「ダメよ司令官！ 安静にしないとカラダに悪いでしょ！」

「え？ あ、はい」

何なんだ？ 本当にどうしちゃったんだ霞の奴。

まるで別人つてぐらい俺のこと心配して。

「司令官、いい？ 絶対に無茶しちゃダメよ？ まだ病み上がりなんだから！」

「わ、わかったつて。気を付けるよ」

俺が大人しくすると、霞も何とか冷静さを取り戻してくれた。

わからん。いったい霞に何があったんだ？

「と、とにかく、俺が戻って来たことを周知させたいんだけど。皆を呼んできて貰っていいか？」

「わかったわ。でもその前に……」

霞はきゅつと俺の手を握ったかと思うと、そつと、そのまま自分の頬に寄せた。

柔らかい、霞のモチモチほっぺ。

「お帰りなさい、司令官……」

いままで見たことのない優しいげな笑顔で、霞はそう言った。

思わず見惚れてしまった。

見た目は小学生くらいの少女なのに。

男心を揺さぶる、大人びた艶らしきものが、その笑みにはあった。

「あ、ああ。ただいま、霞」

返事もどこか浮ついた感じになってしまう。

いつもの霞ならここで「シャキつとしないさいよ！」と喝を入れるところだが……

「ほら、手を貸してあげる。一緒に皆のところまで行きましょ？」

今日の霞は異様なまでに優しい。

まるで子どもを慈しむ母のように、俺の手をそつと曳いてくれる始末だ。

思わず「かーちゃん……」と呼んでしまいそうになった。それぐらい、いまの霞からは深い母性を感じた。
いかん。変な趣味に目覚めてしまいそうだ。

霞の急な変化への戸惑いは、もちろんあったが……。

まあ、しかしだ。前のように険悪な態度を取られるより、いまのように柔らかな感じで接してくれたほうが良いに決まっている。

どこか物足りなさはあるけれど……負傷した身としては、いまこの労りはありがたい。

お言葉に甘えて、俺は霞の手を借りながら歩きだした。

「……もう、絶対に傷つけないから、司令官」

隣で霞がそうボソツと呟いた。

……もしかしたら、俺が深手を負ったことに、彼女は罪悪感を覚えているのかもしれない。

バカだなあ。あのときは俺が望んで戦火の中に残ったんだ。そんなこと霞が気にする必要はないというのに。

でも霞ですら、この調子だ。

他の艦娘も、負い目を感じて落ち込んでしまっているかもしれない。
い。

ここは早いところ元気な姿を見せて艦娘たちを安心させてやろう。

俺たちの戦いは、これからが本番なのだから。

大きな戦いを終えて、いつときの平穩を手にしたかのように思えるが、深海棲艦が全滅したわけではない。

戦況が静まり返ったときほど、敵の動向に注意しなければならぬだろう。

大本営は今回の大規模作戦の成功で俺を高く評価してくれている。

今後さらなる支援をすると約束してくれたし、見事に戦いを終わらせた暁には多大な報酬を用意してくれるとも言った。

何も富と名声に目が眩んだわけではない。

俺には責任があるのだ。

俺の行動、活躍次第では、部下である艦娘たちの戦後における扱

も変わってくる。

大戦果を残したからと言って、もし慢心して怠けていたら栄冠は一気に転落することだろう。そうだったら、命をかけて戦ってくれた艦娘たちまで、悪評に振り回されるかもしれないのだ。

信頼を築くのには時間はかかるが、失うのは一瞬だ。

そんなことに艦娘たちを巻き込むわけにはいかない。人類の希望である彼女たちの未来は、明るいものでなければならぬ。

もちろん俺の未来だって明るいものにしたい。

打算的ではあるが、幸せな家庭を築くためにも現実的に考えて予算は必要だ。除隊後、働き口が無事見つかるとも限らないしな。

そのためにも、やはり怠けてはいられない。今後ますます精進して、大本営の期待に応えなければならぬ。

……なにより、俺を英雄と信じてくれる人々の希望を裏切らないためにも、立ち止まるわけにはいかないんだ！

「霞。俺は、やるぞ。提督として、この世界を守るため（そして将来お嫁さんとエロいことをするため）きつと深海棲艦から海の平和を取り戻してみせる」

誓いを新たに、そう宣告した。

「霞ならきつと「当然よ」と頼もしい返答をしてくれることだろう。」

……しかし、彼女の返答は予想外なものだった。

「いいえ、司令官はもう頑張らなくていいのよ？」

「……はい？」

艦娘たちの様子がおかしい。

俺の帰還に誰もが号泣してくれた。

豪華な復帰祝いをしてくれ、中には「お帰りなさい！」と言って抱き着いてくる者もいた。

そこまではいい（飯はうまかったし、おっぱいの感触も堪能できたし）。

しかし、いつもツンケンとしていた霞の急変といい、艦娘たちがど

うも変だ。

なんというか……

すごく、過保護なのだ。

「ふう。入院生活が長引いたせいでカラダが鈍ってるなあ。ちよつと軽く散歩でもしてカラダ動かしてくるか」

「いけません提督！」

「え!? 何でダメなの大淀さん!?!」

「まだ治りかけのカラダで激しい運動をして心臓発作を起こしたらどうする気ですか!?!」

「ちよつと散歩してくるだけだよ!?!」

俺が外に出ようとすると、必ず誰かしら止めに入る。

何とか説得して外に出ることが許されても……。

「あの初月? そんなに警戒しながら歩かなくても大丈夫じゃないか?」

「甘いぞ提督。敵はいつどこから襲撃してくるかわからない。気を抜いたら終わりだぞ?」

外出時には必ず護衛の艦娘がついてくる。

敵影なんてまったくくない晴れやかな青空の下でも、キョロキョロと周辺を見回し、俺を守ろうとする。

ちよつと神経質になり過ぎではないだろうか。

最近は敵空母艦載機の目撃情報すらないと言うのに。

それでも艦娘たちは俺に危害が加わらないよう、常に厳戒態勢を敷いている。

本当に、いったいどうしてしまったんだ、彼女たちは。

「安心しろ提督。お前は必ず僕が守ってみせる」

やだ、この艦娘イケメン。

夜寝るときすら、誰かしら同衾するようになった。

「しれえ! 雪風がついている限り何も怖いことはありません! どうか安心してお休みください!」

「う、うん、ありがとな雪風」

「えへへ♪ しれえ！ あったかいです！」

最初のうちは甘えん坊な駆逐艦たちが一緒に寝たいのだろうとほほ笑ましく思っていたのだが……。

「提督……あの、今夜は、衣笠さんが一緒に寝てあげるね？」

「ここは譲れません」

「榛名は大丈夫です！」

「俺は大丈夫じゃないですー！」

ついには重巡や空母戦艦までが同衾すると言い出した時点で、俺はこの異常性を嫌でも理解しなければならなかった。

間違いない……。

艦娘たち全員、過度な心配性になっている！

俺のことを案じてくれるのは大変嬉しいが、いくらなんでも、これはやり過ぎだ。

このことを秘書艦筆頭である大淀さんに相談すると、彼女は切なげに語り始めた。

「提督。私たちは気づいたんです。あの戦いから、どれほどあなたが掛け替えのない存在かということを」

どうやら艦娘たちにとって、俺が死にかけたことは余程ショックな出来事だったらしい。

「提督が鎮守府に残って、最後まで指揮を執ってくれて、本当に嬉しかった。あなたのそんな優しく強い思いがあったからこそ、私たちは戦えたんです」

確かにあのときは艦娘たちと心がひとつになった感触があった。

もしかしたらその瞬間に、艦娘たちの意識に大きな影響を及ぼしたのかも知れない。

「提督が意識不明だと知ったとき、とても不安でした。もう二度と会えないんじゃないかって。そう考えただけで、とても怖かったんですっー！」

なるほど。

それで俺が少しでも傷つきそうになると、過敏に心配していたわけ

か。

「もうこの鎮守府であなたを嫌う艦娘は一人もいません。みな等しく、提督を尊敬し、お慕っています」

た、確かに、あの霞すら滅多に暴言を言わなくなったのだ。

霞だけじゃない。いつも反抗的だった曙と満潮までもがだ！

圧倒された。

まさかここまで彼女たちに敬愛されていたとは。

提督としても男としても誇らしいことだが。しかし……

「お願いです提督。どうかご理解ください。あなたを失うこと。それは私たち艦娘にとって最も恐ろしいことなんです。あなたのいない世界なんて……考えられません！」

「お、おう」

そうは言われても、いくらなんでも限度というものがある。

だって、さすがにねえ……

「いくらなんでも一緒にお風呂に入るのはマズイと思うんだけどな大淀さん！」

「いえ！ 入浴しているときこそ一番無防備になるんです！ こ、ここは大淀が責任を持って混浴し、提督の身をお守りいたします！」

顔真っ赤にして言うことか！ 無理しないでいいんですよ!?!

「大丈夫だって！ 何も起きないから！」

「で、でも、提督はまだお怪我をされていらっしやいますし、カラダを洗うのに何かと不都合でしょ？ よ、よろしければ大淀がすみずみまで洗ってさしあげます！」

なぜタオルで隠したところばかりチラチラ見るんですかね大淀さん……。

「遠慮なさらないください提督！ あっ！ も、もし裸を曝すのが恥ずかしいとおっしゃるのなら、わ、私も生まれたままの姿をお見せ

します。これで、平等ですよね？」

「ストップ！ タオルに手かけないで！」

童貞に美少女の生ヌードとかまだハードルが高すぎるわ！

そりや意識不明のとき夢の中で艦娘たちの裸見ちゃったけど……リアルだとぜんぜん破壊力が違う！ 刺激が強すぎる！

「で、でも男性は女性と抱き合ったり、性的興奮を催すとストレスが軽減されると伺いました。もしかしたら提督が元気になれるのをお手伝いできるかもしれません！」

別の意味で元気になつてしまおうわ！

ええい！ 鎮まれ分身よ！ 耐えろ！ いくら相手がたとえ食べ

頃の美少女でも彼女は大切な部下だ！

そういう目で見えるな！ 提督として示しがつかなくなる！

「提督、その……大淀でよければ、そういうことも、喜んでお受けいたします。私、提督のためなら、どんなことだって……」

「……」

……あ、まずい。一瞬「もう艦娘が嫁でいいんじゃないかね？」と思つてしまった。

「提督」

追い打ちをかけるように、大淀さんはどこまでも献身的な眼差しを向けてくる。

「命をかけて鎮守府に残ってくれた、そんなあなたを大淀はお慕……尊敬しています」

本当にどんなことも受け入れてくれそうな雰囲気を湛えて、大淀さんは身を寄せてくる。

「どうか、我慢なさらなくてください。これまで頑張ってきたご自分にご褒美を差し上げてください」

彼女の表情に、一粒の、妖艶が滲む。

「提督、いいんですよ？」

少女は囁く。

男を堕落させる、甘い蜜のように。

「私たち、艦娘に——いっぱい甘えても」

プツン、と理性の糸が切れかけた、その瞬間。

「よっこいせ」

壁に頭をぶつけて気絶することにした。

「きゃあああつ提督ううう!!」

すまない大淀さん。

素敵なお嫁さんと幸せに暮らすという夢を叶えるためにも、俺は立派な提督を続けなければならぬんだ。

だから、たとえどんなに艦娘たちが過保護に甘やかしてきたとしても、俺は絶対に屈したりしない!

英雄の名に恥じない漢を貫き通してみせる!

……と思いつつも「ちよつと勿体ないことしたなあ」と惜しみながら俺の意識は闇に落ちていった。

その後、艦娘たちの心配性がより重症化したのは言うまでもない。

決意とサラトガの柔らかかバスト

拝啓、天国のお父さん、お母さん。

幼少時、あなたたちを深海棲艦による空襲で喪^{うしな}ってから早数年。あなたたちの仇を討つため、世界の平和のため——そして未来の嫁さんとイチヤイチャするため、今日も俺は提督として戦う日々を送っています。

時期としては、そろそろ桜の蕾が芽吹く頃です。

この季節になると、毎年家族で見に行っていた熊谷桜堤の桜風景や、お母さんの作ったおにぎりや卵焼きの味が、とても恋しくなります。

怨敵である深海棲艦との戦いは、ひとつの節目^{ふしめ}らしきものを終えました。

恥ずかしながら世間から『英雄』などと持て囃^{はや}されています。

……ははは、笑っちゃうだろ？ あんな泣き虫坊主だった俺が『英雄』だってさ。

確かに小さい頃は世の中の男の子の例に漏れず『大きくなったら世界を救うヒーローになるんだ！』って言っていたけど……まさか現実になるなんてな。

図らずもひとつ、夢が叶ったわけだ。

なら、今度はもうひとつの夢を——お父さんとお母さんたちのように幸せな家庭を作るといふ夢を叶えたい。

俺が素敵な夫婦生活に憧れるのは他でもない。あなたたちが近所でも評判の仲良し夫婦だったからだ。

そりやもちろん、ときどき喧嘩もしていたけど、それすらどこか微笑ましい感じでさ。すぐに仲直りしちゃうし、見ている俺まで胸やけしちゃうぐらいのラブラブぶりだ。

まったく、参っちゃうよ。

でも、そんな二人の息子に生まれたから、俺は幸せだったんだ。だって、あんなにも温かで愛に溢れた家庭は、そうない。

いっぱいワガママ言っただけで迷惑かけて、いっぱい叱られもしたけど、

二人がどれだけ俺のことを愛してくれていたか、いまなら良くわかるよ。

二人が『人』として本当に大切なことを教えてくれたから、いまの俺があるって確信している。

そんな二人の老後は、誰よりも報われて、幸せに包まれたものでなければ、ならなかった筈だ。

俺も嫁さんを貰って、二人に紹介して、安心させて、育ててくれた恩返しをする筈だったんだ。

なのに……

ごめん、お父さん、お母さん。そっちに行くのは、もう少しの間待っていてくれ。

一度は死にかけて、二人のところへ行きたいって思いはしたけど……俺は天寿を全うするよ。

二人の分までちゃんと生きたいんだ。

生きて、生き抜いて——そして提督として人類の未来を守りたい。もうあのときのように、ただ理不尽に奪われるのは嫌だから。他の人たちに同じ思いをさせるのは嫌だから。

だから俺は、これからも戦うよ。

それが、あの火災でただ一人だけ生き残った自分の使命だと思うから。

世界に平和を齎して、平和な世界で嫁さんと幸せになってみせるよ。

何も恩が返せなかった罰当たりな息子が、唯一できる恩返しとして。

約束するよ。きつと素敵なお嫁さんと一緒にお墓参りに行く。

辛いことがたくさんあったけど、それでも今とっても幸せだよって報告するから。

だから、どうか安心してほしい。

あなたたちの息子は、英雄の名に恥じず、逞しく、強く生きたって誇れるように、俺ががんばるから。

……そう。だから、いま目の前にある試練だって、きつと乗り越えてみせる。

話は変わりますが、お父さんはよく俺に「人の厚意は素直に受け取りなさい」と言いましたね？

どんな形であれ、思いやりの気持ちを蔑ろにしちゃいけない。人の輪は他人を思いやることで出来ているんだから、と。

そのことを良く理解していたからこそ、お父さんはお母さんのような素敵な女性に巡り会えた。

いざというとき助けてくれる親友たちにも恵まれた。おかげで身寄りのなくなった俺を彼らは助けてくれました。本当に感謝しています。

他人を拒絶して自分のことしか考えない人間は、最後には孤独になることをお父さんは知っていた。そういう人間は、いざ本当に助けを必要とする状況に陥っても、もう誰も手を差し伸べてはくれないのだと。

お父さんとお母さんを失った後、幼い俺が胸に刻んだのはその教えでした。

辛くて悲しくても、それだけは絶対に守ろうと決めました。

おかげで、種族が異なる艦娘たちとも、心を通わすことができたのだと思います。

……そう。それだけなら良かった。

でも最近、素直に厚意を受け取ることが本当に正しいことなのか、わからなくなっています。

何故かって？

それは、このままだと、俺……

艦娘たちの思いやりの心に、ダメにされてしまいそうなんです。

朝、美人な女性に起こしてもらおう。

これだけ聞くと何とも夢のような話だ。

しかもそれが……

「提督？ Good Morning♪ そろそろ起きる時間ですよ？」

サラトガさんみたいな清楚なアメリカンビューティーに起こしてもらえるとしたら、男として舞い上がるほどに幸せな瞬間に違いない。

お父さんも洋画の女優とかお好きでしたでしょ？

俺も好きだったよ。たまにエッチなシーンとかあるものね。二人で鼻の下伸ばしながら見ていて、お母さんの拳骨を食らったあの日々が懐かしく感じられるよ。

しかしだ。

サラトガさんは、その記憶にある女優とは比べ物にならないくらいに美人で、面倒見の良い物腰の柔らかな淑女だ。

しかも途轍もないダイナマイトボディの持ち主と非の打ちどころがない。細身のカラダにどうやってそんな大きな二房がくつついているの!? と衝撃を受けるくらいデカイです。

デカイです（強調）。

そんなお姉さんに優しく透き通るような声で起こされたら、さらもう最高の目覚めのひと言。

洋画の主人公なら迷わず押し倒して「Oh Yes♡」なシーンに移行していたことだろう。

しかし、自分にそんな不埒な行いは決して許されない。

なぜなら、彼女は大切な部下だから。

俺の代わりに海に出て、命をかけて戦う艦娘たち。

そんな人類の希望である彼女たちに爛れた欲望をぶつけるなんて……艦娘たちの尊厳と誇りを踏み躪る裏切り行為に等しい。

そりゃ見目麗しい彼女たちの魅力に何も感じないわけじゃないし、いろいろ桃色の想像を膨らませたことはあるけれども——それでも

俺が提督である以上、越えてはならない一線というものがある。
なにより男女というのは結婚するまでは清い関係でいなければ。
と、思ってはいるんだが……

「あのサラトガさん」

「はい♪ 何ですか提督？」

「起こしてくれるのは、たいへん嬉しいんだけど」

「けど？」

「……そんなに抱きしめなくても宜しいと思いますことよ!？」

しかも赤ん坊にするように、胸の中で抱きかかえるように。

おっぱいが！ サラトガさんの特大ダイナマイトおっぱいがお顔に！

「でも、男性はこうされると元気が湧くとお聞きしていますが？」

その通りです。

男として生まれたなら誰もが求めて止まない女性のおっぱい。

その感触を顔面いっぱい堪能できるだなんて「最高かよ」のひとつ言。

しかもスタイル抜群の見た目も中身も超絶美人の超特大おっぱいだ。このまま昇天したって悔いはない。

しかし俺は誓った。

深海棲艦をすべて倒すまで、立派な提督として勤めると。

たとえ艦娘たちが魅力的でもあくまで上官と部下の関係でいると。

そして未来の嫁さんのためにも純潔を貫くと！

だからサラトガさん。

そんなに胸を押し付けしないで！ 特に朝はマズイから！

「提督。サラでよろしければ、たくさん元気にしてさしあげますね♪」
いろいろな意味で元気になってしまう！

お父さん。ご覧のとおりさ。

俺の一日は、こうして艦娘の誰かしらに起こされて始まる。

それも、だいたいは昨晚一緒に眠っていたのと同じように、抱きしめられた状態で。

誤解しないでもらいたい。そう命じたわけではなく、艦娘たちがあくまで俺を心配して同衾しているだけなんだ。

俺が重傷を負って生死の境を彷徨って以降、すっかり心配性になってしまった艦娘たち。

俺が見えないところで、また危篤状態になってしまうのではないかと気が気でない彼女たちは、こうして常に傍にいて何かと尽くしてくれる。

サラトガさんはもともと俺に対して好意的だったけど、まさか同じ寢床で一緒に眠るほどの関係になるとは思わなかった。

彼女ほどの美女と同衾して、狼にならなかった俺の鋼の精神力をどうか褒めてほしい。

厚意に付け込んで男の欲望をぶつけるなど言語道断と己を叱咤して、ようやく朝を迎えられた。

そう、彼女たちの行動は、あくまで無茶を働いた俺を思いやってのこと。

お父さんの教えの通り無下にしてはならない思いやりの気持ちというやつだ。

しかし、それでも……度が過ぎるとそれは重みに変わるのだと、ここ最近痛感した。

たとえば、俺が食事をするとき……

『おう、今日はカツレツかあ。では早速このナイフとフォークで……』

『いけません提督！』

『え？』

『もしナイフで指を切って失血死されたらどうするんですか！』

『どんだけ脆弱なんだよ俺は!?!』

こんな具合に些細なことでも心配してくる艦娘たち。

食器すらまともに持たせてくれないのだ。

逆に心が休まりません。

だが一番堪えたのはコレだ。

『お願いイク！ トイレのときぐらい一人にさせて！』

『ダメなの！ 用足してるときは、とつても無防備になるの！ イクがじつと見守っててあげるから安心して出すの！』

『出せるか！ こんなガン見された状態で！』

『出す！ 出すのおおお！』

『みぎゃああああ！ もう限界いい！ でりゅううううう!!』

お母さん。あなたに見守られながらトイレをした幼き頃を思い出しました。

とつても悲しい心境で。

重い。とにかく重い。

艦娘たちのご厚意が、過保護ぶりが、とても重くて、辛かいです。確かに、ここまで艦娘たちを心配性にさせてしまった俺にも非はある。

しかし、ここまで来ると、もうただの過保護とは言えない。

新種の過保護だ。

過保護改だ。

きつと改二が控えている。

怖い。

でも一番怖いのは、そんな艦娘たちに身を委ねてしまいそうになる自分自身だ。

どうあれ、美人揃いの艦娘たちにここまで思われて尽くされるなんて、一種の男の夢が叶ったと言える状況。

このまま流れに身を任せれば、そこには甘く心地いい至高の樂園が待ち受けていることだろう。

けれど、断言できる。

一度その坩堝るっぼに嵌まってしまったら、二度と抜け出せないことを。

そして、一度でも艦娘に手を出してしまった日には最後。

間違いなく、猿になる。年がら年中、発情しまくる。

そればかりは、やはり躊躇われる。

だって言わば、艦娘はかつての母国を救ってくれた英霊だ。

そんな彼女たちに劣情を覚えるのは、ひどく無礼な気がするとか、罪悪感が生じるというか。

極端なこと言ってしまうと、偉人の絵を見て興奮するようなものだ。

……まあ、世の中にはモナ・リザの手を見て下品にも勃起するような人がいますけどね。

とにかくだ。

人類が生存するためには、どうしても艦娘たちのチカラが必要となってくる。そんな彼女たちを指揮できるのは俺だけなのだ。ならば俺がしつかりしないでする！

絶対に、絶対に艦娘たちの甘やかして我を失ったりしない！

「んっ……提督。そんなに息を荒くされたら、あんっ……くすぐったいです♡」

……お父さん。早くもこの魅惑的おっぱいに負けてしまいそうです。

やめてよサラトガさん！ そんな色っぽい声出されたら本当に洋画みたいな展開になっちゃいそうじゃないか！

「うふふ♡ もっと提督のこと抱きしめてあげたいですけど、そろそろ総員起こしをしないといけませんね。名残惜しいですけど起きましょうか？」

そう言つてサラトガさんは、かけ布団を捲っていく。

え？ ちょっと待ってくれ。いま布団を捲られたら……。

「No！ サラトガさんストップ！ いま捲られるのはマズイYO！」

なぜかエセ外人風に止めたが、時にすでに遅し。

「Oh……」

サラトガさんが頬を真っ赤にする。

朝の効果とサラトガさんの特大バスの影響で完全に目覚めた我

が分身と見事にご対面してしまったのだ。

Oh……と俺も思わず呻いた。

「……あ、その。て、提督も男の人ですものね」

自由の国出身でも清楚なサラトガさんはこういうのに慣れていないのか。普段の余裕ある大人の表情は影を潜め、生娘のように恥ずかしげにオロオロとしている。

しかし、それも束の間。

顔を赤くしつつも、グツと拳を握って決心をしたかのように頷くと。

「提督……サラでよろしければ、その——すつきり、させてあげましょうか？」

「……」

Hey 鎮まれマイサン。

それ以上、起き上がるんじゃない。

コレだ。

俺が一番恐れているのはコレなのだ。

艦娘たちは、どこまでも純粹に俺を心配して献身的に尽くしてくれる。

だが、異常なまでに過保護になった彼女たちは、俺が望みさえすれば『そういう行為』だって懸命にしようとする。

しかし誤解しないでほしい。

何も彼女たちが淫乱と化したわけじゃない。

いまのサラトガさんのように当たり前のように恥じらいはあるのだ。

この間、俺に誘惑らしきことをしてきた大淀さんだって「提督と久しぶりに会えて舞い上がっていました！ どうかお忘れくださいー」と後で顔真っ赤にしなから謝って来た（何故かやたらと股間の辺りをチラチラ見てきたのは気になったが）。

そう、あくまで彼女たちは俺を思っつて男の喜ぶことを健気に実現しようとしてくれているだけだ。

逆に言えば、それだけ彼女たちに心を許されているということ。

男として誇らしいことこの上ない、至上の榮譽と言える。
据え膳食わぬは男の恥。

ここまで艦娘が勇気を振り絞って尽くそうとしてくれているのに、
それを受け入れない男は真のヘタレに違いない。

ああ、きつとその通りなのだろう。

だから……

俺はヘタレでいいんだい！

「シーユー、サラトガさん！ 先に着替えて待ってるからね！」

「えっ！ 提督!?!」

ごめんよサラトガさん。

一線を越えるってことは、つまり責任を取るってことなんだ。

サラトガさんのことはもちろん嫌いじゃないというかスグにお付き合いたいぐらい好みドストライクだが、やはり平和な世を作るまで俺に恋愛は許されなんだ！

シヨボンとするな分身。

この戦争が終わって無事結婚したら、ちゃんとお前も幸せにしてあげるから。

さあ今日も元気よく提督業開始だ！

「いけません提督」

「おうふ!?!」

いざ退室しようとする、背後からサラトガさんに思いきり抱き締められた。

必然的に『むにゆううううううううん』と背中に押し当てられる
巨大な双丘。

やわらかあああああい!!

「まだ怪我が治ったわけじゃないんですから、ちゃんと安静にしてくださいね？ サラのお願いです♡」

そう言つて俺を落ち着かせるように頭を撫でて『いいいいいい♡』

してくるサラトガさん。

こら、また元気になるな分身。

……ああ、だがしかし、本当に柔らかい。ナニこれ、本当にこの世に存在する物体？

あまりの気持ちよさに、身体から、チカラが抜けていく……

俺が大人しくなると、サラトガさんはまた俺の顔をたわわなバストに導いて、子どもをあやすように頭を撫でる。

「うふふ♡ 本日はサラが提督のこといっぱいお世話しちゃいます。どうかサラにいっぱい甘えてくださいね♡」

逃れられない。

どんなに決意を固めても、悲しき男のサガがこの甘い癒しに溺れてしまいたいと訴えてくる。

これが悪意ではなく純粋な厚意だというのだから、安易に拒むこともできない。

だからこそ……俺が理性を強く持つていけばいいだけなんだ。

諦めるな。負けるな俺。

きつとこの試練を乗り越えれば、ハッピーエンドな未来が待っているんだから！

「提督？ その……提督が望まれるようでしたら、本当にサラはいつでも、いいですからね？」

「……」

あゝあゝくっ！

やめろ！ 別のハッピーエンドを想像するなあああ！

お父さん、お母さん。どうか天国から見守りください。

息子が見事本能に打ち勝ち、栄光の勝利をつかみ取るその日まで。

そして、息子が無事運命の相手と巡り合えることを誰よりも信じていてください。

わりと本気で。

「さあ、提督♪ しつかり身支度をして、本日も素敵な提督として頑張
りましょうね。朝食はもちろんサラが食べさせてあげます。うふふ
♡」

ちなみにこの後、滅茶苦茶お着替えを手伝ってもらい、朝ご飯を「あ
くん♡」して食べさせてもらった。

貫禄と衣笠のハグ

あの激戦から数日。

警戒レベルの高い深海棲艦が、再び各海域に侵攻を始めたという情報、いまだに入ってきていない。

雑兵とも言える駆逐艦が出現している以上、敵勢力が根絶やしになったというわけではないが、不思議なことにそれ以外の艦種がまったく姿を見せないでいる。

凶悪な対空射撃で毎度空母を苦しめてきたツ級も、夜戦において恐ろしい牙を剥いてきたリ級も、戦艦たちによる強力な編成を文字通り無に帰してきた力級も、破壊の権化たる夕級やヲ級も——そして圧倒的なチカラで我々をねじ伏せてきた《鬼》や《姫》すらも。

倒しても倒しても湯水のように湧いて出てきた敵が、すっかり沈黙を決め込んでいる。それが、逆に不気味だった。

周囲に危害が及んでいないのであれば、それに越したことはない。かつての平和な海そのものの姿だ。

人類は、いつときの安息の日々を得たのかもしれない。

……そう、あくまで、いつときだ。

やはり俺には、この状況が嵐の前の静けさに思えてならない。

確かに我が艦隊は、歴代最高戦力とも言える敵の軍団に勝利した。

大本営の一部の人間は「もはや怖いもの無しですな!」と呑気に笑っていたが……頭の切れる者たちは「これで済む筈がない……」と懸念をいんでいる。

長年で培われた提督としての勘も、同じことを告げていた。

もし仮にだ。

もし敵が、さらなるチカラを身に着けて現れるとしたら？

最も恐れているのはソレだ。

敵のこの沈黙がチカラを溜め込んでいる期間だとしたら、いずれ、あの激戦以上の戦いが繰り広げられるかもしれないのだ。

ただでさえ、想像を絶するものだった戦いのさらに上に行く戦い……はつきり言つて、正気を保てる気がしない。

本音を言えば、そんな狂気じみたことは起こって欲しくはない。だが、俺の判断ひとつに世界の命運が懸かっている以上、常に最悪のケースは想定していなければならぬ。

やはり安穩としてはいられない。

何が起きても対処できるよう、警戒を怠らず、我々もより鍛錬を重ねていくべきだ。

そうなるか……やはり、俺に対してすっかり過保護になってしまっている艦娘たちの現状は宜しくない。

ある意味、平和な時間に慣れ過ぎて、腑抜けた状態と言っても過言ではない。

ここは上官として、喝を入れなければならぬだろう。

そうと決まれば、やることはひとつだ。

「お前たち！ いまから演習を行う！ 各々、あの激戦を思い出し、持てるチカラすべてを發揮せよ！ 手を抜くような真似をしたら承知しないからな！」

皆には済まないが、俺は今日から心を鬼にする。

これまでは「艦娘とはいえ、女性なんだから紳士的に接しなくては！」と態度や語気を強めるのは避けていたが、状況は変わったのだ。

彼女たちが過保護な女性へ変化したというのなら、俺も一新して厳格な提督になってやろうじゃないか。

そうとも。彼女たちが俺を子どものように甘やかすのも、俺に貫禄が不足しているからだ。

俺が厳しい態度を取れば、艦娘たちもきつと冷静になって、また以前のようになんか邁進することだろう。

よしつ。たとえば良い戦績が出たとしても、ここは敢えて辛辣な指摘を出そう。

正直胸が痛むが、皆の正気を取り戻すためにも、スパルタ形式を貫くのだ！

……でもさすがに何かご褒美用意しておかないと可哀想かな？

厳しさは大事だけどやり過ぎると俗に言うブラック鎮守府になっ

てしまうし、匙加減が難しいところだなあ……等々と悩んでいる間に演習が始まった。

艦娘のそれぞれが己の得意とする戦法で戦う。

鎮守府にしばしの間、砲撃と爆雷の轟音が響き渡った。

一通り済んだところで俺は演習を停止させ、総評を述べることにした。

「ふんっ。こんなものか、お前たち」

……と言うつもりだったが、実際に出てきたのは以下のセリフだった。

「あ、あれ？ みなさん、その……なんかメツチャ強くなつてませんか？」

嘘でも「こんなものか」とは言えなかった。

いや、だって……マジですごい迫力だったんだよ。

バトル漫画とかでよくある「なんと凄まじい闘気！ ここにいる俺まで吹っ飛ばされそうだ！ ぐわああああつ！」みたいなのを、まさか実体験するとは思わなかったよ。

おかげでいま腰が抜けている。膝とかガクブルしている。

ちよつと聞いてくださいますよ？ ウチの娘たちだったら、見ないうちに修羅みたいになってるんですよ？ こわーい！

「どうだ提督よ？ あの戦いから我々も一層鍛錬に励んできたのだ。貴方を守るためにな」

誇り高きビッグセブンである長門が、さらに凜々しいオーラを纏いながら、へたり込んでいる俺を立たせてくる。

男の俺なんかよりもずっと紳士的でカッコイイ。悔しい。

そして、二の腕に当たる彼女の豊満な乳房の感触に内心喜んでいる自分がとても情けない。

「ぽい！ 夕立、もう絶対に提督さんを傷つけさせないから！ どんどん強くなるっぽい！」

口調は駆逐艦らしく愛らしい夕立だが、その赤い眼光は「提督さん

を傷つける奴は……ろすっぽい」と殺意に満ち溢れていた。

やめて、ぽいぽい！ 子犬のように可愛かった頃のお前に戻っておくれ！

「提督。この神通、二度とあのような不手際は犯しません。この命に代えても、提督をあらゆる脅威からお守り致します。どうか、ご安心を」

「ア、ハイ……」

ゴメン神通。君の忠誠心は嫌と言うほど伝わってくるが、そう凄まじれると胃がキュウキュウと締め付けられて逆に落ち着けない。

覇気だ。覇気が見える。きつと霸王色だ。

凄まじい覇気を放っているのは神通だけではなかった。

艦隊すべての艦娘各々が活気と使命感に満ち溢れ、「二度と提督を傷つけてなるものか！」と瞳が語っている。

鎮守府一帯が「ゴゴゴゴ……」と重々しい空気に包まれているのは、きつと錯覚ではないだろう。

なんと勇ましき乙女たちか。そして、なんと想いが重い乙女たちか！
たった一度の上官の負傷で、彼女たちはここまで成長を遂げたのだ。

提督としては喜ぶべきところだが……それ以前にとにかく怖い！
なにその「睨んだだけで駆逐艦イ級程度なら瞬殺」できそうな眼光！

知らないうちに艦娘たちは、強さがインフレ化したジャ○プ漫画の住人みたいになっていた。

そんな彼女たちに言えることは、ただひとつだった。

「えっと……頼もしい限りです」

とりあえず、戦闘面に関して心配することは無さそうである。

深海棲艦が滅多に姿を見せない以上、出撃する機会は以前よりも減った。

だからと言って、提督としてやるべきことが消失したわけではない。

猶予ができたこのときだからこそ、積極的に遠征任務を効率よく指示していくべきだ。

もちろん処理すべき書類仕事だつてある。

むしろ、提督の主な業務は書類との睨めっこと言えよう。

膨大な書類の山はもちろん俺一人ではこなせない。毎度、秘書艦なる艦娘たちに補助してもらうのが通例だ。

午前中は演習に時間を費やした。午後となつたいまから手を付けないと、今日のノルマは達成できないだろう。

「今日の秘書艦は衣笠か！ よろしく頼むぞ！」

「うん！ 衣笠さんに任せて！」

明るい笑顔で気合いを入れる衣笠。

普段はお転婆でお調子者の面があるが、いざというときは他人を氣遣って心配してくれる、面倒見の良い艦娘だ。

そんなもともと世話好きな衣笠が過保護になつたらどうなつてしまうのか、と若干の不安はあつたのだが……

よかつた、見たところ以前と変わらない様子だな。

衣笠も一度は夜の護衛として同衾しようとしてきたが、劇的に態度が変わつた艦娘と比較すれば、まだ彼女の変化は大人しい部類と言える。

少なくとも、現時点では俺の記憶にある衣笠そのものだ。

……まあ、演習のときは他の艦娘と同じく修羅状態だったけど、艤装を解いた現在では、普段通りのJK染みた美少女として眩しい笑顔を見せてくれている。

「提督、頑張るのはいいけど無理はしないでね？ 困ったことがあつたら、いくらでも衣笠さんに頼ってくれていいんだから！」

病み上がりの俺を気にして、健気にそんなことを言ってくれる衣笠。

過度に干渉せず、一步引いた距離感で俺を手助けしようとする彼女の優しさが伝わってくる。

……そうそう、こういうので良いんだよ！ 思いやりの気持ちつてのはさ！

風呂やトイレに同行するとか、ナイフやフォークを持たせず「アーン♡」して食べさせるとか行き過ぎなやつじゃなくて、こういう些細な気遣いが一番嬉しいんだよ！

さすがは『隣に住む幼なじみにしたい艦娘ランキング（いま作った）』一位の衣笠。

わりと真面目な話、衣笠みたいな同い年の女の子が学生時代にいたら絶対に恋していたと思うわ。

衣笠が髪型をツインテールからサイドテールに変えたときとか年甲斐もなく本気でドキツとしたからなあ。

やんちゃだった小娘が、ある日いきなり大人の色香を身に着けた感じがして、すごく魅力的に映った。

いやあ、美少女つてちよつとイメチェンするだけで本当に印象がガラリと変わるもんなんだよね。

彼女が部下じゃなければ間違いないく「俺のために毎日鯖みそを作ってくれ」とイケメンボイスで求婚していたことだろう。

なぜ鯖みそかと言うと大好物なのだ。プロポーズするときには殺し文句として必ず使おうと思う。

王道のみそ汁よりもワンランク上っぽい一品を告白に用いることで撃破率120%は約束されているようなものだ。

ちなみに「鯖みそって臭うし骨取るのメンドクセーじゃん。ないわー」とか言う奴とは全面戦争する気なんで、そこんところよろしく。

さて、そんな《理想的なお嫁さん像》の一人である衣笠の手前、情けないところは見せたくないと思うのが男心。

演習の場面ではもの見事にヘタレなところを見せてしまったが、デスクワークならば俺の独壇場だ。ここらで名誉挽回と行こうじゃないか。

刮目するがいい衣笠。

訓練生時代に鍛えられた華麗な処理テクニクで瞬く間に書類を

片付け、改めて俺が頼りがいのある提督であることを印象付けてやろう。

人から「特技は何ですか？」と尋ねられたら「速筆力う……ですかね」と自信満々に答えられるぐらいのスピードだ。ビビるなよ。

ここでもでたく上官としての貫禄を取り戻せば、衣笠を通して他の艦娘たちが「提督つてやつぱりすごーい！」と認識を改めてくれるに違いない。

そうすれば、きっと彼女たちの過保護ぶりも治まることだろう。

一方的に甘やかされるだけの関係なんてやつぱり良くない。

本来、俺たちは共に助け合う仲間——そう、戦友フレンズなのだから！

さあ、気合い入れて書類仕事だ。

ふふっ……今日はちよつと本気出させてもらうぜ。

バトル漫画のライバルキャラみたく不適な笑みを浮かべて、いざ机に座る。

目の前には今日中に処理すべき書類の山が……

ない。

「あれ?」

いままさに神業のデスクワークを披露しようとしたのに肝心な書類獲物はどこにいったんだ?

せっかくペンを抜刀のごとく抜き払い、印鑑を銃のように構えたのに、これじゃ格好つかないじゃないか。

おかしい。

今日も大本営やあらゆる部署からいろいろ書類が届く筈なのだが……。

困惑の最中、ひとつの予想が頭の中に浮かぶ。

ま、まさか。

「衣笠さんや?　つかぬことをお聞きしますが、ここにあった書類はいずこへ?」

「ああ、それ?」

俺の質問に衣笠はニコリと実に爽やかにほほ笑む。

仮に俺と彼女が同級生で、放課後の教室に二人きりというシチュエーションだったら迷わず告白してしまうほどに魅力的な笑顔。

しかし、彼女が次に発言する内容を考えると震えが止まらない。

提督の立場を危うくさせるどころか崩壊させかねない一撃を秘めたひと言を聞くのが怖い。

待ってくれ、衣笠。

さすがに、さすがにそれだけは。

そればかりは、勘弁してくれないか？

じゃないと、俺が鎮守府（こ）にいる意味が……

「書類仕事なら朝のうちに、ゼーんぶ衣笠さんが終わらせておいたよ♪」

……あれ？ 変だな。花瓶とかガラス細工とかが落ちてないのに、何か割れる音がしたぞ？

ちよつと待ってくれ。

俺一人でも片づけるのに苦労する書類の山を、朝のうちに終わらした、だと？

「き、衣笠さん、さすがに冗談きつくはないか？ ダメだよお、書類仕事
が面倒だからって嘘ついてサボる口実作っちゃあ」

「ええ〜？ 嘘なんてついてないよ！ あれぐらいの量なら私じゃなくたって他の艦娘もスグに終わらせられるよ？」

なん、だと……。

「だって提督がいない間は私たちが書類仕事やってたんだから、もうすっかり慣れちゃったよ」

た、確かに。

俺が不在の間は艦娘たちに諸々の仕事を任せきりだったわけだし、必然的に彼女たちの事務能力が向上してもおかしくはない。

だが、それにしたって……君たち、スペック高過ぎやしません？

戦闘力が超常レベルの艦娘たちは、その気になればデスクワークも超常レベルに化すというのか。

人間と艦娘の間には、それほどまでに能力の格差があるというのか！
……あれ、おかしいな。どうしてこんな時に井戸のイメージが浮かんでくるんだろう。

呪いで有名過ぎるあの人の住処かな？

いやあ、最近はビデオテープなんてオーパーツレベルで見かけないから、呪い業界も世知辛いですよねえ。

あ、最近マブダチの人妻と合体したから問題ないんですか？ すつごーい。ふたりは最強の怨念を持った呪い同士フレンズなんだね。

……待って！ やめて！ 井の中から蛙かわずさん出てこないで！
とある『ことわざ』を俺に突きつけないで！

君は海なんて知らずに素直に井戸の中をずっと泳いでいなさい！
心配すんな、そこが世界のすべてだから！

え？ 現実から目を逸らすなって？

だって……だってっ！ 完全にやる事が無くなっちゃったよ！
提督として！

プライドがボロボロで泣きたくなるわ！

「衣笠！ 他に、他に俺にできることはないのか!? ていうかさつき『無理はしないでね?』って言った以上、書類仕事とは別にやるべきことがあるって解釈していいんだよね!」

「うん、もちろん。提督には大事なお仕事が残ってるよ?」

「だよな!」 俺にしか出来ないことは、まだあるよね！ 教えてくれ！ 俺は何をすればいい!」

「遠征から帰ってきた艦娘たちを笑顔で迎えてあげることよ♪」

だれにでもできるよ そんなことおとおおおとおお!!

他にやることはないかと尋ねても、ほとんどが提督業とは無関係なことばかり。

えらいこっちゃ。衣笠さんったら、最初から俺に仕事させる気ねえ！

彼女がやろうとしているのは、単に俺の身のお世話だった。

「提督！ 秘書艦の衣笠さんにいくらでも頼ってね！ お茶にする？ トイレ行きたかったら付き添ってあげるから言っただけ。あ、ちよつと早いけどお風呂にする？ す、少し恥ずかしいけど、衣笠さんがお背中流してあげるよ？」

それ秘書艦じゃなくて、もう介護艦だよ！

けつきよく衣笠も他の艦娘と同じく過保護全開かい！

裏切ったな！ ぼくの感動の気持ちを裏切ったな！

「ぐうっ！」

俺はその場で膝を折って打ちひしがれる。

己の無力を嘆きながら、ガクンとこうべを垂れる。

「提督どうしたの!? どこか痛いのか!?」

痛い？

ああ、痛いとも、おもに心がな。

あまりにも自分が情けなくて涙が出てきた。

「うう、俺はなんてダメな提督なんだ……せつかく鎮守府に戻ってきたのに、完全にいらぬ子じゃないか！」

俺が鍛えなくても艦娘たちは充分強い。

俺がやらなくても艦娘たちのほうが迅速に仕事を終わらせてしまふ。

俺はそんな艦娘たちに、ただ過保護に甘やかされるだけ。

なんと情けない！ こんな、こんな気持ちになるぐらいなら……

いつそのこと病院で美人看護師さんたちとイチャイチャしてれば良かった！

「提督！ そんな悲しいこと言わないで！」

号泣している俺を衣笠がぎゅつと抱きしめてきた。

以前なら「ひゃっほい！ 巨乳JK系艦娘にハグされたぞ！ 柔らかい！ いい匂い！」と内心舞い上がるところだが、いまは惨めな気持ちしか湧かない。

俺みたいなダメ提督に彼女の抱擁を受ける資格などない！

「優しくしないでくれ衣笠！ 頑張っている君たちに何も報いること

ができないこんなダメ提督に気を遣う必要なんてないんだ！」

「そんなことないよー！」

すごい剣幕で衣笠は大声を上げた。

いつものフランクな感じは微塵もない、真剣な声音だ。

「提督はこれまでずっと私たちと一緒に戦ってくれたじゃない！ 私たちをここまで育ててくれたのも提督。艦隊をここまで大きくしたのも提督。提督が諦めないで、頑張ってくれたから、いまの私たちがあるんじゃない！」

「き、衣笠……」

俺を抱きしめる彼女の顔を見してみる。

衣笠は泣いていた。

男なら決して女の子にさせてはならない泣き顔だった。

「提督、私、あなたが戻ってきてくれて本当に嬉しかったんだよ？ あれだけ酷い怪我を負ったら、普通の人ならもう提督やるなんて嫌になるのに……提督は戻ってきてくれたでしょ？」

「それは……」

妖精を視認できる特殊な人間にしか提督が務まらない以上、代わりに存在なんてそう見つからない。

俺が逃げたら、誰が艦娘たちの指揮をする？

命を懸けて戦ってくれた彼女たちを放って逃げるなんて、そんな不義理な選択肢、あっていい筈がない。

そんな当たり前の判断を、衣笠は嬉しいと言ってくれる。

「私たちが頑張れるのは、提督がいてこそなんだよ？ あの戦いだって、提督が諦めないで鎮守府に残ってくれたから、私たち勝ってたんだから」

「き、衣笠……」

「出撃でボロボロになつて帰ってきてても、提督が笑顔で出迎えてくれるだけで元気がもらえるの。私たちには帰る場所があるんだって、すごく安心できるんだ。だから、提督はいらない子なんかじゃないよ？」

そ、そんな。よせよ、そんな涙腺の緩むようなこと言うの……うわ

ああああつ！

「い、いいのか？ 俺、鎮守府にいていいのか!？」

「当たり前だよ」

再び柔らかなほほ笑みを浮かべて、優しく抱きしめてくる衣笠。

「私たちには提督が必要な。提督のいない鎮守府なんて、それこそ存在する意味がないよ。みんな同じことを思ってるんだから」

う、うううつ……本当に、本当に必要としてくれるのか。

こうして切実な雰囲気で抱きしめられて感動している今も、一方でだらしのないオスの本能が「衣笠のオツパイオツパイ！」と元気に腕を振っているような、しょうもない提督なのに！

「提督が元気でいてくれれば、それだけで、私たちにとっては充分な報酬だよ?」

「衣笠、そう言ってくれるのか?」

「うん。だからお願い。明るい笑顔で、遠征から帰ってきた艦娘たちを迎えてあげてね?」

「……うん、うん！ わかったよ！ それが俺にできることなら!」

そうか、俺にはまだ鎮守府にいられる理由があるんだ……。

ちやんと俺の居場所はある！ こんなに嬉しいことはない！

ありがとう、艦娘の皆。

俺、これからも君たちのために頑張るからな！

くつ。嬉しさのあまり、また涙が出てきたぜ。

「す、すまねえ衣笠。みっともない姿見せちゃまって」

「ううん。いいんだよ提督? いまは私たち二人しかいないんだから、衣笠さんの胸で、いっぱい泣いても……」

そう言うと、衣笠は俺の顔をそのセーラー服に包まれた胸元へと導き、ぎゅうつとさらに深く抱きしめてくれる。

「よしよし。みんなが遠征から帰ってくるまで、衣笠さんがギュツとしてあげる」

豊富な乳房で俺を包み込み、そっと頭を撫でてくれる。

うう、なんて優しい娘なんだ衣笠。

こんな上官思いの部下を持って俺は果報者だあ。

感謝の思いで胸がいつぱいになり、そのまま衣笠に身を任せていく。

「んっ……提督、いいよ？ 私の胸に、あん♡ もっと、もっと、甘えても♡」

ありがたいなあ、部下の思いやりの心というのは……ん？

いや、待て。

これ、ただ甘やかされているだけじゃない？

いや、どう見ても甘やかされてますよね!?

そう気づいたが、しかし時すでに遅し。

俺の頭はガツチリと衣笠にホルドされている。

動けん！ 衣笠の形の良い豊満なバストに包まれた状態から！

……いや、違う。

俺のカラダが拒否してるんだ。

この幸せな感触から逃れることを！

オスの本能が全力で「いーじやんいーじやん！ すげーじやん！

身を任せちやいなYO！」と喝采を上げていやがるんだ！

「ん♡ 提督、かわいい♡ もっつと抱きしめてあげるね♡」

衣笠の声色もどんどん甘く蕩けていく。

大きな胸がむにゅむにゅと形を変えて顔面にいつぱい広がり、ミル

クのように甘い香りが咽るほどに鼻腔を突いてくる。

これが仮に俺と衣笠が同級生で、初めて自室にお招きしたというシ

チュエーションだったら、もう間違いなくここから年齢制限がかけら

れる展開に……

いやいやダメだ！

提督としての貫禄を損なわないためにも、理性を強く持つんだ俺！

でも抜け出せない！

恐るべし、衣笠のハグ！

ま、まずい。

この調子じゃ俺、本当にダメ提督になってしまうかも。

抗いがたい抱擁に心地よさを覚える自分に危機感をいだきながら、この先どんな艦娘たちによる過保護な甘やかしが待ち受けているのか。

想像しただけで、戦慄を覚えられずにはいられなかった。

「提督……私、あなたのために、もつと頑張るからね？」

ただ、この純粋な思いやりは素直に嬉しいんだよなあ。

いや本当に、思いやりだけなら……。

背伸び山風、提督を甘やかす

「あの、提督……あたしに、甘えて、いいよっ！」

勇気を振り絞るように、幼い少女が腕を広げる。

司令室の窓から差し込む朝日に照らされるその姿は、まるでこの場に天使が舞い降りてきたのではないかと錯覚してしまいそうなほどに、儂く、そして美しかった。

本日の秘書艦である、白露型8番艦、山風。

八の字に垂れ下がった眉とボリュームのある緑色の髪が特徴的な、幼い駆逐艦の中でも特に小柄な艦娘。

そのわりに程よく膨らんだ胸元で、彼女は俺を抱き留めようとしている。

艦娘たちが過保護になってからというもの、以前では決して見られなかった側面を見せるようになった艦娘は何人もいる。

山風もまた、その一人であった。

着任当初は、自分に対しても他人に対しても、どこか投げやりな態度を取っていた山風。

同型の姉妹とすら滅多に馴れ合おうとしなかったほど、無気力な艦娘だった。

しかし、提督である俺や他の艦娘たちとの触れ合いを通じて、彼女も徐々に心を開いていき、自然な笑顔を見せるようになった。

不器用ながらも、他人を気遣う場面も増えてきた。

そして、現在。

いつものように困り顔を浮かべながらも、その瞳に慈しみの色を宿して、山風は俺のために甲斐甲斐しく世話を焼こうとしてくれている。

甘えさせる、という形で。

「あたし、その……提督のこと、いっぱい……癒して、あげるよ？」

「山風……」

彼女は本当に変わった。

ダウンナー系な雰囲気は相変わらずだが、自分の世界に籠もって他人

を拒絶していた当初と比べれば、とんでもない進歩だ。

なにより、付かず離れずの距離感を保っていた山風が、その小さな身体で俺を受け止めようとしてくれていていることに、感動を禁じ得ない。

山風も他の艦娘と同じく、負傷した俺を慮って、心境の変化が起きたものらしい。

本来コミュニケーションを取ることが苦手な彼女が、精一杯尽くそうとするほどに。

「山風、お前ってやつは……」

尊いとすら感じる気遣いに胸を打たれた俺は、ゆっくりと彼女の身体に手を伸ばし……

「いや、どう考えても甘えるのはお前のほうだろうがあああ！」

山風を抱えて『高い高い』してあげた。

「ふわっ!? て、提督?」

動揺する山風に構わず、衝動のままにそのチッコイ身体を宙に上下させる。

くうう、山風め。胸にジーンと来るようなこと言ってくれおってからに。

そんな微笑ましい態度見せられちゃ、イヤと言われようが構いたくなくなってしまっじゃないか!

退院以来、すっかり艦娘たちに甘やかされてばかりな俺だが、今回は違う。

今日は……俺が艦娘を甘やかすのだ!

成熟した艦娘相手だと、ついつい誘惑に駆られて冷静でいられなくなってしまう俺だが、山風のように幼い駆逐艦ならば平常心を保てる。

いくら人一倍スケベな俺でも、さすがに駆逐艦に欲情するほど倒錯した性癖は持ち合わせてはいないつもりだ。

だって、人間で言えば、彼女たちは小中学生の年頃だ。そんな彼女

たちに劣情をいだくとしたら……完全にロリコンじゃないですかヤダー！

俺は昔から年上好きの生粋のオツパイ星人だ。未成熟なカラダに決してときめいたりなどはしない。

……まあ、潮や長波、山風の姉たちである白露型、一部の陽炎型や秋月型のように、駆逐艦のくせにやたらと発育の良い駆逐艦もいるっちやいるけど。

山風もまた、小さい背丈に見合わない女性らしいスタイルを誇っている。

女性の肉体に成長し始めたアンバランスな肢体。そういったものを嗜好する手合いからすれば、彼女たちは間違ひなく垂涎的になるだろう。

けれども俺の場合、駆逐艦たちを前にして真っ先に湧くのは、やはり庇護の情であった。

穢してはならない。彼女たちは見守るべき存在なのだ、根付いた倫理観が俺を冷静にさせてくれる。

特に山風に対しては、その気持力が強く表出する。

それは、父性と呼ばれるもの。

山風が暖かな言葉を送ってくれたことで、その感情は現在進行形で膨れ上がっている。

いまなら全国のお父さんの気持力が良くわかる。

普段素っ気ない娘にある日「いつも頑張ってるお父さんに、お返ししたいの」と健気に言ってもらい、嬉しさのあまり舞い上がってしまう。いま、それと同じ心境を味わっている。

言葉と態度とは裏腹に、とても傷つきやすく、寂しがり屋な構ってちゃん。それが山風という艦娘だ。

複雑な感情に振り回される、第二次性徴期を迎えた少女そのものと言えよう。

そんな娘が心を開いて、「癒してあげる」なんて言ってくれたのだ。

これが感動せずにいられようか。

逆に思いきり甘やかしてやりたいと思うのが人情ではないか。

ここで優しい気持ちにならない人間は、よほどの捻くれ者に違いない。

つまり何が言いたいかというところ……

ちつくしよう！ 本当にかわいいな山風は！ 愛らし過ぎてどうにかかってしまいそうだぜ！

ということ、である。

「山風はいい子だな！ よしよし。ようやくギプスも外れたことだし、今日は目一杯遊んであげるからな！」

休日に子どもと遊んであげる父親の心境でそんなことを言う。

執務はもちろん大事だが、艦娘たちとの適度な触れ合いも提督として欠かせない務めのひとつだ。

幼い駆逐艦とのやり取りは、将来、子どもができたときの予行演習にもなるしな。

というか真面目な話、将来は山風みたいな娘が欲しいものだ。

こんな風に、さぞ溺愛してしまうに違いない。

むしろ、もうこのまま養子として引き取っても構わんぐらいだ。

山風、俺のこと「おとーさん」と呼んでくれていいんだよ？

「よし、山風、なにをして遊ぶ？ トランプか？ 将棋か？ それとも

『超リアル人生ゲーム（夢なんて存在しないハードモード）』でもするか？ 入院中に（一人寂しく）暇潰しするために用意した遊び道具がいっぱいあるからな。好きなの選んでいいぞ」

「ほんとお？ うわーい……って、違う〜」

俺の提案に一度は喜ぶ様子を見せる山風だったが、すぐに不満顔を浮かべる。

ノリツツコミなんて砕けたコミュニケーションまでできるようなったのか山風。おとーさん感動。

相変わらずスツゲー棒読みだけど。

「違うの、今日は、あたしが、提督のお世話……するのっ」

俺に『高い高い』されながら、足をジタバタさせる山風。

気の抜けそうな声色の中に、わずかに怒気がこもっている。

俺の対応が気に食わなかったのか、頬をプクッと膨らます始末

だ。

かわいい。

「提督、あたしに、その……何かして欲しいこと、ない？ 何でも……してあげるよ？」

「いたいけにも、そんなことを言ってくれる山風だったが。」

「と言われてもなあ……」

何でもしていいと言うのなら、山風の頭をヨシヨシと撫でたり、膝枕させてあげたり等、思いきり甘やかしたいところだけど。

しかしそう言うときまたご立腹してしまうだろうし。どうしたものか。

そもそもの話。

いくらなんでも駆逐艦に甘えるってのは……いや、さすがに、ないわー。

大人の色気ムンムンのサラトガさんにならともかく、幼い少女相手にいい大人が子どものように甘やかされるなんて、絵面的にも世間的にも完全にアウトじゃないか。

女学生寄りの大淀さんや衣笠に甘えることだって、本来なら危ういことだと言うのに。

しかし山風本人は、他の艦娘の例に漏れず、俺を甘やかす気満々らしい。

「提督、他の艦娘にするみたいに、あたしに、頼っても……いいよ？ あたし、がんばるから……」

「というか、これはアレだ。」

周りに対抗意識を燃やして、自分も同じように構って欲しいという幼児特有の背伸びではなからうか？

もしそうなら、なんと微笑ましいことだろう。

ますます山風の愛らしさが増していくではないか。

「ははは、いいんだぞ山風。その気持ちだけで充分嬉しいさ」

実際、この時点でもう充分癒されているようなものなので、紛れもない本音を伝えたのだが、

「むう〜」

しかし、山風的には納得できないようで、またもや頬をプクくつと膨らましている。

かわいい。突っつきたい。

「頼ってよ」

ジト目で意気地にそう言ってくる山風。

不機嫌な彼女には申し訳ないが、こんな態度すら微笑ましく感じる。

「だから大丈夫だって。怪我も充分治ってきたし」

「むうく……じゃあ、せめて書類仕事とか手伝ってあげ……」

「それはやめて！ 俺の唯一のやりがいを奪わないでくれ！」

なごやかな心地から一変。

反射的に切羽詰まった言葉を吐いてしまう。

書類仕事。これだけはたとえ山風でも譲るわけにはいかない！

「え？ でも、あれぐらいの量なら、あたしスグに終わせられ……」

「わかってる！ だがそれでも俺にやらせてくれ！ たとえ君たちよりも処理速度が遅くとも、俺がやりたいんだ！」

艦娘たちは俺でも手こずる書類の山をあつという間に片づけてしまう。

その事実が露見してから一時期本気でショックで塞ぎ込んでしまった俺だったが、せめてもの意地として、やはり最高責任者である俺が書類に目を通すということでは話は収まった。

というか、本来そうあるべきなのだ。

もちろん、過保護になった艦娘たちは「私たちがすべてやりますから」と甘々なことを言ってきた。

徹底して俺に何もさせないつもりのようなだった。

さすがに堪忍袋の緒が切れた俺は、ヤケクソ気味にこう言った。

『「こらお前たち！ 書類仕事させないと治りかけのこの身体でラジオ体操やってやるぞ！ 腕ブンブン振りまくってピョンピョン跳ねてやるぞお！ 俺の身体がどうなってもいいのかああん!? わかったら素直に俺に書類仕事をさせるんだよオラアアアン！』

俺の身体を人質にそう脅迫したら、艦娘たちは時代劇のように泣き

喚き、なんとか了承してくれた。

「というわけだから山風、俺のことを思うならどうか書類仕事という楽しみを奪わないでおくれ？」

「むう〜」

俺のお願いにも、やはり山風は不満げだ。

お手伝いができないことが、よほど不服らしい。

うくん、それならば。

「あつ、じゃあ俺のお膝に乗るつてのはどうだ山風！ そしたら俺たくさん元気が出てきて、すぐく仕事が捗ると思うな！」

小動物を膝に乗せると自然と癒されるように、かわいい山風が膝に乗ったら、それももう元気百倍になるつてもんだ！ もちろん危ない意味の元気百倍じゃないよ！

「提督の……」

「ん？ 何だい山風。お膝じゃなくて肩車のほうがいいか？」

「提督のバカ！」

「っ!？」

大声!？ あの山風が珍しく大声を出したぞ！

しかも泣いてる！

誰だ！ かわいい山風を泣かした奴は！

俺か！ ぶっ飛ばされてえか俺エ！

「提督のバカばか！ 何で、わかってくれないの!？」

自分を自分で殴ろうとした矢先、山風のほうからポカポカと拳を叩きつけてきた。

痛くはないけど、心が痛む行為だ。

「や、山風」

「どうして、あたしを甘やかすことばかりするの？ 違うの。提督が、あたしに甘えて欲しいのに……」

「い、いや、でもねえ山風。さすがに駆逐艦に甘えるのは情けなく感じるといっうか」

「あたしなんかじゃ、やっぱり、頼りにならないんだ……」

「え？ いや、そこまでは言っていないぞ?？」

いかんぞ。山風がまた昔みたいにネガティブモードに入っている。なんとかフオローせねば。

お、そうだ。

「山風ほらペロペロキャンディあるぞ！　これで機嫌直しておくれ！」

これが悪手だった。

子どもは子ども扱いされると余計に怒ることを、幼少時に自分も経験していた筈なのに。

山風はますます涙を浮かべて、怒りでプルプルと身体を震わせる。そして感情を抑えきれないとばかりに、拳をギュツと握って、

「提督なんて……大嫌いー！」

脳内に雷鳴が轟くほどの一撃を、俺の心に打ち込んだ。

「ぐはああああっ!!」

大嫌い、大嫌い、大嫌い……

その単語が頭の中でリフレインする。

っ、辛い。

娘のように可愛がっていた子に、こう直球に嫌いと言われることが、こんなに辛いだなんて。

「あっ……」

山風は「しまった」とばかりに、口を押さえるが、時すでに遅し。

山風にそんなことを言わせてしまった自分が情けなくて、俺はその場で膝を折った。

「て、提督、あの……あたし、そんなつもりじゃ……」

「は、ははは。い、いいんだ山風。お前の気持ちもわからずに、怒らせるようなことをした俺が悪いんだから……」

ダメだなあ俺。

これじゃ、いざ子どもができて、とてもいい父親になんてなれるわけがない。

己の不甲斐なさに落ち込んでいると、

「提督……」

ぎゅつと柔らかな感触に抱き寄せられた。

華奢ながらも、すべてを包み込むような温もり。

「や、山風」

俺の顔は彼女の胸の中に導かれていた。

「ごめん、なさい……。迷惑かけたいわげじや、ないの……」

傷つけたことを詫びるように、きゅつとさらに抱き寄せる。

……思っていた以上にデカイ。

って、こんなときに何てこと考えてるんだ俺は。

「ただ……わからない、から」

「え？」

「他に、お返しの仕方、わからないから……。だから、皆と同じこと、しようって思ってた……」

お返し。

そのひと言をきっかけに、俺は山風と出会ったばかりのことを思い返した。

『構わないで。ほっておいて』

何を言っても、何をしようとしても、山風はそう言っただけで他人の優しさを拒んできた。

だが、それは鬱陶しいから、という理由ではなかった。

そうだ。山風は確か、こう言ったんだ。

『優しくされても——何も、お返しできないから……』

着任当初、山風は戦うことを極端に恐れていた。

少しでも砲撃を食らっただけでも錯乱し、夜戦になると完全にパニック状態になる。

軍艦時代で経験した壮絶な過去がトラウマとなる艦娘は何人もいる。

だが、その中でも山風のは重度のものだった。

艦娘なのに、戦うことができない。

そのことを、山風はずつと負い目に感じていた。

決して口にはしなかったが、それが他人を病的に拒絶する理由なのは、誰の目から見ても明らかだった。

そんな山風に、俺は言った。

『戦えないのなら、無理に戦わなくてもいい。他のことで、艦隊に貢献できることを探そう』

そうして、俺はなんとか山風の居場所を探そうとした。

そうしなければ……良からぬ者たちの魔の手が、彼女に届きかねなかったからだ。

大本営の機関のひとつに、深海棲艦の生態研究を専門とする機関がある。

通常兵器が一切効かない深海棲艦の生態を解き明かし、艦娘以外の戦力——即ち人の手で討伐できる手段はないか、それを主に研究している。

優秀な人材が集まった組織だが……研究のためならば手段を選ばないマッドサイエンティストな側面がある。

その特徴のひとつとして、『半死状態の深海棲艦を生け捕りにし、サンプルとして寄せ』という命令が、以前に下された。

撃破された深海棲艦は、基本的に粒子状となって消滅してしまう。ゆえに、その生態の謎を解き明かすには、生きたままの状態で捕らえなければならぬ。

理屈では理解できるが……正直、倫理性を疑う行為だ。

艦娘たちも、この命令ばかりには罪悪感を募らせた辛い表情を浮かべていた。たとえ、相手が敵だとしても。

そんなマッドな研究機関が、ある日鎮守府にやってきた。

戦闘に参加できない艦娘がいるようですね、とイヤに愛想の良い笑顔で彼らはそうやってきた。

彼らの目的が山風なのは明らかだった。

正直、どんな話をしていたのかは覚えていないし、思い出したくも

ない。

難しい専門用語を並べられたところで、バカな俺に理解などできる筈もない。

ただ、奴らが好意的な口裏の中に巧妙に隠した本音だけは、聞き逃さなかった。

そう、決して言葉にはしなかったが、奴らは遠まわしにこう提案してきのだ。

——どうせ役に立たないのだから……■**駿サ**■**プ**■として、寄せよ。と。

傍らにある刀を抜かなかった自分を、褒めてやりたい。

仮にも相手は味方だ。

トラブルを避けるためにも、不用意な争いは避けるべきだった。

だから、努めて冷静に、穏やかに、俺は断りを申し出た。

『お言葉ですが、種族は違えども、艦娘もひとつの命です。安易な発言は、どうか控えていただきたい』

できる限り抑え込んだつもりだったが、どうやら上手くいかなかったらしい。

連中は顔面を真っ青にして、ガタガタと震えていた。

眼力ひとつで怯む肝の小ささに呆れつつ、俺は続けた。

『戦闘に参加できなからうが、彼女は私の大切な部下です。彼女の今後の処遇は私自身が決めます。ですから、あなたがたのお世話になるようなことは一切ございません。どうか、お引き取りください』

そう言うと、彼らは逃げるように退室して行った。

見送らないのはさすがに無礼なので、帰り道は神通にご同行を願うことにした。

その後、彼らが鎮守府に顔を見せることも、過激な命令をしてくることは、なくなった。

どうやら大本営が大々的な人事異動をおこなったとのことだが……まあ、もうどうでもいいことだと、ある報告書と共に記憶の片隅

に押し込んだ。

その出来事の後からだ。

山風が、とつぜん俺にこう言ってきた。

『あたし……戦うよ。お願い……出撃、させて?』

何が彼女を突き動かしたのかは知らない。

ただ、戦う意思を見せた山風は、改二勢にも引けを取らないほどの戦果を上げた。

『あなたも……沈めば?』

いまや山風も、大規模作戦には欠かせない、強力な戦力となった。

「あたし、ずっとお礼が、言いたかった。こんなあたしを、提督は見捨てなかった……守って、くれた」

「山風、まさかお前……」

聞いていたのか。あんな胸糞の悪くなるような話を。

「このまま戦わなかったら、もっと怖い目に遭うかもしれないんだって思ったら……震えが止まったの」

そうか。山風は自分の身を守るために、戦うことを選択して……

「それとね……」

「ん?」

「……嬉しかった、から。あたしみたいな、艦娘を、大切って言ってくれて……」

ぎゅっと、山風はより深く、俺を抱きしめる。

「だから、頑張らなくちゃって、思ったの。提督の、期待に、応えなくちゃって……」

「山風……」

言葉が出なかった。

彼女はその小さな身体で、どれだけの恐怖を乗り越えて、勇気を出したことだろう。

「戦いも、夜も、怖いよ? でもね、皆が、一緒だから、大丈夫になった。皆優しく、暖かくて……だから、ずっとここに、いたいって思えた」

覚えている。

お祭りのとき、パーティーのとき、困り顔を浮かべながらも、皆の中に溶け込んでいった山風に、もう悲壮の色はなかった。

「提督が、見捨てなかったから、あたし、いま、ここにいられる……。だから、お返し、したいの。だってあたし、提督にまだ、何も、お返しできてないから……」

そんなことはない。

山風が仲間たちと打ち解けて、元気に過ごしてくれさえいれば、それだけで充分なお返しだ。

……でも、それじゃ納得できないというのであれば――

「山風」

「え？」

「実はさ、昨日はあんまり良く眠れてなくてさ、ちよつと仮眠したいんだ」

塞ぎ込んでいた少女を、笑顔にすることができるのなら、

「よかつたら、膝枕してくれないか？」

ちよつと恥ずかしいことだって、どうってことない。

「提督、気持ちいい？」

「おう。こりや最高の膝枕だ」

「そつか……えへへ♪」

機嫌良さげにほほ笑む山風。

よかつた、やつと笑ってくれたな。

弾力に富んだ太ももの上に頭を乗せつつ、俺もつい緩んだ笑みを浮かべる。

うーん、お世辞抜きで本当に心地がいい。

華奢な身体で膝枕なんて大丈夫かとちよつと心配していたが、思いのほかポリウームのある太ももは、俺の後頭部を柔らかく受け止めてくれている。

いかんな、本当に眠ってしまいそうだ。

優しく頭を撫でてくる山風の手つきも気持ちがいいし。

最初は躊躇していたけど、たまには、こういうのも悪くないかもしれないな。

滅多に見れない、山風の笑顔も見れることだし。

「……提督、あのね？」

「ん？」

「提督が、死んじゃうかもしれないって知ったとき、すごく……怖かった。もう、二度と会えないんじゃないかって考えると……夜、一人でいるよりも、ずっと怖くなった」

「……」

「だからね。恥ずかしがらないで、素直になろうって、思ったの……提督と、いっぱい、思い出、作りたいから……」

「そっか」

山風の悲しげな眼差しを受けて、改めて実感する。

自分は本当にバカな真似をしたのだと。

彼女たちをここまで追いつめてしまうほどに、心配させてしまったのだと。

だからこそ……

「心配するな山風。いまは、こうしてピンピンしてるだろ？」

ぎゅっと、山風の小さな手を握る。

確かな温もりを、お互いに伝え合う。

「約束する。もう無茶なことはいしない。お前たちを放って、どこかに行ったりするもんか」

「提督……うん」

きゅっと、山風は強く俺の手を握り返した。

「約束、だよ？　もう、あんなことしちゃ……やだよ？　だって……」
頬をほんのりと赤く染めて、モジモジしたかと思うと、山風は
気恥ずかしそうに唇を開いた。

「その……提督のこと……嫌いじゃ、ないから。居なくなると、寂しい……」

握りしめた手に、指を絡めてくる。

決して離れないように。

「また、一緒に間宮とかに、行きたいから……だから」

「ああ、そうだな。行こう。他にも、いろんな場所に」

そう。不安なんて、楽しさで打ち消してしまえばいいんだ。

またここから、作ってあげばいい。艦娘たちとの思い出を。

そうすれば、いずれ彼女たちも元通りに……

ふわ。ヤバイ、本格的に眠たくなってきたな。

ちよつとの間だけ膝枕してもらうつもりだったけど……せつかくだから、このまま本当に仮眠を取ってしまおうか。

山風も、嬉しそうにしてくれていることだし。

瞳を閉じて、幸せな微睡みの中に落ちていく。

「……提督？ 寝ちゃった？」

山風がそう尋ねてくる。

ちよつと悪戯心が湧いて、このまま眠ったフリをして反応を伺ってみることにした。

山風は引き続き、手をきゅつと握りながら、もう片方の手で、頭を撫でてくれる。

「……あのね？ さつきは素直になるって言ったけど……まだ少し、勇気が出せないから……いま言っちゃうね？」

それは、いままでに耳にしたことがない、とても透き通った優しい声色だった。

「提督、いつも、ありがとう。あたし、この鎮守府に来て、よかった」
思わず涙腺が緩みそうになるのを堪えた。

山風エ……この、キュンと来るようなこと言ってくれちゃって。

起きたら思いきり『イイコイイコ』してあげるからな！

そう密かに感動に震えていると……

「——んっ」

ファサツと、絹のような感触が頬をかすめる。

これは山風の髪か？ 何で？ と疑問に思っている間に、少女の香りど、熱い吐息を顔間近に感じた。

一瞬、唇の辺りに躊躇うような吐息が当たったかと思うと……

——ちゅっ

頬のあたりに、とても柔らかかなものがあてがわれた。

……え？

ちよつと待つて。もしかして、いまのつて……

「~~~~っ！」

頭上から声を押し殺した唸り声が聞こえてくる。

「な、なに、やってるんだろ、あたし……はわわ……」

心なしか、頭の下の方も熱が帯びていく。

や、山風さん？ あなた、まさか……

一通り悶えると冷静になったのか、じつと見つめてくる山風の強い視線を感じた。

おもに、唇のあたりに。

「でも、いつかは、ちゃんと……してあげたいな」
何を!?

というか山風さん、何その駆逐艦とは思えない色っぽい声!?

激しい動揺から飛び起きた気分だったが、いま起きれば大騒動間
違いなしなので、俺は必死に眠るフリを貫き通した。

山風はまるで何事もなかったかのように、再び俺の頭をナデナデし
始めた。

「寝てる提督……かわいいなあ……。いまだけ、独り占めしても……
いいよね？」

まるで宝物に触れるように、山風の手つきはとても優しかった。

な、何だこの胸の高鳴りは。

まさか、俺、山風相手にドキドキしているのか？

駆逐艦相手に!?! 娘のように可愛がってきた山風に!?!

ち、違う! 俺は、ロリコンなんかじゃない!

そうさ! 実際、抱きしめられたときに味わった山風の意外にたわ

わなおっぱいの感触とか、ムチツとした太ももの感触で興奮したりしていな……

おい、待て。

なに立ち上がろうとしてるんだ、我がムスコ。

ダメだぞ!! 駆逐艦相手にそんなことおとおお!!

「よしよし……ふふ♪ 膝枕って、いいかも。なんか、癖になりそう」

俺の葛藤も知らず、山風は無邪気に俺の頭を撫で続けるのであった。

俺も癖になっちゃったらどうしよおとおお!!

ビスマルクだつてお世話がしたい 前編

今日も今日とて俺は、書類仕事という提督として立派な業務を全うしていた。

他にやることはないのか、とか、艦娘に任せたほうが早いのに非効率的な、という指摘は、どうか勘弁願いたい。

たとえ飾り物の上官だとしても、上官としての自覚を持って執務と向き合うということが大事なのだ。

以前のように、威厳ある提督として返り咲くことを俺は諦めていない。

……とは言ったものの、戦闘回数がめっきり減ったためか、最近は作戦関係の書類もなくなってきた。

届く書類といったら、式典の提案やら、自治体が企画したイベントに艦娘を参加させたいといった要請等々……凡そ世界救済とは程遠いものだ。

もちろん、こういった世間に向けた艦隊のイメージ作りも、大事な務めなわけだが……

こうして執務にまで安穩とした空気が入り込むと、ますます平和ボケしていきそうで怖い。

「えっと、なにになに？ 第二次瑞雲祭りの企画書？ まあ日向が狂喜乱舞するから良いだろう。承認つと」

またひとつ、あっさりと仕事が付く。
このペースだと夕方には終わってしまいそうだ。

俺のやる気に反して、こなすべき仕事の量は日に日に減っていつている。

くそう、時間に猶予ができると艦娘たちとの甘々な時間が長引いてしまうぞ。

そうになると、また理性と本能のフルファイトが勃発し、俺の神経をすり減らすことになるのだ。

美女、美少女たちに甘やかされるのは確かに幸せなひと時だが、自分はそのに溺れてはならない立場なので、結果的に本能との戦いで疲

弊することになるのだ。

正直普通に仕事しているときよりも辛い。

なまじ性根がスケベなぶん、人一倍、苦勞する。

少しでも気が緩めば最後、どんなことでも受け入れてしまう甘々な艦娘たちの厚意に付け込んで「グへへ」な展開に直行してしまうことだろう。

ブラック鎮守府ならぬピンク鎮守府の完成である。

天国のお父さん。男って、どうしてこう悲しい生き物なんだろうね。

……もつとも、いま目の前にいる艦娘に対しては、そういう心配はしていないが。

「アトミラール。何か助けが必要なら、このビスマルクを頼ってくれてもいいのよ？」

砂金のように眩い金髪ロングストレートの美人が、仁王立ちして大きな胸をぶるんと揺らしながら、自信ありげにそう言う。

最近、俺のことをなぜか「提督」から「アトミラール」と呼ぶようになった、ドイツ戦艦ビスマルク。

その佇まいからは、規律を重んじるドイツ艦隊に相応しい凄みを感じさせ、一方で、深窓の令嬢のごとき美貌は、同性ですら夢見心地の世界に導いてしまうのではないかと思うほどに、どこか神々しい魅力を秘めている。

ボディスーツ染みた服装は、彼女の凹凸の激しい魅惑的な肢体をぴっちり浮かび上がらせており、生地が複雑に切り取られた部分からは、生白い肩や背中、乳房の付け根が惜し気もなく曝されている。

スカートは履いておらず、丈の長い上着だけで下半身を隠している。姿勢によっては形の良い豊満なヒップはもちろん、大胆な黒の紐パンツが見えることになる。

息を呑むほどの美女が、そんな際どい恰好をしていれば、どんな男性だって前屈みになって、否応なく淫らな妄想に駆り立てられること

だろう。

かくいう俺がそうである。

出会った当初は、彼女の前で平静なフリをするのに相当苦勞したものである。

だが、それも最初のうちだけだった。

俺は知っている。

確かにビスマルクは美人揃いの艦娘の中でも、ひと際美人の超ナイスバディな海外艦。

だが、しかし、その実態は……

「手伝い？ いや、特にないぞー」

やんわりと断りを入れると、ビスマルクはピクリと笑顔を引き攣らせた。

「え、遠慮することないのよ？ なんならその書類仕事を手伝ってあげましょうか？」

「ダメだ。俺の生きがいを奪わないでくれ」

「じゃ、じゃあ、他にやって欲しいこととか……」

「だから大丈夫だって。暇だったらその辺にある漫画持っていつていいからさ。ほら、ジョジョの五部まだ読んでなかったろ？ 面白いから是非読破をオススメす……」

「アトミラール！」

俺の声を遮って、甲高い声上がる。

「なああああんで頼ってくれないのよおおおお!!」

視界がビスマルクの泣いた顔で埋め尽くされる。

その泣き方はとても大人びた美女がするものではなく、どちらかと言うと幼い子どもが「ギャアギャア」とワガママを言うときにするような顔だった。

「なによなによ！ 他の艦娘には散々甘えておいて！ わ、私じゃ頼りにならないってわけかしら!」

「おい、そんな間近で怒鳴るなって。耳がキーンってするだろ」

あと、言うほど艦娘に甘えた覚えはないぞ。……ないよね？

「泣くなよビスマルク。悪気はなかったんだって。ほら、どら焼きあ

るからこれでも食って機嫌直してくれ」

「え。ど、どら焼き!? ……ふ、ふん! 呆れちゃうわね。こんな子ども騙しで、はむっ、誤魔化せると思ったら、むぐ、大間違いなんだから、はむはむ、んうくく♡」

文句を言うわりには、ご機嫌にどら焼きを頬張るビスマルク。

異国の艦である彼女が早くこの国に馴染めるようにと、よく日本の食べ物を食べさせてきたが……すっかり和の文化に染まったなコイツ。

いまだってハムスターみたく口いっぱいに入れて食べてるし。

さて、ご覧のとおり、このビスマルクという艦娘。

見た目は淑女^{レディ}、中身はお子様——を地で行く残念タイプの美女なのだ。

少しでも褒めるとすぐに調子に乗って高飛車な振る舞いを見せ、褒めないとすぐに機嫌を損ねる。

三食料理を他人に作ってもらうことを当たり前だと思っており、自分から用意するという発想すらない。

そして先ほどのように自分の思い通りにならないと、わあわあと目をバツテンにして騒ぎ出し、お菓子をあげるとコロっと笑顔になる。

肉体の成長に、まったく精神が追い付いていない。

まさに、カラダだけが大人というやつだ。

当初はえらい金髪美人が来たなひゃっほいと内心舞い上がった俺だが、その子ども染みた本性を知って以降は、「まあ、現実はこのなもんか」と彼女に高望みな幻想をいだくことはやめた。

いまや、ほぼ駆逐艦と同じ感覚で接するようになってる。

とはいえ、決して悪い子じゃない。

ちよつと傲慢っぽいところはあるが、命令は素直に聞いてくれるし、その自信相応の実力で、これまで多くの戦果を残してきたのも事実。

それに、自分の気持ちに正直なところとかは、却って好ましく思えるぐらいだ。

そういうわけで、俺の中でビスマルクは『少々の手のかかるカワイイ妹分』という立場なのだ。

そんなビスマルクは現在、他の艦娘と同様、俺の世話を焼きたがっている。

負けず嫌いな彼女らしく対抗意識を燃やしたのでろうが……正直、ビスマルクに甘やかされたところで「微笑ましい」という気持ちしか湧かない。

ルックスだけなら俺の『ムスコ』いわく『ドチャシコこの上ない』そうだが、いかんせん彼女の中身が幼いことを知っているぶん、辛うじて理性がストップをかけてくる。

山風の時と同様、そういう目で見ちやイカン！ と。

前もって言うておくが、俺は決してロリコンなどという引き返しよりのない魔境に陥った覚えはない。一切。断じて。

如何にカラダは大人でも、その精神年齢が幼いのであれば、よこしまな感情を向けてはならないと、真つ当な結論に辿り着く程度には、俺も良識を備えている。

現にいま、背伸びしては空回りしているビスマルクに対して芽生えている感情は、実に和やかな類だ。

まったく、どら焼きひとつでこんなに喜ぶなんて。愛い奴よ。

「ビスマルク、よかつたらもう一個食べるか？」

「いいの!?! 貴方って相変わらず気が利くのね……って、ハッ!?!」

嬉々として二個目のどら焼きに手を出そうとしたところで、ビスマルクの顔つきが迫真めいたもの変わる。

違う、そうじゃない。と言わんばかりに。

「わ、私ばかり食べるのも悪いわ！ アトミラーも食べなさい！」

「え？ 俺は別にいらな……むぐっ！」

「ほ、ほらっ！ このビスマルクが『あーん』って食べさせてあげるわ！ ありがたく受け取りなさい！」

「モゴモゴー！」

「あ、あら、アトミラーつたら、そんなにガッツいちやって。私に食べさせてもらったのが、そこまで嬉しかったの？ ま、まったく、しょ

うがない甘えん坊さんね♪」

なわけあるかい！

どら焼き丸ごと口に押し込まれて苦しいんじやいボケ！

ズズズ……ぷはぁ。ちようどよくお茶を淹れていたから助かった。

危うくまた生死の境を彷徨うところだったぞ。

どら焼きで。

「どうアトミリアル？ 私だってやろうと思えば他人のお世話ぐらいできるのよ？ どんどん頼るといいわ！」

いやいや。ビスマルクさん、ヘタしたら君、重傷から回復した俺にトドメ刺そうとしてるからね？

はぁ……。案の定、このお姫様気質のビスマルクに、人のお世話は無理難題のご様子。

本人はその自覚がない上に、やる気満々だと言うのだからタチが悪い。

俺、今日、無事でいられるかな？

ビスマルクだつてお世話がしたい 後編

その後もビスマルクは何かと「私に頼りなさい！」と絡んできた。四方八方にピョンピョンと飛び回って期待の眼差しを向ける姿は、さながら猫である。

可愛らしいっっちゃ可愛いらしかったが、これでは仕事に集中できない。

なので適当にお願い事をすることにした。

「そんなに言うなら司令室の掃除をしてもらおうかな」

「えく。なんか地味じゃないそれ？」

こ、こやつめ。自分から「頼れ」とか言っておいて、お願いの内容に不満を洩らすとは。

「まあ、いいわ。私にかかれればこの埃っぽい司令室も、王室みたいに華やかな部屋に様変わりするんだから」

と、何だか言いつつ、ビスマルクは自信満々にハタキを持って掃除を始めた。

ほっ。これでしばらくは静かになる。

……が、やはり普段家事などしないビスマルクがマトモに掃除できる筈もなく。

ビスマルクが見てないところで柵から物は落ちるわ、埃はなぜか俺の顔目がけて舞ってくるわ……瞬く間に司令室は綺麗になっているんだか、散らかしているんだか、よくわからん惨状と化した。

「……ビスマルクももういいぞく。充分綺麗になったからく」

「あら、そう？」

「うん、ホント綺麗。さすがビスマルク。さすがビス」

「っ！ ま、まあね！ 私にかかれればこの程度ワケないわ！」

俺の棒読みの贅辞にも、ビスマルクは満足げに笑って鼻高々となった。

嘘でも褒めておかないと、ビスマルクのやつ意地になっていつまでも掃除続けるだろうからな。

散らかった物は、ビスマルクがドヤ顔で悦に浸っている間に直して

おいた。

やはりビスマルクにこの類のお手伝いは無理らしい。
別に責めはしない。

人には適材適所がある。艦娘も同様、できること、できないことがあつて当然。

だからビスマルクも可能な範囲で俺のチカラになつてくれればいいのだ。

そういうわけなので、お願い。もう大人しくしていてねビスマルク？

「また手持無沙汰になつてしまつたわ。どうしましょう」

しかし残念ながら心の声は届かず、ビスマルクさんったら、まだまだヤル気満々でいらつしやる。

ために「君が傍にいてくれるだけで仕事が捗るよ」とイケメンボイスで言ってみようかと思つたが、我ながらドン引きなので、やめといた。

「そうだわ！ ちょっと待つていてアトミラール！」

何を思いついたのか、ビスマルクは高速戦艦特有のスピードで司令室を出て行く。

そしてすぐに戻つてきたかと思うと、彼女の手には、塩の入つた袋と複数の小皿があつた。

「塩？ そんなの何に使う気だビスマルク？」

俺が不審げに尋ねると、ビスマルクは「ふふん」と得意気に笑う。

「この国では塩をお皿に盛ると魔除けになるんですよ？ 私、詳しいんだから！」

ああ、そういえばあつたな、そんな風習。

日本由来なのか、中国由来なのかは曖昧らしいが、大昔から塩は神事やお祓いの場面で多用されてきたものだ。

奈良、平安時代では貨幣と同等の価値がある貴重品だったようで、自宅の敷地内に設置すると、ご利益があると信じられてきたらしい。現代でも商売繁盛のために置いている店は多い。

でも、確か正しいやり方をしないと却つて悪いものが寄つてくると

か、天然の塩じゃないといけないとか、いろいろルールがあつたと記憶しているのだが……

「ふふん♪ これさえあれば司令室は安全ね。……あつ！ い、言っておくけど、私は別にお化けが怖いとか、そういうわけじゃないんだからね！」

しかし、楽しみに盛り塩を設置しているビスマルクの微笑ましい姿を見ると、野暮なことを言うのは躊躇われた。

ま、細かいことは良いだろう。所詮は気休めみたいなものだし、ビスマルクがそれで満足するのなら、やりたいようにさせてやるのが一番だ。

「あら？・ねえ、アトミラール」

「ん？ どうかしたか？」

「この塩、不良品だわ。クローゼットの傍に置いたら、いきなり黒色に変わったわよ？」

「ほうほう。それは確かにひどい不良品……って、はいいい!？」

ちよつと待つて!?! 塩が黒く変色するのって、確か悪いものが寄つてきたっていう怪談とかでよく見る演出じゃないか!?!

……うわっ、ホントに黒くなってる。こわっ。

いるの？ そのクローゼットに何かいるの？

い、いや、落ち着け。そんなオカルトあるわけないだろう。

確かにこの世界には妖精さんや艦娘や深海棲艦のようなファンタスティックな存在はいるけど、お化けばかりはさすがにフィクションの中だけの存在だ。あつてたまるものかよ。

き、きつとビスマルクの言うとおり不良品なんだよ。ちくしょう、メーカーに文句言つてやる。

「ミティマス……イツデモ……イツマデモ……」

いや、聞こえてないよ？

クローゼットの間隙から女の子の声なんて。

まるでイカっぽい娘や小さな暴君をダウン系にした感じの声で癖になりそうだなあとか思つてないから。だつて何も聞いてないの

だから、うん。

まずいなあ、俺。まさか幻聴を聞くだなんて。

まだ身体の調子が悪いのかな。ハハハ……。

「ねえ、いまクローゼットから声がしなかったかしら？ 誰かいるのー？」

「やめろおお！ 扉を開けるなビスマルクう！」

何もいらないだろうけど、でも開けないで！

見て確認しない限り、そこには何も存在しないと立証できるのだから！

みんな大好きシユレディンガーの猫！ あれ、違ったっけ!?

「いい子だから取っ手から手を放しなさいビスマルク！ 今川焼き！

今川焼きあげるから、こっちいらっしやい！」

「今川焼き!?! も、もう、こんなもので、はむっ、私が喜ぶとも思っ
て……んうううう♡ すごく甘くい♡」

ふう、セーフ。ビスマルクがチョロくて助かった。

……いやいや、別にビビってないぞ？

どどど、どうせ空耳だし。塩の変色だつてきつと何らかの化学反応だろうしい。

クローゼットの間隙から感じる視線だって、ただの錯覚だし。

うん、錯覚だ。錯覚に決まっている。

ほら、みんな誰しも中学二年生ごろに「何者かの視線を感じる……」
とかいって自意識過剰になっていた時期があるだろう？

アレが再燃しただけさ。封印されし邪眼が疼くんだよ。

くっ、鎮まれ我が右腕。

ビスマルクが今川焼きに夢中になっている隙にセクハラをしよう
とするんじゃない。

相手はお子様だ。正気に戻れ。

「シレイカンガ……タノシソウデ……ナニヨリデス……ウフフ」

……誰か幻聴だと言っておくれ。

トラブルは続いたものの、無事に今日も書類仕事を終わらすことができた。

「ちようど夕飯の時間帯だな。どれ、久々に何か作るかな」

「ビスマルクが秘書艦のときは、だいたいは俺が手作り料理を用意する。」

「ここ最近では艦娘たちが包丁を握らせてくれないので、なかなか台所に立つ機会がなかったが、今日ぐらいい腕をふるわせてもらおう。」

「やること為すことすべて残念な結果に終わったが、ビスマルクが俺のためにいろいろ頑張ってくれたのは事実だからな。」

「ちゃんと労ってあげなければ。」

「ビスマルク。晩飯は鯖みそでいいか？」

「鯖みそ！ いいわね、Danke……じゃないわ！」

「じゃないわ!？」

「夕飯のメニューを聞いて嬉しげに顔を輝かしたビスマルクだが、急に一転して慌てたような表情を浮かべた。」

「なんだ、そのお礼を言ってから即座に否定していくノリツツコミの亜種みたいなの。もしかして流行ってんのか？ 地味に傷つくからよしなさい、そんなもの。」

「鯖みそがイヤなら生姜焼きにするか？ それとも鶏の唐揚げ？」

「アトミラールが作った生姜焼き……鶏の唐揚げ……じゅるり……」

「料理の名前を聞いてヨダレを垂らすビスマルクだったが、すぐに頭をブンブンと振った。」

「待ってアトミラール。今夜はこのビスマルクが夕飯を用意してあげるわ！」

「なに!？」

「あれほど他人に食事を用意させてきたビスマルクが自ら料理だとい!?」

「お、おいビスマルク無理するなよ？ 慣れないことすると大怪我するぞ？ そもそも火の使い方わかるのか？」

「バカにしないでちようだい！ 見てらっしゃい。いまに豪華絢爛な

夕飯を用意してアツと言わせてやるんだから！」

このビスマルクの自信の在り様、まさか俺がいない間に料理のやり方を覚えたのだろうか？

あのお嬢様タイプのビスマルクが？

それは興味深いな。

彼女が努力して料理の腕を磨いたというのなら、ここは上官としてその味を堪能してあげるべきだろう。

……でも大丈夫だろうか。

まさか比叡や磯風のように、料理の名を冠した化学兵器を出してきたりしないだろうな。

いつたい、どんな料理が……

「どうアトミラール？ おいしいかしら！」

「あ、うん。うまい、よ……」

ビスマルクが用意した晩飯は、幸いにも普通に食べられる出来栄えだったし、実際にうまかった。

うん、確かにうまいよ。

——パンにチーズとハム。

ええ、ほぼ素材の味だね。ただ切って挟むだけだから火を使った調理も必要ないね。

まあ、ちよつとブラッドな味付けがされているけど。

「ふ、ふふん。私だって、やればできるんだから……ア、イタタタツ」
指に包帯を巻きまくっているビスマルクの努力に免じて、文句を言うのはやめておこう。

目をバツテンにして泣いているビスマルクが、余計に泣きかねない。

ドイツ人つてもともと夜はあんまりガッツリ食べないっていうしね。

うん、よく頑張ったビスマルク。デザートに雪○だいふく用意してやるからな。

……ああ、でもやっぱり鯖みそ食いてえ……。

そんなこんなで、夜も更けてきた。

今日も無事、何ら変わりない一日が過ぎていく。

いつもどおり目と腰にタオルを巻いて艦娘と入浴を済まし。

いつもどおり金剛が「テートク！ お背中お流ししマース！」と風呂に乱入してきて、混浴していたビスマルクとひと悶着あったり。

いつもどおり風呂上がりの牛乳を愛宕から受け取って「愛宕のミルクおいしいですかあ？」と意味深な笑顔で聞かれたり。

いつもどおり発明好きの明石から「できました提督！ 心の疲れが一気に吹っ飛ぶお薬です！」と明らかに怪しいお薬を突き付けられたり。

いつもどおり不知火になぜか眼がを飛ばされながら「司令、不知火はいつでもバッチコイです」とセリフと表情が噛み合わない、ドスの利いた声で謎めいたことを言われたり。

いつもどおり瑞鳳に「提督♡ 今日も一日お疲れ様♡ いいこいい♡ ギゆう♡」と甘ったるい声色でハグされたり。

いつもどおり山風が「提督、あの、肩揉んであげようか？」と献身的で可愛くてしょうがねえなコンチクショウだったり。

でもって、他の艦娘が絡んでくるたびビスマルクが「私だってそれくらいできるわ！」と対抗心燃やして激しいボディアクションしてきたり。

特にアクシデントもなく、今日も鎮守府は至って平和であった。

……うん。俺は順調に神経が麻痺していると思う。

「ふう……今日も一日疲れたわね。私、そろそろ休むわ」

美容を気にするビスマルクは夜更かしを好まない。

俺も彼女の美貌に悪影響を及ぼすのは本意でないので、素直にその

申し出を受け入れる。

「おう、お疲れ様。俺はもう少しやることあるから、先に眠っていいぞ？」

「え？ でも今日の仕事の分は終わったでしょ？」

「まあな。でもせっかく時間があるから、他にできることしようと思っただけ」

艦娘の戦闘力が全体的に向上したので編成の見直しをしたいし、なかなか手が付けられなかった装備強化のプランも練りたい。

あと、読みかけの『尊敬される上司の条件』を熟読したい。

提督としてやるべきことは尽きないのだ。

「ダ、ダメよアトミラー！ 夜はちゃんと休みなさい！」

案の定、ビスマルクからダメ出しされる。

まあ、こう言われるのは予想していた。

もはや慣れた展開に、俺は平然と受け応える。

「大丈夫だってビスマルク。キリのいいところで終わらせたら俺もちゃんと寝るから」

「寝るってどれくらい？」

「んん。まあ4時間ぐらい眠れば充分だろ」

「そんなの全然寝たうちに入らないわよ！」

そうかあ？ それぐらい眠れば充分熟睡の範囲だよね全国の社会人さんたち？

「もう！ どうしてアトミラーはそういうつも無茶するの!？」

俺の飄々とした態度が、どうやらビスマルクの逆鱗に触れてしまったらしい。

プンプンと頬を膨らませて完全に怒り出した。

「無茶はしてないだろ？ ただ空いた時間があるならそれを有効活用しようって思っただけで……」

「それが無茶だって言うの！ なんでワザワザ予定詰め込むのよ！

休めるときは素直に休みなさいってば！」

「別にこれぐらい普通だって。誰だってやってるぞ」

「普通じゃないわよ！ だいたいこの国の人間はいろいろ非効率的過

ぎるのよ！ 過労で倒れるとか世界中で日本だけよ!? 適度に働いて適度に休みなさいよ！」

むむむ、ビスマルクのくせに真つ当なこと言いおつて。

「し、しかしだなビスマルク、時間は有限なんだぞ? 一分一秒だろうと無駄にしちやいけないんだ。そう考えれば短い時間でもできることをやるのが日本人の美学というもの……」

「ああ、もう! このわからず屋!」

尚言い訳を続けると、いきなりビスマルクが飛びかかってきた!

「うおっ! 何をする! わぷっ!」

反応する暇もなく、ビスマルクにぎゅっと抱き着かれ、身体を拘束されてしまった。

顔元に、彼女の豊満な胸が当たる状態で。

つて、またこのパターンかい。

どうしてこう童貞に優しくないことばかりしてくるんですかね艦娘の皆さん。

「こら離さんかいビスマルク! これじゃ本が読めないだろ!」

「いいえ離さないわ! これ以上あなたを無茶させないためにもね!」

そう言つてビスマルクはさらに抱きしめるチカラを強める。

ぐあああ! むつちりでフワフワなおっぱいがああ!

「サラトガから聞いたわよ! こうして胸で抱きしめると、あなたが大人数になるつて!」

ちよつとサラトガさん! なんてこと広めてんの!

少し天然が入っているサラトガさんのことだから、日常会話でポロつと話してしまったんだらうけど……:よりによってカラダは大人、中身はお子ちゃまのビスマルクに知られるとは。

そりや確かにこんな大きな胸で包まれたら強制的にチカラが抜けてしまうけどさ……:別の個所はどんどん活発化してしまうよ!

いかん。薄い生地越しから伝わるビスマルクの柔らかな乳房の感触と体温で理性がグラグラと……。

いくらビスマルクがお子ちゃまでも、こうダイレクトにわがままボ

デイを押し付けられては、さすがに奥底で眠る本能が呼び覚まされてしまう。

「ビ、ビスマルク、わかったから一旦離して……」

「いいえ、わかっていないわ！ いつもそうよ！ あなた、自分を疎かにして、他人のことばかり優先して……ぐすつ」

見上げるとビスマルクは涙目になっていた。

やってしまった。また艦娘を泣かせてしまった。

「お、おい、泣くなよビスマルク」

「ひつぐ、ぐすつ……なによ、いつつも一人で抱え込んで。わ、私だってあなたのチカラになりたいんだから」

「充分なってるって。ビスマルクの活躍のおかげで、どれだけの数の海域攻略が成功したと思ってるんだ？」

「……でも、あなたを守れなかったわ」

「……」

その話を持ち出されると、俺も強く言い返すことができない。

気づくと、ビスマルクは縋りつくような形で俺に密着していた。

「ねえ、私がどうしてあなたを『アトミラール』って呼ぶようになったかわかる？」

俺の服の裾をきゅつと掴みながら、ビスマルクは言った。

「私の中で、あなたがそう呼びたい存在になった——ってことなのよ？」

ドイツ戦艦としての誇りを持つビスマルクは、誰よりも負けず嫌いだ。

そんな彼女が、日本の戦艦に対抗心を燃やすのは当然だった。

だが現実是非情だ。大和型や長門型といった強力な戦艦を相手にすると、どうしても一歩及ばなかった。

それでも、ビスマルクは自分こそが戦艦として一番凄いのだと疑わなかった。

しかし性根は素直な少女だ。本当は己の実力不足を、イヤと言うほど痛感していた。

だからこそ、劣等感からビスマルクは荒れはててしまった。

たびたび挑発的な発言をするようになり、同じ高速戦艦である金剛と張り合い、喧嘩沙汰になる場面が増えていった。

でも、俺は知っている。

喧嘩の後、ビスマルクは人気のない場所で、自己嫌悪でワンワン泣いていたのだ。

『なによなによ！ 私ばかり悪者みたいに！ わ、私だって必死なんだもん！ 艦隊の役に立ちたいんだもん！ うわああああああん！ びええええええええええ!!』

とても戦艦クラスの艦娘とは思えない、子ども染みた泣きっぷりだった。

いつものように喧嘩を仲裁して、少し説教しようとしてビスマルクを追いかけた俺だったが、そんな現場を目撃してしまった以上、強く言うわけがない。

なにより、嬉しかった。あのビスマルクも、艦隊を思う気持ちは、確かにあったのだと。

ならば彼女のために、してあげるべきことはひとつだった。

『安心しろビスマルク！ 俺がお前を強くしてみせる!』

頑張ろうとする奴は素直に応援したくなる。俺自身、夢を追いかける人間だから、尚更放っておけなかった。

それ以上に提督として、ビスマルクに居場所を作ってあげたかった。

母国でなくとも、ドイツ戦艦として華々しく活躍することができ、そんな彼女の居場所を。

ビスマルクを強化する道のりは、とても長く険しいものだった。

それでも、ビスマルクの傷ついた顔を思い出すと、諦めるわけにはいかないと思った。

ビスマルクも必死になって、いくつもの試練を乗り越えた。

結果――

『私が一番ですって？ 何言ってるの、当たり前じゃない!』

その発言に相応しい実力と貫禄を、ビスマルクは見事、身に着けた。雷撃能力を備えた唯一の戦艦として、数多の夜戦でその猛威をふるった。

彼女がいたからこそ、攻略できた海域はいくつもある。

もはや誰もビスマルクの実力を疑わなかった。彼女はこの艦隊で、なくてはならない存在になったのだ。

『提督、その……ありがとう。感謝は、しているわ』

素直になれなかったビスマルクも、そうしてやっと自然に穏やかな笑顔を見せてくれるようになった。

そして現在、彼女は己の母国語で、俺のことを『A d m i r a l』と提督呼んでいる。

「私をここまで育ててくれた人に、恩を返したいって思うのは、当たり前じゃないの」

ビスマルクは、その幼い心のままに、儂げな少女のように弱々しくなつて、密着してくる。

「私にとっては、もう、ここが帰る場所なのよ？ あなたが居る鎮守府じゃないと、意味がないの。……だからお願い。勝手に死んだりしないで。私に、あなたを守らせてよ」

「……」

いま一度考える。

艦娘が過保護になつてからというもの、俺は彼女たちの変化を受け入れられずにいた。

なんとか前のような関係に戻せないかと考えてきた。

けれど。

受け入れるべき変化だつて、あるんじゃないのか？

この鎮守府を心の故郷だと言つてくれた、そんなビスマルクの変化までも、俺は否定する気なのか？

俺には、提督として世界を守るといふ使命がある。

しかし。

まず先に、傷つけてはならない、守るべき存在がいるのではないか

?

俺が無茶をすることで、子どものように泣いて心配してくれる。そんな無視してはならない、思いやりの心があるのではないか。

「はあ……」

深い溜め息を吐いて、俺はビスマルクの頭にポンと手を置いた。

「わかったよ。今日はもう休むよ」

苦笑まじりにそう告げると、ビスマルクはキョトンと可愛らしく戸惑った顔を浮かべた。

「……ほんとに?」

「ああ、ビスマルクの言う通りちゃんと寝るよ」

「……途中でこっそり起きたりしたら、承知しないんだからね?」

「わかってるわかってる。信用しろって」

「信用できないから釘刺してるんでしようが、もう……ふふ♪」

小さな娘に言い聞かせるように言うと、ビスマルクはやっと涙で濡れた顔をほほ笑みに変えた。

そしてすぐに、いつものように自信に満ちた顔つきで立ち上がる。

「いいことアトミラール? この戦艦ビスマルクがいる限り、あなたを二度と傷つけさせはしないわ! 安心して夜を越しなさい!」

度が過ぎた思いやりは困るが、こういう純粹でまっすぐな思いやりには、素直に応えたいと思ってしまう。

まったく、敵わないな。

さて、そんなこんなで就寝である。

ビスマルクのお言葉に甘えて、たまにはグッスリ眠るとしよう。

「ふわ。ほら、アトミラール。早く布団に入ってからっしやいな。私もう眠くてしょうがないわ」

先に布団に入って待っていたビスマルクが、あくびをしながらそう言う。

俺を守ると言った手前、やはり彼女も他の艦娘同様、一緒の布団で

眠るつもりらしい。

……さて、いきなりだが、ここで質問をさせていただこう。
あなたは眠るとき、どんな服装で眠る？

ジャージ派？ それとも旅館にあるような浴衣派？

ちなみに俺はパジャマ派だ。ナイトキャップと安眠枕は欠かせないね。

一方、ビスマルクは……

「なあ、ビスマルク」

「なあにい？」

「……お前、服はどうした!？」

シーツから露出しているビスマルクの生白い肩と背中……どう見ても何も着ていないように思えるんですが!？」

「え？ だって私いつも全裸で寝るもの」

「なぜ!？」

「知らないの？ 裸で寝ると美容にいいのよ」

マジかよ。

妖精さんに頼んでタブレットを持ってきてもらい、試しに検索して調べてみる。

………本当だ。

全裸で寝るとリラックスして睡眠の質が高まり、老化を遅らせて肌が若々しくなり、しかも冷え性が改善、なんと免疫力もつく！

なんやこれ、良いことづくしやんけ。

全裸睡眠スゲー。

でもいまはヤベー。

「せめて何か羽織ってくださいませんかねビスマルクさん！」

「イヤよ。そんなことしたら眠れないじゃない」

俺だって眠れないよ！

全裸の女の子と一緒に寝るとか童貞にはハードル高すぎるわ！

しかもビスマルクみたいなグラマー美人相手と！

待って、寝返らないで。

そんな洋画のワンシーンみたいに「うーん……」って色っぽい息遣

いで仰向けにならんというて。

うわ、スゲ。ふたつの房が反動でぶるんって揺れた。

あとちよつとでも動くよ、シーツを押し上げてている突起物がチラつと見えそうだ……

いやいや、何じつくり観察してるんだ俺！

相手は中身お子ちゃまのビスマルクなんだぞ！

というか、なんでこんなに平然としていられるんだビスマルク？

風呂のときもそうだったけど、俺に裸見られることに抵抗ないの？

まさかそういう羞恥心までお子ちゃまレベルなの？

そ、それとも、俺相手なら見せても構わないという遠まわしなお誘い……

ってバカ、やめんかそんな童貞特有の安易な発想！

「ねえ、アトミミール……早く、来て……」

眠たげな瞳でそう言っているのか、あるいは流し目で意味深に言っているのか。

どうあれ、全裸で横たわるビスマルクは、まるで絵画のように美しかった。

思わず、我を忘れてビスマルクの肢体に魅入ってしまう。

……と、そこで突然、足元がグラつと揺れた。

「……ん？　なんだ、地震か？」

俺の意識を引き戻すように、実にタイミングよく地震が発生した。

「おう、結構揺れるな」

また妖精さんにタブレットを持ってきてもらって震源地と震度を確認する。

……ん、なんだ震度3程度か。

これぐらいなら慌てる必要もないな。津波警報もないし。

地震大国に住む日本人は、この程度の揺れなど慣れっこだ。

しかし……

「いやああああ！　地震〜!!」

ビスマルクが甲高い悲鳴を上げる。

そう、地震に縁のない御国に住む方々には、このレベルの震度でも

大パニックものなのである。

布団から跳ね起きたビスマルクは、涙目で俺に飛びついてきて……
つて、ちよつと待て〜！

「ちよ！ おまつ！ なに全裸で抱き着いてきてんだ!? 離れんかい
！」

「いやああああ！ 絶対いやあああ！ 怖い！ 地震怖い！」

「さっきまで偉そうに『あなたを守るわ！（キリツ）』とか言っておいて何だその体たらくは!?!」

「怖いものは怖いんだもの！ うわああああん！ 滅ぶわ！ 絶対この揺れは世界滅ぶわ！」

「滅ばねーから離れろつて！」

むしろ俺の童貞が滅んでしまうわ！

理性ガガガガガ！

何コレ!?

一糸まとわれない女のカラダってこんなに柔らかいものなの!?

パジャマの薄着越しから、ビスマルクの生の乳房の感触がダイレクトに伝わってくる。

しかも思いきり抱き着いてきてるもんだから、すごい勢いで押し潰れたバストがムニユムニユとこれでもかと柔らかさを主張している。

そして微かにコリコリと当たるふたつの固い突起……つて、あかああん！ これ以上描写するとR指定に直行や！

そして俺のムスコもそっちに直行する気満々や！

やめろムスコ！ 「無知シチュって最高じゃね？」とか言つて煽るんじやない！

「Admiral! 無事か!? この揺れは世界の危機だ！ このグラーフ・ツエツペリンが命を懸けて貴官をお守りしよう！」

「地震怖い！ ですつて！」

「て、提督心配しないで！ ぼ、僕が守るからね！」

「べ、別に怖くなって来たわけじゃないんだからね」

「お前らまで割り込んでくるな！」

日本に暮らして長いんだから、いい加減慣れろって海外艦の皆さん！
「提督く。地震やバイですねく。怖いですねく。こりや世界終わりますねく。最後の一杯、ポーラとたくさんと飲みませんか？ うへへへ！」

お前は地震のある国出身だろうが！ 酒飲む口実作るな！

その後、海外艦だけでなく「提督！ 揺れで落ちたものが頭に当たったりしませんでしたか!？」と過剰に心配しにやってきた日本艦までやってきて、

全裸でビスマルクが抱き着いていることを金剛に「どういうことデース！ ずるいデース！」と長らく責め立てられ、

酔っぱらったポーラまで全裸になつてしかもリバーズしてザラがブチぎれて等々……

夜中の間ずっとてんやわんやして、結局ぜんぜん眠れやしないのであつた。

忠犬、初月

「提督。僕を飼ってくれ」

犬の首輪を着けた部下の少女に、こんなことを言われました。
どうしますか？

① 飼う

② 正気に戻す

⇒③ いいだろう、俺なしじゃ生きていけないカラダに調教してやる
グヘヘ

へっへっへっ。俺に飼って欲しいだど？

お望みどおり朝からたんまりと可愛がってやろうじゃねえか
……っつて、ちやうわボケ

いかんいかん。

起き抜けで頭がボーっとしているせいでトンデモナイことしか
すところだった。

というか、そもそも空耳だよな？ あんな爆弾発言、寝ぼけて聞い
たに違いない。

「初月^{はつづき}？ すまん、寝起きでのせいでよく聞き取れなかった。もう一
回言ってくれないか？」

俺を起こしに来てくれたボーイッシュな艦娘、初月にそう願います
る。

我が鎮守府、空の守護神とも言える防空駆逐艦、秋月^{あきづき}型の4番艦、初
月。

性能、容姿、精神面と共に駆逐艦離れした姉妹の中でも、際立って
武人氣質の艦娘。

俺の記憶にある初月は、あんな笑えない冗談を言うような娘ではな
かったはずだ。

もちろん、その細い首に犬の首輪を着けるなんて、倒錯染みたことだつてしない。

うん。やっぱり聞き間違い&見間違いに決まっている。

俺、低血圧で朝弱いし。

きつと潜在的に眠るマニアックな性癖がこんな幻を見せているのだろう。

ははは、まったく俺のムツツリさんめ。

あとで自戒としてスクワット1万回だコラ。

そういうわけで初月。ワンモアプリーズ？

「提督。僕を飼って、身も心もすべて、お前の色で染めつくしてくれ」

「そこまでは言つてなかつただろ!？」

「なんだ。ちゃんと聞こえていたんじゃないか。ダメだぞ提督、人のお願い事は真面目に聞かないと」

「真面目に聞いてたまるか!」

とはいえ、事が事なので、ここは詳しく話を聞こう。

このままでは部下にアブノーマルなプレイを強要している変態提督に見られかねん。

身支度を整えてから、初月と正座で向き合う。

「どういうことなんだ初月。朝っぱらからそんな特殊なプレイをオネダリしてくるだなんて。7000字程度で説明しなさい」

「丸々一話分じゃないか。律儀に説明していたら僕の回が終わってしまふよ」

チツ。バレたか。

次回に持ち越して危機回避しようと思ったのに。

「イヤな予感しかしないが、とりあえずワケを聞かせてくれ」

メタ的なやり取りは無かったことにして、改めて聞き直す。

「提督。これは僕なりのケジメというやつさ」

「ケジメ？」

「そうだ。提督は僕が着任したときのことを覚えているかい？」

「もちろん。随分と凜々しい駆逐艦が来てくれたと思ったもんさ」

艦娘たちとの初めての出会いは、一人ひとり常に胸に刻み込んでいるつもりだ。

初月との初対面も、印象強く残っている。

なにせ、伊勢、日向、叢雲に立て続き、女体にピッチリと張りつく黒インナースーツの魅力を再認識させてくれたからな。「うん、やはり黒インナーはいいものだ。将来の嫁さんにいつか着てもらおう」と、明るい未来への楽しみがまたひとつ増えた瞬間であった。

「初めて会ったとき、僕は言った。『お前は僕が守る』と」

うん、そうだったな。

可愛らしくもあり、同時にイケメンな少女にそんなことを言われたもんだから、不覚にも『キュン』と乙女のようにときめいてしまったっけ。

まったくもって、誰得なりアクションである。

だが、それほどまでに初月の言葉には有無を言わせぬ頼もしさがあった。

きつと女子相手ならば一発で恋に落ちてしまうほどに。

実際、仮に初月が女学園に通ったら間違いなくモテまくるだろうな。

くそお、いろんな意味でジェラシーだぜ……

しかしいま、そんな異性や同性すらも虜にする凜々しい美顔に、ひと筋の影が差している。

「守る、そう言ったのに……僕は約束を破った。お前を、失うかもしれない」

自責の念に駆られた初月は顔を俯かせる。

心なしか、獣耳のように逆立った髪がしゅんと垂れているように見える。

「初月……もう、いいじゃないかそのことは」

あれほどの激戦の中、俺を守りつつ敵を殲滅するのは、どう考えても不可能だった。

誰のせいにもできないし、初月が負い目を感じる必要だってない。そこんところ、他の艦娘にも理解して欲しいのだが……

「気にするなよ。このとおり俺はピンピンしてるんだし」

「いや、それじゃ僕の気がおさまらないんだ」

初月は尚も食い下がる。

もともと責任感の強い性格だ。

口にしたことを曲げるなど、彼女が最も許せない失態だったに違いない。

「あの一件から僕なりに考えたんだ。どうすればお前に償えるだろうと」

「償いだなんて、そんな大袈裟なあ」

「僕にとっては、それほどのことなんだ。だって……」

顔を上げた初月は、切なげな瞳でこちらを見つめる。

いつもの凜々しきさはない、駆逐艦相応にあどけない、いまにも泣いてしまいそうな顔つきだった。

「僕の提督は、この世でただ一人——お前しかいないんだから」

「っ!?!」

思わず見惚れてしまった。

クールな初月が減多に見せない、乙女としての表情。

それは一瞬で男心を鷲掴みにしてしまうほどの破壊力を秘めていた。

「そんなお前を、また守ることができなかつたら……今度こそ、僕は自分が許せない」

スつと初月は身を寄せてくる。

一度目が合ったら離せない。そんないまにも吸い込まれてしまいそうな、初月の整った美顔が、間近に迫って来る。

「最初の頃は、ただ部下として当然のことを口にしたただけだった——でも、いまは違うんだ」

そつと手を重ねられる。

数々の激戦を乗り越えてきた武勲艦の手は、とても華奢だった。深い情感のこもった瞳と、視線が重なる。

「提督、頼む。今度こそお前を守らせてくれ。もう二度と、傷つけさせない」

義務感とは異なる。

決して譲れない何かを秘めて、初月はそう宣言した。

「あらゆる危険から、あらゆる不幸から、お前を守ってみせる」

彼女は今度こそ誓いを違え^{たが}ないだろう。

そう思わせる迫真めいたものがある。

「だから……」

小さな両手で俺の手を握りしめて、初月は、にこりと爽やかにほほ笑む。

そして言う。

「常にお前の傍にいられるように、僕を飼ってくれ」

「いや、その理屈はおかしい」

いつのまにか、俺の手にはジャラジャラと鳴る鎖を握らされていた。

その鎖は初月の首元に巻かれた首輪に繋がっている。

どう見ても年端もいかない少女に対して特殊プレイしている光景です。

「わからん。わからんよ初月。どういう発想の膨らませ方したら、そんなぶっ飛んだ結論に至るんだ？」

「僕はいたって真剣だよ提督」

「余計タチが悪いわ」

普通なら、ここで良い話で終わるところだったろうに。

どうしてこう、どの艦娘も肝心なところで台無しにするのだろうか。

「提督よ、これは知恵が足りない僕なりに必死に考えた上での結論なんだ」

「そうか。もつと知恵を身につける努力をしような」

「非才な僕は、戦うことしかできない」

「鮮やかにスルーしたなお前」

「僕は秋月姉さんみたいに完璧じゃないし、てるづき照月姉さんみたいに愛嬌もないし、すずねえ涼姉さんみたいににお淑やかでもない……」

「おいおい。」

「そんなに姉と自分を比較してへこむのは良くないぞ？」

「初月は初月じゃないか。」

「そんな僕ができることと言えば……番犬のようにお前の傍に付き従うぐらいなんだ」

「だから、なぜそうなる。」

「そういうわけだから、僕を飼ってくれ」

「ちよつと落ち着けて」

「ここはとにかくフォローして、初月に自信を取り戻させてやらねば。」

「あのな？ 初月にも初月ならではの魅力がたくさんあるんだぞ？」

「勇猛果敢な武勲艦であることはもちろん、純粹で真っ直ぐで、お姉さんの思いなことか、数え上げればキリがない。」

「そう初月に伝える。」

「あとはまあ口にはできないけど、駆逐艦のくせに龍驤がギャン泣きするレベルの抜群のスタイルも、彼女の魅力のひとつであろう。」

「というか前から思っているんだが、秋月型のみなさん本当に駆逐艦なのか？」

「揃いも揃って粗食のくせに、男を惑わすトンデモナイ恵体の持ち主。」

「海水浴のとき彼女たちの眩しい水着姿を拝んだときは、我を忘れて『みんな幸せにします』とつい求婚しかけたぐらいだ。」

そんな娘に首輪を着けて犬のように飼うだなんて……ああ、ダメダメ！ エッチすぎます！ 開いてはいけない性癖が開いてしまいかねません！

というわけで、初月を正気に戻すため必死に説得する。

「提督は、やっぱり優しいな。こんな僕にも、気を遣ってくれて……」

俺の言葉に初月は落ち着きを取り戻したようだ。

わかってくれたか初月？ なら、その首輪をいい加減に外しておくれ。

誰かに見られたら本気でマズイから。

「でもね提督。僕は気づいてしまったんだ」

「ん？ 何を？」

「最初のうちは僕も、この案は『いや、ないよ』と思ったよ」

「最後まで思っとけよ」

「だけど、試しに想像してみたんだ。お前が入院している間、毎晩まいばん、提督に犬のように可愛がられる自分の姿を」

ん？ 気のせいかな。

初月の顔がどんどん上気していつているような……

「普通なら、屈辱的なことなのに、あっちゃいけないことなのに……どうしてか、頭から離れなくなってしまったんだ。首輪で拘束されて、お前の意のままに生活する日々を」

初月の息が荒い。

雄々しい貫禄に反して、牝として艶めかしく発育したカラダを蠱惑的に震わす。

初月が身を動かすたび、鎖がジャラジャラと背徳的な音色を奏でる。

「ハア、ハア。お前が、いけないんだぞ。お前のせいで、僕は……おかしくなってしまった」

「は、初月さん？」

「変なんだ。提督が戻ってきてから、想像の中で考えていたことを、して欲しくて、しようがないんだ」

こ、これはもしや……

「僕は、提督に飼われたい」

初月のほうが、すでに開いてはいけけない扉を開いてしまっている!? 「普段は情けないくせに、いざというときばかり、肩を貸してくれたり、姉さんたちにも話せない僕の悩みに気づいたり。本当にお前は、僕を狂わせる——でも、そんなお前だから僕は……」

「うおっ!」

やたらと色っぽい顔色を浮かべたまま、初月は俺にしがみついていた!

むにゆうと小生意気に膨らんだ乳房が、か細くも柔らかな初月の肢体の感触が、ダイレクトに伝わってくる!

「ちよっ、お、おい初月なにを!?!」

「すんすん……提督の、提督の匂いだ……すううううっ」

あの初月が抱き着いてきたことさえ驚きだというのに、さらに『クンカクンカ』までし始めた!?

「は、初月!? 何してんだよ! は、離れろって!」

「いやだ。絶対に離れるもんか」

いつもなら聞き分けのいい初月が、まるで駄々っ子のようにしがみついてくる。

しかし密着してくるそのカラダは、とてもではないが、幼女のソレではない。

こうしてくっついてしていると改めてわかるが、やはり秋月型は駆逐艦とは思えない体つきをしている。

すでに男を受け入れられるように発育を始めた、女のカラダそのものだった。

少女としてのあどけなさを残しつつも、着実に大人の女に成熟する一歩手前にある肢体からは、この時期の肉体年齢にしか放てない、危うげな色香を、むせるほどに漂わせていた。

ボーイッシュな初月も、やはり女の子なんだなとしみじみ実感する。

……って、冷静に感慨に耽ふけっている場合じゃないな。

「初月！ 正気に戻れって！」

「言うことを聞かせたいなら僕を飼うと誓ってくれ。そしたら何でも言うこと聞いてあげるよ」

「だから、それをやめなさいってば！ お姉さんたちが知ったら悲しむぞー！」

「心配ないさ。『これから四六時中、提督の護衛に着くよ』と言ったら快く応援してくれたよ」

「言い方！ それだけだと真面目に任務しているようにしか聞こえない！」

「僕はいつだって真面目だよ。真面目に提督の犬になりたいんだ。ワンワン」

壊れたアー！ 初月が壊れたアー！

「提督。これまで僕は、泣き言なんて言っちゃいけないと思っていた。弱さは恥だと思っていた」

いま、まさに恥を曝さらしていますよ初月さん。

「……でも、僕は知ってしまったんだ。誰かに甘えることの喜びを。提督。お前は、『弱い僕』を優しく受け入れてくれた。それが、すごく嬉しかったんだ」

「……」

「そんなお前に、僕は何も恩を返せていない。そんな恩知らずな真似をする自分が、許せないんだよ」

そんなこと言われたら、俺も強く言えなくなってしまうじゃないか。

駆逐艦の中でも驚異的な戦歴を持つ武勲艦である初月。

しかし、前世のトラウマを払拭できるほど、彼女も強くはない。

武人としての皮を剥がせばこのとおり、彼女もただの、か弱い少女となる。

いつだって勇ましく、凛々しい雰囲気纏った初月だが……本当は幼い駆逐艦相応に誰かに甘えたがっていたのだ。

敬愛する姉たちにすら見せてこなかった、初月の脆い部分。

そんな彼女の弱さを全面的に受け入れるのは、提督である俺の役目だった。

『すまない提督。でも……こうしていると、すごく安心する……提督は、暖かいな』

肩に寄り添いながら目を閉じる初月は、どこにでもいる繊細な女の子だった。

そんな些細な出来事でも、義理堅い初月は、俺に何か恩を返したいと考えている。

彼女の性分を考えれば、わからんでもないが……

それにしたって、首輪をつけて飼うってのは。

……さすがに、ねえ？

「……初月、お前の気持ちはよくわかった。で、でもさ？　もっと別のやり方もあると思うんだけど」

こんな極端なことじゃなくなつて、恩返しの方法はいくらでもあるはずだ。

しかし初月は首を横に振る。

「提督、僕は繋がりが欲しいんだ。決して切れない、提督との強い繋がりが」

いや、だからって物理的な繋がりを持つのはどうなのさ。

だが、初月が言いたいのは、どうやらそういうことではないらしい。「僕が提督の所有物だという証——それがないと、提督の傍にいちや

いけない気がするんだ。いや、僕自身がそれを許さない」

「しよ、所有物って、お前なあ」

「僕は本気だよ」

戦いに臨むときと同じ目を、初月は向ける。

決して折れない、決して逆らえない、武人としての気迫が宿る。

「提督。どうやら僕は、とっても弱くなつてしまったみたいなんだ。提督を失うことが、とても怖い——だから」

感触を植え付けるように、初月は、起伏に富んだ肉体を押し付ける。

「お願い。僕に、提督を守らせて？ お前の傍で、ずっと、片時も離れず」

耳元に唇を寄せ、熱く蕩けるような吐息を当てながら、初月は囁く。「弱い自分は、好きじゃない。でも提督……お前だけには、見られてもいい。僕のすべてを、見てほしい」

いままで戦友として対等に接してきた初月が、

「提督——僕は、お前のものだ」

自らを従僕として差し出した。

ジャラジャラと、鎖の音が室内に響く。

人を惑わす蛇が蠢くように。

長い鎖を、初月は自らのカラダに巻き付けていく。

下乳に食い込んだ鎖が乳房を押し上げ、その豊満な膨らみを強調する。

くびれたウエストにも、丸い腰回りにも、黒く艶光るインナーに包まれた太ももにも。

まるで舐め回すかのように、早熟な肢体に、背徳の縛めが絡みついていく。

それはまさに、自分というメスをオスに捧げるための、礼装に他ならなかった。

「提督がしたいこと、して欲しいこと、僕が何でもしてあげる。だから……」

初月は、鎖の取っ手を差し出す。

いままで見えたことのない、魔性の笑みを浮かべながら。

「提督。僕を、飼って？」

窓から差し込む朝日の下。

首輪に鎖を巻き付けた美少女が、ほほ笑んでいる。

ひどく、いびつな光景なはずなのに。

なぜだろう。

それを、ひどく美しいと、思えてしまうのは。

「……」

だからこそ、俺は――

「ええ〜こちら司令室〜司令室〜。秋月〜？ お前んとこの四女が俺に対しておませなイタズラをしております〜。ただちに迎えに来るように〜。以上〜」

「なっ!？」

通信機を使って長女を呼び出す。

まあ順当に考えて、そうすべきだよね。

はい、これにて無事解決。

「お、おい提督！ あの状況なら普通、僕をものにして〇〇なこととして××なことや拳句の果て△△△△するところだろ!?! もしかして不能……あうっ!」

小生意気なこと言う小娘にデコピンを食らわす。

「だまらっしやいこの駆逐艦お子ちゃまが！ あれぐらいの色気で大人を誘惑するだなんて、三年早いわい！」

「うう〜……」

涙目で睨む初月に俺はフンッと余裕の態度を見せる。

まったく、結婚する前にアブノーマルなプレイを経験してたまるかってんだい。

……まあ、実は結構危なかったんだけどな！

俺が少しでも発育良好なロリっ娘属性に目覚めていたら間違いないく即死であった。

初月、末恐ろしい娘っ！

その後、司令室にやってきた秋月に一部始終を説明。

真つ赤々な顔で目をバツテンにしながら「もう〜！ そんなことしちやメツでしよう〜！」と怒る秋月は、申し訳ないが怖いというより凄く可愛らしかった。

それにしても。

単純に過保護といっても、いろんな形があるんだなと痛感させられたな。

ここにきて、とんでもない変化球が来やがった。

……初月の場合、開花したての性癖に翻弄されている気があるが。艦娘の個性は十人十色。

それと同じく、お世話、奉仕の仕方も、十人十色らしい。

この先、いったいどんな艦娘たちによる悪意なき誘惑が待ち構えているかはわからないが、より一層意思を強く持たなければならぬのは確かだな。

負けん。俺は負けんぞ。

絶対、絶対に俺は結婚するまで純潔を貫いてやる！

「提督。僕はまだ諦めてないからな？ いつか必ず僕の主人になってもらうぞ」

「お前はちゃんと反省しろ！」

謎の艦娘《S》を探せ！

明石「できました！ 艦娘に甘えたくなるお薬です

！」①

「艦娘に、甘えたい」

ダメだ。

もう抑えきれない。

自分を自分で、コントロールすることができない。

艦娘に抱きしめられたい。

艦娘に頭を撫でられたい。

艦娘に優しく囁いてもらいたい。

そして……

愚かしく、そして激しい欲求がどんどん溢れてくる。

脳内を過激な一色で染め尽くさんとばかりに。

「くっ！ うわあああ！」

だが堪えた。

最後の意思を振り絞って、床に身を叩きつける。

スグに起き上がられない勢いで転倒。

それにも関わらず……ああ、なんとということか。

倒れても尚、床を這ってでも、肉体は本能的に『彼女』へと向かっている。

腕を広げて、愛しそうに、俺を見つめる艦娘に。

笑顔を浮かべながら『彼女』は囁く。

もう我慢しなくていい。

自分がすべてを受け入れる。

自分があなたを幸せにする。

だから……

——溺れてしまおう。

そう『彼女』は語る。

どこまでも深い慈愛と……狂気を孕んだ瞳を浮かべながら。

「あ、ああ……っ」

意識が混濁していく。

自分が自分で無くなっていく。

いけない。

このままでは、『彼女』の思いどおりになってしまう。

今回、俺を限界まで追い詰め、提督としての存在意義を奪おうとしている、『彼女』の計画どおりに！

「なぜだ……」

徐々に失われていく自我を必死に繋ぎ留めながら、俺は尋ねる。

いまだに、この現実を受け入れられないあまりに。

「なぜお前が、こんなことを！」

記憶の中にある『彼女』は、決して非道な真似をする奴ではなかった。

誰よりも、堅実で、眩しいほどに、まっすぐな娘だった。

だというのに……

俺の手に握られた、一冊のメモ帳。

そこに書かれた、たったひとつのヒントを手がかりにして、俺はここまで辿り着いた。

メモには、こう書かれている。

——依頼人《S》

それが、今回すべてを裏で操っていた、恐るべき黒幕の称号だった。

俺は甘かった。

あれだけ『平和ボケしてはならない』と言い聞かせておきながら。その実、警戒心が緩んでいた。

なぜ思い込んでしまったのだろう。

たとえ過保護になっても、艦娘たちは基本みんな良い子だと。

これまでの艦娘たちのやること為すことのほとんどが、男をケダモ

ノに変えかねない過剰なご奉仕ばかりだった。

それでも、彼女たちの心根には常に思いやりの気持ちがあつた。彼女たちに悪意はない。それは理解していた。

だから思つてしまったのだ。

俺が理性を強く持つてさえいれば、何も害はないと。

しかし、俺はもつと危機感をいだくべきだったのだ。

なぜ考えなかつたのだろう。

俺を守るためなら……

手段を選ばない艦娘が、存在することを。

俺はこの日を、きつと忘れないだろう。

いままでの試練など、今日という日に比べれば実に生やさしかった。

そう痛感するほどに苦境な、この、長い長い一日を……

爽やかな朝だった。

開けた窓から、心地いい風が入ってくる。

「うーん、いい天気だ。こんな日は、きつと素敵なことしか起きないに違いない」

こう過ごしやすい天気だと、書類仕事も捗るといふものだ。「こいつ、いつも書類仕事しかやってねーな」という手厳しいツツコミは勘弁願いたい。

「とはいえ、そろそろ書類仕事以外にもやれること考えないとな、と我ながら思う今日この頃」

そんな風に独り言ちりながら、毎度のように書類と睨めっこをしていると、

「提督くお疲れ様です。お茶を淹れたのでよろしければどうぞ」
「おう、明石^{あかし}。珍しく気が利くじゃないか」

いつもなら工廠に引き籠もっているはずの工作艦、明石がお茶を持ってきてくれた。

大淀さんと同様、腰周りが露出した袴型のミニスカートから見える生白いお肌が今日も眩しい。

朝から眼福である。

しかし、あの明石がお茶を淹れてくれるだなんて、本当に珍しいな。艦娘たちが過保護になって各々ご奉仕をしてくる中、以前と変わらず装備の改修やら、奇天烈な発明品^{きてれつ}を作ることばかりに熱中しているような娘だというのに。

もともと、その発明した品物で俺の負担を無くそうという気遣いは、普段からしてくれている。

いくなれば、それが明石なりのご奉仕だ。

他の艦娘の例に漏れず、俺のことを心配してくれているのは間違いない。

……ただ、渡される発明品が『心の疲れを吹っ飛ばす薬』といった使うのに躊躇うような怪しげな一品ばかりなのが、ちよつと困りものなんだよな。

明石って創作意欲が暴走すると一気にマッドサイエンティストな側面が出たりするし……

正直、受け取る身としては不安しかない。

わざわざ、いろんなものを作ってくれる明石の気持ちは嬉しいのだが……ぶっちゃけ毎度、実験に使われるモルモットの気分になるため、発明品を試したことは一度もない。

すまん明石。

そんな具合に、日々『修理』『研究』『開発』等に勤しんでいる生粋の技術者である明石が、突然こんなごく普通の気配りをしてくるのだから、まことに驚きである。

何か、心境の変化でもあったのだろうか。

とはいえ、艦娘たちの異様なレベルの過保護奉仕が日常となった今では、こうした細やかな気配りが一番ありがたく感じる。

ここは喜んで戴くとしようじゃないか。

「ささ、どうぞどうぞ♪ 有名ブランドの玉露ですから、凄くおいしいと思いますよ！」

「おう、そいつは飲まずにはいられないな」

「そうでしょそうでしょう？ さっつ、提督！ 一気にグイッと、どうぞ♪」

「いや、熱いお茶で一気飲みはできんだろうが。んぐっ……」

と言いつつも、とくべつ猫舌でもない俺は、そのままグビグビとスポーツドリンクを飲む勢いで、あっという間にお茶を飲み干してしまった。

なんとというか、それぐらい一気飲みにしたくなるほど、そのお茶の味は……

「ゴクツ、ゴクツ……んう！ これは！ うまいぞおおお！」

なんだコレは！

あまりのうまさで、リアクションが異常なグルメアニメみたく雄たけびを上げながら破壊光線を放出してしまっそうだ。

これは一杯では満足できん！

青汁のCMとは逆バージョンの「うまいっ！ もう一杯！」という感じに、明石におかわりを要求しようと口を開くと……

「艦娘に、甘えたい」

口を衝いて出たのは、そんな言葉だった。

……何事でござるか？

俺は自身の耳を疑った。

嘘だろ。いまの俺が言ったのか？

そんなバカな。

日々、艦娘たちの過保護な甘やかしには屈しはせんと、意志を強く持っている俺が、あんなことを眩くなんて！

もしや俺が思っているよりも、とつくに理性は限界を迎えていたのか？

無意識に口にしてしまうほどに？

な、なんてことだ！

とうとう俺はダメ提督になってしまったのか!?

大本営や人類の皆に、いったいどんな顔を向ければいいんだ!?

己の精神のあまりの脆弱ぶりに絶望し、頭を抱えて悶えそうになると……

「フ、フフフフ……」

不敵に笑う明石と目が合った。

先ほどまでの明るい笑顔ではなく、どこか邪悪に満ちた笑い方だ。

「明石。さてはお前……」

明石がお茶を持ってくるなんて、珍しいというよりも、不自然だとは思っていた。

先ほどの飲み干したお茶の器を見る。

うまいお茶だったか、お茶にしては不可思議な味がした。

高級の玉露だから、そういうものなのだろうと何食わぬ顔で飲んでしまったが……

「お前、お茶に何を淹れた？」

「ふっ」

俺の疑問に答えるように、明石はシャツのジッパーを開け、胸元から一本の瓶を取り出す。

反動でポヨンと揺れる明石の豊かな乳房。

……すげえ。胸が大きいと本当に谷間で物を仕込めるのか。

緊迫すべき場面なのに、どうでもいいところに感心してしまう。

哀しきは、色めいた瞬間を見逃せない童貞のサガよ。

明石が取り出した瓶のラベルには、彼女の顔がデフォルメされたイラストが描かれている。

激烈にセンスの悪いそのラベルは、瓶の中身が明石によって作られたことを意味している。

見るからに怪しげな液体が入ったその瓶は……

「大成功です！ 『提督が艦娘に甘えたくなくなってしようがなくなる薬』！ その完成度がここに証明されましたああ！」

「明石いいいい！ お前という奴はああああ!!」

なに達成感に満ちたドヤ顔で拳を天に突き上げてるんだこんなにやろおお！

盛りやがった！

コイツ上官相手に薬を盛りやがった！

艦娘に甘えなくなる薬？

普通の人ならそんなバカな代物があるか、と鼻で笑うことだろう。

だが製作者が明石となれば、話は変わってくる。

ただでさえ超常的なチカラを發揮する艦娘たち。

その艦娘たちの装備改修や修理を引き受ける工作艦の技術力ならば、突飛な効力を秘めた薬を作ることなど造作もないことだ。

その気になれば、冗談抜きでドラ○もんの秘密道具並みのアイテムを作るからなコイツ。

「なんということをしてくれたんだ明石！ こんなこととして許されると思ってるのか!? 罰として頭をいっぱいナデナデしなさい！」

……ああっ!? また意思とは無関係にい！」

現にいま、さつきから気を抜くと、艦娘に甘えたい、おねだりしたいという感情が込み上げてくる。

どれだけの量を飲まされたのかは知れないが、どうやらすっかり明石の思惑に嵌まってしまったようだ。

「ふふふ。さっそく効果覲面ですぬ。ご気分は如何ですか提督く？」

「お、お前なあ！ こんな軍法会議ものだぞ?！」

このことを大本営に報告すれば、上層部は然るべき対応をしてくれるだろう。

理由はどうあれ、飲料に薬を秘密裏に投入するだなんて、ヘタをしたら反逆罪にもなりかねない。

明石にお灸を据える意味でも、ここはきつちりとした処置をすべきだとは思うのだが……

「と、言うわりには提督いっつも大本営には報告しないじゃないですか」

ああ、そうだよ！

だって本当に報告しちゃったら大本営の方々容赦ないんだもの！

最悪、解体という判決だって降しかねない。

さすがにソレは明石が可哀想じゃないか！

そう。

俺がこう甘いもんだから、以前から明石は発明品の効果を試すため、頻繁に誰かしらを実験台にしていたのだ。

そのことをすっかり失念していた。

くっ！ 誰もが過保護になったいま、さすがにもう、そんな真似はしてこないだろうと油断していた！

大本営に報告したりはしない。

だが、今日という今日は許してはおけん！

「明石い！ こんなこととしてくれた責任は取ってもらおうぞ！ 今日一日その立派な膨らみで俺を癒し……なんでもない」

危ねえ。

薬の効果の後押しで、とんでもないことを要求するところだった。いかん。堪えるんだ俺。

薬なんかのチカラに屈してはいかん。

そんな風に焦る俺に反して、明石はたいへん満足気な顔でニタリと笑っている。

「何ですか何ですか提督く？ いいんですよ？ 明石にして欲しいこと、何でもおっしやてくださっても。いまなら薬のせいだってこ

とで誤魔化せるんですよ？ うふふ♪」

挑発的な笑顔でカラダを寄せてくる明石。

彼女が前屈みになると、セーラー服の中の豊かな乳房がたぷんと波打つ。

サラトガさんやビスマルクのダイナマイトクラスと比べれば控えめだが、それでも男を惑わすのに十分なボリュームだ。

思わずゴクリと喉が鳴る。

コ、コイツ。意味わかって言ってるのか？

弁解の余地を与えられた男が、どれだけ好き勝手に暴走すると思ってるんだ。

いまだって、「ん？ じゃあ放送コードがなんぼのもんじゃい！

なコトしてもいいってことお？」とゲスイ一面が顔を出そうとしているんだぞ！

男を甘く見るな明石！

「もう提督、そんなに怖い顔しないでください。確かに強引だったかもしれませんが、今回のことは、ある艦娘たつてのお願いでやったことなんですから」

「なに？」

つまりコレは明石の独断ではなく、ある艦娘の依頼ということか？

「聞いてください提督。その艦娘はたいへん嘆かれていたんです。提督がなかなか素直にならず、いまだにカラダに負担をかけることばかりしている」と。

ええ、それはもう心配していました。ひよつとしたら、この鎮守府で誰よりも提督の身を案じていたのではないでしようか？

ぐすつ。だから私にお願いしてきたんです。一日でもいいから、提督が素直に私たちに甘えて、心身共に癒されるようにして欲しいと！

泣かせますね。なんて上官思いなんでしょう！」

瞳をウルウルとさせながら、明石は事の経緯を力説する。

「やり方は確かに褒められたことではないかもしれませんが！ でも！

ここまで貴方を心配してくれる艦娘の純粋な思いを、提督は無下にするつもりなんですか!?!」

「明石。目薬片手に言われても、ゼーんぜん心に響かないぞ」
「てへっ♪」

あざとく舌を出す明石。

バレバレの演技で同情を誘おうとしたってそうはいかん。

しかしまあ、事の発端である艦娘は別にいるってことはわかったな。

明石が言うには、他の艦娘同様、俺のことを非常に心配しているよ
うだが……

けれど、こればかりは、さすがに褒められないな。

あまりにも、やり過ぎである。

マツド気味な明石に依頼なんてしたら、どれほど突拍子もない事態
が起きるか、知らなかったわけではあるまい。

今回のような薬を作ることを、確信していた節さえある。

誰かは知らないが、そこまでして、俺に無理をさせたくないとい
うのか。

うーん。どうやらその艦娘、よほど過保護を拗らせているようだ
な。

「明石。その依頼人は誰だ？ ちょっとソイツにお説教というか、話
をつけてくるから」

「え？」

ここは、ひと言ガツンと言ってやらないと、上官としての示しがつ
かない。

その艦娘本人のタメにもならない。

早いとこ、ケリをつけに行こう。

しかし、俺の要求に明石は顔を青くしたかと思うと、ブンブンと首
を横に振る。

「ダメ、ダメです！ 依頼人の詳細は提督には黙っているって約束した
んです！ 守秘義務ってやつです！ こればかりは提督にも教え
られません！」

んう？ なんだこの明石の慌てよう。

義理堅いと思わせるような言動だが、これはむしろ焦っているよう

な……

……さては

「明石。その艦娘に何本の『ネジ』を渡された？」

「ギクッ！」

明石の顔から見る見る汗が噴き出す。

とてもバツが悪そうに眼を泳がせているあたり、どうやら間違いない。

おかしいとは思った。

いくら実験好き開発好きとはいえ、明石が無償で依頼を受けるなんて。

だが真相は単純だ。

明石の奴、その謎の艦娘と取引しやがったな。

装備の強化、または機種転換をする際には『改修資材』——通称『ネジ』と呼ばれる特殊な物質が必要とされる。

これらは明石にしか扱えない代物で、多ければ多いほど、強力な装備を開発することができる。

同時に今回のような奇天烈な薬を作る際にも活用できる、極めて謎の物質だ。

いわば、技術者明石にとっては無くしてはならない、宝石に等しい貴重物。

とうぜん、明石はしょっちゅう欲しがっている。

しかし、ネジは滅多に見つかるものじゃない。

敵のボスを倒したときや、大規模な作戦が成功したとき、まるで報酬のように光と共に出現するのだが、そんな現象が起きるのも実に稀だ。

一時期、ネジがたいへん不足することも珍しくない。

その際、作りたいものが作れないあまり欲求不満になった明石が「提督〜！ これでもネジを用意できないって言うんですか〜!? チラッチラッ！」とスカートの中身をチラつかせて無理にでも要求して

くることもある（頑張つて1本、2本は集めた）

それほど、明石にとつてネジとは求めて止まないもの。

謎の依頼者は、どう集めたのか知らないが、ありつただけの数のネジを明石に与えたものらしい。

なにが上官思いか。なにが純粹な思いか。

完全に私利私欲にまみれたブラックな交渉じゃねーか！

「おのれ明石い！ ネジの魔力に我を忘れてこんな非道な真似をするとは！ この資本主義の権化め！ 今日という今日は温和な俺も怒つたぞ！」

「て、提督。お、落ち着いてくださいよ〜」

落ち着けるか！ 俺の男としての尊厳が懸かっているんだぞ!?

さつきからお前の豊かな胸に飛び込みたい衝動を必死に抑えてんだからな!?

「明石！ 解毒剤みたいなものがあるならスグに寄こせ！ そうしたら三日間食事禁止程度の罰にしてやるから！」

「充分ひどい罰なんですけどソレ!？」

「四の五の言わない！ 一秒過ぎるごとに罰のレベルを上げていくぞ！ だから早く寄こしんさい！ いーち……」

「鬼ですか!？ ま、待つてください！ 一応もしものとき用に解毒剤は作っておいたのですが……」

「なんだ、あるんじゃないか。じゃあ早くそれを……」

「で、でも。依頼人の艦娘に取られちゃったんですよね……あははっ

♪

あはは、じゃないわ！

くそっ、なんて手の込んだことを。

準備といい、画策といい、逃げ道を塞ぐあたり、どうやらその依頼人、相当な切れ者と見た。

こうなつてくると、本当に俺の身を心配しての行動なのか、怪しく思えてきたぞ。

何か他に、もつと大きな目的がある。そう黒い野望めいたものを感じる……。

ここはやはり、無理やりにも明石から聞き出すしかない。
解毒剤もその艦娘が持っていると言うのなら尚更だ。

「吐けえ明石い！ 誰に、誰に頼まれた!? 正直に吐けえ！」

「ちよつ、て、提督。そんなに肩を掴んで揺らさないでください。こ、このままでは別のものを吐いてしまつ……うぷつ」

知るか！ これは尋問だ！

さあ、ささつと（二重の意味で）吐いて楽になってしまえ！

……と、ヤケクソ気味に明石を揺らしていると、
それは起きた。

——いや、楽になるのはお前だ。

「え？」

自分の声でありながら、しかし自分のものではない声。
それが、頭の中から、あるいは心の中から、響いてくる。

……ええ？ ちよつとヤダ。

何、この感覚。めっちゃ怖いんですけど。

まるでもう一人の自分が語り掛けてくるみたいな感じ。

おいおい。千年アイテムなんて手に入れた覚えはないぞ？

腕にシルバーなんて巻きたくねーぞ俺。

——装うな。眼を逸らすな。真実の姿を、曝し出せ。

俺の戸惑いを無視して声は囁いてくる。

多感な14歳の少年少女たちなら、さぞかし大歓声を上げるだろう
シチュエーション。

しかし、いざその身で体感したら恐怖の何物でもない。

まるで、どんどん自分の意識がそぎ落とされていくような……

いや、違う。

これは、本能を引きずり出されているんだ。

塗り固めていた理性を剥がし、いままで抑圧してきた、俺の巨大な
本能を表に……

待て。

おい、待て。

それはつまり、このままでは、俺が、

ケダモノになってしまおうということの意味している。

「待っ……」

いつものように理性をフルに働かせようとした。

だが、遅かった。

いや、もはや意味を成さなかった。

俺が摂取した薬は、余すことなく、俺の神経を蝕んでいたのだから。

「あ、ああっ……」

もうひとつの声が囁く。

——その欲望、解放しろ。と。

「あ、ああああっ……」

「提督？ どうしまし……」

様子が変わった俺に明石が心配げに声をかけてきたが、その先は続かなかつた。

なぜなら、俺が思いきり明石に抱き着いたからだ。

「え？ て、提督？」

「……たい」

「はい？」

「艦娘に、甘えたい」

切な声色で、呟いた。

誰でもない、俺自身の口で。

明石「できました！ 艦娘に甘えたくなるお薬です！」②

俺は昔から、熱い男が登場する物語が好きだ。

誰しも、理想のヒーロー像がある。

漫画、小説、映画、時代劇、史実、はては現実の出会いで……きっかけは何でもいい。

どんな人間にも——よほど捻くれていない限り——「自分もかくありたい」と思えるような、憧れの対象が存在するものだ。

俺にも当然の憧れの人物がいる。

一人は俺の父。

もう一人は訓練生時代の俺を心身共に鍛えてくれた兵長殿。

そして最後の一人は……

あとはまあ、フィクション等に登場する、ハードボイルドな探偵や侍、熱い心を持ったヒーローなどだ。

架空の人物に憧れていると、よく笑う者がいる。

確かに、フィクションである彼らの生き様は、現実ではあり得ないものばかりだ。

……しかし、だからこそ「自分もこんな風に生きたい。こんな風に逞しくなりたい」と、新鮮な刺激を受けたり、あるいは自分を見つめ直すきっかけになるのではないだろうか。

正体不明の深海棲艦に脅かされる、こんな時代だからこそ、架空の英雄譚は人類を勇気づけるものだ、俺は思っている。

そういう理由から、俺はいまも変わらず、熱い男たちが描かれた少年誌や、漢気溢れるヒーローが登場する映画を愛好している。

どんな苦難だろうと、決してブレない強さと信念を持ち、巨大な試練に立ち向かう彼らの生き様を見ていると、自分など、まだまだ未熟だと痛感させられる。

そう自省する意味でも、この趣味は捨てられない。

……だが悲しいかな、昨今はその手のジャンルは敬遠されているらしい。

書店などに行くと、ほとんどの売れ筋商品は『努力をせずに授かったチカラで楽に敵を倒し、美女たちを囲って絶賛される』というようなものばかりだ。

他人の趣味趣向に口出しをするつもりはないが……正直、俺はこの手のジャンルは、あまり好きではない。

幼い頃から『友情、努力、勝利』の三原則で育ってきた分、苦労も知らずにただ無双して凄い凄いと持てはやされる物語に、どうも魅力を感じないのだ。

やはりヒーローとは、情が深く、内なる強さをひけらかさず、誰かのために苦難に立ち向って初めて、かっこよく映えるものだ。

だと言うのに……

時代は変わったのか、最近の主人公は根っここの部分まで卑屈で捻くれ者で欲深い人間等、どちらかと言うと悪役ポジションにいるべきキャラクターばかりで溢れかえっている。

仕舞いには、いい大人の男が幼い少女に対して「○○ちゃん、好き」と甘える漫画が大人気という有り様だ。

一定の需要があることは理屈ではわかつている。

そういうのが好きな手合いに喧嘩を売りたいわけでもない。

好きなものに対しては、自信を持って好きだと主張していいと思う。

だが、それでも言わせてほしい。

……けしからん、と！

ただ快樂を貪るだけの物語？

エッチな本ならともかく、普通の物語でそんなものを求めるなど

……男の王道とは程遠い！

真の男ならばもつと熱血を求めよ！

ハードボイルドを求めよ！

感涙を流すほどの人情話を求めよ！
もつと手に汗握る、男心が高ぶる物語を！
真の男に必要なのは、そんな生き様なのだ！

……と、このように、人によつては、熱くてやかましいと言われかねない主義を持っているがゆえ――

「イヤだ！ 艦娘に甘えるだけのダメ男なんかなりたくな……艦娘に甘えたい。ああ！ また口が勝手に！」

ただいま、一番敬遠しているダメ男にクラスチェンジしかけており、たいへん苦しんでいる。

艦娘に甘えたくてしようがなくなる薬。

その効果は絶大だった。

これまで数多の色欲を煽る試練を乗り越えてきた鋼の理性。

我ながら褒めてやりたいその歴戦(?)の自制力が、しかしいま、凄まじい強迫観念によって打ち崩されようとしている。

艦娘に甘えろ。艦娘に甘えろ。艦娘に甘えろ。

そんな誘惑が脳内で、うわごと謔言のように繰り返されている。

頭の中で聞こえる以上、耳を逸らすことはできない。

意識から振り払うことも不可能だった。

まさに悪魔の囁きが、徐々に俺の思考能力を奪っていく。

それが証拠に、肉体は辛抱たまらんとばかりに、目の前の明石を抱きしめたまま、いまだ離さずにいる。

「て、提督」

抱きしめられた明石は、色白の頬を桃色に染めて、ただオロオロとしている。

よもや、ここまで直球に肉体的接触をされるとは思っていなかったのだろう。

滅多に見せない、純朴な少女のような反応を示している。

しかし、拒む様子はない。

それをいいことに、明石の華奢ながらも女として成熟したカラダをさらに抱き寄せる。

いつも機材、装備ばかりを弄って、汗や油まみれになっているとは思えないほど、明石からは良い匂いがした。

普段から気を遣っているのだろう。

日々、明石の型破りな行動に振り回されて、つい忘れがちだったが……彼女もやはり乙女なのだ。

そして、途方もなく魅力的な女性だ。

密着すればするほど、明石はオスを煽るような恥じらいを見せ、悩ましく発育したカラダの感触は、ますます理性を揺さぶってくる。

もつともつと、彼女の新鮮な反応、温もりが欲しいと思ってしまう。存分に、明石に甘えてしまいたいと思ってしまう。

……いや、ダメだ。

このままでは、本当に衝動のままに流されてしまう！

甘えちゃダメだ。甘えちゃダメだ。甘えちゃダメだ！

そう言い聞かせても、やはりカラダは脳の指令を拒否する。

薬の効果は、いよいよ危険なレベルまで浸透しているようだった。

こうなつては、もう手段は選んではいられない。

「あ、明石、俺を振り払え！ このままだとお前に何をするかわからないー！」

もはや俺にできることは、わずかに残った自我の意識で明石に指示をするぐらいだった。

戦闘には向かない明石だが、それでも艦娘の端くれ。俺を振り払うぐらいの腕力はある筈だ。

「頼む明石！ 遠慮はいらん！」

しかし、いつまで経っても明石は俺を突き放す素振りを見せない。

「どうしたんだ明石？　言う通りにやってくれ！　いつそ気絶させる勢いで俺を投げ飛ばすんだ！」

「できませんよ」

「え？」

明石は俺を突き放すどころか、腕を回して抱きしめてくる。

そして耳元に唇を寄せて、言う。

「私が提督を、振り払えるはずがないじゃないですか」

視線を明石の先へ配る。

見たことのない、明石の憂いめいた横顔がそこにはあった。

いつも調子よく悪戯する小娘のような笑顔は微塵もない。

そのまま明石は、俺を落ち着かせるように背中を撫でる。

ぎこちない手つきだったが、そこには確かに温かな思いやりが込められていた。

「いいんですよ提督。このまま私に甘えても」

「明石、お前なにを……」

耳を疑うほどに優しい声色で、明石はそんなことを呟いた。

なんだ？

こんな明石、俺は知らない。

彼女がこんなにも、母性に満ちた雰囲気放つだなんて。

じつと様子の変わった明石を見つめていると、彼女もこちらを向いた。

視線が絡み合う。

息を呑んだ。

さつきまで幼稚にはしゃいでいたはずの少女が、一気に大人びた淑女としての気品を漂わせていた。

なんて優しい眼差しだろう。

「こんな形で提督を甘えさせるなんて、確かに褒められたことじゃないかもしれませんが。でも提督？　私も、今回依頼してきた艦娘の気持ち、わからないでもないんですよ」

俺の背中をヨシヨシと撫で続けながら、明石は語る。

「だって提督、本当に見ててヒヤヒヤすることばかりするんですもの。」

提督にとっては当たり前のことなのかもしれないけど、見ている側はやっぱり心配しちゃいますよ」

俺が入院する前の出来事も含んで、思い返しているのだろう。

それは過保護な心配ではなく、本気で俺の身を案じている口振りだった。

「だから、強引ではありませんけど、一日ぐらい提督が素直になる日があってもいいんじゃないかって思って、今回のことを……いえ、これは言い訳ですね。

——私自身、こんな形じゃないと提督と向き合えないんですから」
「え？」

「だって、照れくさいんですもん。いつも、モノづくりに没頭してる私に、いきなり皆みたいにお世話したり、優しくなっちゃって……らしくないじゃないですか？」

顔を赤らめながらそう語る明石には、いままで打ち明けられなかった思いを吐露する者特有の、羞恥の色があった。

「私だって、その……提督に普段のお礼とか、お返しとか、お世話だったり、したいと思うんですよ？」

もにもよると口ごもりながらも、明石は熱い眼差しを向けて、そう言った。

俺は言葉を失った。

いつだって自分の創作意欲が第一かに思えた明石が、そんなことを考えていたなんて。

内秘めてきた本心を語ったことで、明石の中で火が着いたのか。

意を決したように瞳を閉じると、明石はその豊かな美乳へと、俺の顔を導いた。

「っー」

あまりに大胆なことをするあまり、反応が遅れた。

顔中に広がる豊満な感触。

濃密に香ってくる乳房の匂い。

これまで幾度と艦娘の胸に抱かれてきたが……やはり、この柔らか

な二房に、オスを蕩かすフェロモンが最も凝縮されていることを実感する。

いつのまにか、抵抗するチカラが無くなっていた。

すんと足が脱力し、そのまま明石のカラダにもたれかかる形になつてしまう。

明石はぎゅつと、俺の頭を抱きしめ、柔らかな声で語り掛ける。

「提督、いつも、ありがとうございます。私のワガママや無茶に、何だかんだ付き合ってくれて。これでも、感謝してるんですよ？ 本当に……」

形の良い美乳に包まれながら、明石の澄んだ告白を聞く。

ドクンドクンドクン、と心臓の音がうるさいくらいに響く。

それが自分のものなのか、至近距離で聞こえる明石のものなのか、それすら判別がつかず、いよいよ意識が朦朧としていく。

「いろいろご迷惑かけたお詫びです——提督、今日は私にたくさん、ワガママ言っちゃってください。我慢しないで、いいですよ？ 精一杯、受け止めてあげますから」

追い打ちをかけるように、明石が慈しみに富んだ声で、囁いてくる。

「明石に、いっぱい、お世話させてください」
いけない。

このままでは本当に……

「明石にしたいこと、何でもおっしゃってください」
したいこと。

明石にしたいこと。

そう、明石がずっと秘めてきた思いがあるように、俺にも彼女に対して「やってみたい」と密かに秘めてきたものがある。

とても口では言えない、実行に移すこともおこがましい、想像の中だけで思い描いてきたこと。

それを、やってしまう。

枷かせを外された、この瞬間、きつと迷いなく。

ダメだ。

逃げるんだ明石。

きつと止まらない。

このままでは、お前を……

声高に叫ぼうとしても、やはり、もう抑止の声が出ることはなかった。

代わりに出てきたのは……

「……甘えたい」

剥き出したにされた本能だけだった。

「明石に、甘えたい」

理性は、屈した。

もう誰にも止めることはできない。

俺の呟きに、明石は「ふふ」と微笑んだ。

「いいですよ。どうぞ、お好きにだけ」

許しを得た。

その瞬間、理性による拘束から解き放たれた両手が、長年の思いを成就せんと、ゆつくりと明石へと伸びていく。

ああ、やってしまっただな。

本当に、アレを。

許してくれ明石。

俺はもう、自分で自分を、止められない。

「提督。来て？」

明石の声に導かれるまま、衝動に導かれるまま、俺は、ふたつの手を……

ズボツ。

明石のスカート下の切れ込みへと、突っ込んだ。

肌が露出した部分を、手で覆うように。

「え？」

さすがの明石も、これには呆然とした声を上げる。

……ああ、やってしまった。

俺はついに、禁断の地へ足を踏み入れ……いや、手を突っ込んでしまったんだな！

「あ、あの提督？　これは、どういう？」

「……かったんだ」

「はい？」

「ずっと、これをやってみたかったんだ！」

「ええ〜!？」

薬の効果のせいだろう。

躊躇すべき発言も、構うことなく叫んでしまう。

明石が履くミニスカート。

袴のように腰骨あたりに大きなスリットが入っているため、常に白い地肌が丸見えとなっている。

少しでもズレれば、ショーツどころか太ももの付け根すら見えかねない非常に際どい構造。

目のやり場に困る、そんなスカートに、いったい何度うつつを抜かされたことか。

……何度なんど、その容易に侵入できそうな隙間に手を入れてみると妄想を膨らませたことか！

それがついに……現実には！

「て、提督？　さ、さすがにコレは私も予想外というか。で、できればもう少しロマンチックなのが望ましいんですけど……ひゃううううううん!？」

明石から蠱惑的な悲鳴が上がる。

スリットに侵入するだけに飽き足らず、手が前後に動き始めたのだ。

「あつ、ちよつ、待つ……あん！　て、提督、どうしてこんな……」

しかし、考えてみてほしい。

俺が触れているのは、あくまでも腰周りだ。

胸や尻ではない。

いや、このまま勢いをつければショーツに包まれたヒップを鷲掴みすることも可能だが、そこまではしない。

あくまで俺が堪能しているのは腰元のみ。

性的な部位に触れば、それは確かにセクハラだ。

だが、腰元ならば、肩や手首に触れるのと、そう違いはないのではないか？

ならば、これもギリギリ、セクハラではない！

暴論？

では、明石の反応を見てみるがいい。

セクハラ——セクシャルハラスメントとは性的いやがらせのことを言う。

しかし……

「んっ♡ ……や、やだ、だんだん提督の手が、んっ♡ なんだか、気持よく感じられて……ひゃん♡ な、なんでえ♡ 提督の手つき、なんで、こんな……あ〜くん♡」

こうして快感に悶える明石を見ても尚、俺の行為が嫌がらせと言えようか？

我が掌で、我が指圧で、明石は悦楽の海へと浸っている。

ならば、俺がやっているのは、マッサージと変わらない。

訓練生時代、同期の間でも評判だった俺のマッサージテク。

どんなに我慢強い屈強な人物も、この手にかかれれば極楽浄土に昇るかのような笑顔を浮かべ、反抗的な人物はヨダレを垂らしながら俺に忠誠を誓い、不感症だった人物もピースをしながら「もっど〜！」とねだり、そして誰もが等しくパンツを使い物にできなくしたものだ。

乙女のデリケートな素肌を触らせてもらっている、せめてものお礼として、この手で、この技術で、明石もとことん喜ばせてやろう。

彼女にこうして甘えることで、俺は満たされた気持ちになる。

そして明石も、俺にマッサージされることで、至福の心地を味わっ

ている。
そう。

これこそが《Win Winの関係》というものだ。

「んにやああああああああん♡ ら、らめえええエエ♡ 提督の手、気持ちいいのおおオオ♡ おかしく、おかしくなるう♡
もう、立ってられにやいのお♡」

ビクンビクンと背筋を震わせ、悩ましい声を上げながら、明石はぎゅつと俺の頭を抱きしめる。

むにゆうう、と明石の形のいいバストに、顔面が押しつぶされる。カラダのバランスを支えるためにも、これは致し方なし。

なので、これもセクハラには分類されない。触れているのも手ではなく、顔だし。

セーフである。

息がし辛い、それでも、手の動きは止めなかった。

このまま、明石を最高潮の領域へと導くまでは、どんな状態だろうと動かし続けるつもりだ。

「スウウウ……ハアアア！ スウウウ……ハアアア！」

息苦しいのは大きく呼吸することで解決だ。

うむ。甘いミルクの匂いがたいへん芳^{かぐわ}しい。

「提督♡ 提督ううう♡ 私、もう♡ ダメです♡ 我慢、できない♡

昇っちゃう♡ 昇っちゃのオオオ♡」

ああ、昇ってしまえ明石！

そのまま天に向かって……昇^イってしまえ！

手の運動を最大出力に！

明石の嬌声も最高潮に……達する！

「ああああああああん♡ イクウウウウウウウウウ♡
♡」

快楽の絶頂と同時に、ひと際強く俺を抱きしめる明石。

「んぐっ！」

もはや一部の隙間もなく乳房に顔を抑えつけられ、呼吸を絶たれた俺は、明石と同調するように意識が落ちていった……

やっちまった

意識が回復すると同時に、俺は激しい後悔に襲われた。

薬の効果は、どうやら一旦、治まったらしい。

気絶したためか、あるいは内秘めてきた願望を存分に解消したためか。

だが、どの道、一時的な鎮静に過ぎないだろう。

また自我を失ってしまう前に、俺は目の前で気絶している明石を起すことにした。

「おい明石！ しっかりしろ！」

「あへ〜……」

艶やかな笑顔で倒れ伏す明石は、記憶にある訓練生たちが快樂のあまり意識を昇天させたときと同様の有り様だった。

違うとすれば、むさ苦しい野郎どもの痴態と比べ、途方もなく扇情的というところだろう。

思わず唾を飲み込むほどの色香を漂わせていたが、いまは見惚れている場合ではない。

俺はまだ彼女から肝心なことを聞いていないのだから。

「明石、頼む。起きてくれ！ お前に依頼をした艦娘はいつたい誰なんだ!？」

カラダを揺すって問い詰めても、明石はエクスタシーに浸ったたま目を覚まさない。

こ、これはまさか、俺つてばあの後、無意識でさらにとんでもないことを明石にしてしまったのではないだろうか？

スカートのスリットに手を突っ込んで腰元をサスサスする以上のことを……

いかん。ますます早いところ明石に起きてもらって真相を確かめ

なければ!

「起きてくれ明石! あの後ナニがあった!? お互いの貞操は無事か!?! お前は処女か!? 俺は童貞か!?!」

激しく揺さぶっていると明石のスカートのポケットから、ポトリと落ちるものがあった。

「ん? これは……」

それは一冊のメモ帳だった。

表紙の塗装が剥げかかっていることから、普段から使いこまれていることがわかる。

……ひよつとしたら、このメモ帳に何か手がかりになることが書かれているかもしれない。

明石には悪いとは思ったが、状況が状況だ。

俺は思いきってメモ帳を手に取り、中の内容を確認することにした。

メモ帳には小難しい設計図や数式やら、試してみたいアイデアなどがびっしりと書かれていた。

あとは装備の改修依頼をしてきた各艦娘のリストを、ずらりと並べているページがあった。

長門、霞、神通等、最近俺のもとにもやって来て、改修の許可を申請してきた面子の一覧が、明石のほうでもきっちり記録されているようだった。

気になったのは、その後半のページ。

そこには、以下のことが書かれていた。

——依頼人《S》さんから頼まれた『提督が素直に甘える薬』完成。近日実行予定。

重要項目とばかりに赤文字で、ひとつのページに大きくそう記載されていた。

その横には遊び心なのか、炎に包まれた明石が気合を入れているデフォルメイラストが描かれている。

「依頼人《S》……」

どうやら、それが今回の事件の立案者らしい。律儀なことに、明石はメモであっても、依頼人の素性を隠したようだ。

しかし《S》とは何だろうか？

何かの暗号か？

……いや、普通に考えればその艦娘の名前の頭文字か。イニシャル

だが、そうになると、該当する艦娘が多すぎる。

漣、皐月、酒匂、蒼龍、翔鶴……

うーむ。一人ひとり片っ端から当たっては、日が暮れてしまうぞ。

「いや、待てよ……」

明石がこの薬を作ったのが、ちよつと前のことならば……

犯人はここのところ明石に改修依頼をした艦娘に限られてくるのではないだろうか？

こつそりと交渉するため、表向きは装備の改修依頼をするフリをして……

依頼人リストは、ちょうど日付順に並べられている。

その若い順から見っていくと……

イニシャルが《S》の艦娘は何名かいた。

決して探しきれない人数ではない。

中には、とてもこんなことをするとは思えない艦娘もいたが……しかし、ここはすべてを疑ってかかって、総当たりしていくべきだろう。明石の言を信じるならば、解毒剤はその黒幕である艦娘が持っている。

一刻も早くそれを手に入れなければ……目の前の明石のように被害が甚大になってしまう！

「すまない明石……欲望に打ち負けた脆弱な俺を許してくれ……」

いまだに絶頂で気を失っている明石に頭を下げる。

ついでこのメモ帳を借りていくことも許してくれ。

また何か手がかりを見つけて、役立つかもしいからな。

……あ、ついでに、鎮守府にとって害しかなさそうな発明品の設計図は、提督権限で後々焼却させてもらうんで、そこんとこよろしく。とりあえず気絶した明石は妖精さんに頼み、入渠室まで運んでもらった。

しかし、何て恐ろしい葉だ。

本当に我を忘れるほどに、艦娘に甘えてしまうだなんて。

またいつあの衝動が襲ってくるかわからない状態で、該当する艦娘に聞き込みをするのは、正直不安が募るが……

しかし手段を選んでいる暇はない！

待っている、謎の艦娘《S》！

お前の思いどおりにはさせん！

提督としての尊厳を守るため、ひいては艦娘たちの純潔を守るため、俺は行動を開始した。

よし、行こう。

必ずや黒幕を見つけ出し、そして……

「思いきり甘えてやる！……ってまた口が勝手にいいい！」
前途多難である。

天使、涼月①

最近、明石のところへ行った艦娘。

そして名前のイニシャルがSの艦娘。

それが、明石に『艦娘に甘えたくなる薬』を作らせた依頼人《S》なのかは、正直わからない。

情報が不足している現段階では仮定としか言いようがない。

しかし、いまはその仮定を信じて動くしかない。

とにかく俺が真つ先にすべきことは、依頼人《S》が持っているだろう解毒剤を手に入れること。

でないと、本気でいまの俺は艦娘に何をしだすか、わからない。

手っ取り早いのは、疑わしき艦娘全員を司令室に呼び集め、ボディチェックすることだが……

これは愚策だ。

もし本当にその中に犯人がいたら、解毒剤を持ったまま司令室に来るなんてバカなこととはしないはずだ。

そのまま解毒剤を捨ててしまう可能性だってある。

俺を無理にでも甘えさせようと画策するような艦娘にとって、不要なものではないのだから。

……つまり、こうしている間に、すでに捨てられていても、決しておかしくはないということだ。

そんな危うい状況下で、呼び出しの放送なんてしたら、事態はより悪化する。

お前の目論見に気づいたぞ、と相手に報せるようなものだ。

もちろん、明石にもう一度同じ解毒剤を作ってもらおうかとは考えた。

しかし彼女は俺の失態で気絶してしまっている。

とうぶん目を覚ます様子はなかったし、いざ作業に取り掛かってもらっても、いつ完成するのかも定かではない。

となれば、やはり地道に搜索するしかない。

このわずかな手がかりだけで黒幕を見つけ出すだなんて、はつきりといって砂の中から針を探すような無茶だが。

だからって、このまま何もしままま、黒幕の思い通りになるわけにもいかない。

とにかくアクションを起こして解決の糸口をつかむのだ。

現状、俺は完全に後手に回ってしまっている。

だが相手はまだ『俺が事情を把握して動いている』ことには、さすがに気づいていないはずだ。

今ごろ『明石さんはうまくやったかしらん？ そろそろ甘えたくてしよすがなくなっている頃かな？ うふふのふ』なんてニヤつきながら油断しきっているかもしれない（※セリフはイメージです）

これは俺にとってアドバンテージだ。

利用しない手はない。

作戦はこうだ。

容疑者らしき艦娘と接触した場合、まずは薬の効果で完全に甘えん坊になっているフリをする。

もし相手がクロなら、きつとそれで「効果抜群！」と警戒心が緩むはずだ。

その隙に、懐に解毒剤を忍び込ませていないか調べ、あるならそのまま奪う。

相手に気づかれずに懐から道具や武器を抜き取る技術は、訓練生時代で鍛えられている。

仮に持っていないければ、さり気なく誘導尋問をして、うっかり口を滑らせ、吐かせる。

これも訓練生時代で身に着けた技術だ。

とりあえず、この作戦で行こう。

すっかり艦娘に戦闘を一任させるようになって久しいが、軍人としての腕は鈍らせていないつもりだ。

さて、問題はまずどの艦娘からアタックを仕掛けるかだが……

「しかし、本当にタチの悪いことをしてくれたよな」

誰だかは知らないが、さすがに今回ばかりは俺も怒っている。激おこである。

ひと言なにか言つてやらないと気が済まない。

しつこいようだが、俺が提督である以上、戦いが終わるまで安息の日は許されないのだ。

その責任ある立場を、怪しい薬を使ってまで台無しにしようとするなど……

過保護を通り越して身勝手ではないか！

許せん。

今日という今日は俺もビシツと言つてやる！

犯人が誰だろうと、厳しい処罰を与える所存である。

「ふんっ。待っているがいい《S》。俺を本気にさせたらどうなるか思い知らせてやろう……」

頭の中でお仕置きプラン（もちろんエッチな意味ではなく）を考えていると、ふと背後から……

「あ、提督！ よかった。ちょうど探していたんです」

怒りの感情も引つ込むような、穏やかな声に呼び止められる。

なんとという美声だろう。

軟弱な男なら、この声を聞いただけで腑抜けになつてしまふに違いない。

されど、いま俺の怒りのゲージは限界突破している。そう簡単に静まるものじゃない。

こんな切羽詰まっているときに誰じやいボケエ。と、ちよい悪オヤジみたいな心境で足を止めて後ろを振り向くと――

そこには天使がいた。

純白の衣を纏い、まばゆい銀髪を靡かせ、柔らかにほほ笑む、美しい天使が。

「お疲れ様です提督。いまお時間頂いてもよろしいですか？」

「……え？ あ、ああ、構わないぞ涼月^{すずつき}」

間違えた。

天使ではなく、涼月でした。

羞恥で顔が熱くなるのを感じる。

いや、しかし。

言い訳をさせていただくと、そう見間違えるのも無理はないと思うんだ。

彼女の美貌は、その……『天使』と形容しても、決して大袈裟ではないからだ。

これは何も、薬の影響で頭がイカれたわけではない。

冗談抜きで、涼月という艦娘は、美しすぎるのである。

「？　どうかされましたか提督？　涼月のお顔に何かついていませんか？」

「あ、いや、そんなことないぞ」

きよとん、と首を傾げる涼月に、俺は上ずった声で答える。
いかん。

相変わらず涼月を前にすると、冷静さをたもてん。

彼女が着任してから随分と経つというのに、いまだに、その限度を越えた美貌に慣れないでいる。

艦娘は誰もが見目麗しい美女、美少女ばかりだ。その容姿に格差をつけるなんて、愚かと言えよう。

しかし、そうわかかっていても……

この涼月の美しさは、群を抜いている。そんな言葉が出てきてしま
う。
なにせ、同じ艦娘ですら、涼月と初めて対面すると、息を呑んで心
を奪われるほどだ。

先ほどの意気込みもどこへやら。

俺は完全に毒気を抜かれた状態になって、涼月の美貌に目を奪われ
る。

防空駆逐艦、秋月型、その3番艦。

見た目が駆逐艦離れした秋月姉妹の中でも、特に等身が高く、大人
びた容貌を持つ涼月。

健康的で清潔な色白の肌。長いまつげの下にある青灰色の瞳は、見
る者を引き寄せ、魅惑的な曲線を描いた肢体は、彼女が駆逐艦^{幼い艦娘}である
ことを忘れさせる。

衣服越しても隠せない強烈なまでに艶めかしい肢体は、不思議なこ
とに品がないとは思わせない。触れがたい神聖的な美さえ感じさせ
る。

頭から足の先まで、まるで天の鼻肩と慈愛と根気で創られたのでは
ないかと疑うほどの、完成された造形美。

涼月が立つ場所だけで、別の空間ができたかのように、壮麗なもの
へと一変する。

不浄の地も、たちまち清涼に浄化されてしまうのではないかと本気
で信じ込むほどに、涼月の美しさには異質なものがある。

想像を絶した美貌というのは、本当に心を鷲掴むものらしい。

容貌はもちろん、その肉体、佇まい、纏う空気まで——涼月は、何
もかもが美しい。

だからといって、このままいつまでも惚けていては埒が明かない。

俺は「こほん」と咳払いし、できるだけ顔を引き締めて涼月と向き
合う。

「そ、それで、どうした涼月？ 何か俺に用か？」

表面上は上官としての態度を装って、内心の動揺を悟られないようにしたが……やはりいつもより声の調子が外れている気がした。

しかし尋ねられた涼月は気にした風もなく受け応える。

「はい、実は先日の件で……」

「先日？」

「その、お初さんが大変ご迷惑をおかけしたようで、申し訳ございませんでした」

そう言つて涼月は心苦しそうに頭を下げる。『お初さん』とは彼女の妹である初月のことだ。

「ああ、そのことか……」

初月が『僕を飼つてくれ』と爆弾発言をして、俺を啞然とさせたあの一件。

律儀な涼月は改めてそのことを謝罪しに来たらしい。

姉妹の中でも特に初月と密接な仲である分、気が咎めたのだろう。

「お詫びと言つては何ですが、カボチャのケーキを作ってきたので、よろしかったら召し上がってください」

涼月は箱とビニールで上品にラッピングされたパンプキンケーキを差し出す。

自家菜園を作るだけあつて、相変わらず熱いカボチャ推しである。

しかし、食生活が質素な秋月型である彼女からすれば、ケーキなんてとんでもなく奮発してくれた手料理だ。

これは相当、初月のことを気にしているご様子。

「そんな気を遣つてくれなくてもいいんだぞ涼月？ せっかくだから、そのケーキは秋月たちと一緒に食べるといい」

そうフオローを入れたが、しかし真面目な涼月は首を横に振る。

「いえ、そういうわけにはいきません。妹の不始末を詫びるのは、姉の務めですから」

キリつとした顔で涼月は言いきる。

優しさと厳しさを併せ持った姉としての一面が垣間見える。

やはり出来た娘さんだな涼月は。

「この先、提督にご迷惑をかけないよう、あの後ちやーんとお初さんにお仕置きをしておきましたから」

「え？ お仕置き？」

「はい。悪い子さんにはお仕置きです」

眉をつり上げて「私だつて怒るんですよ？」と姉の威厳を示すように、ご立派なお胸を張る涼月。

涼月のお仕置きだと？

何ソレ、めっちゃ気になる。

普段は優しさの塊である涼月が——というより、もはや善性の化身である涼月がいったいどんなお説教をするのだろう。まったくイメージがでない。

いや、でも涼月のような娘ほど、実は妹の前ではSツ気のあるお姉様になったりするのかもしれない。

たとえば、このような……

『うふふ。いけないお初さんには、たつぷりお仕置きしないといけませんね』

『あつ、涼姉さん、やめて。姉妹で、女同士でこんな……はううん！

ダメだ姉さん！ 僕、はしたない女になっちゃううう！』

『ふふつ。とつても可愛いですよ、お初さん♪』

やべえ！ オラちよつとワクワクしてきたぞ！

上官権限で是非詳細をお聞きしたい！

……でも、あの日以降、初月のやつ変わらず俺のそこへ来ては『提督よ。フリスビーで遊びたくはないか？』とか『さいきん骨をかじるのが僕のマイブームなんだ』とか言つてチラチラ意味ありげに見つめてくるんだよな。

お仕置きとはいったい……

「かわいい妹にお仕置きするのは、とても心苦しかったです……でもお初さんは聞き分けの良い子ですから、すぐに反省してくれました♪」

「ソウカ。ソレハ、ヨカツタ」

涼月さんや、どうやら君の妹さんは随分とぶてぶてしいようですよ？

やっぱり優しい涼月にはSっぽいことは無理難題だったといふことかな。

でもSっぽい涼月もそれはそれで……

ん？

S？

涼月のイニシャルはS……

……ああああああっ！

うっかり忘れていたけど涼月も依頼人《S》の可能性を持つ容疑者の一人じゃないか！

最近工場に行った艦娘リストの一覧にも涼月の名前はあったし！

……いや、でも。

さすがに涼月は違うんじゃないか？

だって、あの涼月だぞ？

マジで天使のように優しい涼月だぞ？

菜園のお手入れしているときだって、小鳥が彼女の肩に止まるぐらいだぞ？

そんな小鳥を愛しげに見つめながら、優しく語りかけるような地上に舞い降りた大天使なんだぞ？

もし涼月が今回のこと企てたって言うんならショックで三週間ほど寝込む自信あるよ俺。

ううむ。

できることなら涼月のことは信じてあげたいのだが……

しかし、容疑者は全員疑うと決めた手前、例外は作れないし。

「じー……」

俺は涼月に向けて熱い眼差しを……ではなく、疑いの目を向ける。

「提督？ あの、やっぱり涼月のお顔に何かついてますか？」

何かついてるかだつて？

とっても綺麗なお顔がついているよ？

だが俺が見ているのは、その瞳の奥にある君の本性だ。

こんな良い子を疑うのは心苦しい。

信じてあげたい。

だからこそ、見極めなくてはならない。

はたして彼女の心が見た目と同じく美しいのか、どうかをな。

「じ〜」

「提督、その、どうされて……」

「じ〜……」

「あう」

あまりにも凝視したためか、涼月の白い頬が徐々に赤くなつていく。

きよろきよろと目を泳がし、おろおろと顔を逸らす様子は、彼女があどけない駆逐艦であることを思い出させる。

「提督、そんなに見つめられると——涼月、恥ずかしい……です」

そう流し目を向けて恥じらう姿は、とても儂く、それでいて色っぽく、そして、どうしようもなく、尊かった。

……うん！ これはもうシロだよ！

こうして見つめられただけで恥じらうような純情な乙女が、菓を盛るなんて腹黒いこと考えるわけがねえ！

真に心が綺麗な女性は、見た目までその美しさが現れるもんなんだ

よ！（極論）

「あのお提督？ もしかして、このカボチャのケーキお気に召しませ

んでしたか？」

「何を言う涼月！ とつてもおいしそうじゃないか！ 喜んでいただくさー！」

疑ってすまなかつたな涼月。

謝罪の意味も込めて、そのケーキはありがたく頂くとするよ。

厚意は素直に受け取るのが礼儀というものだ。

俺の言葉に涼月はホッと胸を撫でおろした。

「よかつたあ。てつきりお初さんのことで、とても怒られているのかと……」

「おいおい、俺がそれぐらいのことで怒るわけないだろ」

薬を使ってまで俺を甘やかそうとする謎の艦娘と比べたら、初月の『飼ってくれアピール』なんてまだ可愛いものだ。

……いや、だからって『服を着ているとペットとは言えないかな……』とかボソツと呟かれるのは、焦るからやめてほしいけどね！

とにかく、涼月はきつと無関係だ。

早いとこケーキを受け取って、次の容疑者のもとへ……ドクン。

「あ」

しかし、つくづく試練というものは発生するらしい。こんなときに。

よりによって涼月が目の前にいるときに限って。

——艦娘に甘えろ

「あ、う、あ……」

またもや俺の意識は『艦娘に甘えたい衝動』によって掌握される。

「提督？ お顔の色が悪いですけど、どこか具合が……」

「……涼月」

「はい、何ですか提督？」

「もし本当に申し訳ないと思うのなら、是非ともしてほしいことがあ

るんだが……」

完全に弱みに付け込んだ脅しみたいなことを口走る俺の口。だが止められない。

意思とは無関係に、口が勝手に動く！

「あ、はい♪ 涼月にできることなら何でもおっしやっってください♪」
涼月もそんな素直に了承してはダメだ！

ああ、マズイ。

言ってしまう。

またもや内に秘めていた願望を！

涼月、俺は……

俺は、君に……

「ケーキを『あーん』して食べさせてほしい」

「え？」

……ああー。

言ってしまった。

男なら一度は体験したい、女の子に『あーん』と言ってもらって、食べ物を食べさせてもらう行為。

いや、お祝い事やパーティーのとき積極的にそういうことをしてくれる艦娘は毎回数名いるので、未経験ってわけではないのだが……

だからこそ、いままでにやってもらったことのない相手、特に涼月のような包容力いっぱい的美少女に同じことをしてもらいたいと、密かに考えていた。

考えてしまったのだ。

結果、こうして薬の効果で、あますことなくその願望を垂れ流しにしてしまう。

それどころか……

「涼月に思いきり甘えたいんだ」

ついには彼女の肩を掴んで迫る始末。
ダメだ。

やっぱり薬の効果に抗えない。

口もカラダも勝手に動いてしまう。

「て、提督……」

「頼む涼月。何も言わないでくれ」

困惑する涼月に、切な声色で、俺は頭を下げる。

「情けないと思ってくれて構わない。ただ、いまは誰かの温もりが欲しくてしょうがない……いや、涼月だからこそ、甘えたくてしょうがないんだ」

「まあ……」

何を調子のいいことを言っているんだよ俺の口い。

やつべーよ。これが公共の場だったら絶対に事案として通報されているレベルだよ。

涼月もきつとドン引きだよ。

いくら天使のように優しい彼女も、さすがにこれには難色を示すに違いない。

いやだなく、涼月に冷めた目を向けられるのは。ショックで三年間寝込む自信がある。

強引な言動と行動の裏では激しく焦りつつ、涼月の様子を伺うと……

「——うふふふ♪」

そこには、本物の天使がいた。

不純なものなど一切感じられない、神聖の光がそのまま少女の姿となったのではないかと思うほどの、美しい存在が、笑いかけてくれた。いた。

「珍しいですね。提督がそんなにも、素直に気持ちを打ち明けてくださるなんて」

ほほ笑みを絶やさず、暖かなものに満ちた瞳で、こちらを見つめる涼月。

なんて、澄んだ眼差しだろう。

不安や恐怖など、瞬く間に吹き飛んでしまう。

見つめられるだけで、深い安堵が込み上がってくる。

ひよっとしたら彼女には悪意や害意の概念すらないのではないか。

そう信じ込んでしまうほど、彼女のほほ笑みには絶対的な慈しみが込められていた。

「提督、私は嬉しいです。そこまで、涼月を頼ってくださいなんて……」

ふと、彼女の眼差しに、熱いものが宿る。

天上の祝福が、ただ一人の人間のために、ひと筋の光となって降り注ぐように。

「情けないなんて思いません。提督はこれまで、弱音を吐かずにずっと頑張ってこられたのですから」

涼月の言葉のひとつひとつが、胸の奥に眠るものをドクンドクンと呼び起こしていく。

「そんな提督が、こうして正直に私に弱音を打ち明けてくださったのなら……受け入れないわけには参りません——いえ、是非、そうさせてください」

涼月、君ってやつは……

「提督。ぐ遠慮なさらないでください」

「いたい、どこまで慈しみ深いんだ。」

「涼月でよければ——貴方を癒してさしあげます」

そう言って涼月は「うふふ♪」と、いつものように心を射抜く笑顔を浮かべるのだった。

心も、カラダも、意識のすべてが、涼月のほほ笑みに屈服する。

薬の効果など関係なく、魂そのものが、涼月という少女を、求めだす。

世界のすべてが、涼月で満たされる。

彼女は、光そのものだ。

「では提督。よろしければ、涼月のお部屋にいらしてください。たくさん、おもてなしいたしますから。うふふ♪」

涼月の美しい手に曳かれて、そのまま彼女の部屋に招待される。

涼月の自室。

そこは、至福のいつときが約束された聖地。

天国のお父さん。

今度こそ、俺は、ダメかもしれません。

天使、涼月②

艦娘たちには、それぞれの寮部屋で生活してもらっている。

一人部屋はあるにはあるが、だいたいは姉妹か気の合う艦娘と同室の場合が多い。

涼月も姉妹と同室だが、現在は不在だ。

実に好都合だった。

いや、決してやらしい意味ではない。

いまの姿を他の艦娘に見られたら、間違いなく俺の心は折れていただろうから。

「はい、提督。あ〜ん♡」

思春期の男子なら一発で恋に落ちるだろう笑顔を浮かべながら、涼月は手作りのパンプキンケーキを俺の口元に運ぶ。

ふんわりした生地感触と、カボチャの甘い風味が口の中でじゅんわりと広がる。

「おいしいですか提督?」

「うみゃい」

モグモグと食べながら率直に感想を告げると、涼月はますます機嫌良さげに顔を輝かす。

「よかったあ♪ もっと召し上がってくださいね。はい、あ〜ん♡」

口の中だけではなく、部屋の空気まで甘く染め尽くされそうな中で、俺は涼月にケーキを食べさせてもらう。

いくら涼月が大人びた見た目をしていても、人間で言えば中学生くらいの少女。

そんな相手に、いい大人がこんなことをしてもらっているだなんて

……

情けなくて涙が出てきそうだ。

泣けないんだけどな! 『艦娘に甘えたくなる』薬のせいだ!

意識は鮮明にあると言うのに、完全に肉体のコントロールを奪われてしまっている現在、俺は成す術なく涼月に甘えてしまっている。

俺のビジュアルを漫画みたく二頭身化したって、こりゃキツイ絵面だ。

それでも涼月はドン引きすることなく、慈しみ深い笑顔でご奉仕してくれている。

改めて、彼女の懐の広さには感服してしまう。

それに比べ、俺ときたら……

「提督？ 涼月にもつとして欲しいことがあったら、遠慮なくおっしゃってくださいね♪」

「じゃあ思いきり抱き締めてください」

いくら薬の効果だからって遠慮なさすぎだろ俺！

「まあ。うふふ♪ 本当に今日の提督は甘えんぼさんですね♡」

そして涼月！ 君はいくらなんでも優しすぎい！

心の中でどんなに叫んでも、届くことはない。

涼月は言われた通り、小さな子どもにそうするように、その立派な胸元へと俺の顔を抱き寄せる。

衣服越してもハッキリと大きさがわかる乳房はやはり豊満で、大の男の顔も包み込む。

そのまま涼月はたおやかな手で、俺の頭を撫でてくる。

「疲れが溜まっていらしたんですね、提督。涼月でよければ、たくさん癒されてください」

疲れの代わりに別のものが溜まりそうですけどね！

参ったな。

こんなことしている暇はないのに。

一刻も早く解毒剤の手がかりを見つけて、薬の効果を消さなくてはならないのに。

そう自分に言い聞かせても、やはりカラダは頑なに涼月から離れることはなかった。

マズイ。

この調子だと、明石のときと同じように……いや、それ以上に過激なことをしかねない！

「よりによって駆逐艦相手に！」

俺は脳内で「ダメだぞ！ 相手は駆逐艦だぞ！ いくらゴツクンボデイの美少女でもそれはアカンぞ!？」と声高で叫び続ける。

気分はさながら漫画とかでよく見る、主人公相手に注意を呼び掛ける善の心だ。

そうなると必然、主人公を誘惑する悪の心も登場することになる。

『へっへっへ。こんなおいしいシチュエーションでやることと言ったらひとつだよなあ、提督よおく』

ほら出てきた！

翼と尻尾を生やした悪の心が囁く。

『我慢することあねえさ。相手はいいって言うてんだからよお。ここは薬のせいってことにして存分にトランジスタグラマーな美少女に甘えればいいじゃねえかよおお!!』

黙れ悪の心！

俺はその程度の誘惑に負けたりはしないぞ！

そうだよな俺!?

「涼月、もっとギョツとしてくれ」

バカバカ！ 俺の軟弱者！

「うふふふ♪ もう提督ったら。いいですよ？ はい、ぎゅ〜♪」

ふわとろボイスで涼月はまた俺をぎゅっと抱きしめる。

むにゅっと顔中に満ちる柔らかな乳肉の感触。

「よしよし。今日は涼月がずっとお傍にいてあげますからね?」

涼月も涼月で頼られることで気分が高揚しているのか、俺に対する口調も、どんどん幼子をあやす調子に変わっている。

とても駆逐艦とは思えない母性に満ちた声と温もりで、涼月はどこまでも優しく俺を受け止める。

いよいよ本格的にマズイ。

このままだと善意の塊である涼月は、俺のもっと無理な要求も受け入れてしまうかもしれない。

そうだったら、行く着く先は……

な、なんとかせねば。

けど、薬の効果が解けない以上、いまの俺にはどうすることもできない。

ダメなのか。

俺の提督人生はここで終わるのか。

まさか無害の象徴ともいえる涼月に、ここまで追い込まれる羽目になるなんて。

男にとって真に恐ろしいのは、意図的な誘惑ではなく、むしろこういった純粋な善意なのかもしれない。

……いや、でも待て。

さつきまでは涼月は依頼人《S》ではないと決めつけたけれど……いまの状況って、俺を甘やかしたい犯人からすれば理想的なものではないか？

俺の中で、再び涼月に対する疑念が込み上がってくる。

天使のように優しい涼月。

……けれど、その実態は男を魅了する墮天使という可能性はないか。

「提督。他にも涼月にして欲しいことがあったら、何でもおっしゃってくださいいね？」

こう言ってくる涼月の言葉に、はたして本当に裏はないのか。

見定める方法はないものか。

そう思ったときだった。

「……じゃあ、涼月の秘密を教えてくださいませんか？」

「えっ？」

俺の口から突然、状況を一変させる言葉が出てくる。

もしかしたら『真実を知りたい』という俺の強い願望が、甘えるという形で出てきたのかもしれない。

なるほど。

明石のスリットに手を突っ込みたいという、隠してきた願望を実行に移したのと原理は同じだ。

俺が本気で望んだことが、そのまま行動に現れる。

込み上がる衝動に抵抗するのではなく、敢えて従う。

その上で、逆に策略として利用してやる。

なるほど、これが発想の逆転ってやつか。

ジョナサンパパの言葉は間違いじゃなかった。

よし、なら思いきり望んでやろう。

俺は涼月の本音が聞きたい。

涼月が本当に依頼人《S》でないのなら、その証拠を見せて欲しい。

ありのまま涼月が知りたい！

「俺も普段見せないところを見せたんだから、おあいこで教えておくれよ涼月」

「秘密、ですか」

「ないわけじゃないんだろ？」

「それは、そうですね……」

「なら、おせーておくれよお。言わないとくすぐつちやうぞ〜」

「ひゃんっ！ て、提督、ダメ、そんなところくすぐつちや……あんっ

！ うふふふ、わ、わかりました、きゃんっ、言いますからあ、ふふ

ふ、ゆ、許してくださいさあい」

ちよつと際どい方法だが、なんとか涼月に証言させる状況に持ち込んだ。

しかし、くすぐりで悶える姿まで色っぽい涼月は。

……まあ、そこはいい。

さあ、曝け出すんだ涼月。

嘘を言っても無駄だぞ。

得意ではないが、声の質、表情の動きなどから嘘をついているか判断できる洞察力は訓練生時代で身に着けている。

不審な点があれば、薬の効果を利用して、思いきりねだつて聞き出

してやろう。

涼月が依頼人《S》ならば、それで墮ちる可能性はある。

涼月は真に天使か？ それとも墮天使か？

尋問開始！

「そうですね。せっかくの機会ですし……提督、涼月のお話、聞いてくださいますか？」

涼月をそう言つて、改まるように「ん」と息継ぎをする。それすら、やたらと色っぽい。

やっぱこの娘、墮天使かもしれん。

「提督、初めてお会いしたときのことを覚えていますか？」

以前、初月にも尋ねられた問いだ。

幸い俺の口は、そのときと同様「もちろん」と返答した。

艦娘は基本的に、海で発見される。

敵が光の粒子となって消滅すると、稀に光と共に忘我状態の艦娘が出現するのだ。

そのまま発見した艦娘たちによって保護され、鎮守府に着任すると意識を取り戻す。

そして自分が何の艦であるのかを思い出し、提督である俺の前で名乗りを上げる。

この現象に関しては、諸説ある。

中には『もしや艦娘の正体は……』と人類との信頼関係を崩しかねない説を唱える者がいるが……

俺は別に真相に興味はない。

究明するつもりもない

艦娘たちが何者であれ、人類の味方であり、命を懸けて戦ってくれる戦士であり、かつて祖国を守った尊き軍艦の生まれ変わりであることに、変わりはないのだから。

ただ……

「信じてもらえないかもしれませんが……実は鎮守府に着任する前にも、私、意識があったんです。そこは冷たくて、動くこともできない……真つ暗な場所でした」

艦娘として誕生する以前の話を聞くと、どうしても考えてしまう。

この世に艦娘が現れたのは、はたして人類の敵である深海棲艦と戦うためだけなのか、ということ。

「そこにいると、とても苦しくて、悲しくて。ずっとこんな真つ暗闇が続くのかと思うと、涙が止まらなくなつて……でも、ある日、光が見えたんです」

同じ話を他の艦娘からも聞いたことがある。

艦娘になる以前は、ずっと暗闇の中で沈んでいるような感じだったと。

そして、誰もが言う。

「声が聞こえて、手を差し伸べられたような温もりを感じたんです。すると、それまで動かなかつた筈のカラダが動いて……そして気が付いたら——提督。あなたが、目の前にいらっしゃいました」

艦娘として覚醒する瞬間。

それは、誰かに救い出されたような感覚だったと。

「いま思うと、あの声は、差し伸ばしてくださった手は……提督だったんですね？」

そつと俺の手を握りしめる涼月。

その温もりは、以前も同じように体感したものだだった。

あの激戦のときと、同じように。

提督となる人間は、妖精さんの姿を視認できるという特質がある。そして、もうひとつ。

艦娘と意識を共有するという特質だ。

旗艦である艦娘と意識をリンクさせることで、提督である俺は現場

の戦況を把握しつつ、思念で指示を出すことができる。

ただし、旗艦の艦娘が攻撃を食らうと、俺も精神的にダメージを食らうというデメリットがある。

並みの人間なら間違いなく精神崩壊を起こすほどのものだ。

その精神ショックに耐えうることでできる精神力を持った人間が、提督に選ばれるのか。それは定かではない。

ただ、俺は気合いで、その精神的苦痛を乗り越えてきた。

俺の判断ひとつに世界の命運が懸かっている以上、それしきのことと根を上げるわけにはいかない。

……ただ、敵のボスが潜む最深部に進めば進むほど、まるで怨念のような精神汚染が襲ってくる。

冷たい。悲しい。恨めしい。憎い。

そんな負の感情が脳内に押し寄せ、正気を破壊し尽くそうとする。そればかりは、気合いでどうにかなるものではなかった。

俺が苦痛から膝を打つと、いつも横にいる大淀さんが「提督、艦隊を撤退させてください！ このままでは……あなたが壊れてしまいます！」と涙目で進言した。

だがそのたび、俺は愛刀を自らのカラダに刺すなどして、痛みで正気を取り戻すのだった。

『……これしきの痛み、あの日の火災で味わった地獄と比べたら、どうってことねえんだよ！ 負けてたまるか……俺たちは勝つんだ！』それは横で震える大淀さんだけではなく、海の向こうで俺を心配する艦隊に向けた言葉でもあった。

『俺に構うな！ 越えるんだろ？ 無念を晴らすんだろ？ だったら進め！ お前たちの戦いだ！ 終わらせてこい。暁の水平線に……勝利を刻め！』

いつだって海の向こうで戦い、傷つくのは艦娘たちだ。なら、安全な場所でのうのうと指示するだけの俺が、同じように戦わないでどうする？

精神的苦痛など、煮えたぎる闘志で誤魔化せばいい。

俺が諦めて撤退を指示したら、勝てる戦いにも勝てなくなってしまう

うのだから。

そして何より。

俺に救いを求める声が聞こえる以上、尚更引くわけにはいかなかった。

いつもそうだ。

敵地の最深部に向かうと、精神汚染の声とも、旗艦の艦娘とも異なる声が、脳内で響く。

助けて。帰りた。戻りたい。また海を、駆けたい——そんな、痛切な声。

声の正体など、どうでもいい。

ただ直感でわかるのは、俺が諦めたら、その声の主を救い出せないということだけ。

激戦の中で、俺は声の主に向かって、心の手を伸ばす。

こつちに来るんだ。そこから抜け出せ、と呼びかけながら。

そして戦いが終わると……誰かの手を掴んだ感触が掌に満ちる。

それと同時に、新たな艦娘が、光と共に姿を現す。

涼月のときも、同じだった。

俺に救いを求めてきたあの声は、やはり……

「提督、あなたが諦めず、進んでくれたから、私、いまここに居られるんですよね？」

涼月は俺の右手を持ち上げて、華奢な手で包み込む。

あの日、自ら刀で突き刺した右手を、労わるように。

「ありがとうございます。ずっとお礼を言いたかったです。我ながら不思議な話だと思っていたので、うまく話すきつかけが作れなかったのですが……でも、よかったです。やっと、伝えることができました」

涼月の瞳に、嘘はない。

その熱い眼差しを、嘘と言えるわけがない。

「こうして姉さんたちと、妹たちと一緒に過ごせるのも、提督のおかげ

です。あなたの諦めない強さがあつたからこそ、この日常があるんです」

そう言つて涼月はまた、見惚れるような笑顔を向ける。

「だからどうか……守らせてください、あなたの命を」

真剣な声色で、涼月は告げる。

「あの激戦……あのときほど、悔やんだ日はありません。あなたを、失うかもしれない。……だから今度こそ、守ってみせます」

命を守ることに。

それこそが涼月を動かす原動力。

彼女は、その誓いを違^{たが}えないだろう。

そう思わせる強い意思を感じさせる。

「あなたは必ず、涼月が、お守りします」

濁りの一切ない瞳と見つめ合う。

心から安堵する、慈しみの眼差し。

それを前に、疑念の心など、とうに消え失せていた。

逆に湧いてきたのは、そんなまつすぐな思いに対する戸惑い。

そして。

いまの自分に対する呆れだった。

「……涼月。俺は本当に、守られる価値のある男なのかな？」

「提督？」

薬の効果なのか、それとは関係なく出てしまった言葉なのか。

気づくと俺は、そんなことを呟いてしまっていた。

「俺は、そんな立派な人間じゃないよ。いつだって自分のことばかり考えて、心配してくれる周りを無視して、無茶ばかりしてる」

その結果、今回のような事件まで引き起こしてしまった。

涼月の真摯な言葉が、自身を見つめ直す機会を作った。

その上で、わかった。

謎の艦娘をここまで駆り立てさせたのは、他でもない。

俺の責任だ。

俺がちやんと、その艦娘と向き合わなかったせいだ。

そいつを安心させてやらなかったからだ。

止められたはずじゃないか。

俺がもうちよつと素直になつて、艦娘たちの言葉に従つていれば、防げたはずじゃないか。

俺が他人に甘えることを覚えれば。

……だが。

そうわかつていても、俺は……

他人に甘えるということができない。

一度でも、甘えることを覚えてしまつたら、きっと俺は誰かに縋らないと生きていけなくなる。

それほどに、俺は弱いから。

「涼月は俺のこと強いつて言うけど……違うんだ、強いフリをしてるだけだ。昔はもつと泣き虫だったんだ。何かあるとすぐに泣いて、母親に慰めてもらつてさ。でも……」

もう慰めてくれる母はいない。

勇気づけてくれる父もない。

だから泣き虫であることをやめた。

一人でも強くなると決めた。

父さんと母さんの仇を討つためにも、前を向いて進まなくていけないんだと言ひ聞かせて。

男なのだから。

そしていまの俺は、大人なのだから。

だから俺は、艦娘の思いに報いてやれない。

上官と部下だけの関係なら、何も問題はなかった。

でもそれ以上の関係を求められたら、拒むほかない。

他人の優しさに、甘んじるわけにはいかない。

強くあり続けるためにも。

そういう薄情な人間なのだ、俺は。

だから、涼月。

そんな人間に恩を感じる必要はないんだ。

「いいんだ涼月。そこまで俺のために必死にならなくても。俺は結

局、その思いに応じてやれるほどの器じゃ……」

「提督」

柔らかな温もりが俺を包む。

慈愛、憐憫、切情——あらゆる感情が詰まった抱擁を、涼月はしてくる。

「提督、一人で抱え込まないでください」

万感の思いを込めて、涼月は語りかける。

「誰もが弱いんです。だから支え合って生きていくんです。あなただけが強くある必要は、ないですよ？」

視線が重なる。

いままでに見たこともない、世界中の優しさを集めたような笑顔が、そこにはあった。

なぜだろう。

どうしていま俺は、母に抱かれたあの頃と同じ感覚を、味わっているのだろうか。

「気持ちに應えるとか、報いるとか、気にしなくていいんです。もう充分、あなたは私に特別な場所をくれたのですから。私は、そんなあなたを守りたいと思った……それで、いいじゃないですか？」

そつと頭を撫でられる。

まるで赤子に触れるように、その手つきは、どこまでも優しい。

「ずつと、頑張つてこられたのですね？ 誰にも弱音を言わず、ずつと一人で……」

弱音なんて、言えるわけがなかった。

俺が提督であり、人々の希望を背負っている以上。

……でも。

「提督、もう一人で頑張らなくていいんです。涼月がずつと、お傍でお守りします。あなたの支えに、なります。だから、安心して？ 私の前だけでもいいですから……」

——素直になつて？」

もう、いいんじゃないか？

俺を受け入れてくれる、艦娘の前だけでは。

再び涼月と見つめ合う。

いつのまにか、唇と唇が触れ合いそうなほどに、密着していた。

「あっ……………」

涼月もいまになって自覚したのか。

白い頬を桃色に染めて、瞳を切なげに潤ませた。

そこには、忠義や恩義とはまた異なる感情の色が宿り始めていた。

「……………どうしてしまったのでしょうか。いまの提督を見ていたら、何だか、私……………」

どこか夢見心地の表情で、涼月は俺の頬に触れる。

「提督、私、変です。胸が、とても熱いんです」

密着した乳房を、涼月はより強く押し付ける。

お互いの鼓動が、肉体を通していまにも聞こえてきそうだった。

「この気持ちは、何なんでしょう……………提督なら、わかりますか？」
わからない。

たぶんそれは俺も、憧れはしても、まだ経験したことのない感情だから。

でも……………」

「心に従ってみれば、わかるんじゃないか？」

なんの迷いもなく、俺の口はそう告げた。

「……………」

涼月はゆっくりと瞳を閉じる。

俺も同じように、心に従うまま、瞳を閉じた。

そして……………」

「お取込み中のところ失礼えええええ!!」

部屋の扉が勢いよく開けられた。

「ひゃん！ な、なんですか!?!」

「いいところゴメン涼月！ 悪いけど司令は連れて行くわ!」

「え？ えええ?」

一瞬にして雰囲気をぶち壊した闖入者は、俺の手をガシッと掴むと、動揺している涼月を放って部屋から抜け出した。

「ちよちよちよ！ な、なんだあ!? いったい何事だ!？」

俺はそのまま手を引かれて、廊下を全力疾走する形になる。

「危なかったわね司令！ あとちよつとで取り返しがつかなくなるところだったわ！」

「え!? あ、いや、まあ、確かにあとちよつとで卒業しかけるかもしれないなかったけどさ……」

とつぜんのハプニングで冷水をかけられたように正気を取り戻すと、先ほどの涼月とのやり取りを思い出し、悶絶しそうな気分になるが……

手を引つ張る艦娘は、そんな暇も与えずに俺に走ることを強いる。

「卒業？ まあ、いいわ！ とにかく私についてきて司令！ このままじゃマズイのよ！」

「マズイ？ いや、そもそもお前、どうして……」

いきなり現れるなり、俺を引つ張る、その艦娘は……

陽炎の包容力

「司令！ この陽炎かげろうがついていけばもう安心よ！」

狐色のツインテールが、彼女の意気込みを物語るように揺れ動く。陽炎型ネームシッパたる彼女は、あいかわらずその名前にふさわしい濛々もうもうと立ち昇る熱気のように、勝ち気で明るげな笑顔を浮かべる。見ているだけで勇気づけられるような、理屈抜きで元気が湧いてくる、そんな不思議なチカラを持った満面の笑みだった。

しかし……

「いや、安心しろって言われても、俺はまったく状況を飲み込めないんだが……」

駆逐寮にある一室の空き部屋。

その部屋に特に説明もなく連れてこられた俺は、安心するよりもまず困惑する他なかった。

当然である。

涼月と二人きりになって危うく我を忘れていたところを、強引にとは言え救出してもらったことは感謝しているが……

ワケもわからず振り回されてはたまらない。

何より、先ほど陽炎が口にした『このままだとマズイ』という発言も気にかかる。

「ちゃんと事情を話してくれよ陽炎。俺をここに連れて来てどうする気だ？」

「いえ、ワケは聞かないでちょうだい！」

「はい？」

「疑問はもつともだけど、いまは説明している暇もないの！ でも大丈夫！ 司令は私が必ず守るわ！」

そう言っただけで陽炎は星が瞬きそうなサムズアップ&ウィンクをする。

「とにかく司令はここでジッとして！ 私がなにかも万事解決してくるから！」

と、そのまま陽炎は勢いよく空き部屋を出ていこうとする。

「待てい」

「ひゃんっ!？」

人を混乱状態のままにして置いてきぼりにしようとする陽炎を、後ろから羽交い絞めにして引き留める。

「ちよ、ちよつとおー。離してよお司令〜!」

顔を赤くしてジタバタする陽炎。

しかし詳しいことを聞くまで離すつもりはない。

「あのなあ。何の説明もなしに安心しろなんて言われて納得する奴がどこにいるんだ?」

「だ、だから説明してる暇ないんだってばあ! 私に任せてここで大人しくしててよ〜!」

「陽炎、お前のその行動力は美点のひとつだけだな。一人だけ問題を抱え込んで、誰にも話さずに解決しようとするのは悪いクセだぞ」

口振りから察するに、どうやら俺を守ろうとしていることはわかる。

しかし、何から?

肝心な部分を陽炎は話そうとしない。

実はこういうことは頻繁にある。

何かしらトラブルが起きても、陽炎は他者に頼らず、すべて一人で解決しようとする。

そして実際、一人で一件落着に持ち込めちゃう。

陽炎にはそういうヒーロー染みた素質がある。

まっすぐな正義感と絶対的な自信でどんな障害にも果敢に挑む。頼もしいと言えば頼もしい。

……しかし、一方でその正義感と自信が強すぎるあまり、周りの声に耳を傾けないところがある。

一度自分が正しいと思っただけは決して疑わず、勝手に一人で突っ走り、結果的に何も事情を知らない連中を放置するような形になる。

今回もまた同じケースだろう。

一人事態を把握しているものの、内密にしたまま独力で片づけるつもりらしい。

それで「安心しろ」などと言われても、当事者としては無理な相談

だ。

逆に不安になってしょうがない。

「陽炎、強引に連れてきた以上、お前には説明する義務があるぞ？ 何があつたんだ？ 言うまでは行かせないぞ」

「ひゃん！ もう、どこ触ってるのよ！ 司令のエッチー！」

「え、エッチって、別に変なところは触ってないだろ!？」

言っておくが、どきくさに紛れて際どい箇所を手を伸ばしたりはしていないからな。

断じて。

「司令ったら、いくら薬のせいで甘えん坊さんになってるからって、こんなこと……」

「ん？ 何でお前、そのこと知ってるんだ？」

「あつ！ やば……」

うっかり洩らしてしまったらしい陽炎の発言。当然聞き逃さなかつた。

どういうことだ？

俺に『艦娘に甘えなくなる薬』を盛ったことは、製作者である明石と計画を企てた艦娘しか知らないはず。

なんで陽炎が知ってるんだ？

「陽炎？」

「あう……」

念推すように尋ねると、さすがの陽炎も観念したらしい。

溜め息を吐いてから渋々と語り出す。

「うう。わかつたわよ白状するつたら……。司令がいま、どういう状況に置かれているのかは理解しているわ」

「理解ってどこまで？」

「明石さんが作った薬でいまマトモじゃないってことと解毒剤が必要なことも」

驚いた。

本当に事情を把握しているようだ。

「お前、どうやって知つたんだソレ？」

「情報の出どころは聞かないでちょうだい」

「なに？」

「知らなくていいこともあるってことよ。司令にとってショックなことかもしれないし。深入りしないほうがいいと思うわ」

「どうやら陽炎は俺よりも詳しいことを知っているようだ。」

「ひよつとして俺が考えていた以上に、今回のトラブルは大ごとなのか？」

「私が責任持って解毒剤を持ってくるから、司令はここで待っていて」「……その口振りからすると犯人の当てはついてるみたいだな？」

「まあね。だからこそ聞かないでちょうだい。司令のためにも、その娘のためにも——司令には知られずに終わらせたいの」

「真実は時に人を傷つける。」

「明るみに出さず、知らないままのほうが、誰もショックを受けなくて済む。」

「それは一理ある。」

「実際、今回のことで俺は少し傷ついている。」

「まさか艦娘の誰かがコソコソとこんな凶行を起こすだなんて。」

「犯人にはひと言ガツンと言ってやるつもりだったが、いざ対面したら悲しさのあまり何も言えないかもしれない。」

「陽炎はそんな俺の気持ちを察して、真相を闇の中に封じようとしているのだろう。」

「これ以上俺を傷つけないように。そして犯人である艦娘との信頼関係を守るために。」

「陽炎は思いやり深い娘だ。」

「無理強いするところもあるが、それは相手を本気で心配しているがためだ。」

「そんな彼女は、俺と主犯の艦娘の双方のことを考えて、穏便にトラブルを解決するつもりなのだろう。」

「二度とこんなこと起きないように、私がちゃんと説得する。だから司令、私を信じて任せてくれない？」

「こちらを振り向いて力強く言う陽炎。」

その目はとても真剣だった。

「……そうか。陽炎の気持ちはよくわかった」

「ほんと？ よかったわ。じゃあ、そろそろ離し……」

「いや、そう言われると余計に気になってきた。聞き出さずにはいられない」

「はい!？」

「そもそも俺は提督として事件の全容を知る義務があるんだ。引くワケにはいくまいよ」

「ええええ!?! 普通この場面でそんなこと言う!?!」

「言いますとも。てなわけで尋問します。こちよこちよこちよ」

「ひゃっ!?! ちよ、ちよっとお!?! くすぐらないでよお!?! ひくっ、あははは!?! だ、だめえ!?! 私、脇は弱い、ひいいん!?!」

羽交い絞めしていた片腕を陽炎のお腹に回し、カラダを支える。

もう一方の手で陽炎の脇をこちよこちよとくすぐる。

「そろそろ吐きんしゃい。いったい誰が犯人なんだ？ 洗いざらい話さないとかくすぐり続けるぞ?」

「ふふ、あはははは!?! し、司令の鬼い!?! わからず屋あ!?! ひきっ、ふハハハハああん!?! ちよっつと、脇腹までくすぐらないでえ!?! アハハハハ!?!」

先ほどの勇ましさも何処へやら。

搔痒感からカラダをくねらせながら涙目で大笑いする陽炎。

何とも嗜虐心を煽る反応に勢いが乗っていく。

「ふひやひや、ひやひやあん!?! し、司令!?! くく、も、もう許してよお!?! あははっ!?!」

「やめて欲しかったら知っていること言いなさいってば」

「だ、だから言えないんだってばあ!?!」

「ええい!?! 強情な奴め!?! 続行だコラア!?!」

「うひやひやん!?! バカバカ司令のイジワル!?! セクハラで訴えてやるううう!?!」

確かに大の男が見た目中学生の少女をくすぐるなんて、ギリギリでセクハラかもしれないな。

だが真犯人を暴くためなら手段は選んでいられない。
スマンな陽炎。

限界が来る前に素直に話したまえ。
しかし流石というべきか。

一部の艦娘から『物語の主人公みたい』と言われるほどの胆力と度胸の持ち主である陽炎。

くすぐられたただけでは、なかなか口を割らなかった。
その結果……

「はあ、はあ……。も、もうらめえ……」

もはや笑い声を上げる体力も残らないほどに消耗してしまった。
さすがに可哀想になってきたので、陽炎が失神する前に拘束を解く。

陽炎はそのまま、ぐったりと床に倒れ伏した。

じたばたと抵抗したためか、衣服はすっかり乱れ、めくれたシャツから白いウエストや、ささやかな胸の谷間が丸見えとなっている。

消耗した身を横たえ、涙目で息を吐くその姿は、見ようによつては
いかがわしい暴行を受けた後に見えなくもない。

……いや、あながち間違いではないか。

我ながらやりすぎたと反省。

「す、すまん陽炎。大丈夫か？」

腰を下ろして倒れた陽炎を介抱する。

陽炎は呼吸を整えながら、俺に非難の目をぶつける。

「はあ、はあ……。司令のバカ。やめて、って言ったのにい」

上気した顔でそう言われると、一層インモラルな空気が濃密なものとなる。

普段はそこらの男児よりも男児らしい活発さを誇る陽炎。

しかし弱まった状態で切なげな瞳を浮かべる姿は、男心を煽る色香を放っており、やはり陽炎も乙女なんだと痛感させられる。

つい反省の気持ちも忘れて、ドキっとしてしまう。

「司令ったら、本当に甘えん坊さんになっちゃってるみたいね」
「え？」

「でないよ、こんなマネしないでしょ?」

「ま、まあ、そういうことにはしておこうか」

俺の突飛な行動を、陽炎は葉のせいだと思っっている様子。

だが実際、無関係というわけでもないだろう。

いつもの俺なら駆逐艦相手にくすぐりの尋問をするだなんて、躊躇するはずだ。

多少なり葉が影響していたものと思える。

そのためか、陽炎の表情から非難の色はだんだんと薄れ、イタズラを働く弟に呆れるような苦笑を浮かべる。

それは、多くの妹を持つ長女にしかできない、寛容に満ちた笑顔だった。

「ねえ司令? そんなに、私に構ってほしかったの?」

「はい?」

彼女が浮かべるその表情は、いつのまにか溺愛している妹たちに向けるものと同じものになっていた。

……いや、それとはまた別の感情も混ざっているだろうか?

「もしかして、私に傍にいてほしいから、あんな風に引き留めたりしたの?」

「あ、いや、だからそれは犯人のことを教えてほしかったからで……」

「本当かなあ? だっていまの司令、艦娘に甘えたくてしようがないんでしょ?」

からかうような笑みを浮かべて、ちよんちよんと指で俺の胸元をつつつく陽炎。

どうも過剰なスキンシップによって陽炎の中で、何やらスイッチが入ってしまったらしい。

妹を甘やかす、長女としてのスイッチが。

「司令ってば、いま実はものすごく、私に甘えたかったりするんじゃないの?」

「ん?」と小首を傾げる陽炎の表情が、だんだんと甘ったるく蕩けていく。

陽炎は頼られたり、甘えられたりすると、とても機嫌が良くなる。

ネームシップとして、そして長女としての誇りが強いためか、誰かに必要とされることに喜びを感じるようだった。

そこに『過保護』をブレンドしたら、どうなるか。

結果は明白である。

「うりゃ」

「んぐっ!？」

陽炎は床から起き上がると、そのまま身を屈めている俺をぎゅっと抱きしめてきた。

「しようがないなあ。甘えん坊さんの面倒は、お姉さんがちゃんと見ないとね♡」

トロンとした声色で、俺の顔を胸元へ導き、ヨシヨシと頭を撫でてくる。

ひかえめな膨らみながらも、ちゃんと柔らかな弾力を誇る陽炎の胸元。

しかも乱れたシャツの中から、甘い少女の匂いがむせるほどに香ってくる。

男の本能を揺さぶる刺激が、これでもかと襲ってくる。

いかん。

また『艦娘に甘えたい』衝動が引き出される危険な状況に陥ってしまった！

「ふふ♪ 司令にこんなことする日が来るなんて、なんだか新鮮。でも悪くないかも」

「お、おい陽炎。こんなことしてる場合じゃないだろ」

「遠慮しない遠慮しない♪ 大丈夫だって、誰にもバラしたりしないから。好きなだけ私に甘えてくれていいのよ？ ふふん♪」

だめだこりゃ。

陽炎のやつ、完全に『お姉ちゃんモード』に入ってしまったって本来の目的まで忘れてる。

一刻も早く解毒剤を手にしななければならないのに。

しかし……

「よしよし♪ この陽炎型ネームシップに何でも言ってくれていい

んだからね〜♪」

イケナイとわかかっていても、陽炎の抱擁には不思議と抗えない魔力らしきものがあつた。

ヘタをしたら本気で頭が幼くなって、少女であるはずの陽炎に甘えなくなるような、そんな魔力が。

それは長女だけが持ち得る包容力。

小さなカラダでも、どんなことでも受け入れられる広い広い器。

なるほど。陽炎型の姉妹たちが、長女に頭が上がらない理由も領ける。

これほど深い慈愛を向けられたら、その思いに応えずにはいられなくなるだろう。

思えば、陽炎はいつだって過剰なつてぐらい妹たちへの面倒見がよく……

……面倒見が、いい？

瞬間、俺の脳が光速で処理を始める。

甘えなくなる薬。

依頼人《S》

陽炎が庇おうとする存在。

ふとしたきっかけで、頭の中に散らばるパズルのピースが揃うことがある。

まさにそのような勢いで、記憶中枢に閃光の波が訪れる。

そうだ。

考えてみると不自然なことが、いくつもある。

それが意味することは、つまり……

「謎はすべて解けた!」

「ふえ!?!」

解答を得た俺は、思わず陽炎の抱擁から抜け出した。

そうか。

そういうことだったのか。

俺は陽炎の肩をガシッと掴む。

「陽炎、どうやらこの部屋から出すわけにはいかないのは、お前のようだ」

「え？ どういうこと？」

「説明しよう」

戸惑う陽炎に、俺は辿り着いた答えを口にする。

ちよつと強引な推理ではある。

しかし、これですべての辻褄が合うのだ。

俺に『艦娘に甘えたくなる薬』を盛ることを企てた、謎の艦娘、依

頼人《S》

その正体は、ずばり……

明かされる《S》の正体

「謎の艦娘《S》……その正体は、犯人は——」

明石と交渉し、薬を作らせ、俺を甘えん坊にしようと画策した艦娘は……

「お前だ、陽炎^{かげろう}」

「……え？」

俺の指摘に陽炎は口をポカンと開けた。

よもや自分が犯人だと指摘されるとは思っていなかったのだろう。目に見えて陽炎は動揺しだす。

「ちよ、ちよつと待って司令。どうして私が犯人なの!？」

「ああ、俺もさつきまでは違うと思っていたよ。このメモを見るに、前は候補から外れるからな」

懐から明石のメモをスツと取り出し、陽炎に見せる。

依頼人《S》

明石の工廠を訪ねた艦娘のリスト。

それが主犯らしき艦娘に辿り着くためのヒントだった。

「俺はこのメモから犯人は最近明石に改修を頼んだ、^{イニシャル}頭文字がSの艦娘だと思っ込んだ。涼月を始め、鈴谷、蒼龍、白露、時雨……容疑者は何人もいた。

……だが、俺はそのイニシャルにとらわれ過ぎていた。ヒントはもうひとつあったんだよ」

依頼人《S》と書かれた文字の横。

そこには炎を纏った明石のデフォルメイラストが描かれている。

最初は何てことのない、ただのラクガキだと思っていたが……

「これも重要なキーワードだったんだ。この絵はある文字を隠している」

「文字？」

「炎に包まれた明石……すなわち、これは炎の文字を意味している。そして、この『S』。俺はてつきり日本語表記のイニシャルだと思っただんだ。」

陽炎ならイニシャルはK。だから違おうと決めつけた。しかし……読み方を変えたらどうなる？」

「え？ それは、えーと……」

「陽炎は英語で『Heat haze』……このままだとイニシャルがHでまた候補から外れる。だが文字を分解すると……」

陽と炎。

文字を単独にした途端、意味は変わりだす。

「陽にはいろいろな意味があるが……そのひとつに『日の光』がある。それを英語にすると——『Sunlight』。イニシャルがSになるんだよ」

「あ……」

「そして陽炎の名前はこのリストの中に入っている。つまり陽炎。お前も容疑者の候補に入るってことだ」

「そ、そんなの当てずっぽうよ！ そもそも私は司令を守ろうとしてるのに……」

「そこだ陽炎。思い返すと不審な点がいくつかあるんだ」

「不審？」

「そうだ。薬や犯人の情報を俺より詳しく知っていることもそうだが、なにより……」

どうして俺が涼月の部屋にいるってことがわかった？」

「っ!? そ、それは……」

「一見、我を忘れた俺を助け出してくれたように見えたが……いくら何でもタイミングが良すぎる。どう考えても不自然だ」

ベストタイミングの乱入。

それが可能だったのはつまり……

「犯人はずっと俺を尾行していた。たぶん、明石が薬を盛ったその時点からな」

恐らく明石を通して薬の効き目がある確認していたのだろう。

そして目論見は見事、達成された。

「薬の効果が靦面だと把握した犯人は、俺が司令室に出たところで声をかけるつもりだったが……」

しかしそこで間の悪いことに涼月が現れた。

「犯人の目的が俺を艦娘に甘えたくなるカラダにするだけなら、すでに目的は完遂されている。

……だがもしも、犯人が甘えたがりの俺を独占しようと画策している艦娘となれば？」

「っ!？」

「真の目的は俺と二人きりになること。他の艦娘といい雰囲気になっていたなら、そりやおもしろく思わない。本来、自分がそうするはずだったんだと、ストップをかけるんじゃないか？」

「ち、違うの。私はただ……」

「陽炎、お前は俺を守ると言ってこの空き部屋に連れてきたが……本当は味方のフリをしてここに監禁するつもりなんじゃないか!？」

「そんな！ 誤解よ！ 私は本当に司令は守ろうと思っただけ！ お願ひ信じて!！」

「無理だ！ 明石に薬を盛られた時点で俺は疑心暗鬼の塊なのだ！ なにも信じられない!！」

「落ち着いて司令!！」

「こんな部屋にいられるか！ 俺は出ていく!！」

「出ていくって……ちよっ！ 窓から!?! 司令ここ2階よ!?!」

「なんぼのもんじゃい！ 危険を冒してでも男の尊厳は守り抜く！ 提督の名にかけて！ とう!！」

「司令ええええ!?!」

そのまま文字どおり俺は2階の窓から飛び降りる。

常人ならば間違いなく怪我をするだろうが、こちとら訓練生時代毎日のように地獄の特訓を受けた身。

これぐらいで致命傷を負うような、ヤワな鍛えた方はしていないつもりだ。

……だが長い入院生活でカラダが鈍っているぶん、このままだと多

少なりダメージがあるかもしれない。

地上まであと間近、というタイミングで……

「司令、危ない」

とある艦娘が俺をキャッチしてくれた。

艦娘の超人的なチカラがあれば、高度から落下してきた大の男を受け止めることも容易だ。

おかげで地面への激突は避けられた。

「ご無事ですか司令？」

「あ、ああ、助かったぜ」

「いったい何事ですか？ いきなり窓から飛び降りてくるだなんて」

「説明は後だ。いまはとにかくここから離れたい」

「よくわかりませんが……了解いたしました。歩けますか？」

「ああ、たぶん……あ、いや、ちよつと足を捻うちまったみたいだな」

「それは大変です」

「すまないが医務室まで連れて行ってくれるか？」

「構いません。では、このまま参りましょう」

肩を貸してもらって、そのまま医務室へ向かう。

入渠でどんな傷も回復する艦娘にとって、医務室は不要なものだ。

ゆえにこの医務室は、鎮守府でただ一人の人間である俺のためだけに用意された場所である。

この辺に艦娘が通りかかることは滅多にない。

ここならば誰にも邪魔されず、ゆつくりできるだろう。

「何があったのですか？ あんな無茶なマネをされるなんて、よほどのことのようなのですが？」

湿布を用意しながら彼女は尋ねてくる。

「ああ、実はな……」

ベッドに腰を降ろしつつ、俺はこれまでの経緯を語る。

ある一点を伏せて。

「そんなことがあったのですか……」

「もう参っちゃったよ」

「心労お察します。さぞかし苦勞されたことでしょう」
「本当にな。そういうわけだからさ……」
背を向けた彼女に向けて、俺は言い放つ。

「大人しく解毒剤を寄こしてくれないか？ —— 不知火しらぬい」
「……」

俺を医務室まで運んだ艦娘……陽炎型2番艦、不知火は、その場で身動きを止めた。

「……何のことですか？」
「お前が持つているんだろう？ 明石の作った解毒剤」

「なぜ私が？」

「決まってるだろう」

俺は言った。

「不知火。お前が犯人だからだ」

「……おかしなことをおっしゃいますね」

背を向けたまま不知火はそう言う。

その声は微塵も動揺していない。

「先ほどおっしゃったではないですか。その犯人から逃げるために窓から飛び降りたと」

「ああ」

「なら解毒剤を持っているのは私ではなく、犯人である陽炎のはずではないですか……」

「おっと、変だな」

「はい？」

「俺は『ある艦娘から逃げてきた』とは言ったが……その相手が陽炎

「……」
「ボロを出したな。さっきまでのやり取りを盗み聞きでもしない限り、そんな風に口を滑らせたりはしないぜ？」

「……」
「観念しろ、不知火。いや……——依頼人《S》」
不知火はゆつくりと、こちらを振り向いた。
相も変わらず、情緒の読めない表情だった。

まるで姉の陽炎と対を為す、氷のように冷ややかな瞳が、俺に向けられる。
「……いつから、私が犯人だど？」
微塵も感情を乱さず、不知火はそう言った。
「こちらも落ち着きを取り持ちつつ語る。」

「確信したのは窓から飛び降りたところをお前に助けられたときさ。いや、正確には犯人を特定するためにああしてひと芝居打ったのさ」「芝居？」
「犯人は必ず俺を助けると踏んだのさ。手段はともかく犯人が俺のことを守ろうとしていることだけは判明していたからな。」

「犯人が俺のあとをずっとつけていたなら、あの場で動かざるをえない。そうだろ？」
「呆れましたね。もし尾行されていなかったら、どうするつもりだったんですか？」

「いや、犯人は間違いなく俺のことをずっと尾行していたよ。なにせ陽炎は、ソイツを追って涼月の部屋までやってきたんだからな」
「……っ」

「あまり考えたくないが、お前、涼月に何かするつもりだったな？ だから陽炎は必死に止めたんだ。取り返しのつかないことが起こる前に」

「……ぜんぶ憶測じゃないですか」
「いいや。陽炎が必死に犯人を庇っている時点で察したよ。犯人は陽炎型の誰かだって」

「司令の推理どおり、陽炎が犯人だったかもしれませんよ？」

「あんなの推理でも何でもなし。三文探偵小説になら使われそうなトリックだけだな、いくらなんでも強引すぎるだろ……もつとも、あながち間違いはなかったらしいけどな。」

「イニシャルS＋燃え上がるイラスト——見事に該当するな、しらぬい不知火」

「それだけで私が犯人と決めつけることこそ強引では？」

「言っただろう？ 窓から飛び降りたのは犯人を特定するためだつて。」

「そもそも……俺を抱きとめた瞬間、不自然に襟元に手を伸ばした時点で、お前が犯人だと確信したよ。証拠品を回収したかったんだろが……墓穴を掘ったな」

「……っ！ それは……」

「お探しのものはコレか？ 不知火」

俺はポケットに忍び込ませていたUSBメモリのような機械を取り出す。

それは今朝、俺の軍服の襟元に隠されていた——盗聴器である。

「用意周到なことだ。前日に俺の軍服にコイツを忍び込ませて、動向を伺おうとしていたわけだ」

「なぜ、それを……」

「軍人を舐めるなよ？ ちよつとでも首元に違和感あれば、何かが生込まれたとわかる。着た時点で気づいたよ。」

もつとも、こういうのは逆手に取って利用するのが基本だな。気づかないフリをして下手人を誘導し、炙り出すつもりだった。ちよいと説教するつもりでな。

「……まさか、こんな形で利用することになるとは思わなかったけどさ」

「……すべて計算していたというのですか？」

「途中からな。なんせ薬のせいで思うように発言できなかったからよ。随分とモタついちゃったが……陽炎のおかげでうまくいった。」

陽炎を疑う演技をすることで、お前を油断させたのさ。芝居に付き

合ってくれた陽炎には感謝だな」

明石のメモ帳を取り出し、あるページをめくる。

そこにはペンで書いたばかりの真新しい筆跡があった。

『これは芝居だ。俺に合わせてくれ。そして犯人のことは——お前の妹のことは俺が何とかする。これは俺の責任だ。どうか任せてほしい』

陽炎は最後まで躊躇していたが、俺が目で力強く訴えると、頷いてくれた。

そして、

『不知火のこと、お願いね』

長女の切な願いと、動かぬ証拠がそこに記されていた。

「さて、ここに来たのは他の艦娘に危害が及ばないようにするためと……お前とゆつくり話し合うためだ」

ベッドから腰を上げる。

足を捻ったというのはもちろん嘘だ。

「聞かせてくれ。なぜこんなことをした？」

俺の問いを聞いて不知火は、

「……ふふ」

ここで、はじめて表情の変化を見せた。

皮肉にも、とびきりいい笑顔だった。

「さすがは司令ですね。あなたのように勘のいい殿方は好きですよ」
ねっとり絡みつくような視線を浴びせられる。

背筋に冷たいものが奔る。

目の前にいるのは、本当に俺の知る不知火なのだろうか。

愛想がなく、不器用で、それでも仲間のために真っ直ぐに戦ってきた艦娘。

それが今ではまるで、娼婦のごとき妖艶さをたずさえて、俺を射すくめている。

「なぜこんなことをですって？ 決まっているのではないですか」

俺が重傷を負ってから過保護になった艦娘たち。

だがこの不知火は……彼女が抱えているものは、過保護なんて生やさしいものではない。

いびつな笑み。光を失った瞳。

そう、これは……

「すべて、あなたのため。不知火なりの、愛ですよ」

狂気そのものだ。

不知火の思惑①

戦艦も顔負けの貫禄と実力を持つ駆逐艦。

それが鎮守府内で蔓延る、不知火に対する風評だった。

目で敵を殺せる。

艀装がなくても十分に強い。

いちばん怒らせてはならない艦娘。

何を考えているのかわからなくて怖いのです（b y プラズマ）

等々、およそ一隻の駆逐艦に向けられるとは思えない数々の通説。

確かに泰然自若とした佇まいは、とても駆逐艦とは思えない落ち着いた

きぶりがあるし、誰も寄せ付けないオーラのようなものがあるのも、

また事実。

けれど、俺の知る不知火しらぬいは、単に感情表現が苦手な、不器用な娘で

しかなかった。

そう。あのときだって、アイツは俺を振り回していたんだ。

「え？ 妹たちに甘えてもらいたい？」

「はい……」

いつものように冷たい鉄面皮で、不知火はそんな相談を持ちかけてきた。

「どうも姉妹の中で不知火だけ妹たちと距離があるような気がするのです。陽炎はどの妹とも親密に接することができるのですけど」

「まあ、アイツは妹たちのこと溺愛してるからな」

「はい。妹たちはそんな陽炎になら何でも話せるという感じなのです
が……」

「ですが？」

「なぜか不知火には畏怖の情らしきものを向けるのです。何故なので
しょう」

「いや、それは……」

お前が怖いからだろ？

とはつきり言う勇氣はなかった。

「長女が一番に慕われるのはわかります。ですが不知火とて姉。たまには私を頼ってもいいと思うのです」

「ふうん。つまり不知火……」

彼女の話を要約すると、

「陽炎に嫉妬してるわけか？ 妹たちを独り占めにされて」

「まあ、そんなところですよ」

「へえ〜」

次女特有の悩みというやつだろう。

いままで心の内の読めないやつだと苦手意識があったが、こいつにもカワイイところがあるんだな。

そのときは、そう微笑ましく思ったものだ。

「また心臓に悪い眼力でやってくるもんだから何かと思えば……お前、そんなことに悩んでたのか」

「そんなこととは何ですか？ 不知火は真剣に悩んでいるんです。だからこうして恥を忍んで司令に相談をしているというのに……」

「あ、いや呆れて言ったわけじゃ。わ、悪かったよ。そんな怖い顔で睨むなって。いや、本当に怖いからヤメテ」

「すみません。不知火、表情硬くて」

「それ弥生やよいのセリフ」

「何ですか？ 不知火が使っちゃいけない決まりがあるんです？」

「それ！ そういう風に威圧的な話し方するから妹たちが怖がるんだろうが！」

「っ!？」

「そんな雷に打たれたみたいなの顔して驚くなよ。自覚してなかったんかい」

いろいろ過剰装飾された噂が流れていても、裏を返せば何でもない。

やはり不知火も駆逐艦相応に、かわいらしい悩みを抱える少女なのだった。

「まあ、とりあえず妹たちが困っていたら助けてあげたらどうだ？
それだけで印象は変わるもんだぞ」

「なるほど。では試してみます。ご教示痛み入ります」
そのようにアドバイスを送った後日……

「はあく困りました……」

「ん？ どうした萩風^{はぎかぜ}。溜め息なんて吐いて」

「あ、司令。実は嵐^{あらし}が最近、夏バテ気味で……」

「ああ、ここんどこ本当に暑いからなあ」

「それで私、夏バテに効く健康料理を作ってあげたんですけど、嵐^{あらし}は『これぐらいでへバツてたまるかあ！』って強がり言っただけで食べてくれないんです」

「嵐らしいな。でも流石にそれは問題だな」

「はい。どうにかして治してあげたいんですけど……」

そう困っている萩風と話し合っていると……

「どうしたの萩風？」

「ひっ!? し、不知火姉さん？」

横から不知火が割って入ってきた。

なぜかドスの利いた声で。

「何か困りごと？」

「え、ええ、まあ、そんなところですよ……」

萩風はオドオドしながら答える。

無理もない。

男の俺ですら、不知火の威圧感に満ちた表情と声には怯むものがあった。

とても好意的とは言えない態度で不知火はズイツと妹に距離を詰める。

「困りごとなら、この不知火に話してごらんなさい」

「え？ し、不知火姉さんにですか？」

「そうよ。言っただけならいい」

「えっと、その……」

「どうしたの？ 何か言いにくいことなの？」

「い、いえっ！ そんなことはないのですが……」

「だったら話してみなさい。さあ、さあ」

「あ、あうう」

「なぜ黙っているの？ ほら、言っでごらんなさい。この不知火に。この姉に……さっさと言いなさい！」

「ひいひい!? ご、ごめんなさいごめんなさい！ 不知火姉さんには迷惑はかけません！ か、陽炎姉さんに相談してきますう！」

不知火の凄みで恐怖の臨界点が越えた萩風は、足下が渦巻きになるような勢いで去って行った。

妹のそんなリアクションを見て、不知火は、

「あんな早足で逃げるなんて。よほど恥ずかしい悩みごとだったのかしら」

本気で理解できんとばかりに頭をひねったので、俺は思わずその脳天にチョップを繰り出した。

「何をするのです司令。乙女に暴力を振るうなんて。ましてや、まったく役に立たないアドバイスをした分際で。ひどい人ですね」

「お前のほうがひどいわー！」

不知火の想像以上の不器用ぶりに、俺は頭を抱えた。

どうりで陽炎型の姉妹のことごとくが、長女を頼るわけである。

「アホかお前は！ あんな尋問じみた聞かれかたしたら誰だって怖がるわー！」

「不知火に落ち度でも？」

「落ち度しかねえんだよ！」

こんな一件があっても不知火はめげずに、その後も度々アドバイスを求めてきた。

「司令。不知火は確信しました。私に足りないのは愛嬌だと」

「そうだな。お前には微塵も存在しない要素だな」

「憎たらしいくらい正論なのでキャメルクラッチをするのは控えましょう」

「まずそのすぐにキレル性格を直したらどうだ？」

些細な発言ひとつで拳をバキバキ鳴らすような姉など誰も持ちた
くないはないだろう。

「で、どうやってその愛嬌を出す気だ？」

「夕立ゆうだちさんや球磨くまさんを見て思ったのです。口癖のようなものがあれ
ば親しみやすさを感じるのではないかと」

「まあ、確かに多摩たまや秋津洲あきつしまとかもマスコットの愛らしさがあるな」

「なので不知火も考えました」

「え？」

「見ててください」

そう言つて不知火は小首をあぎとく傾げ、両手を猫のようにする
と、

「ぬいぬい」

無表情＋棒読みで、そんなセリフを吐いた。

窓も開けていないのに、冷たい風が吹いた。

「……」

「ぬいぬい」

「ゴリ押しされたところでリアクションのしにくさは変わらんつて
の」

「愛らしさを感じませんか？ こう男性的に」

「愛らしさなら雪風を見て勉強しなさい」

「むう……」

不満げな顔を作る不知火。

ここで唇を尖らせて拗ねたりすれば愛嬌は出るというのに、不知火
の場合は野犬も逃げ出すような渋面を作るものだから、まったく愛ら
しさを感じない。

本当にお前は駆逐艦なのか？ と浦風や浜風や秋月たちに聞くの
とは、また別の意味でそう尋ねたくなる。

「愛嬌よりもまず笑顔を作る練習をしたらどうだ？」

「笑顔ですか？」

「おうとも。対人関係では何事も笑顔が基本だからな。自然な笑顔を

作れるだけでだいぶコミュニケーションは楽になるはずぞ?」

笑顔は自分を守るための武器。なんて言葉もあるぐらいだから。「少なくとも、そんな無愛想な顔のままじゃ妹たちは甘えてくれないぜ?」

「失礼ですね。不知火だつて笑えますよ?」

「おう、そうかい。じゃあ笑つてみてくれ」

「はい。では」

グギツ

「こわっ!? ちよ、やめて! すぐにヤメテ! なにソレ本当に笑顔!?! 仮にラノベの挿絵に使われたら読者ドン引きするレベルだよ!?! ページ捲つた瞬間叫び声上げて本ぶん投げるレベルだよ!?! つうかグギツつてなに!?! ニコリじゃなくてグギツて!」

「うるさいですね。不知火の満面の笑みに何か落ち度でも?」

「落ち度しかねえつての! ああ、夢に出そう! ぜったい今夜うなされる!」

「……そうですか。そんなに、不知火には愛嬌がありませんか……」

「え? あ、いや、その……」

さすがに言い過ぎたか。

「わ、悪かったよ。その、不知火には不知火なりの良さがあると思うぜ?」

本気で落ち込みだした不知火に何とかフォローを入れるが、

「いいんです無理に慰めなくても。どうせ不知火は戦闘しか取り柄のない女なんです」

まいったな。

部屋の隅で体育座りを始めてしまった。

「ふっ。陽炎が太陽なら不知火は月。太陽の光がなければ自分から輝くこともできない星。それが私」

ついには双子姉妹の片割れが劣等感剥き出しに言いそうなセリフまで言い出す。

いよいよ、いかん。

……仕方ない。

「おい、不知火お姉ちゃん」

「なんですか、いきなりお姉ちゃんだなんて。気色悪いですよ。」

「気色悪い言うな！ 甘えさせる練習に付き合おうとしてんだらうが！」

「練習？」

「おう。この調子じゃどうせまた空振りばかりして、ますます妹たちに怖がられるだろうからな」

「まあ、それはありえますね……」

「な？ だから俺でよければ練習台になるぜ？」

ぶつちやけ駆逐艦に甘えるだなんて、恥ずかしいことこの上ないが……傷つけちゃまった手前、ここは恥を忍んで協力するべきだろう。

「バカですかあなた」

「おい」

人の厚意をバカとは何だ。

「よくもまあ、そんな発想ができるものですね」

「ほつとけ。じゃあ他に何かいい方法思いつくのか？」

「残念ながら現状では他に思いつきませんね。やむを得ません」

溜め息を吐いてそう言う不知火。

まったく。相談持ちかけに来てんのはソツチだったのに、偉そうなやつだ。

「しかし、ずいぶんと大きな弟ができてしまったものですね」

「ご不満か？」

「可愛げがあるとは言えませんか」

「けつ。悪うござんした。どうせ可愛げねーですよ」

「ええ、可愛げのない者同士ですね。だから……」

そう言って、こちらを振り向いた不知火の表情は、

「案外、相性がいいかもしれませんね？」

とても自然な笑顔だった。

——なんだ、ちゃんと笑えるじゃねーか。

不知火の笑顔を初めて見た日。

あの笑顔を妹たちにも向けられたなら、きっと何のわだかまりのない関係が築けることだろう。

このときの俺は、そう確信していた。

しかし……

「思い出しますね司令。あの頃、よくあなたに膝枕をしてあげましたよね」

いつからだろう。

本来、妹に向けるべき深い感情は、

「他にも抱きしめたり、頭を撫でたり、お菓子を食べさせてあげたり。ホント、大きな弟ができたみたいでしたよ。

でも……不知火にとっては、それがいつしか安らぎの時間になっていました」

不知火の願いは、いつのまにか、見当違いな方向へ矛先を変えてしまっていた。

「司令、警戒しなくてもよろしいんですよ。あの頃と、同じことをするだけじゃないですか？ 何をそんなに怯える必要があるんです」

そつと距離を詰めてくる不知火。

その瞳に、正気の色は失われている。

「いいんですよ。我慢なさらず、不知火に甘えてくださっても。あの頃とは比べものにならないくらい、激しく、深く、不知火を求めてくださっても」

足が後退する。

堂々と向き合うと決めたはずなのに、いつのまにか心が、目の前の少女に臆している。

「あなたを失いかけて、やっとわかったんです。不知火にとって、あなたの不器用な優しさが、どれだけ自分にとって掛け替えのないものだったかを。

陽炎にも、妹たちにも明かせない本当の私……あなたになら、ぜんぶ見せられる。だから……」

不知火は腕を広げる。

「どんなことをしてでも、あなたの命を守ってみせます。もう二度と、無茶なことなんてできないように」

そう言つて、不知火は慈しみ深い笑顔を浮かべた。

「ねえ司令？ 不知火は、ちゃんと笑えていますか？」

「……」

「たくさん、練習したんです。笑顔も、優しく接する方法も。だからお願いです司令。」

——不知火に、甘えてください」

不知火。俺は……

そんな悲しい笑顔は、見たくなかったぞ。

不知火の思惑②

自分で言うのもなんだが、俺は上官として報われているほうだと思う。

これだけ多くの部下たちに信頼され、身を案じてもらえるだなんて、そうあることじゃない。

一人ひとりと向き合い、ともに障害を乗り越えてきたからこそ、得られた絆だと自負している。

もちろん、すべてが順風満帆だったワケじゃない。

中には俺に反感精神を持つ艦娘もいたし、ときには衝突することも珍しくはなかった。

だから尚のこと、誠意を忘れてはならないと己に言い聞かせて、艦娘たちと向きあってきた。

軍艦から人の身を得て、深海棲艦と戦うべく運命づけられた乙女たち。

そんな彼女たちの数少ない理解者に、自分がなるのだと。

それが命を賭して戦う彼女たちに対する、提督以前に、人としての最低限の義務だと思った。

悩んでいるのなら、手を差し伸べよう。

やりたいことがあるのなら、自由にやらせてあげよう。

不安に苛まれているなら、少しでも和らげる助けをしよう。

言葉を交わすことが叶わなかった軍艦の頃とは違う。気持ちを伝え合う手段が、自分たちの間にはあるのだから。種族は違えど、わかり合える筈だ。

そう信じて、俺は今日まで提督を続けてきた。

その結果が、いまのような状況だ。

艦娘たちが過保護になるほどの信頼関係を築けたことに、はたして俺は喜ぶべきなのか。

……いや、それ以前に、俺がやってきたことは正しかったのだろうか。

変わり果てた彼女を見ると、そんなことを考えてしまうのだった。

「司令。不知火なら、司令のすべてを受け入れる覚悟があります」

かつての鉄面皮を忘れてしまう柔和な笑顔で、不知火は語る。

「あなたの教えどおり、上手に、的確に、優しく接するコツを覚えたのです。家事やお料理もできるようになったのですよ？ きつと司令を満足させられます。

……不知火はもう、あの頃とは違うのです」

そう、違う。

俺の記憶にある不知火と、目の前の不知火は……

「もう、陽炎にだって負けません。私が一番——司令を幸せにできるんです」

俺が不在の間、彼女の中で、どんな心境の変化があったのだろう。

陽炎^{長女}への対抗心を剥き出しにして、妹たちともっと親密になりたいと願う不器用な少女。怒りっぽく、手にかかる、されど微笑ましくも愛らしい艦娘。

俺は良かれと思って、そんな彼女の助けになった。

それがどうして、こんなことになってしまったのか。

ただ、言えることはひとつだ。

「不知火……お前がやっていることは、間違っている」

陽炎に説得を頼まなくて正解だった。

コンプレックスの対象である陽炎がどんな言葉をかけたところで、いまの不知火は耳すら貸さなかったことだろう。

それどころか、事態はより悪化していたかもしれない。

だからこそ、俺が言わねばなるまい。

不知火がこんな凶行を起こした原因である俺だからこそ、はつきりと。

「不知火。正気に戻れ。こんな無理やりな形で俺を甘えさせるなんて、絶対に間違ってる……」

「では早速ベッドの準備をいたしますね」

「いや、聞けよ」

迫真の声音で説得を仕掛けたところ、しかし不知火、コレを華麗に

スルー。

あれ？　ここは普通、シリアス全開な会話パートになる筈だよな？
「とうにかベッドの準備って、何をする気だよお前は」

「何をつて、それを不知火の口から言わせるのですか？　イヤですね
恥ずかしい」

頬をポツと赤らめて、恥ずかしげに言う不知火。

本当に何する気ですかアタタ！

「え、ええい！　いいから、とにかく解毒剤を寄こさんかい！」

身の危険を感じたので、無理やり話の流れを本題に戻す。

負けるな俺。不知火のマイペースに振り回されちゃイカン。

ここで男を見せなければ、ここまで乗り越えてきた苦労がすべて水の泡になるのだぞ！

「ふう。あいかわらさずムードを台無しにする人ですね司令は」

「お前こそ雰囲気をぶち壊しておきながら偉そうだな」

俺のツツコミにも動じず、不知火は呆れ気味に懐から一本の小瓶を取り出した。

ラベルには明石のデフォルメイラストとご丁寧に『解毒剤ですよ』と腹が立つような文字が記載されている。

「これがそんなに欲しいのですか司令？」

不知火は手元の小瓶を挑発するようにチラつかせる。

「どうやら捨てずに残していたようだ。ひとまず最悪のケースは避けられた。」

「不知火。素直にソレを寄こすんだ。いまならまだ許してやる」

「渡さなかったら？」

「心苦しいが、こんな大事を起こしたぶん、相応の罰を与えなくちゃいけないな……」

神妙な顔つきでそう伝える。

隙を突いて解毒剤を奪うという手もあるが、再犯を防ぐためにも不知火自身が反省した上で渡さないと、解決したことにならない。

多少脅すような形になっても、ここは強気に出るべきだ。

もともと不知火は真面目な艦娘だ。こんな事件を起こした主犯だ

としても、後ろめたい感情が僅かにでも残っているのなら、きつと応じてくれるはずだ。

そう信じて、俺は凄みを強めて交渉を続ける。

「もう一度言う。解毒剤を寄こせ。でないと、本当にひどい罰を与えるぞ」

「……わかりました」

眼力を加えて凄むと、不知火は畏まったように瞳を閉じた。

よかった。どうやら俺の思いが通じたらしい。

なんだかんだ言つて、やはり不知火は聞き分けのいい優等生なんだな。

「わかってくれたか不知火。じゃあその解毒剤をこつちに……」

「いえ、渡しませんが？」

「は？」

「だって渡さなければ司令が直々に罰を与えてくれるのでしょ？」

そんなの心躍るに決まっているじゃないですか。是非お願いします」

「あれ……!?!」

どうということ!?!

何で不知火のやつ目を爛々とさせて罰を期待しているの!?!

「さあ司令。どんな罰を与えてくれるのですか？　どんな激しいことでも不知火はバツチコイですよ」

謎の迫力を纏いながらズイズイとこちらに迫る不知火。

なにやら底知れぬ恐ろしさを覚え、思わず「ひえっ」と情けない声
が上がる。

「や、やめろ！　息を荒げてコツチに来るな！」

「ご無体な。貴方のほうから期待させるようなことを言っておいて。焦らしですか？　それも結構ですが、できれば不知火は××で××なことと、さらには……（以下、放送コードがなんぼのもんじやいな発言の数々）をしていただけるとたいへん気分が昂揚し……」

「はいストップ！　女の子がそんな破廉恥な言葉使っちゃいけませんーん！」

やべえ！

これ初月のときと同じだ！

真面目な艦娘ほど性癖拗らせてしまったパターンだ！

どうしてこうなるまで放っておいたんだ、陽炎お姉ちゃん！

「お、落ち着け不知火！　というかお前の目的は俺を甘やかすことじゃなかったのか!?!」

「ああ、そうでした。なるほど、司令はまず不知火に甘えることをご所望しているわけですね。いいでしょう。ではやはり先にベッドの準備を……」

「そういう意味じゃねえー！」

どうしよう、この子ぜんぜん話聞いてくれない！

おかしいな。

本来ならここで金○先生ばりに「人をダメにするような思いやりはねえ！　思いやりとは言わないんだよ！」と説教をして、「申し訳ございません司令。不知火が間違っていました。ぬいぬい（泣き声）」と不知火を反省させる予定だったのに。

なぜこうも「うっかり一族の遠坂さん」みたいに裏目に出るの？

「往生際が悪いですよ司令。ここまで来たのならあなたも男らしく覚悟を決めて不知火に身をゆだねたらどうですか?」

そしてどうして俺のほうが『コイツ空気読めてねえな』みたいな感じで責められなきやいけないんだ。

「あ、あのなあ不知火。もうちよつと真面目に話を聞いてくれよ。状況を考えるとそういう場面だろ、ここは?」

刑事ドラマで例えるなら、追い詰められた犯人が凶行の理由を語る大事なことだよ?　崖の上じゃないけどさ。

「状況?　そんなの不知火が一番理解してはいますが」

「なに?」

「司令がこの医務室に来てくださった時点で、不知火の『優位』と『勝ち』は決まったようなものですからね」

不知火が不敵な笑みを浮かべた、その瞬間、

「あ……」

ドクン、と不吉な鼓動が打つ。

「もしや無我夢中で忘れていらっしやいましたか司令？——薬の効果は、まだ切れていないのですよ？」

「う、あああつ」

カラダが熱い。

体内で火が燃えるような熱さに、上擦った声が漏れる。

しかし不快な感覚ではない。

これは……理解を超えた快感が込み上がったときに上げる類いのものだった。

制御が効かない。

脳髓が膨れあがりそんな強烈な刺激を前に、処理能力が追いつかない。

「……えたい」

あたかも泥酔に似た心地の中、口から勝手に言葉が漏れる。

「艦娘に、甘えたい」

艦娘に甘えたい衝動。

それが、ここへ来て、とんでもない規模となつて押し寄せてくる。まるで、これまでの症状など前座に過ぎなかつたと言わんばかりに。

遅効性、という言葉が浮かぶ。

まさか、ここからがこの薬の本領発揮とでも言うのか？ 不知火はそこまで計算をして……

「どうされました司令？ この解毒剤が欲しいのですよ？ さあ、こちらに来てください。もつとお傍に」

ダメだ。

いま迂闊に不知火に近づいたら……今度は二度と、正気に戻れない。

衝動のまま、不知火に欲望をぶつけてしまう。

そんな確信がある。

「くっ……うわあああ！」

だが堪えた。

最後の意思を振り絞つて、床に身を叩きつける。

……それでも、肉体は正直に、床を這ってでも不知火のもとへ向かおうとしていた。

「ダメじゃないですか司令。そんな風に勢いよく倒れたら危ないでしょ？ どこか痛いところはございますか？ 不知火が手当てしてさしあげますよ？ ふふふ……」

不知火は余裕の笑みを崩さない。

主導権は自分にあるのだと言わんばかりに。

……いや、実際にそのとおりだ。

いまこの場での支配者は、不知火に他ならない。

彼女の言うとおり、俺がこの医務室に来た時点で、勝敗は決していたんだ。

浅はかだった。

説得でどうにかできると思った俺が愚かだった。

だが、もう手遅れだ。

演技で不知火をおびき出したつもりだったが、逆にまんまと策に嵌められたのは俺のほうだった。

「司令。もう我慢なさらなくていいんです。不知火がすべて受け入れます。あなたを幸せにします。だから——」

溺れてしましましょう。

そう不知火は語る。

どこまでも深い慈愛と……狂気を孕んだ瞳を浮かべながら。
「なぜだ……」

何がここまで不知火を駆り立てるのか。

愛想がなく、不器用で、それでも仲間のために真っ直ぐに戦ってきた艦娘。

誰よりも、堅実で、眩しいほどに、まっすぐな艦娘だった。

それがどうして、こんなことに……。

俺が重傷を負ったことで過保護になった艦娘たち同様、守れなかったことへの罪悪感が積もり積もってしまったからか？

甘えて欲しいのに甘えてくれない不知火の妹たち。その代わりにして執着されているからか？

それとも単に開花したての衝動に翻弄されて、我を失っているからか？

不知火が変貌してしまった、この現実を受け入れられないあまり、俺はかすかな正気をつかみ取りながら尋ねる。

「なぜお前が、こんなことを！」

「そんなの、あなたが好きだからに決まっているではないですか」

「……はい？」

虚を突かれる。

聞き間違いか。

この深刻な局面において、場違いも場違いな発言に、俺はしばし言葉を失った。

「好きって……え？ あ？」

間抜けな声上がる。

だって待ってくれよ。

まさか俺、いま告白されたのか？

こんな、切羽詰まった状況で？

それも……あの不知火に？

「なにを不思議がっているのですか？ まさか、私がただ心配性を拗らせて、こんなことをしていると思っただけですか？」

この場で思いを吐露することは、何の不自然でもないとはかりに、不知火は胸を張って語る。

「言っただけでしょう？ これは不知火なりの愛だと……一人の異性として、あなたをお慕いしている。だから、ここまでするんじゃないですか」

「……な、な」

言葉が出ない。

いくら過保護になっても、艦娘たちが俺に向ける感情は、忠義とか恩義とか感謝の気持ちから来るものだと思ひ込んでいた。

けれどまさかそこに、思慕の念をいなく艦娘がいたとは。

完全に予想外だった。

だってだ。こんな、しょうもない男に？

普段の俺なら美少女からの告白に歳も忘れて舞い上がるところだったのだろうが……こんな甘酸っぱさとは縁遠い現状で、夢見心地の気分に入るなど、到底できない。

ただ衝撃を受けるばかりだった。

「意外ですか？　不知火のような堅物が色恋にうつつを抜かすことが……。でも司令。あれほどひたむきに不知火のワガママに付き合ってくださいったかたに、特別な感情をいだかないとでも思ったのですか？」

不器用な不知火が妹たちと仲良くなるため、よく付き合っただけの特訓。

あれだけのことでも、いだいてしまうものなのか。

恋心というものは。

「それに司令。『あんな顔』を見せられたら、乙女としては到底、辛抱できませんよ」

「え？」

「作戦時は上官として凛々しい顔を。プライベートの時間では砕けた明るい顔を。そんな人があんな風に……不知火の膝の上だけでは、寂しげな寝顔を浮かべるなんて——それで、愛しさを覚えない女がいると思いますか？」

呆然と倒れ伏す俺の傍に不知火が寄ってくる。

腰を屈め、片手で俺の頬にそっと触れる。

「自覚していましたか司令？　眠っているときのあなたは、本当に悲しそうな顔をしているんです。眠りながら涙を流すことだって何度もありました。いつもいつも、悪い夢を見ているんでしょう？」

「……」

両親を失った日。決して忘れることなんて出来ない。

あの日の出来事は、いまでも頻繁に夢に見る。

どれだけ時間が経っても、決して色褪せることはない。

忘れてはならない。

あんな地獄を二度と起こさないために、俺は提督になったんだ。だから、止まるわけにはいかないんだ。

そう言い聞かせていた筈なのに……。

「知っていましたか？ あなたがそうして眠りながら泣いているとき、不知火はよく頭を撫でて『大丈夫ですよ？』と語り掛けていたんです。そうすると、とても安らかなものになるのです、司令の寝顔が。その様子が、どれほど愛しかったことか」

「思いもしないところで、俺は弱さと覚悟の甘さを、部下の少女に見せてしまっていたらしい。」

「そんな司令を見て、わかったんです。『ああ、これがこの人の本当の顔なんだ』と。」

司令、あなたはいつも気丈に振る舞っているけど、本当は温もりと癒しを求めているんでしょ？」

違う。

そんなの俺には許されない。

この戦いが終わるまで、世界を救うまで、安穩とした生活なんて許されないんだ。

それがあの地獄で生き残った者の義務だ。

そんな訴えを目力から悟ったのか、不知火は首を横に振る。

「司令。どれだけ取り繕ったところで、あなたの本当の心は、他人の優しさを欲しているんですよ？」

「な、に？」

俺の、本当の心だと？

「だって、あなたが飲んだ薬は——封じ込めている感情を表に出す、『素直になる薬』なんですから」

再び呆気に取られる。

そんな、バカな。

俺が飲まされた薬は『艦娘に甘えなくなる薬』ではなかったのか？

「実は最初に明石さんに作ってもらったのは、その薬なんです。司令が本当はどんな思いを抱えているのか、知りたくて。……でも結果が

不確定でハッキリしないものを飲ませるのは危険だと明石さんに諭されたので、代わりに『艦娘に甘えたくなる薬』を作ってもらいました」

でも……と不知火は続ける。

「それでも、やはり、気になつてしまったんです。あなたの本当の心の内を。だから計画の前日、明石さんに内緒でこっそり薬を入れ替えたんです。どんな結果が出ようと、それが司令の心から望むことなら、不知火は叶えるつもりでした。そして……」

にこり、と不知火は清らかな微笑を浮かべる。

「安心しました。やはり司令は、私たち艦娘に甘えたくてしようがなかったのですね？」

「あ……あ……」

もはや否定の言葉は何の効力も持たない。

なぜ言えようか。

この込み上がる胸の高鳴りは、俺の偽りない感情そのものだったのだから。

どうして抗うことができようか。

理性など、もう何の役にも立たない。

知ってしまったから。

認めてしまったから。

ああ、そうだ。

あのときも、あの瞬間も、俺は——本心のままに、艦娘に甘えていた。

「司令、もう頑張らなくていいのです。あなたはもう十分に戦いました。あとはすべて私たちに任せて、もう休んでください。あなたの心も、それを望んでいるのですから」

そう、望んでいる。

自戒と自制の裏で、俺はずっと、平穏と安らぎを……誰かの温もりを求めていた。

弱さは恥だと、そう言い聞かせて目を逸らしてきた真実の姿。

「ずっと我慢されてきたのですね？ 甘えることが許されない立場だ

から、いつも強かな上官として振る舞うしかなかったのですね？ なんて、かわいそうな人。ああ、だからこそ不知火が、一生お傍にいてさしあげます」

もう抗えない、振り払えない。

他でもない俺が、ずっとこんな言葉を求めていたのだから。

でも、待ってくれ。

この感情を曝け出すのは、提督としての使命を果たしてからだ。

それまでは、どうかお願いだ不知火。

俺に、提督を、続けさせてくれ。

じゃないと、じゃないと俺は。

だから、その手元にある解毒剤を……

「心配いりませんよ司令。あなたが負い目を感じる必要ありません。やがてそんな感情も忘れてしまいます。だって……

もう薬の効果を消す解毒剤は捨ててしまったのですから。これは、ダメーです」

「……」

最後の希望。

もはや、それすらも、絶たれた。

「正確には、あなたが飲んだものと同じ薬です。『素直になる薬』……司令のために用意したのですが、でも、むしろ不知火自身が最も求めていたものかもしれません。だって……」

キュポンと、不知火は瓶の蓋を開ける。

「これで不知火も、あなたに本当の思いを伝えることができますから」
そう言つて不知火は、瓶の中身を……

一気に飲み干した。

しばしの間を置いて、床に落ちた瓶がパリンと弾ける。

「あ、はあ、司令……はああつ」

上気しだす不知火の顔。

華奢なカラダをビクビクと震わせて、熱い吐息をこぼす。

「はあ、はあ、司令え……司令え」

情欲に濡れた熱い眼差しが向けられる。

まるで甘い蜜が絡めついてくるような強い思慕の念が、総身に浴びせかけられる。

「司令え、お願い、です。もう、無茶なことしないで」

それは今までに聞いたことのない艶っぽく、乙女じみた不知火の声だった。

「死んじやイヤです。生きて、傍にいてください。不知火を、見て。不知火に、甘えて」

普段の凛々しい姿は微塵もない。

舌足らずな少女のようなその口調は、不知火が幼い駆逐艦であることを思い出させる。

「ずっと、ずっと待っていたのに。あの頃のように、いえ、それ以上に、いっぱい、いっぱい不知火に甘えて欲しかったのに……」

なのに司令は、ひどいです。私よりも先に陽炎と仲睦まじく触れ合うなんて。それを耳にしていた不知火の気持ちが変わりますか?」

涙まじりに不知火は地団太を踏む。

駄々っ子も同然の態度だった。

「いやっ……いやです! 陽炎にだけは負けたくない! こればっかりは絶対に!」

不知火のほうが、陽炎よりも、いっぱいいっぱい司令と触れ合ってきたんですから!」

克己を投げ捨て去った感情の発露。

長女への嫉妬も、自らの思いも、不知火は余すことなく吐き出す。

これが真実の不知火の姿だと言うのなら、普段の彼女は、いったいどれほど肩ひじを張っていたというのだろう。

「もう誰にも邪魔させない。不知火が司令を守るんです。他の人たちのやり方じゃダメなんです。こうでもしないと、司令はまた無茶をしてしまうから」

世界を守るためなら命を投げ捨てることも厭わない。

深海棲艦の精神汚染から逃れるためなら自傷することも厭わない。

そんな俺だからこそ、艦娘たちは過保護になってしまった。

そんな彼女たちの思いを拒んできたからこそ……いまのような状

況を作り出してしまった。

これが。

これが俺のしてきたことの末路なのか。

「お願いです司令。生きてください。それだけでいいんです。あなたが生きてさえいてくれれば、不知火は……」

不知火に抱き起され、そのまま熱い抱擁を受ける。

拒むチカラも、意識も、もはや薄れている。

どうして拒める。

俺のために、ここまで熱い涙を流す少女の思いを。

「どんな手を使つてでも、あなたの命を守ります。あなたの望みを叶えます」

俺を守りたいという気持ちも、俺への恋情も、まぎれもない真実だと、他でもない不知火の態度が物語っている。

無理だ。

ここまで純粹で、強靱な願いを、どう振り払えというんだ。

手を引かれる。

抵抗力を失った肉体と意識が向かう先は、医務室に置かれたベッド。

「司令、あなたはもう、心置きなく、自分の望みを叶えていいんです。不知火が、それをすべて受け入れます。だから、司令……」

心を明るみに曝し、魂まで裸となった男女の至る末路は、ただひとつだった。

「不知火と、幸せになりましょう?」

その声を最後に、

ブツリ、と電源が落ちるように、俺の自我は、

役目を終えた。
責任を放棄した。

そして提督は艦娘に甘える

泣いている。

誰かが泣いている。

ぼんやりとした意識で、その泣き声の在り処を探す。

慰めなくてはならないと思っただからだ。

理由はわからないが、泣いているのなら、手を差し伸べなくてはならない。

ほうっておけない。

なぜなら、その泣き声が――

あまりにも子どもの頃の自分と似ていたから。

両親を失ったときの自分と。

結婚記念日。

俺の両親は毎年この日を欠かさずに祝った。

普段から充分付き合いたてのカップルみたくイチャついているクセに、この日になると二人はより深くお互いの愛を確かめ合うのである。

それぐらい本当にラブラブだったわけだ。

まったく。盛り上がるのはたいへん結構だが、そのイチャつきぶりを毎年見せられる息子の気持ちにもなっしてほしいものである。

毎度まいど、ケーキを食べる前に、胸やけしてしまいそうだった。

……けど、決して嫌いな日ではなかった。

豪華な料理が食べられるから、というだけじゃない。

なんだかんだで、幸せそうに笑い合う両親を見ると、自然と自分も微笑ましい気持ちになったからだ。

結婚記念日を祝うことすらない家庭なんてザラにある。

我が家にはそれがない。

いつまでも色褪せることがない思いを、両親はいだき続けている。それはきつと、凄いことなのだと思う。

子どもながらに、二人の関係性を「いいな」と羨ましく思った。いつか自分も、二人のように素敵な相手と巡り合って、本気で恋する日が訪れるのだろうか。

そんなことを考えながら、仲睦まじく語り合う両親を見ていた。

『俺は幸せ者だな。こんな素敵な家族を持てたんだから』

父は決まって、毎年そんなことを言った。

お酒が回っていたせいでもあるが、よくもまあ恥ずかしげもなく、そんなことを口にできるもんである。

でも父の言うとおりであった。

幸せだった。

間違いなく。

母も、そして俺も。

日頃から当たり前前に感じすぎていて、つい忘れてしまうけれど、そう簡単に手にすることができないもの。

失ってはならないもの。

—— 自分も、二人の子どもに生まれて幸せだよ

自分も恥ずかしげなく、そんなことを言えば、父と母は喜んだだろうか？

喜んだだろう。きっと思いきり抱きしめてくれたに違いない。

でも照れくさくて言えなかった。

そりやそうだ。

いつまでも思ったことを無邪気に口にできるような子どもじゃないんだ。なんて、偉そうなことを思った。

子どもらしく、してればよかったんだ。

意地なんて張らないで、言えよよかったんだ。

どうして、言えなかったんだろう。

それが両親との——

最後の思い出だったのに。

赤い世界。

空には不気味な姿をした化け物がたくさん飛んでいる。化け物のカラダから切り離されたものが地上を焼き尽くしていく。港のほうから化け物の咆哮が轟く。

何度も大きな爆発が起きて、建物が粉々に砕けていく。なにもかもが崩壊していく。

よく遊んだ公園。友人たちと作った秘密基地。休日に両親とよく出かけたデパート。おいしいパフェが食べられる洋食店。通りがかるたびに、あれが欲しいこれが欲しいとよくねだったホビーショップ。

……もはや、見る影もない自分の家。

消えていく。なにもかもが炎に吞まれていく。

熱い、苦しい。

でもそれ以上に、いつも傍にいてくれた人たちがいないことが悲しい。

どうしてだろう。

その日は、自分たち家族にとって大切な日だったのに。素敵な一日で終わるはずだったのに。

どうしてそれが、こんな地獄に変わってしまったんだろう。わからない。

こんな目に遭う理由がわからない。

何も悪いことはしていないのに。

確かによくイタズラしたり、ワガママを言ったりして、叱られるしただけ、ちゃんと反省すれば、あの人たちは許してくれた。優しく頭

を撫でてくれた。

何も悪いことは、していないのに。優しくて、あつたかい人たちだったのに。

なのに、どうして。

父さん、母さん、どうして、あなたたちが……

忘れてはならない光景。

こんな地獄を二度と起こさないため、俺は戦うと決めた。

こんな理不尽なことが、あつていいはずがないから。

生き残った俺が、やらなければならないんだ。

だから、戻らなくては。

義務を果たすために、俺は鎮守府に戻らなくては。

でも……誰かが泣いている。

無視することができない。

だって、きっと助けを求めているから。あの日の俺と同じように。

炎の中、俺を必死に救い出してくれたあの兵長殿のように、俺が救い出さなければ。

そう思ったとき、視界から赤い色が消えた。

悪夢の原風景とは、まったく異なる場所に切り替わる。

そこは瓦礫の山だった。月明かりに照らされていて、ひどく寂しい印象を与える。

どこか見覚えのある場所だった。

ここは……ああ、そうだ、あの激戦で崩壊した鎮守府だ。

それが証拠に、辛うじて原型を留めている提督用の机と椅子が、瓦礫の中に紛れ込んでいる。

毎日使ってきた机と椅子だ。見間違えるはずがない。

その瓦礫の山に、一人の少女が静かに立っている。

壊れかけた机と椅子に、少女は物憂げな視線を注いでいる。

そこに座っていた人物に、思いを馳せるように。

『何をしているのですか、あなたは。私との約束も破って、とつぜん、いなくなるなんて……』

震える声で少女は言う。

この場にいる『俺』に向かって言ったのではない。

そこにはいないに『俺』に向かって、彼女は苦言をこぼしている。

『私、まだちつとも妹たちと仲良くできていないのですよ？ 言ったではないですか。こんな私でも、妹たちとうまく話せるように協力すると』

優しさとは程遠い強圧的な声色。

それがだんだん、か細く、啜り泣くようなものになっていく。

『甘えさせる練習とか言つて、人の膝をいのように枕にしておいて、私をほうつてそのまま寝たりして。本当に、勝手な人ですよ』

少女はカラダをふるふると震わせる。

それは怒りから来る震えとは異なるように見えた。

『本当は泣き虫のくせに。私の膝の上でうなされて、泣いてしまうような人のくせに。どうして、どうしてこんな無茶をしたのですか……』

瓦礫に雫が落ちる。

明るい月明かりの下で、少女は腰を降ろして、膝を抱えだす。

『私、まだぜんぜん上手に笑えないんですよ？ 優しくする方法だつて、まだ教わってないのに……最後まで、最後まで自分の言ったことは守ってくださいよ。司令の、バカ』

少女は——不知火はそう言つて、嗚咽を洩らして泣き出した。

『司令……不知火は、まだあなたに、何もお返しができていないのに。お礼のひと言も言えなかつたのに……どうして、どうして命を投げ出すようなことをするのですか！』

俺の知らない不知火がそこにいる。

彼女がこんなにも声を大にして泣き叫ぶところを、俺は見たことがない。

ひよつとしたら、姉である陽炎ですらも。

『バカです。あなたは本当に大バカものです。自分勝手すぎます。私たちを残して……この先、どうすればいいというんですか』

掠れていく不知火の声。

そこにいるのは、勇ましい艦娘でも、凜々しい駆逐艦でもない。

見た目相応の、少女がいるだけだった。

『いや……死なないで。死なないで、ください、司令』

不知火の感情が伝わってくる。

まるで彼女の中に入り込んでしまったかのように、心の痛みが、こちらにまで届く。

……そうか。これは、不知火の意識の中だ。

旗艦の艦娘と意識を繋げることができる提督としての特殊能力。

その影響なのか、ときどき、こうして深く関わり合った艦娘たちの記憶を、夢を通して見ることもある。

だから、これは不知火の記憶。

あの激戦を終えて、俺が重傷で運び込まれた後の記憶。

つまり、この涙も、嘆きも、胸を締め付けるような思いも、すべて実際にあったこと。

あの不知火が、感情を決して表に出さない少女が、こんなにも慟哭している。

『死なないで……お願いです……生きて、帰ってきて……』

その姿に、かつての自分が重なる。

世の理不尽を憎み、底の見えない孤独感に苛まれ、涙を流すばかりだったあの頃の自分と。

立ち直れたのは、俺を救い出してくれた兵長殿が、言葉をかけてくれたからだ。

『俺はお前の境遇に一切の同情をしない。こうなった以上、お前は自分の意志で生きていくしかないんだ。』

このまま悲嘆に暮れて、他人に縋って生きていくのか。たとえ苦しみを抱えてでも、この理不尽な世界で戦っていくのか——お前の人生だ。お前自身が決める』

絶望して『生きる意志』を失いかけていた少年に『自身で道を選び

抜く意志』を、彼は思い出させてくれた。

ただ奪われるだけの人生はイヤだった。

だから、戦うことを選んだ。

父の友人のもとへ引き取られた俺は、そのまま平穏に過ごすこともできたが、そうはしなかった。

命の恩人と同じ道を進みたかった。

成長し、軍に入った後も、兵長殿は真摯に、それこそ全霊で俺を鍛えてくれた。

どれほど感謝しても足りない。

いまの俺があるのは、兵長殿のおかげだ。

……でも、不知火は？

俺が去ったあと、その悲しみを拭う存在はいたのだろうか。

不知火だけじゃない。

他の艦娘たちも同じだ。

……いなかったんだ。

立ち直るきつかけ。心が安心するきつかけ。

それに出会えなかったから、誰もが俺の身を極端に案じるようになってしまった。

失うかもしれない。その怖さを知ってしまった。

『司令……死な、ないで……』

大切な人を失う痛み。

その苦しみを俺は知っている。

誰よりも知っている。

知っているはずなのに、俺は……

『よかった……司令官が無事で』

涙を流して、俺の帰りを迎えてくれた霞。

あんなにも俺に手厳しかった少女までもが、俺の死を恐れて泣いた。

『命をかけて鎮守府に残ってくれた、そんなあなたを大淀はお慕……尊敬しています』

『まだ怪我が治ったわけじゃないんですから、ちゃんと安静にしていってくださいね？ サラのお願いです』

大淀さんも、サラトガさんも、俺の身を心配して、労ってくれた。

『提督はこれまでずっと私たちと一緒に戦ってくれたじゃない！ 私たちをここまで育ててくれたのも提督。艦隊をここまで大きくしたのも提督。提督が諦めないで、頑張ってくれたから、いまの私たちがあるんじゃない！』

提督としての存在意義を見失いかけた俺に、衣笠はそう言ってくれた。

『提督、いつも、ありがとう。あたし、この鎮守府に来て、よかった』心を閉ざしていた山風が、感謝を込めて、そう言ってくれた。

『私にとっては、もう、ここが帰る場所なのよ？ あなたが居る鎮守府じゃないと、意味がないの。……だからお願い。勝手に死んだりしないで。私に、あなたを守らせてよ』

あれほど自国への誇りを持っていたビスマルクが、ここをもうひとつの故郷と言ってくれた。

『僕の提督は、この世でただ一人——お前しかいないんだから』

武人氣質の初月が、憂いを込めてそう言ってくれた。

『提督、いつも、ありがとうございます。私のワガママや無茶に、何だかんだ付き合ってくれて。それでも、感謝してるんですよ？ 本当に……』

お調子者の明石ですら、改まって感謝を伝えた。

『こうして姉さんたちと、妹たちと一緒に過ごせるのも、提督のおかげです。あなたの諦めない強さがあったからこそ、この日常があるんです』

これまでの行いを、涼月は称えてくれた。

そして……

『一人の異性として、あなたをお慕いしている。だから、ここまでする

んじゃないですか』

こんな男を、不知火は好きだと言ってくれた。

いい加減に認めよう。

俺と艦娘は、もうただの上官と部下だけの関係じゃない。

意識しないようにしてきた。

目を逸らしてきた。

上官のケジメとして、向き合うことを避けてきた。

艦娘たちの思いを。

でも、それが彼女たちを悲しませるようなケジメだと言うのなら、

俺は……

手を伸ばす。

泣き崩れる不知火へ向けて。

いつのまにか、忘れてしまっていた。

父と母が教えてくれたことの中でも、一番大切なことを。

結婚記念日に感じた、あの暖かさを。

おぞましい記憶が蘇るあまり、意識的に思い返すことを避けていたのかもしれない。

俺が艦娘たちにすべきこと。

それは、最初から決まっていたじゃないか。

帰ってきてすぐ、伝えなくちゃいけないかったはずじゃないか。

子どもみたいに照れくささを理由になんてしない。

あのときのように躊躇ったりしない。

今度は、はつきりと、伝えよう。

……いや。伝えられる。いまの自分なら。

不知火を抱きしめる。

想像以上に華奢な、腕の中で泣く少女に、万感の思いを込めて言う。

「すまない不知火。たくさん心配かけて。俺が、バカだった」

その言葉を契機に、俺の意識は、

現実を引き戻された。

「……司令、令？」

現実の世界でも、不知火は俺の腕の中にいた。

「……そんな、どうして？」

ありえないものを見るように、不知火は動揺した顔を浮かべる。

「そんな、ありえませんが……どうして、正気を取り戻せたのですか？」

俺が飲まされた、抑圧された感情を曝け出す『素直になる薬』。

その効果で『艦娘に甘えたい』と言った俺が、こんな行動を取るとは思っていなかったのだろう。

一見、自力で薬の効果を解いたようにも思える。

けれど、そうじゃない。

「取り戻せたわけじゃないさ」

薬の効果が解けたわけじゃないだろう。いまも持続している。

だからこそ、ハッキリと答えが出せた。

「俺が飲んだのは『素直になる薬』なんだろう？ だったら……」

混乱する不知火をあやすように、彼女の頭に手をポンと乗せた。

「これも、俺の素直な気持ちから来る行動だ」

ただ身勝手に欲望を押し付けるだけが、人間の本性じゃない。

誰かを無条件に思いやることができる。それもまた、人間が生来持っている感情だ。

「そん、な……」

不知火にとっては、予想外の結果だったのだろう。

目に見えて、動揺しだす。

「なぜですか、司令。あなたの本当の心は、私たちに甘えることを求め

ているはずなのに」

「……ああ、そうらしい。認めるよ。俺は確かに、他人の優しさを求めている。お前たち艦娘の優しさに、甘えたいと思っている」

「だったら、なぜ……」

そんなに落ち着いていられるのか。思う存分甘えてくれないのか。そう瞳で訴える不知火。

「あれほど、お辛い思いをされているのに……他人のぬくもりを、あなたは誰よりも欲しているはずなのに」

「不知火、まさかお前……」

見ていたのか。

俺が不知火の記憶を垣間見たように。

「勝手に見てしまったことはお詫びします。でも……あなたの身にあるんことがあったと知った以上、不知火はやはり引き下がれません」俺が不知火の悲しみを感じたように、不知火もまた、あの日の俺の感情を知ったのだろう。

自分のことのように、不知火は切な情を含んだ視線を投げかける。

「不知火なら、あなたの寂しさを、埋めることができます。あなたの拠り所になれます」

「……」

「だから、お願いです。このまま素直に、不知火に……」

以前の俺なら、それは間違っていると云っただろう。

そんなものは、いびつな関係だと。

……けれど、いまは違った。

「不知火。ありがとな、そう言ってくれて」

「……司令？」

俺の言葉に戸惑う不知火。

俺だって、正直まだ戸惑っている。

あれだけ艦娘たちの過保護な思いやりを拒んでおきながら、本心の底では、その優しさを求めていただなんてな。

でも……よく考えれば、おかしいことじゃなかった。

「いいんだ、それで。だって俺にとって、お前たちはもう——家族も同

然の存在なんだからな」

俺が失ったもの。

結婚しない限り、もう二度と取り戻せないと思っていたもの。でも違ったんだ。

俺は、もうとつくに……

「家族みたいな存在に甘えたいって思う。それは別に、おかしいことじゃ、なかったんだよな」

俺はこの鎮守府で、艦娘たちと出会って、とつくに失ったものを取り戻していたんだ。

「情けないな。ちゃんと上官としてケジメつけるつもりだったのに。……でもさ、無理だよな。ここまで一緒に戦ってきたお前たちを、ただの部下として見るわけがない」

俺と艦娘は、まさに運命共同体だった。

喜びも悲しみも、生と死の瀬戸際も、すべて分かち合ってきた。

そんな彼女たちに特別な感情をいだかないなんて、できっこなかったのだ。

確かに血の繋がった家族とは違う。そもそも種族が違う。

普通の家族として向ける感情としては、いびつなものも、あるかもしれない。

だがそれでも。

「お前たちは俺にとって、掛け替えのない存在なんだ。誰ひとり失いたくない。傷つけたくない。だから……」

だからこそ、言わねばなるまい。

「ごめん。お前たちを、不安にさせるようなこととして」

大切な存在を失うこと。自分がもつとも恐れていること。

それだけは、艦娘たちに味わわせてはならなかったのに。

上官と部下。その関係に拘り続けてきたがゆえに、一番大切なことを見失ってしまった。不知火を、ここまで追い詰めてしまった。

「ごめんな、不知火。もっと早く気付いてあげられればよかった」

素直になる薬によって、初めて自覚した本当の思い。

恐らく効果が最大限に強まったことで、表面的な願望ではなく、

もつと深い場所に根付く純な思いが、表に出てきたのだろう。不純物のない、透明な水のように。

そのおかげなのか、いまでも心が清らかだった。落ち着いて、不知火と向き合うことができる。

彼女にかけるべき言葉を、伝えることができる。

「約束する。もう絶対、お前たちを不安にさせるような無茶はしない」
不知火の不安を取り除くように、言い聞かせる。

「俺は死なない。お前たちと一緒に、平和になった未来で生きる。だからこそ……もう少し俺に提督を続けさせてくれないか？」

この戦いの終わりを、見届けるまで。すべての因縁を晴らすまで。そして、俺と、艦娘たちの明るい未来を作るためにも。

「もう一度、助け合ってほしい。どっちかが与えるだけの関係じゃない。一緒に支え合って、この戦いを終わらせよう」

どんなに強がっても、人はひとりでは生きられない。

支え合う存在がいるから、初めて前を向ける。幸せを噛み締めることができる。

それを教えてくれたのは他でもない。

毎年のように記念日を祝う、俺の両親だった。

あの二人のように、手と手を繋ぎ合わせて生きていくことで、本当の意味で、人は幸せになれるのだろう。

「俺、変わるよ。前みたいに、一人で抱え込んだりしない。頼るべきところでは、ちゃんと艦娘たちを頼る。甘えるべきところでは、素直に甘えさせてもらう」

きつと、それで良かったんだ。

俺が邪念なく、素直にさえなっていれば、何も問題は起きなかったのだろう。

「だからさ、不知火。お前もさ、陽炎と一度ちゃんと話し合ってみるよ？ ただ嫉妬するだけじゃなくてさ。今日みたいに、思いの丈を打ち明けてみるよ」

すれ違いは悲しいことだ。

いつのまにか、手の施しようがないほどの、亀裂を生んでしまう可

能性だつてある。

今回は、それを実感した。

陽炎と不知火には、そうなってほしくはない。

俺のように、伝えたいことを伝えられないまま、大切な人と二度と会えなくなるような……そんなことには、なつてほしくない。

「こんな薬なんか頼らないで、思いきり本音でぶつかってみろよ。姉妹なんだ。それぐらい普通だ。それができれば、きつと妹たちとも……」

「……本当に、勝手なかたですね、司令は」

不知火は、ぎゅつと俺にしがみつく。

「……本当に、無神経な人です。乙女が告白までしたというのに、出てくる言葉がそれですか？ まったく本当にあなたという人は……」

熱い雫が胸元に流れるのを感じる。

「そう言われてしまつては、引き下がるしかないじゃありませんか。それが、あなたが心から望んでいることなら……」

憑き物が落ちたように、不知火の身体からチカラが抜ける。

「言つて、しまいましたからね。あなたの望みを、不知火が叶えると」
数分前まで不知火に感じた狂気は、いまやすっかり薄れていた。

ここから何かを仕掛けようとする意思も、感じられない。

俺と同じように『素直になる薬』を飲んだ不知火だが、どうやら深層に根付く生真面目な性分が表に出たらしい。

理解してしまつたのだろう。

家族同然の存在。

混じり気のない心で、そう言われてしまつた時点で、『それ以上の存在』にはなれないのだと。

真実は時に残酷だ。

特に、本心を隠せない、いまのような状況では、尚更だつた。

「……司令は、やっぱり司令なんですね。これだけのことをしても、やっぱりあなたは——」

『提督』で、あり続けるんですね？」

俺の志は変わらない。

たとえ『素直になる薬』を使っても、根底にある意志は、提督として生きる道を選んだ。

その時点で、不知火の計画は、ここで潰えたのだ。

彼女は、最後の駆け引きに敗北した。

だが不思議と、不知火に落胆した様子はない。

悔しさはあれど、しかしどこか、安堵したような、呆れているよう

な……そんな色合いがあった。

「司令。ワガママが許されるのなら……どうか、もう少しの間、こうさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「ああ」

それぐらいなら構わない。

胸の中でむせび泣き始めた不知火の頭を、俺は撫でた。

不知火が泣き止むまで、そうしてあげるつもりだった。

「……ごめんなさい、司令」

消え入るような声で、不知火は静かに、そう言った。

こうして、依頼人《S》による事件は幕を閉じた。

長い、長い一日だった。

けれどその分、得られたものは大きい。

ずっと目を逸らし続けてきた、己の本当の思い。奇しくも、この一件で気づくことができたのだから。

今後は、ちゃんと艦娘たちと向き合っていける。

彼女たちの思いを疎かにすることなく、真っ直ぐに。

いまの自分なら、きつとそれが、できるだろう。

進む未来は、明るい。そう信じている。

ただ、ひとつ問題が残っているとすれば、それは……

お互い真っ裸の状態だということを、どのタイミングで切り出すかな。

恐ろしや『素直になる薬』の効果。

俺が文字通り『悟りの境地』に至らねば、いったいどこまで進んでいたことやら。

うん、パンツは辛うじて履^はいているから、たぶんお互い貞操は死守できたはず……。

よかった。

未来の嫁さんに捧げる純潔は今回も守られた。

セーフ！ セーフです！

後日、明石に改めて解毒剤を作ってもらい、俺と不知火は無事もとの状態に戻った。

何事もなかったとは言え、やはり常時本心のままに行動してしまうようなカラダは厄介だからな。

ちなみにその後、明石にはとんでもない薬を作った罰として『くすぐりマシン（作・明石）』によるくすぐりの刑で、しっかり反省してもらった。

『提督の鬼いい！ 都合よく使っておいて用が済んだら拷問にかけるんですかあ!?!』

人聞きの悪い。そもそも明石が賄賂^{ネジ}に目が眩んで依頼を受けなければ、こんなことにはならなかったのだ。

ネジ一本でタチの悪い発明品を作る悪癖が治るまで絶対に許さん。

『あはははひゃあん！ だめえ！ そこはくすぐらないでえ！ スリットのところはまだ敏感なままで……ああん♡』

途中から喜んでいた気がしないでもないが……まあ、なにはともあ

れ、これにて万事解決したわけだ。

「なんか悔しいなあ。けつきよく私が出るまでもなく、司令が全部解決しちゃったんだから」

事件のあらましを俺の口から聞いた陽炎は、不満そうに口を尖らせた。

「あのときは確かに司令に任せちゃったけど……でもやっぱり、普通は姉である私が不知火を説得すべきだったのに」

長女として妹の不知火を反省させたかった陽炎の気持ちは、わからんでもない。

だが、いつものように陽炎が何もかも解決してしまったら、きっと変化は起きなかつただろう。

不知火も、そして俺も、心を入れ替えるチャンスを不意にしてしまうところだった。

陽炎も、それはわかっているはずだ。

だから、いま口になっているのは、単なるシスコンを拗らせた長女の愚痴である。

やれやれ。

本当に妹大好きなお姉ちゃんだな、コイツは。

「そう言うなって陽炎。妹思いなのは結構だけどな、ちよつとは妹離れしたほうがいいと思うぞ?」

「……まあ、確かに私も反省すべき点はあるんだろうけどさ」

不知火が暴走した原因の一端でもあることを気にしてか、陽炎はいつもの明るさを影に潜めて、珍しくかしくこまったように縮こまる。

「まさか不知火がそんな気持ち抱えていたなんて、気づかなかつたわけだしね」

面倒見がいいというより、過干渉なところがある陽炎は、妹のことなら何でも知っている自負があつたのかもしれない。

不知火が裏で長女に対して複雑な感情を持っていたことは、やはり陽炎にとって少なからずショックだったようだ。

「不知火が私にだけ計画の話をしたのも、たぶん司令をあの手空き部屋

に誘導させるためだったんでしょね。私の性格なら、そうするだろうって……」

たぶん、そうだったのだろう。

策略の一手として長女まで利用するとは、まことに今回の不知火の計画には、空恐ろしいものを感じる。

……だが裏を返せば、陽炎ならそうしてくれると、信頼を置いていたとも言える。

陽炎もそうプラスに捉えることにしたらしい。落ち込んだ顔から、呆れるような苦笑を浮かべて、溜め息を吐いた。

「まったく、ホントにしようがないな、あの子は。改めてガツンと言ってやんなきゃね」

そう口にする陽炎の表情は、いつもの調子に戻っていた。引きずって落ち込むことなく、妹の行動をただ受け止める。

こういう切り替えの早さと大らかさが、陽炎のいいところだ。

「司令の言うとおり、不知火とちゃんと話し合ってみるわ。あの子には、あの子の良さがちゃんとあるんだってこと、知ってもらわなきゃね」

そうだな。そこだけは、陽炎に任せよう。

いまの二人なら、きつと面と面向き合って、本音で話し合えるはずだ。

「ありがとね司令。いろいろと」

「いや。今回のことは俺にも原因はあるしな。お互い様だろ」

今後はこんなことが起きないように、俺もしっかりと艦娘たちと向き合っていかなきゃな。

不知火にも、そう偉そうに言ってしまったのだし。

「これを機に、もう少し人に甘えることを覚えていくことにするよ」

「ふうん……じゃあさ、あのときの続きしてみよっか♪」

「え？」

言うなり、陽炎は俺の背後に回ってしなだれかかってきた。

そのまま、あの空き部屋でやったように、俺を抱きしめる。

「お、おい陽炎」

「ほおら、またそうやって遠慮する。ちゃんと私たちに甘えたり、頼ったりするって決めたんでしょ？」

「いや、そうなんだけどさ……」

やはりこうして美少女に抱きしめられるのは、落ち着かないものがある。

だって陽炎めっちゃいい匂いするし、スレンダーな体型でも、ふにょんと柔らかい感触がするし。童貞としては、いろいろと悶々としてしまう。

……けどまあ、ちよつとずつ耐性つけないとイケナイよな。

「よおしよくし♪ 今回はいっぱい頑張りましたね〜司令え♪ 陽炎お姉ちゃんがいっぱい褒めてあげますよ〜♪」

すつかり『お姉ちゃんスイツチ』が入った陽炎は、ぎゅつとしがみつきながら、俺の頭を優しく撫でるのだった。

甘やかすと言っても、これじゃ完全に子ども扱いだ。

まったく、こちとら、いい大人だったのに。

……けれど、不思議と、悪い気はしなかった。

妙な拘りを捨てられた恩恵か、いつもなら照れくささで拒む艦娘の厚意を、素直に受け入れられている。

少しだけ、母に頭を撫でられたときのことを思い出した。

陽炎のような小さな少女相手に、そんなことを思い出すのも、おかしな話だが……懐かしさを覚えるぬくもりが、俺の心を安らかにしていく。

久しぶりかもしれないな。こんな風に昔のことに、思いを馳せるのは。

いままでは覚悟が鈍ることを恐れて、平穩だった頃の記憶を掘り起こすことは、意図的に避けてきた。

……けれど、これからは、ちよつとずつ思い出していこう。

忌々しい記憶だけじゃない。あの結婚記念日のように、幸せに満ちた時間が、自分には確かにあった。

そんな思い出を、チカラに変えていけるようにしていこう。

そんな思い出を、この鎮守府でまた作っていこう。

掛け替えのない艦娘たちと一緒に。
少しずついい。

彼女たちの優しさに、素直に甘えられるようになっていこう。

そう思っていた時期が私にもありました。

「Hey・テイトクー！ 聞きましたよ!? 私たちのことをファミリーのように大切な存在だと思っっていると！ これはつまり遠まわしに結婚したいとプロポーズしたのも同然なのでは!？」

カモン、テイトクウ！ あなたのハニーである金剛はここデース！
思い切りこの胸に飛び込んできてくださいサーイ！」

「提督よ、僕たちを家族のように思っているなら、そこにペットのような存在がいても不思議ではないよな？ というわけだ提督。潔くこの初月を飼ってくれ」

「ア、アトミラル？ ど、どうしても甘えたいって言うなら、このビスマルクがいくらでも甘えさせてあげてもいいのよ？」

「提督う？ 夕雲でしたら、いちばん提督を満足させてあげられますよ？ もちろん後悔させません。いくらでも、甘えさせてあげる♡」
「お前ら加減つてやつを知らんのか!？」

俺が艦娘たちに素直に甘えようとしている、という噂はあつという間に鎮守府に広まった。

それからというもの、どこへ行けども、艦娘たちはいままで以上に俺を甘やかさうとアピールしてくる。

その中には、どう考えても貞操の危機を感じるものも含まれていた。

どうしてこうなるの!？」

「司令、往生際が悪いですよ。宣告したとおり素直にこの不知火に思

いきり甘えてください」

「なにちやつかりお前まで参加してんだよ！ 反省したんじやなかったのか!？」

「はい。あの後、陽炎にも注意されました」

「だったら……」

「ですが、不知火は別に司令を諦めたわけではありませんよ?」

「なん、だと?」

「恋とは障害があるからこそ燃え上がるもの。今後も司令を落とすためにいろいろ策を練らせていただきますので、そのおつもりで」

「お前なあ!」

コイツぜんぜん懲りてないじゃん!

どういうことですか陽炎お姉さん!

「陽炎とは意見の食い違いで途中から拳による語り合いに勃発しましたが、おかげで存分に本音を打ち明けられました。催促してくださいました司令には感謝いたします」

「物騒だなお前ら!?! そんなつもりで催促したわけじゃないよ俺!?!」

「お互い芝生に倒れた後は陽炎も『そう、本気なのね不知火。なら、あなたはあなたの道を進みなさい』とサムズアップして応援してくれたので、迷いは捨てました。理解のある姉を持てて不知火は幸せです」
陽炎! あなた本当に妹に甘いですね!

「というわけで司令。今後とも何卒よろしくお願い致します」

「よろしくされてたまるかあ!」

こんな鎮守府にいられるか!

とうぶん近所の旅館に逃げ込んでやる! 名探偵が泊まっていようが泊まってやる!

「知らないのですか司令? 恋する少女からは逃げられない」

そう言つて不知火は、ニコリと爽やかな笑顔を……いや、いつもどおりの邪悪で不穏な笑顔を浮かべて、俺を追いかけてくるのだった。「ちくしょう! やっぱり艦娘に甘えるなんてコリゴリなあ!」

昭和みたいなオチを口にしながら、全力で俺をダメにしようとしてくる艦娘たちの群れから逃げ回る。

結局そんな、いつもどおりの日々が続くのであった。
とほほ。

「そういえば司令、けつきよく依頼人『S』って不知火のことだったのかしら？」

「なに言ってるんだ陽炎。犯人は不知火だったんだから、そりやそう
だろ」

俺の名推理に間違いはない。

「ん、でも何か引つかかるのよね。本当に頭文字がSの艦娘のことを指していたのかしら、あのメモ」

ふむ。そういえば、明石をくすぐり拷問にかけているとき、明石も何か言いかけていたような……

『もう！ 提督のバカア！ こんな真似するなら教えてあげませんか
らねえ！ ネジを持って私に依頼をお願いしてきたのは不知火さん
だけじゃなくて……あはははっ！ そ、そこはらめえ！ ふひやあ
ん♡』

途中から悶えだしたのでけつきよく聞きそびれてしまったが、あれ
は何だったんだろうか？

「あ、もしかしてさ！ 頭文字のSじゃなくて、あのSのことじゃない
？」

「あのS？」

「複数形で『くくS』って言うじゃない？ だからさ、あのメモに書か
れていたのは……」

司令を無理やりにも甘やかそうと計画する艦娘たち——つまり、
依頼人S！ とか!？」

「……」

「……」

「はははははは！ いやいや、さすがにそれはねえだろ？」

「あ、やっぱり？ それもそうよね。あははははは！」

突飛も過ぎる『もしもの話』に、俺と陽炎は大笑いした。

その瞬間……

——くしゅん！

鎮守府のあちこちから、くしやみの音が聞こえた。

甘く穏やかな日々

ヴェールヌイと子作りしよう？ 前編

響ひびきからヴェールヌイへ。

「改装と共にそう名を変えた暁あかつきがた型駆逐艦2番艦の彼女は、いまだに何を考えているのか、よくわからない艦娘だったりする。

普段からもの静かで、駆逐艦のわりになんか落ち着いた性格をしているせいでもあるけど、もともと感情をあまり表現しない艦娘なんだよな。

クールビューティー。かわいらしく言えば不思議ちゃん、ってやつだ。

ずいぶん長い付き合いではあるが、それでも彼女の行動パターンを把握できた試しがない。

ただ……

「……司令官。もっと、強く抱きしめてほしい」

「昼下がりの執務室。

椅子に座った俺の膝の上にまたがって、ぎゅっと胸元にしがみついてくるヴェールヌイ。

「いまの彼女は、駆逐艦幼い艦娘らしく、俺に甘えたがっている。

それだけは、はつきりとわかる。

「こんな感じでもいいかヴェールヌイ？」

「ダー」

ロシア語で肯定の意を口にして、ヴェールヌイはさらに身を寄せてくる。

幼児特有の高い体温が伝わってきて、なんだかポカポカとしてくる。カラダだけでなく、心も。

「なんか、こういうのは久しぶりだな。

艦娘に『甘やかされる』ではなく、艦娘に『甘えられる』っていうのは。

「それも、以前から滅多に他人に甘えることなんてなかったヴェール

ヌイが、こんなお願いごとをしてくるだなんて。

俺が重傷を負ってから、すっかり過保護になってしまった艦娘たち。

そんな艦娘たちに甘やかされる日々が始まってから、ずいぶん経った。

あれからも艦娘たちは俺が心配のあまり、就寝、着替え、食事、果ては入浴まで、あらゆる場面で過剰なお世話をしてくる。

ろくに女性経験のない童貞の身としては、実につらいものである。いや、ほんとに。

しかし、人は成長するものだ。いまだに童貞ではあるが、成長するのだ。

提督の尊厳を守るため、俺はずっと艦娘たちの思いやりから目を背け続けてきた。

だが不知火の一件から、俺は考えを改めた。艦娘一人ひとりと、しっかりと向き合う、と。

心を入れ替えた俺は、艦娘たちと触れ合う時間を増やすことにした。

艦娘たちの異常な心配性は、俺の無茶な行動のせいで染みついてしまったものだ。だったら、その心配性を解消するためにはどうすればいいか？

話は簡単だ。

俺が率先して、艦娘たちと平穏な時間を過ごせばいいのだ。

つまり、無茶をしないOFFの時間を意図的に設ける。というわけである。

皮肉にも深海棲艦の出現頻度が減ったいま、時間は有り余っている。

俺が無理やり仕事を作りさえしなければ、艦娘たちとのゆとりある時間を用意することはいくらでもできた。

……まあ、艦娘たちにさんざん心配をかけてしまったのは事実だし、重傷で長らく鎮守府の運営を任せてしまったお詫びも、満足にできたとはいえない。

だから日頃の感謝も兼ねて、艦娘たちとの関わりを増やし、何か俺に対して希望があれば、可能な範囲で叶えることにした。

『俺にできることなら、何でもするぞ?』

と艦娘たちに提案を持ちかけたところ、早速一件の要望がやってきた。

怒濤のように雪崩れ込んできた一部の艦娘たちよりも、いち早くに、彼女は俺にお願いをしてきた。

『司令官と、一日一緒に過ごしたい』

俺の袖をクイツと引つ張って、上目遣いでそう言ってきたヴェールヌイ。

あまり自己主張をしたことのない彼女が、ストレートにお願いごとをしてくるのは、本当に珍しいことだった。

これは、よほどのことだ。

一見しっかり者に見える艦娘ほど、かかえる悩みは深いということ、俺は不知火でいやというほど学んだ。

ヴェールヌイだって幼い艦娘だ。普段の落ち着きぶりとは異なるか弱い部分だって、当たり前前にあるはずだ。

俺が重傷を負ったことで彼女もまた何か不安に苛まれているのなら、提督としてその不安を解消せねばなるまい。

なので、熱烈に「テイトク！ 私のバーニングなラブを先に受け止めてほしいデース！」とアプローチしてくる金剛のことは後回しにして、ヴェールヌイのお願いごとを聞き入れることにした。

そのせいでギャン泣きしてた金剛だったが、そこは年長者として小さい子に譲っておあげなさいと諭しておいた。

……こういう塩対応が後々、不知火のときみたいな事件を起こすきっかけになったりするんだろうか？

まあ、でも金剛は何だかんだいって精神的にタフでポジティブな艦

娘だし、万が一にも心が病むことはないだろう。メイビー。

そんなわけで。

ヴェールヌイはいまこうして、俺の膝の上でスリスリと頬を押しつけながら甘えているというわけである。

かわいい。

「ヴェールヌイ、何か他に俺にしてほしいことってあるか？」

「じゃあ……頭を撫でてほしいな。暁^{あかつき}たちにするみたいに」

「お安いご用だ」

帽子を外したヴェールヌイの頭にポンと手を置き、よしよしと撫でる。

「ん……」

ヴェールヌイはくすぐったがりの猫のように身をよじらす。

嫌がっている感じはなく、むしろ気持ちよさそうな顔を浮かべて、さらに身を預けてくる。もつと、と告げるようにキュツと小さな手で俺の服を握る。

本当に小動物のような反応に、思わず頬が緩みそうになる。

俺はより気持ちを込めて、ヴェールヌイの頭を撫でる。

ヴェールヌイの青みがかった銀髪感触が手に心地いい。幻想的にきれいな髪は、その質感も上質だった。いつまでも撫でていたいほどに。

「ヴェールヌイの髪はきれいだな」

思わず口に出していた。

「そう、かな？」

ヴェールヌイは恥ずかしそうに唇を俺の胸元に埋める。

「ああ、うまく例えられないが、まるで氷の結晶みたいに輝いて見えるぞ？」

「……大げさだよ」

しかし満更でもなさそうに、ヴェールヌイはスツとさらに頭を差し出してきた。

愛いやつめ。

俺はますます夢中になって、ヴェールヌイの美しい銀髪を梳くように撫でていった。

そういえば眺みたいに外面も内面も幼い駆逐艦が泣いたときは、よく頭を撫でてあやしていたけど、ヴェールヌイ相手には響だった時代から撫でた覚えがないな。

駆逐艦の中でひと際しつかり者だったってこともあるけど、やはり子ども扱いすることに躊躇するような雰囲気があったからだろうか。そもそも髪は女の命というし。

けど、こんなお願いをするところ、ひよつとしたら頭を撫でられることを羨ましがっていたのかもしれない。

もしそうなら、なんといいじらしいことか。

ヴェールヌイの仕草に和なごんでいると、こちらを見上げる彼女と目が合う。

ふにやり、とヴェールヌイは微笑んで、

「悪くないね、こうして撫でられるのって……嫌いじゃない」

「……っ!？」

電流にも似た衝撃が体中に走り抜ける。

か、かわいい。

思わず心臓が射貫かれてしまうようなヴェールヌイの笑顔。

いつもポーカーフェイスを作っている少女がそんな表情を浮かべると、一段と破壊力がある。

いかん。なんだか妙な感情が芽生えてきそうだ。

「な、なあヴェールヌイ、聞いていいか？ どうして今回こんなお願いごとをしてきたんだ？」

込み上がる感情を誤魔化すようにヴェールヌイに尋ねる。

実際、甘えん坊とは程遠い性格をしていたヴェールヌイがこんな風にじやれついてくるなんて本当に珍しいことだから、気になりはする。

「……司令官に、こうして甘えてみたことって、あんまりないなと思ったから」

白い頬を桃色に染めて、照れくさそうにヴェールヌイは言った。

「司令官がいない間、自分でも驚くくらい、寂しかったんだ。何度か『他の駆逐艦みたいに甘えていればよかったな』って考えたんだ」

「それで、今日こうやって甘えてみようと思ったのか」

「うん。……変かな?」

そんなことはない。

むしろ、そう言ってもらえて嬉しく思う。

大人みたいに落ち着きがあるとはいえ、ヴェールヌイもまだまだお子様だったということだろう。

笑いはしない。むしろ、余計に愛らしいと感じてしまう。

昂揚を抑えきれず、より深くヴェールヌイを抱きしめて、よしよしとあやす。

「心配かけて、すまなかったな。お詫びと言っちゃなんだが、今日はいくらでもヴェールヌイのお願いごとを聞いてあげるからな?」

「ほんとうに?」

「ああ、もちろんさ」

「……スパシィーバ」

静かにお礼を言うと、ヴェールヌイはまたニコリと愛らしい笑顔を浮かべた。

えらいこつちや。

さつきからヴェールヌイがかわいらしく思えてしょうがない。

うまく言葉にできないが、父性に似た感情に翻弄されている。

この少女のお願いごとなら何でも叶えてあげたい。そう思えるほどにヴェールヌイの甘えっぷりに神経が参ってしまっている。

もつとヴェールヌイの喜ぶことをしてあげたい。

一方的に艦娘たちに甘やかされてきた日頃の反動からか、甘やかす側になったことで庇護欲の感情がふつふつと湧いてくる。

「司令官、じゃあ、もうひとつお願いしてもいいかな?」

「ああ、いいとも。何でも言ってくれ」

俺がそう言うと、ヴェールヌイは嬉しそうにはにかむ。

やはり、かわいい。かわいすぎる。

まるで幻想の国からやってきた雪の妖精さんのようだ。

こんなにも愛らしい美少女のお願いごとなら、どんなに無理難題だつて聞き入れてあげるさ！

「それじゃあ……」

キラキラと輝くような笑顔を浮かべて、雪の妖精さんは言った。

「司令官と子作りしたいな」

よし、落ち着こう。

さつきまでの穏やかな雰囲気はどこに行つた、と全力でツツコミたいが落ち着くんだ。

もう、こういう状況には慣れっこだろ俺？

冷静に対処しよう。

ひとつずつ、ゆつくりと確認していこう。

「ヴェールヌイくん。なぜそうしたいのか、一応理由を聞かせてもらえないかね？」

ひとまず動機を探ろう。

そこから聞かねば始まらない。

「さつき、司令官がいなくなったとき、寂しかったって言ったでしょ？」

うん。言ったね。

「その寂しさを埋める方法が、あのときはわからなかったんだ。だから本を読んで『こういう気持ちのときはどうすればいいのか』調べようと思つたんだ」

なるほど。堅実だね。

「それで偶然読んだ小説でこんなことが書いてあったんだ。『夫と生き別れてしまった妻。妻は悲しむけど、でも愛した人との間に生まれた子どもがいるから寂しくない』って結末だったんだ」

なるほど。よくある話だね。

「じゃあ、私も司令官と子どもを作ればいいのか、って答えを得たよ」
なるほど。わからん。

「司令官。私はもう、あんな寂しい思いは二度としたくないんだ。だから……ヴェールヌイと、子作りしよ？」

一切混じりけのない、無垢な顔でヴェールヌイは改めてそう言った。

そんな彼女のお願いに俺は……

「よし！　じゃあ子作りするか！」

なんて言うはずもなく、

「ダメに決まってるんでしようが」

と至極真つ当な答えを返した。

何でも言うことを聞く？　スマンありや嘘だった。

天国の父さんと母さん。

艦娘に対して素直になろう！　そう意気込んでいたのですが……

さっそく前途多難な事件発生でございます。

教えてください。女の子に子作りを迫られたときは、いったいどうすればいいのでしょうか？

童貞だからわかりません。

いろいろな意味で泣きたいです。

ヴェールヌイと子作りしよ？ 後編

ロシアンティーの正しい飲み方をご存じだろうか？

よく紅茶に直接ジャムをぶっ込んだのがロシアンティーと思われがちだが、実際は器に移したジャムをスプーンで掬って舐めながら紅茶と一緒に飲むのが正しい飲み方だ。

こうすることで、いちご、ブルーベリー、ラズベリーと各種ジャムの味を、あたかも仮○ライダーのフォームチェンジのように楽しむことができるのである。

実にハラショーだ。

「いやあ、いつもは緑茶とかだけど、たまにはロシアンティーつてのもいいもんだなく。なあ、ヴェールヌイ？」

「ツーンだ」

口でツーンとか言うやつ初めて見たな。

「お、おいおい、いつまでむくれてるんだよ？」

ほっぺを膨らませてムスツと不機嫌になっているヴェールヌイ。

色白の美少女はむくれている姿でさえ愛嬌があつて、遠目で見るぶんには和むなごかもしれないが……

先ほどから同室で一緒に過ごしている身としてはなんとも気まずい。

ご機嫌を取るため、ヴェールヌイの好きなロシアンティーを用意したりしたのだが、一向に彼女の怒りが静まる気配はない。

まるで日曜日に父親と遊ぶ約束をすっぱかされた娘のようにプンスコしている。

口にはしないけど『約束したのに！ パパのバカ！』と言わんばかりな不機嫌オーラが漂っている。

「なあ、いい加減に機嫌を直してくれよ……」

「嘘つきの司令官が悪いんだよ。何でもお願いごと聞くんて言ったくせに」

「いや、そうなんだけどさ……」

俺が悪いのか？

だっっていくらなんでも……

「悪いと思ってるなら素直にヴェールヌイと子作りしてよ」

「だからダメだっけ言ってるでしょうが！」

いや、どう考えたってダメでしょ。常識的にも倫理的にも。

確かに今日のヴェールヌイは本当に実の娘のようにかわいらしく思えたし、どんなワガママでも聞いてあげたい気持ちになりましたとも。

家族団欒っぽいことをしよう、と思いましたがとも。

でもって、その娘のお願いごとが『子作り』ときたもんだ。

どういうことだよ？

いやいや、ねーよ。さすがにダメでしょ。

たえ娘のようにオネダリされたって、こればかりは領けないよ。

だっけ絵面にするとうこうだよ？

『何で私と子作りしてくれないの？ パパのバカ！』

アブノーマルな家族団欒にも程があるわ。

「あのさ、そういうぶっ飛んだお願いごとじゃなくて、健全なお願いごとなら俺いくらでも言うこと聞けど？」

「それは困る。今日の私の真の目的は司令官と子作りすることなんだ」

「甘えたいって言ったのは!？」

「ただの建前だよ。ああ言えば司令官が喜ぶと思って」

シヨック！

あんなにも無垢な笑顔の裏で実は俺と子作りすることを虎視眈々と狙っていたというのかこの幼女！

あんまりだ！ もう何も信じられない！

「ねえ司令官、赤ちゃんってすごくかわいいよね？」

「……まあ、確かに赤ちゃんはかわいいよ」

腹黒なお前さんはかわいくないけど。

「動画とかで赤ちゃんの微笑ましい様子を録画されたものをたくさん見てから、ヴェールヌイも欲しくてしょうがないんだ。だから子作り

しよっ。」

「なぜそう極端なことになるんですかねえ……」

女の子が実際に赤ちゃんを見てお母さんに憧れるっていうのは、よく聞く話だし、それだけなら、ほんわかとするけど。

じゃあそれをいまずぐ実践しよう、と提案するチャレンジ精神はさすがに理解できまいよ。

「強情だな司令官は。ここまでお願いしているのに頑なに聞いてくれないのか」

じとーつと恨みがましい視線をぶつけるヴェールヌイ。

なんだか聞き分けの悪い俺のほうが悪者っぽくなってるがなヴェールヌイ、世間は全面的に俺の味方をしてくれると思うぞ？

「こうなったらしようがない。最終手段を使うしかないようだ」

「何する気だよ？」

「司令官を誘惑して、その気にさせる」

「ほう……」

誘惑だつて？ 冗談だろ？

数々のお色気イベントを鋼の精神力で乗り越えてきたこの俺に対して？

ふんっ、甘く見られたものだな。

こちらら大淀さんの誘い受けやサラトガさんのダイナマイトおっぱいの感触や衣笠のおっぱいパフパフやビスマルクの全裸ハグにすら理性を失わず耐え抜いてきたんだぞ？

そもそもロリコンの気など微塵もないこの俺にとっては、ロリっ娘駆逐艦の誘惑などお子ちゃまの背伸びも同然。

ヴェールヌイの誘惑に揺らぐことなど、決してない！

……つい最近、駆逐艦の涼月相手に陥落しかけた気がするが、あれは明石に盛られた薬のせいだからノーカウントである。

ノーカウントつつたらノーカウントだ。

ヴェールヌイよ、確かにお前は傾城の美少女といっても過言ではないほどの容姿の持ち主だ。

神秘的な雰囲気、幻想的な髪の色、サファイアのような瞳、色白の

肌に黒のハイニーソックスと萌え要素も完備している。

しかし残念だが、生粋の年上のお姉様好きである俺の牙城を崩すことは、そうできまいよ。

残念だったな。

くつくつく、悔しい顔で一日を終えるヴェールヌイの姿が目には浮かぶわい。

勝利を確信した俺は夜神さん家の長男くんみたいな気分でジャムをひと口頬張って紅茶を飲み込んだ。

「司令官、ジャムが口元についてるよ?」

「え? マジ?」

やだ、恥ずかしい。

せつかく例の顔で『俺の勝ちだ』とほくそ笑もうと思っていたのに、これじゃ締まらないではないか。

「じつとして。取ってあげる」

そう言っつてヴェールヌイは俺の口元に顔を寄せてきて……

「ん……ちゅ、ぺろっ……」

「っ!」

唇をつけてジャムを舐め取った。

「ん……とつても甘い」

「おおお、おまつ……」

な、なんちやう取り方をしているんだ。

もうちよつとずれていたなら、く、唇と唇同士がくっつけあって、マウストウマウスしてしまうところだったぞ!?

気をつけてよね! 俺まだファーストキスだつて未経験なんだから!

とつぜんのことで動揺する俺に反して、ヴェールヌイは余裕ある大人の女性のような表情を浮かべながら、くすりと微笑んだ。

「ふふ、司令官も子どもっぽいところがあるんだね。かわいいな」

そう言っつて、ヴェールヌイは熱っぽい流し目を向けながら、唇をぺろりと舐めた。

駆逐艦とは思えない、妖艶的なオーラが彼女の周りに漂っていた。

気を抜くと、そのまま彼女の美貌に吸い寄せられてしまいそうな……

「……いやいや、違いますよ？」

べつにドキツとなんてしてませんよ？

こんなことされたら、誰だってビックリしますやん？

決して、決して！ ヴェールヌイ相手にときめいたわけじゃないんだから！

「ねえ司令官、お茶を飲んだら少し眠くなってきたんじゃないかい？ よかったら私のお膝を貸してあげるよ？」

そう言うなり、ヴェールヌイはソファアに座って、膝をポンポンと叩いた。

「ほら、遠慮しなくていい。さつき、さんざん司令官のお膝に乗せてもらったからね。そのお礼だよ」

確かにお昼寝するにはちょうどいい時間帯だ。

膝枕をしてくれると言うヴェールヌイの太ももに、つい視線を向ける。

黒ニーソが食い込んだ生白い太ももは、程よくムチムチとしていて、見るからに柔らかそうだ。

華奢な体型のくせに、下半身の肉づきは大人のカラダの一步手前に来ているように感じる。

あそこに頭を乗せれば、さぞ気持ちいい感触を味わえることだろう。

「司令官、さ、おいで？」

「……まあ、膝枕ぐらいならいいか。」

不健全に子作りを迫られるよりはずっとマシだし、これでヴェールヌイが満足するならお言葉に甘えるところでしょう。

「よしよし。いつもお疲れ様、司令官」

案の定ムチムチと柔らかい膝枕の心地よい感触。さらにヴェールヌイの優しい手つきによる頭ナゲナゲ。

疲れがあつという間に吹っ飛んでしまいそうな、極上の心地がそこにはあつた。

うん、悪くない。傍から見れば幼女に膝枕されている情けない絵面ではあるが、実に平穏なスキンシップだ。

日頃の疲れを娘に労つてもらっているような安心感がある。

これぐらの触れ合いなら歓迎だ。

もうちよつとこのまま堪能してもきつと罰は当たらな……

「ふう〜……」

「あひつ!」

耳に息を吹きかけられた!

くすぐるような吐息の感触に思わず情けない声上がる。

「ふふ。いつもはしつかり者の司令官だけど、私の膝の上だと隙が多いね。本当にかわいいなあ」

クスクスとイタズラを楽しむヴェールヌイの静かな笑い声。

お、おのれ。大人をおちよくりおつて。

いや、落ち着け俺。ヴェールヌイのペースに振り回されちやいかん。

これぐらいのイタズラ、子どもならやっても珍しくないじゃないか。

大人の余裕でスルーするんだ。

「ねえ、司令官。こつちを向いて?」

ふん。今度は何をする気だヴェールヌイ。

もう簡単には動揺したりしないぞ?

どんなイタズラだろうと受けて立とうじゃないか。

俺はそう意気込んで体勢を変えて、真上のヴェールヌイと向き合う。

ヴェールヌイは別に何もしてこなかった。

ただ俺をじつと見つめるだけだった。

とても、優しい笑顔で。

「……司令官、本当に無事に帰ってきてくれたんだね」

どこか感慨にひたつたような表情を浮かべて、ヴェールヌイは俺の

頬に手を伸ばす。

「こうして司令官のぬくもりを感じていると、安心するよ。生きていてくれてよかったって」

そう言つて、ヴェールヌイは宝物に触れるような手つきで、頬を撫でてきた。

強気だった意識は、瞬く間に薄れてしまった。

いまのヴェールヌイを前にすると、あれはダメだ、これはダメだと言えない気持ちになつてしまったのだ。

「司令官。約束、ちゃんと守つてね？ 今日是一日、ずっとヴェールヌイと過ごすつて」

ヴェールヌイがお願いごとをしてきたそもそもそのきつかけを考えると、偉そうなことを言えないのではないか。

そんな考えさえ湧いてきてしまった。

「夕飯は、私が作つてあげる。特製のボルシチ。いっぱい食べてくれると嬉しいな」

……そうだよな。

ヴェールヌイの望みの本質を考えれば、やはりここは俺が大人として心を広く持つべきだ。

寂しさを埋める方法はいくらでもある。

極端な行為をしなくても、こういう些細な触れ合いをしていけば、きっとヴェールヌイの不安も解消されて……

「それと……お風呂も一緒に入ろうね？ 背中、流してあげる」
「……」

いや、うん。問題ないよ。

駆逐艦と一緒に入浴するなんて、娘や幼い妹と入るようなもんじやないか。

何を躊躇する必要がある？ これまで何度も成熟したボディを持った艦娘と一緒に入ってるんだから！ (目隠し込みだが)

まさかいまさら……いまさら駆逐艦の裸で変な気持ちになつたりするわけが！

そして日が沈み、ヴェールヌイお手製のおいしいボルシチで食事を済ませた俺たちは、脱衣所へと向かった。

いつものように目隠しは用意していない。

……いや、だって、こんな小さな娘と入浴するのに目隠しを用意したら、幼い裸体さえも意識している危ない奴ってことになるじゃないか。

お子様相手に目隠しなど無用！ 堂々と一緒に入って気持ちよくなればいいのさ！

さあ、ちやつちやつと脱いでしまおう！

衣服に手をかけると、横からもシュルリと衣擦れの音が耳に届く。

「ん……」

ヴェールヌイは躊躇うことなく衣服をひとつひとつと脱いでいく。露わになる生白い肌。まさに玉のような艶々の肌は、明かりのもとにさらされると、より眩しい光沢を放つ。

てつきり駆逐艦特有のお子様体型かと思いきや、そのカラダは女性特有のなまめかしいラインをえがいており、肉づくべき箇所には、これからさらなる成長を匂わせる膨らみが実り始めていた。

ハイニーソックスの食い込みに指を入れて、スルスルと果実の皮を剥くように脱いでいく。

太ももはたつぷりと肉づいているくせに、その先はほっそりと細く引き締まった美白の素足が現れる。

最後の一枚であるショーツを脱いでいく後ろ姿は、彼女が幼い少女であることを忘れさせられた。

子作りしよう、なんて言われたせいなのか。

思いのほか女性的な肢体を誇るヴェールヌイの脱衣を、妙に意識してしまつて……

いや、違う！

これは、きつと画家がインスピレーションを刺激されるのと同じように、ヴェールヌイの佇まいに美的な魅力を感じただけだ！

実際、銀髪美少女であるヴェールヌイの裸体は、どこか触れがたい神秘性を感じさせる。

このまま裸婦画として描き起こしても、違和感なく絵として成立するような、美しさがある。

そうだ。だから、そんな少女に妙な感情を芽生えさせるなんて、あつてはならないこと……

「どうしたの司令官？ 脱がないと、お風呂に入れないよ？」
生まれたままのヴェールヌイが間近まで迫ってくる。

白い裸体は、まるで周りの光を集めたかのようにまぶしく映る。

「ひよつとして私に脱がして欲しいのかい？ ふふ、甘えん坊さんだな司令官は。いいよ。ほら、脱ぎ脱ぎしようね」

あたかも聖なる光を前に屈服する背信者かのように、見えない戒めにかかってしまったかのように、身動きすることを忘れてしまった。

ヴェールヌイの手によって、衣服が脱がされていく。

素肌が空気のもとにさらされると、ヴェールヌイの熱い眼差しを感じた。

くすり、とまたヴェールヌイは駆逐艦とは思えない妖艶的な笑みを浮かべる。

「……背中だけじゃなくて、司令官のカラダ、ヴェールヌイがすみずみまで洗ってあげる。遠慮しなくていいよ。その代わり……」

ヴェールヌイは俺の手を取って、自らのカラダに触れさせる。

掌に広がる生娘の肌の感触。まるでその感触を植えつけるように、下半身から上半身へと、手を這わせていく。

最終的に膨らみかけの胸元まで持つてくると、ヴェールヌイはいまにもと蕩けそうな瞳でこちらを見つめながら、唇を開いた。

「ヴェールヌイのこと……いっぱい、綺麗にして？」

「はっ!？」

気づくと俺は寝間着に着替えて寝床に横たわっていた。どうやら脳の処理能力を超える展開のせいで意識が飛んでしまっただけらしい。

なんとなく、風呂でヴェールヌイと文字通りカラダのすみずみまで洗いこした事実があったことは覚えているのだが……

しかし、詳しい出来事を記憶中枢に取り入れることは脳が本能的に避けたようだ。

童貞のお前には早すぎると言わんばかりに。

おかげで寝床に就くまで何があったのかは曖昧としていて皆目見当がつかん。

まさに過程をすつ飛ばして結果だけが残った。

リアルでスタンド攻撃を食らったような気分だ。

いまにも脳内で神曲『21世紀のスキッツォイドマン』が再生されるのである。

「司令官……」

まだ困惑の中にいるところを、ヴェールヌイの囁くような声によって引き戻される。

ヴェールヌイは横たわった俺の上にまたがっていた。

寝間着用なのか、純白で薄着のネグリジエを身につけている。カラダの輪郭がわかるほどに薄い生地だ。

そんな際どい格好をした美少女が、窓から射し込む月明かりに照らされながら、俺を見つめていた。

「もうすぐ今日が終わる。だから……最後に、ヴェールヌイの願いを聞いて?」

覚悟を決めたような顔で、ヴェールヌイはゆっくりとネグリジエに手をかけた。

「司令官……ヴェールヌイと、子作り、しよ?」

月明かりを浴びて輝くヴェールヌイの裸体は、息を呑むほどに神々しかった。

……だが、見惚れている場合じゃない。

「ヴェ、ヴェールヌイよせ! こんなことしちやいけない!」

「どうして?」

「どうして、って……こういうのは好き合う者同士がするものなんだ!」

「司令官は、ヴェールヌイが嫌い?」

「そういうわけじゃ……」

「……私は、恋と愛とか、よくわからなかった。いや、いまでもよくわからない。でもね……」

ヴェールヌイは俺の胸元に手を乗せて、ほんのりと紅潮した顔を寄せてくる。

「司令官がいなくなったときに感じた、あの胸の痛み。その痛みの正体がそういうものだって言うのなら……私は、あなたと強く繋がりたい。そう、願っているんだよ、私の心は……」

いまにも唇が触れ合いそうな距離で、ヴェールヌイはそう打ち明ける。

「司令官、私は、あなたが思っているよりもずっと寂しがり屋なんだ。もう、置いてけぼりにされるのはイヤだ。親しい人を失うのはイヤだ。だから——あなたが生きていた証を、形に残るものを、私にちやうだい」

「ヴェ、ヴェールヌイ!」

止めなくてはいけないのに。

拒まなくてはいけないのに。
なのに……

心のどこかで、この娘を受け入れてあげたいと思っっている自分がい
る。

ヴェールヌイが感じる寂しさ。

それは俺にもよくわかることだから。

俺にできるのであれば、その寂しさを埋めてあげたい。

でも……

やっぱりこんなやり方は間違っている！

やめさせなくては！

「ヴェールヌイ……すまない。こればかりは、いくら何でも受け入
れられなっ」

「すぴー」

「……」

いままさに華麗なる提督的説得が繰り広げられようとした矢先、
ヴェールヌイは俺の隣にコロロンと寝転がって、くつつくようにスヤス
ヤと眠りだす。

「……あのお、ヴェールヌイさん？」

「なんだい司令官？ 私はもう眠いんだ。話は手短かに頼むよ」

「いや、あの……子供りするんじゃないの？」

「何言ってるんだい？ もうしてるじゃないか？」

「はい？」

「男の人と女の人が裸で一緒に寝ると赤ちゃんができるんですよ？
暁に子作りの方法を聞いたら、そう教わったよ？」

えーと、それはつまり……

「司令官も早く服を脱いで寝てね？ じゃあ、おやすみ……スウ、スウ
……」

そのままヴェールヌイは本当に寝息を立ててスヤスヤと眠った。

「……はあく〜」

深いため息が寝静まった室内に霧散する。

ま、そりやそうだよな。

こんな幼い娘が、子どもの作り方を知ってるわけないよね。

ヴェールヌイ本人も言ったが、彼女はまだまだ『恋と愛』を理解できるお年頃では、ないということだろう。

駆逐艦らしからぬ色香につい翻弄されたが、やはり今回のことは、実に子どもらしい、おませな背伸びだったようだ。

ああ〜ヒヤヒヤした。

今日という日ほど暁に感謝したことはない。さすがは一人前のレデイ（笑）だ。今度お菓子をたっぷりあげるとしよう。

「まったく、人騒がせなお嬢さんだぜ」

とりあえずヴェールヌイの着崩れたネグリジエをきちんと直してあげ、掛け布団をかける。

「ん……司令官……スウ……」

今日さんざん見せた妖艶的な面影は微塵もない、純真無垢な寝顔がそこにはあった。

昼にしてあげたときと同じように、ヴェールヌイの頭をそつと撫でた。

やすらかな寝顔を眺めつつ、ヴェールヌイが口にしたことを思い返す。

形に残るものが欲しい、か……。

「明日あたりにでも、ヌイグルミとかロケットペンダントでも買ってくるかな」

ヴェールヌイが求めているのは、きつとそういう思い出の品物だ。たとえ寂しくなっても、形あるものが傍にあれば、胸にあいた穴を埋めることは、できるものだ。

俺が幼少時、たったひとつ残った家族写真に、支えられたように。もつともつと、思い出を作っという。

この寂しがり屋な艦娘を安心させてあげるためにも。

「心配すんなヴェールヌイ。もう、どこにも行ったりしないから」

そう呟くと、ヴェールヌイの寝顔が心なしか、安心したように綻んだ気がした。

改めて、艦娘との触れ合いを大事にしていくことを意識した、そんな夜だった。

……さて、俺もそろそろ寝るとするかな。

「おやすみ、ヴェールヌイ」

「んう、司令官……Мой Любимый」

ヴェールヌイがロシア語で何事か囁いた。

どういう意味だろうか？

……まあ、たぶん「おやすみ」とか、そういう類いだろう。

ヴェールヌイにはすまないが、ロシア語はさっぱりなんだ。

翌日……

「めでたく司令官と子作りができたよ。生まれるのが楽しみだな」

お腹を幸せそうに撫でながら、ヴェールヌイは鎮守府のあちこちに、そう自慢して回った。

そのおかげで、子作りの意味をよく理解している艦娘たちに一日中「どういふことですか!？」と質問攻めにあうのだった。

俺は無実だ！　そしていまだに童貞だ！（泣）

優しくなった霞はなんでも言うことを聞いてくれる
そうです

「よし、次は笑顔でポーズ取ってみようか？」

「こ、こう？」

「うん、いいぞ。上出来だ。とてもかわいいぞ霞^{かすみ}」

「……バカ」

照れくさそうに真っ赤になった顔を逸らす霞。

愛らしい反応を見せるその瞬間を見逃さず、パシャパシャとカメラのシャッターを切る。

司令室に何度もカメラのフラッシュが瞬く。気分はすっかりカメラマンだ。

もともと写真撮影が趣味だったこともあり、つつい燃え上がってしまう。

モデルが撮影のしがいのある美少女、ということもある。

「今度は後ろ姿を向けて、振り返る感じで頼む」

「……こんな感じ？」

霞は言われたとおり後ろ姿を向けて、傍にある椅子に手をつき、腰元を強調するポーズを取る。

俺は親指を立てて、またシャッターを切る。

霞は文句ひとつも言わず、レンズに向けてにっこりと恥ずかしげな笑顔を作る。

あの霞が。

他人にも自分にも厳しい霞が。

些細なことでも、たびたび俺に説教をしてきた霞が。

俺の言うがままに、ポーズを取ってくれている。

ナース姿で。

「うんうん、素晴らしいぞ霞。とても似合っているぞ。わざわざ用意した甲斐があったつてもんだ」

「そ、そう。まったく変ね、男つて。こんな服だけで、こんなに喜ぶなんて……」

当たり前だ。ナース服は男の夢だからな。

しかもピンク色のミニスカートVerのナース服となれば尚更だ。

現実の女性看護師はパンツスタイルが主流だ。俺が入院した病院でもそうだった。

ぶっちゃけ、いかがわしいビデオでもなければ、もはやお目にかかれない衣装である。

その男の夢であり、ファンタジーの結晶である衣装を、霞は身に着けてくれている。

しかも白のハイニーソックスのオマケつき。

ムチムチとニーソが食い込んだ眩しい絶対領域。

少しでも屈めば形のいいヒップが丸見えになってしまいそうな極ミニスカート。

そんな際どい格好で下半身をこちらに向ける霞は、彼女が幼い駆逐艦であることを忘れてしまうほどにセクシーだった。

着慣れない衣装。しかも、その格好で撮影される。

霞の羞恥心は、とうぜん臨界点に達していることだろう。

それでも、霞は決して、撮影を拒むことなく、こちらの指示を従順に聞き入れている。

シャツターを切りつつ、俺は思う。

……まだ足りない。と。

そう。

まだ、ぜんぜん足りない。

まだ、こんなものでは。

「……霞」

「なに？ 次はどうすればいいの？」

「……服を、脱いでくれ」

「……っ」

「こんなお願いにも、霞は……」

「……わかったわ」

静かにうなずいて、ナース服に手をかけた。

まるで見せつけるように、カラダを正面に向けて、ゆっくりとボタンを外していく。

露わになっていく、生白い素肌。

甘く、かぐわしい少女の香りが、衣服から解放される。

色がついているとしたら、きつと桃色であろう艶めかしい空気が、室内に充満する。

「ん……ふう……はあ……」

脱衣を間近で見られている緊張からか、霞は熱っぽい息を吐く。

素肌に反して赤くなっている顔は、いまにも沸騰してしまいそうだった。

それでも、霞は手を止めることなく、またひとつボタンをぷちんと外し、あられもない姿になっていく。

一体全体、なぜこんなことをしているのか。

この場に居合わせた誰もが、そう口を挟むことだろう。

でもって、ドン引きすることだろう。

そんなことは俺だってわかっている。

だが、これは必要なことなのだ。

霞にとっても、そして俺にとっても。

そう、これは……双方の幸せのためにも、乗り越えなければならぬ試練なのだ！

過保護になった艦娘の中でも、もつとも変化が激しかったのは、言

うまでもなく霞だ。

霞は優しくなった。

たとえば上官相手でも、物怖じせず手厳しい発言、説教、しまいには暴言すら吐ける霞がだ。

確かに改二になってからは多少落ち着きを見せるようにはなったが、いまの霞はもはや別人というほどに性格が丸くなっている。

「おはよう、司令官。そろそろ起きる時間よ」

起床の時間。

秘書艦として、俺を起こすその声色は実に柔らかい。

以前の霞なら、

『さっさと起きなさい！ いつまでも寝込んでんじやないわよ、このクズ！』

と言って、布団ごと剥ぎ取っていたというのに。

だが、いまではどうだろう。

ゆさゆさと布団越しで俺のカラダを揺する、その手つきの、なんと優しいことか。

「……あと五分」

寢床の中でもぞもぞとしながら、そう呟く。

こんなことを言えば、

『はあ?! いい歳して子どもみたいなこと言ってるんじゃないわよ！』

いいから布団から出なさいっての、このクズ!』

と怒りながら蹴りを入れて、強制的に寢床から出すのが霞という艦娘だ。

しかし……

「もう、しょうがないわね。五分だけよ?」

と言って、霞は俺の頭に手を置き、ポンポンと子どもをあやすように軽く叩いた。

「……」

それ以上なにか言われることはなく、俺は五分きっちり横になった。

起床して身支度を整え、今日のスケジュールを確認する。

その横から、霞は湯気がたつマグカップを差し出してくれる。

「はい、コーヒー。月曜の朝は、濃いめのでよかったのよね？」

目覚めの朝の一杯は、日にちによって異なる。

火曜は牛乳、水曜は野菜ジュース、日曜は紅茶といった感じだ。

月曜は濃いコーヒーを飲んで、意識をクリアにする。そう習慣づけている。

霞はその辺をよく把握しており、いつもどおりのドリンクを用意してくれたのだが……

「霞、悪い。今日はなんかコーヒーより緑茶が飲みたい気分なんだ。取り替えてもらっていいか？」

と俺は言った。

こんな気まぐれを口にしようものなら、

『はあ!? 毎回まいかい決まったもの飲んでるくせに、なんで今日に限って違うものが飲みたいなんて言うのよ!? わざわざ淹れてやっただから黙って飲みなさいな、このクズ!』

と無理やり人の口をこじ開けて、熱々のコーヒーを流し込むのが霞という艦娘だ。

いや、こんな勝手な注文を押しつけられたら、普通は誰だって不機嫌になる。

しかし霞は……

「あら、そうなの。ごめんなさい、じゃあ淹れ直してくるわね」と苦笑を浮かべて、コーヒーを下げた。

「……」

そして朝食。

霞が作った和風定食をいただく。

本日のメニューは銀シヤリ、ワカメと豆腐の味噌汁、シヤケの塩焼き、卵焼き、ほうれん草のおひたし、納豆に海苔、そして、たくわん。まさにお手本のような日本の朝食である。

「……………お口に合う?」

おぼんを胸元に抱いた霞が、もじもじとしながら尋ねてくる。

「うん、うまいぞ」

「そ、そうー!」

素直な感想を伝えると、霞はにこやかに顔を綻ばせた。以前なら滅多に見ることのなかった、霞の満面の笑顔。

マイナス方面で感情豊かだった霞も、すっかりプラス方面で感情を見せるようになった。

しかし……

「でも、ごめん。俺、ほうれん草苦手だから食べねえんだ」

せつかくの笑顔をぶち壊すようなことを俺は口にした。

以前の霞なら……いつもどおりの霞なら、こんなことを口にすれば……

『はあ!? 大人なら好き嫌いしないで出されたものきっちり食べなさいよ! ふん! なら明日から、ほうれん草づくしの料理出して苦手を克服させてやるわ! ありがたく思いなさいこのクズ!』

と激怒して、有言実行するはずだ。

しかし……しかし、目の前の霞は……

「もう、しょうがないわね」

と言って苦笑を浮かべた。

「でも司令官、ほうれん草の鉄分は血を作るから貧血にいいのよ? だから、せめてひと口だけは食べて? そしたら残していいから。ね?」

「……」

言われたとおり、ひと口だけおひたしを食べる。

ゴクンと飲み込むと、霞は満足げにほほ笑んだ

「偉いわ司令官。嫌いなものもちゃんと食べて」

そう言っ霞は「よしよし」と俺の頭を撫でる。

彼女の眼差しには、幼い少女が出すものとは思えない慈しみの色が宿っていた。

「じゃあ、これは下げるわね。……あ、いけない。デザートのリンドを持ってくるの忘れてたわ。取ってくるから待ってて?」

ほうれん草が入った器を持って、霞はにこやかに部屋を退室した。

「……」

そのまま黙々と朝食を食べ始める俺だったが……

「……ぐっ！」

思わず箸を置いて頭を抱えた。

「なぜだ……なぜなんだ霞。俺は、こんなにも、こんなにもお前を……」

俺は泣いた。

涙は止め処なくあふれた。

おいおいと泣いていると、間もなくして霞が戻ってくる。

「お待たせ司令官。リング切り分けてきたわよ……って、どうしたのよ!?! なんて泣いているのよ司令官!?!」

「ぐぐぐ、か、霞い、お、俺はあ、俺はあ……」

「ど、どこか苦しいの!?! もしかして料理に変なの混ざってた!?!」

俺は首を横に振る。

違うのだ。

俺が泣いているのは……

「か、悲しいんだ……」

「なにが悲しいの!?!」

「それは……ぐ、うおおおおおっ」

「司令官!」

言葉を継げないほどに泣く俺を見て、霞はリングがのった皿を放り出して駆け寄る。

「泣かないで司令官! 辛いことがあるなら私を頼って!」

そう言っただけで霞は俺の顔を胸元に抱きしめる。

ぎゅっと抱きしめたまま、震える俺の頭を優しく撫でる。

「大丈夫よ司令官、私がついているわ。だからお願い、一人で抱え込んだりしないで。辛いことは私に打ち明けて。絶対に、チカラになつてみせるから」

「か、霞……お前ってやつはあ……」

「ほら、泣かないで。言っただけ? いったい、なにが悲しいの?」

そっと頭を撫でながら、霞は尋ねる。

まるですべてを受け入れる聖母のごとき包容力。

それを前にして、俺はもう本音を押し留めることなどできなかつた。

「霞、俺は、俺はなあ……」

「うん、なあに？」

「俺は……」

すうと息を吸い込んで、俺は叫ぶ。

「霞が、優しすぎるのが悲しいんだ！」

「……は？」

霞が虚を突かれたような声を上げる。

冗談でも言っているのか？　と思っっていることだろう。

だが、俺はいたって真剣だ。

「なんでだよ霞い。わざとワガママなこと言ってるってのに、なんで素直に聞き入れちまうんだよお」

「ちよ、ちよつと待って司令官？　私？　私が原因なの？」

動揺から霞の抱擁が解けると、俺は彼女の肩をガシツと掴み、ジツと目と目を合わせて口を開く。

「そうだ！　俺はお前に叱ってほしくて、あえて怒らせるようなことを言った！　なのに、なぜ怒ってくれない!？」

「わ、わけわかんないわよソレ!？　優しくされたいならともかく、叱られたらどうということよ!？」

霞の疑問はもつともだ。

確かに、昔は俺も、霞にはもうちよつと優しくなってほしいと思っ
ていたさ。

それぐらい、霞の毒舌まみれの説教は辛いものだった。

一周回ってDMになってしまいそうになったさ。

しかし霞はこのとおり丸くなった。

他の過保護艦娘たちと同様に、俺に甘々になった。

だが……

「霞……人はな、失って初めてわかるんだ」

「な、なにを？」

「霞の説教が、俺にとつてどれだけ大事だったか、つてことをさ……」
霞の過剰な説教は、究極的には、上官である俺の成長を願つてのことだった。

罵詈雑言にしか聞こえないその言葉の裏には、いつだって『提督として正しくあれ』という激励が込められていた。

部下のすべてが上官に忠実で素直すぎると、自ずと調子にのつて傲慢が生じるのが人間という生き物だ。

だから、最低でも一人必要なのだ。

上官に苦言を放つて、意識を改めさせる存在が。

「霞。お前の容赦のない言葉があつたからこそ、成長できた点が多々あるんだ。そのことをいまになって実感したよ」

だが、俺を守れなかつたという罪悪感から、霞は持ち前の厳しさを封印してしまった。

優しさしか見せない霞。

それは彼女のアイデンティティーを損なわせてはいないだろうか？

誰よりも厳格で、不正を許さない。それが霞という艦娘なのに。

確かに俺は艦娘たちの思いを、素直に受け入れるとは決めた。

だが、それでも……

「霞。やつぱり甘やかされるだけじゃ、俺はダメになっちゃうよ。
……だからこそ霞。お前が頼りなんだ。お前の容赦のない厳しさが、
いまだからこそ必要だ」

甘やかすことが本当の優しさなのか。

否。

人の成長を願う厳しきこそが、本当の優しさのはずだ。

それは、いまの鎮守府にはないもの。

だから……

「霞、頼む。俺のことを思うのなら、どうかまた昔みたいに、俺に容赦のない厳しい言葉を……」

「い・や・♪」
「……」

バツサリと、ニツコリと、霞は笑顔で俺のお願いを切り捨てた。

「あのお、霞さん？ 今朝のワガママは全部聞いてくれたよね？
だったら、このお願いもだね……」

「絶対に、い・や・♪」

またもや、笑顔で切り捨てられる。

とつてもとつても、いい笑顔だ。

「司令官、私もね、反省したの。昔の私はいろいろ言い過ぎたって。だから、変わろうと思ったの」

「いや、俺はもう特に気にしてないよ？」

「私が気にするの」

なんてこつた。

霞つたら、こればかりは譲れないとばかりに頑なな態度だ。

「司令官がいない間、たくさん後悔したわ。なんでもっと、司令官の頑張りを労ってあげなかったんだろうって……結局、私と司令官の間に、いい思い出なんてひとつもなかったじゃない」

いや、そんなことはないだろ。

霞の進水日とかには皆で盛大にお祝いしたし、夏には海水浴に行つたし、クリスマスの日とか強情張ってケーキを食べようとしないう霞と食べさせ合いつこしたし。

しかし、霞としては納得できないところが多々あるらしい。

「だから決めたのよ。もう二度と司令官を傷つけないって。命を賭けて鎮守府に残った司令官の望むことを、ぜんぶ聞き入れてあげるんだって」

「そう言うなら是非とも昔の『お説教かーちゃん』ばりの霞に戻っていただきたい……」

「ダ・メ・♪ それ以外のことなら聞いてあげる♪」
が、頑固ちゃんめ。

いや、霞の性格を考えれば、らしいっちゃらしいんだけど……。うーん、でもやっぱり優しいだけの霞ってなんか違和感あるぞー。「ほら、司令官。遠慮することないのよ？ 頑張ったぶんだけ、私に甘えてくれていいんだから」

両腕を広げて、にこりと天使のようにほほ笑む霞。

だが、その瞳孔に光はない。

あ、これアカンやつや。

このままだと不知火のときみたく、取り返しのつかない領域にまで踏み込んでしまいそうだ。

なんとかして霞を正気に戻さねばなるまい。

「ねえ、司令官。私にできることなら、なんでもするから……。私に、お願い事して？」

霞はあくまで俺のことを甘やかす気満々だ。

……。仕方ない。

こればかりは使いたくはなかったが、こうなったらショック療法だ。

「……本当になんでも言うことを聞いてくれるんだな？」

「ええ、もちろんよ」

「言ったな？ よしっ」

言質を取ると、さっそく俺はある艦娘に連絡を取る。

「……明石、俺だ。ちょっと用意してもらいたいものがあつてだな」
くくく。

なんでも言うこと聞くだと？

男にそんな口約束をしたことを後悔させてやろうじゃないか、霞。

というわけで。

この撮影会は霞を恥ずかしがらせて、意図的に怒らせようという作戦なのだ。

決して『コスプレをさせてグへへ……』なんて、いかがわしい目的でやっているわけではないことを理解していただきたい。

じゃあ、なぜわざわざピンクのミニスカートナース服をチョイスし

たと聞かれると……一度、生で見てみたかったんだよ！

閑話休題……

とにかく、もともと霞はプライドの高い艦娘だ。

いくら態度を改めたといえども、これほどの辱めを受けて平気でいられるはずがない。

さあ、怒れ霞！

そして昔のように俺のことを『クズ司令官！』と罵ってくれ！

しかし……

「ぬ、脱いだわよ……」

霞は指示どおり、ナース服と、白のハイニーソックスを脱ぎ捨てた

！

そして、目の前で露わになったのは……

真夏の海水浴で見せてくれた、水着姿だった。

上下にフリルが付いた、緑色のホルターネック式のビキニ。

子どもらしい愛らしさを強調したデザインである一方、布の生地が少なめの、なかなか際どいデザインだ。

夏に拝んだときも思ったが、真面目な霞にしては結構大胆なチョイスである。

……うーん、服を脱がせることで怒りが頂点に達すると思っていたのだが、やはり下が水着だったためか、脱衣への抵抗感が薄れてしまったようだ。

いや、下着姿にさせるのはさすがに可哀相だったので、ナース服の下には水着を着るようにと指示したのは俺なのだが……

まずいな。

どうやら本気で霞は俺の言うことを従順に聞くつもりでいるらしい。

まさか、ここまで抵抗しないとは。

羞恥はあれど、まったく躊躇いというものがない。

霞の厚意は素直に嬉しい。それは間違いない。

だが、自らを罰するような、それこそ自分の身を犠牲にするような奉仕など、俺としては望ましくない。

やはり霞は霞らしくあってほしい。

それを口で言って納得してくれないのであれば、こうして強硬手段で正気を取り戻してもらおうほかない。

やむを得まい。作戦をフェイズ2に移行する！

水着姿となった霞をカメラで激写していく。

「うう、こ、こんな格好したところまで写真に撮る気なの？」

「当たり前前だ。いい思い出を作りたいと言ったのは霞じゃないか。俺は全面的に協力するぞ？」

霞のご希望に便乗して我ながらエグいことを言うわたくし。

だが、ここは心を鬼にしてカメラ小僧を演じるんだ。

あらゆる角度から、霞の水着姿を撮影する。

……ほうほう。

霞のやつ、こうじっくりと見ると、なかなか安産型だなあ。

お子ちゃま体型かと思いきや、腰元とかくびれとか、なめらかな曲線や丸みをえがいていて、女のカラダとして立派に発育しているのがわかる。

というかボトムフリルがスカートみたいになっているから、先ほどのナース服以上の極ミニスカートと錯覚してしまい、おかげで丸く豊かなヒップが常時パンチラしているかのように、際どく存在を主張している。

鼠径部のラインもくつきりと見え、とてもセクシーだ。

ビキニのフリルは小さい胸を大きく見せるように錯覚させるらしいが、よく注視すると霞の鎖骨の下には、立派な谷間がある。

慎ましいことには違いないが、思ったよりも膨らみがあるようだ。

驚いた。

衣服の上ではわからなかったが、霞のやつ、こんなにも発育良好だったのか。

ふむふむ、恥じらった顔といい、これはロリコン趣味がなくとも、なんだかイケナイ扉を開いてしまいそ……

つてなに、まじまじと本気で撮影しているんだ俺は。これじゃまるで変態じゃないか。

違う意味で『クズ司令官』になっちゃおう。

落ち着け。

いったん深呼吸だ。

「はあ……はあ……霞い……」

余計に変態っぽくなってしまった。

「……ねえ、司令官。これだけで、いいの?」

「え?」

意味ありげな視線を向けながら、霞は身をよじらす。

「司令官が望むなら、もつと凄いいことしてもいいけど……」

「もつと、つて……お、おいつ」

「わかってるわよ。どうせ最後には——そういうこと、するつもりなんだでしょ?」

なにを誤解しているのか、霞は意を決したような顔を浮かべて、水着の紐に手をかける。

そのまま、ゆっくりと結び目を解こうと……

「ちよつ、待てえい! そこまでヤレとは言ってない!」

「きやつ!」

とんでもないことをしだす霞を、力づくで抑えて止める。

結果……

「あ……」

勢い余って、霞を床に押し倒す形になった。

「……っ。くっ!」

霞は言葉にならない声を上げつつも、抵抗はしなかった。

真つ赤になった顔を逸らして、身を委ねるようにカラダを脱力させる。

「……いい、わよ。司令官が、したいこと、して……」

霞は静かに、勇気を振り絞るように、そう呟く。

「私、平気よ。約束は、守るわ。司令官のこと、拒んだりしないから。」

だから……」

そう言う霞の目から、
ひと筋の涙がこぼれ落ちた。

それを見て、一気に冷静になった。

「……霞、すまん」

霞の上から退いて、俺は頭を下げる。

「司令、官？」

「すまん。お前の気持ちも知らずに、お前の勇気を試すようなことをしちまったな」

霞の決意は固い。そして霞は、自分が決めたことは破らない。そういう娘だ。

そんなこと、俺が一番よく知っていたはずなのにな。

知っていながら、霞の決意を利用して、彼女を限界まで追い込もうとした。そんな自分が情けなかった。

結局、以前の霞に戻ってほしい、というのは俺の都合でしかない。

俺がすべきことは、「変わりたい」と思っている霞を応援してあげる
ことではないだろうか？

「霞の気持ちは、素直に嬉しいよ。優しくされるのも決してイヤってわけじゃないし……ただ、とりあえず自分を安売りすることだけは、やめてくれないか？」

そう。俺が懸念しているのは、その一点に尽きると言える。

「皆にも言っているけど、俺が死にかけたのは俺自身の責任なんだ。そこに負い目を感じて、身を粉にして俺に尽くす義理はないんだ。霞は霞なりに、自分が変わりたいように、変わればいい。だから俺に償うとか、そういうことは考えないでくれ」

「司令官。でも、私……」

「それに霞、言っただろう？俺といい思い出がなかったって。だったらさ、そういう後腐れは無しにしていこうぜ？ でないと、楽しい思い出なんて作れないぞ？」

「っ！」

俺の言葉は、霞の中で鮮烈な一撃を与えたらしい。

思い悩んでいた顔が、瞬く間に晴れていく。

「許して、くれるの？」

「許すもなにも、俺は一度だって霞を恨んだことはねえよ」

「あんなに、ひどいこと言ってきたのに……」

「それが俺を、あの激戦の中で残るような男にしてくれたんだ。お前のおかげでもあるんだぜ、霞？」

「っ……う、ひぐっ」

俺に見られないように、霞は両手で顔を隠して、静かに泣いた。

……ずっと溜め込んでたんだな。

早く気づいてやれなくて、すまなかった。

そう伝えるように、俺は泣き止むまで、霞の頭を撫でた。

ひとしきり泣き終えると、そこには憑き物が落ちたような、無垢な顔があつた。

頭を撫でる手を休めず、俺は霞に語りかける。

「俺も艦娘の気持ち素直に受け入れるって、そう決めたからな……約束は守らないとな。だから、霞がどう変わろうと、俺はちゃんと受け入れるよ。だから、なんというか……」

これからも、楽しい思い出、いっぱい作っていきこうな」

「……うん」

俺の言葉に、霞は素直にうなずいた。

伝えたいことは伝わった。もう大丈夫だろう。

霞の変化は、悪い方向ではなく、良い方向に進む。そう思いたい。……まあ正直、きつめの性格をした霞が恋しいと言えれば恋しいけどな。

でも仕方ない。どんなことも、変わっていくものだ。

これからは霞の説教に頼らなくても大丈夫なように、自分に厳しくしていけばいい。

「……あのさ、司令官……」

「ん？」

「やっぱり、優しい私って、違和感ある？」

「え？ あ、いや、そんなことは……」

「でも、慣れない感じはするんでしょ？」

「まあ、ちよつとだけな……」

「ふうん……じゃあ、少しだけ昔の私に、戻ってあげてもいいけど？」

俺が内心で恋しいと思ったのを敏感に察知したのか。

または要望を受け入れなかったことのお詫びか。

霞はそんなことを言っつて、モジモジとじだした。

「昔みたい………つてことは、一時的に口うるさい感じになるつてことか？」

「口うるさいは余計よ！ ……まあ、そんな感じだけ……」

一応自覚はあるようで、霞はこほんと照れくさそうに咳払いする。

「で、どうするの？」

「うん、じゃあ……」

ひよつとしたらこの先、霞のキツイ一面を見る機会がなくなるかもしれないな。

最後の思い出………というと、なんか大げさだが、かつて俺を厳しく激励した真面目で愛らしい少女の姿を、この目に収めることにしよう。

俺が「それじゃあ、頼む」と言うと、霞はうなずいて、息を大きく吸った。

そして……

「こ、このクズがああああ！ せつかく変わりたいと思つてたのに！ なに空気読まずに『叱られたい！』とか言つてんのよ！ ほつつんと信じられない！ M!? Mなの!?!」

おう！ 霞のこのド直球な毒舌！

退院してから久しぶりに聞いたぞ！

「バカバカ！ 私だって、ちよつとは優しくなろうと思つて頑張つたのに！ 人の気も知らないで！ クズ！ ほつつんとクズ！ クズ司令官！」

このノリ！ 懐かしいな！

本来なら胸が痛む言葉の数々なのに、懐かしさが込み上げて逆にほんわかとした気持ちになってきたぞ！

「霞！ もつとだ！ もつと言つてくれ！ いやあ本当こういうの久しぶりで、なんか楽しくなってきたぞ！」

「なにソレ気色悪っ！ 本当にMなわけ!? 最低さいてい！ さんざん私のやらしい写真撮つておいてしかもMなんて！ 救いようのない変態ね！ 変態へんたい！ 変態司令官！」

新鮮！

艦娘たちが過保護になつてからというもの、こうやって罵倒されることなんて一切なかったから、すごく新鮮に感じる！

せつかくだから、もつと堪能しよう！

「霞！ まだだ！ まだこんなもんじゃ足りない！」

「ふん！ お望みならいくらでも言つてあげるわよ、この変態司令官！ なによなによ！ 他の艦娘たちに甘やかされてデレデレしちゃつて！ 情けないつたらないわね！ 恥ずかしいと思わないの!?!」

「うう！ 耳に痛い！ だが、そういう正論な言葉が欲しかった！」

「うっそ、なに喜んじやつてるの!?! 気持ち悪い♪ ほんとうに気持ち悪い♪ 他の艦娘が見たら、なんて思うかしら？ こんな気持ち悪いクズ司令官をお世話する物好きなんて、きつと私しかいなくなるわよ？ あはっ♪ 感謝なさい♪ 慈悲深い私は、変態の司令官をずつとお世話してあげるんだから♪ 泣いて喜びなさい、このド変態クズ司令官♡」

「はい！ ありがとうございます！」

「なによ！ お礼言うわりには頭が高いわよ！ 這いつくばりなさいよ♡ 変態は変態らしく床に這いつくばってればいいのよ♡ エサ

を欲しがる犬みたいにお腹見せて、ワンワン言ったりしなさいよ♡」
「はい！ 犬、床に這いつくばります！ お腹見せて鳴きます、ワン！」

「きやああ♡ 本当によったわ♡ 信じらんない♡ 信じらんない♡
♡ 屈服しちやった♡ 変態クス司令官、私に屈服しちやった♡
乗っちゃおう♡ 犬になった変態クス司令官の上に乗っちゃおう♡ ねえ、ほら！ 水着つけた女の子が上に乗っちゃったわよ!? 嬉しい？
ねえ、嬉しいんでしょ？ 変態クス司令官♡」

「はい嬉しいです！ 水着美少女に乗つかかれて嬉しいです！」

「変態へんたいヘンタイ♡ ロリコン♡ 変態にさらにロリコンが加わっちゃった♡ もうほんと最低♡ 言い逃れ不可能♡ 犯罪者予備軍不可避♡ もうダメね♡ 私が可愛がつてあげなきや♡ このロリコンケダモノは、私だけが可愛がつちゃうんだから♡ 鳴いちゃえ♡ 水着つけた女の子に乗つかかれて喜ぶロリコンは、豚みたいに鳴いちゃえ♡」

「ぶひいひいひい！」

「ああああん♡ 鳴いたああ♡ ねえ、もっとおお♡ たくさん、腰、揺らしてあげるからああ♡ もっとお♡ もっとかわいい声出してえええええ♡」

「ぶひいひいひい！」

「失礼しまーす！ 明石でーす！ 提督、いきなりナース服用意してほしいって言うもんですから、ついでにバニー服とかメイド服とかも用意したんですけど。よかったらお使いに、なり、ます、か……」

「鳴いちゃえ♡ もっと、はしたなく鳴いちゃえ♡ ロリコン犯罪者予備軍不可避変態クス司令かあああん♡ ご主人様にかわいい鳴き声聞かせなさああいい♡」

「ぶびやあああああ！ かしゆみしやまああああ！」

ら♪「

その笑顔は、いままで見たことがないくらい、優しさに満ちあふれていた。

魔性の春雨 前編

それは月が不気味なほどに綺麗な夜のことだった。

「司令、不知火からひとつ忠告したいことがあります」

不知火は何か恐れるような表情を浮かべて、とつぜんそんなことを言ってきた。

いろいろな意味で精神的にタフな不知火がこんな思い詰めた顔をするのは珍しい。

「忠告って、なんのことさ不知火」

「春雨はるさめさんのことです」

「春雨？ あの子がどうかしたのか？」

「うまくは言えませんが……いまの彼女は危険です」

「危険？ あの春雨が？」

白露型5番艦、春雨はとつても大人しい小動物みたいな愛らしい艦娘だ。

引つ込み思案ではあるが、いつも任務には真面目だし、尊敬する姉たちのことを優先して自分は一步引くという思いやり深い、良くできた妹さんでもある。

そんな春雨が危険ってどういうことだ？ むしろ、そういうものは程遠い性格をしていると思うけどな。

実際、過保護になったという全艦娘の共通点以外では大きな変化は見られなかったし。

「司令、どうか用心してください」

俺の警戒意識が薄いことを感じたらしき不知火は念を押すように言った。

「司令もいい加減に学習しているはずですよ。重傷を負ったあなたを心配するあまり多くの艦娘が劇的に変化したことを」

「うん、お前が言うところい説得力あるな」

「春雨さんはその中でも特に危うい変化をしています。ひよつとしたら、不知火以上に……」

マジかよ。俺を陥落させるため、あれほど緻密な計画を立てた不知

火以上に危険だと？

うーん、ぜんぜん想像できないな。

だが、不知火がこれだけ言うのなら春雨のことを少し気にかけてあげるべきかもしれないな。

まあ、それはともかくとして……

「とりあえず不知火……夜這いかけてる奴に『用心しろ』とは言われたくないんですけど」

「それはそれ。これはこれです。今夜こそは不知火の思いを受け止めてもらいますよ？ さあさあ、司令も生まれたままの姿に……」

「ええい、やらせはせん。やらせはせんぞ！」

俺に告白したこといろいろ開き直った不知火はこうして毎夜のように全裸で寝込みを襲ってくる。もはや夜の恒例と化した貞操を死守する攻防を繰り返しつつ、俺は春雨のことを考えていた。

はたして、あの無害の象徴ともいえる艦娘が本当に危険な存在になったのだろうか。

翌日。

無事に貞操を死守した俺は、さっそく春雨を呼び出し彼女に秘書艦を任せることにした。

忠告をした不知火からすれば「なぜわざわざ藪をつついて蛇を出すようなことを!？」と思うことだろうが、もし本当に春雨がよろしくない精神状態にあるのなら問題を遠ざけて放置することのほうがずっと危険だ。

実際に顔を合わせて話してみなければ微細な変化にすら気づくこともできないのだから。

もしも春雨に以前とは異なる不審な点、または不穏な面が見受けられるようならば提督として然るべき処置をするつもりだ。

しかし……

「司令官♪ 本日は春雨を秘書艦に選んでくださって、たいへん光栄です♪ 春雨、一生懸命お手伝いしますね。はい♪」

お日様のようにほわほわとした笑顔で上機嫌にサイドテールを揺らす春雨。その様子からは、不知火が言うような危険な香りなんてちっともしない。

「え〜と、じゃあまずは飲み物を淹れてきますね。司令官、本日はコーヒーでよろしかったですか？」

「ああ、問題ないぞ」

「はい♪ じゃあ、とびつきりおいしいコーヒーをご用意しますから待っててくださいね♪」

久しぶりに秘書艦に選ばれたことがよほど嬉しかったのか、春雨はいまにもスキップしそうな勢いでルンルンとコーヒーを淹れに向かった。

「お待たせしました♪ 春雨特製ホットコーヒーです。召し上がれ♪」

ミルク色のカップの中から香ばしくも深いコーヒーの香りが心地よく鼻孔を突いてくる。思わず溜め息が漏れそうな芳醇な香りだ。

「う〜ん、いい香りだな。もしかして、わざわざ豆から挽いて淹れてくれたのか？」

「もちろんです。司令官にインスタントのコーヒーを出すわけにはいきませんから。中挽きしてサイフォンで淹れてみました」

ほう、それは本格的だな。さぞ味わい深いことだろう。

「ありがとな春雨」

「いえ、そんな。司令官のためですから。えへへ♪」

褒められた春雨は髪の色と同じように頬を桃色に染め、照れくさそうに口元をお盆で隠した。

うーん、やっぱり気になるような変化は見受けられないな。

いつものように小動物のように愛らしくて、そして健気な妹キャラ全開の魅力を振りまいているじゃないか。

というかさ。むしろ端的に言うど……

春雨、超かわいい〜！ おいおい、なんなんだよこのかわいい生

き物は！ ちよつとした仕草や表情だけでこんなにかわいらしく感じるだなんて反則だぞ！

こりや姉である白露たちが特別かわいいがるわけだ。俺だってこんな妹が欲しかった。

いますぐにでもギュツと抱きしめて、そのぷにぷにと柔らかそうなほっぺをムニムニしたいぐらいだ。

もちろんそんなセクハラ染みた真似をする勇気などあるはずもなく、内心で春雨の愛らしさにデレデレしながらコーヒーをありがたく頂くことにする。

「どれどれ味は……ずず。ん？ このコーヒーは……」

「お口に合いませんでしたか？」

「いやいや、味はうまいよ。でもいつも飲んでるコーヒーと違うような……」

いつもはインスタントか奮発してブルーマウンテンのコーヒーを飲むが、そのいつもと飲んでいるものとは風味が微妙に違う気がした。

「もしかしていつもと違う豆使ったか？」

「あ、はい♪ グアテマラを使ってみました」

グアテマラといえば良質な香気とコクや華やかさに優れたコーヒーだ。

ほうほう、これがグアテマラか。なんというか後味にキレみたいなものがあつてうまいな。

「司令官、前々からグアテマラコーヒー飲んでみたかったですよね？」

「え？ あ、ああ。そうだけど……」

確かにいつも飲んでるコーヒーに飽きがきたとき、そんなことを呟いた気がする。

でも、なんでそんなこと春雨が知っているのだろう。誰かから言伝で聞いたのだろうか？

まあ、なにはともあれ新鮮でおいしいコーヒーの味にはたいへん満足だ。

「気が利くな春雨。わざわざ注文したわけじゃないのに」
「うふふ♪ 口にしなくてもわかりますよ。だって……」

春雨は「クスリ」と口元に笑みを浮かべながら……

「司令官のことなら、春雨は何でも知っていますから」

妙に艶のある声色で、流し目を送った。

……ん？

んん？

気のせいかな？ いま春雨がすごい色っぽく見えたような……。

い、いや、そんなはずないか。確かに白露型姉妹は駆逐艦のわりにやたらと見た目が大人びている艦娘が多いが、春雨はその中でも幼げなタイプだ。そんな子に色っぽさを感じるだなんて……。

いかんいかん。ここ最近、駆逐艦相手にもドキッとさせられることが多いからか、俺の中で恋愛対象の基準がズレ始めているのかもしれない。猛省せねば。

気持ちを切り替えるようにコーヒーを啜る。

「ふう、しかし本当にうまいなこのコーヒー。眠気も一気に吹っ飛んでいきそうだな」

「そういえば司令官、最近は寝不足気味ですよな？」

「まあな。いつも不知火が夜に遊びに来るもんだから」

まさか毎晩夜這いにあつてるとは言えないので言葉を濁す。春雨のような純真無垢な子の前で、ただれた話題を出すわけにはいかなからな。

「……ずるい」

「えっ？」

いきなり春雨のはずんだ声色に抑揚がなくなる。

「不知火さんだったら、司令官の迷惑も考えないでそんなことばかりして。よくないです。よくないと思います。司令官のカラダに何かあったらどうする気なんでしょう」

「は、春雨?」

さつきまで健康的だった春雨の顔色に暗い影が差していく。

「春雨だったら、そんなことしないのに。司令官の望むことは口にしないでなくても理解しなくちゃいけないのに。自分の都合を押しつけるなんてダメです。ダメだと思います」

春雨の瞳からだんだんと光彩が薄れていく。そのせいで彼女の赤い瞳が、まるで血の池のように不吉な色合いと化す。

ど、どうしたんだ春雨のやつ。なんか急に怖いぞ……。

「司令官」

「は、はい! なんでございましょう!」

妙な圧力を放つ春雨相手に、つい上ずった声上がる。

「お困りのようなら春雨から不知火さんに注意しましょうか? もう二度と司令官に迷惑をかけないようにしますから……」

「い、いや大丈夫だ! 俺からちゃんとキツク言っておくから!」

「そうですか? 司令官がそうおっしゃるのなら……」

得も言われぬ焦りを感じたので慌てて春雨の申し出を拒否する。ここで頷いたら不知火の身が危ない。なぜか直感でそんなことを思った。

「ねえ、司令官。寝不足気味なら一度仮眠されてはいかがですか?」

「え? いや、問題ないって。ほら、こうしてコーヒーも飲んでることで……」

「司令官」

俺の言葉を遮るように春雨は身を寄せ、カップを握る手にスツと手を重ねた。そのまま春雨の手に導かれるようにカップがゆつくりとコーヒー皿の上に降ろされる。

「いけませんよ? 大事なカラダなんですから、もつと^{いたわ}労らないと」

重ねた白い手で俺の手の甲をゆつくりと撫でる春雨。背筋に甘い痺れが走る。

な、なんだ？ この男の本能を揺さぶるような手つきは。

「春雨、司令官のことがとつても心配です。もしも司令官がまた倒れたりしたら、春雨悲しくてどうにかなってしまいかもしれません」
言葉そのものは純粹に俺を心配している少女のソレだ。

だが……このねっとり絡みつくような春雨の艶っぽい声色はいたい……。

「司令官……春雨のお願いです。どうか無理せず、休めるときに休んでください」

耳元に唇を寄せて春雨は言う。

こそばゆいというよりも、ゾクゾクするような囁き。

至近距離で香ってくる春雨の甘い匂いも手伝って、変な感情が込み上がってくる。

「は、春雨。ちよつと近づ……」

奇妙な心地から逃れるように体勢を変えると、春雨と目が合った。

そこに、俺の知る春雨の顔はなかった。

「……くすつ。司令官、どうされました？」

にこりと無垢なほほ笑みを向ける春雨。

だがその笑顔には一滴の毒が紛れ込んでいる。

男を惑わす、甘く蕩けさせる方法を知った——女の貌かおだ。

息を呑む。

まるで魔術にでもかけられてしまったかのように、春雨から視線を反らせない。

「司令官、遠慮なさらなくてもいいんですよ？ 我慢していることがあつたら、春雨になんでも打ち明けてください。秘書艦の春雨が、ぜんぶ受け止めますから。はい♪」

言葉を紡ぐ春雨の唇の動きが、いやに妖艶に感じられた。

白く艶光る唇が、ゆつくりと迫ってくる。

「ほら、司令官。春雨にお願いしてください。もっと、もっと素直に。春雨にして欲しいこと、ぜんぶ……」

意識が春雨で一色に染まりそうになる……その瞬間だった。

「ぽいっ！ 提督さんおはようっぽいっ！ 夕立と一緒に遊ぶっぽいっ

い！」

「はぐおおおお?!」

扉を開けるなり俺に飛びかかってきた夕立によって意識を正常に引き戻される。

た、助かった。

夕立が来なかつたら危うく変な空気に流されてしまうところだった。

「ゆ、夕立。お前ノックをしろとあれほど言ってるだろ?」

「ごめんなさ〜い! 提督さんに早く会いたくて忘れちゃったぽ〜い♪」

そう言つて夕立は目を^{ハッテン}へにしながらスリスリと俺にしがみついてくる。

相も変わらずワンコみたいに懐いてくる夕立を見ると、さっきまで感じていた不穏な空気も忘れて安心した気持ちになる。グリグリと押しつけられる夕立のぷにぷにとした頬の感触も心地いい。ついでにムニムニと押しつけられる夕立の発育良好なおっぱいの感触もまた心地いい。

そんな至福な心地を味わっていると……

「夕立姉さん……」

氷のように冷たい感情の欠いた春雨の声に、俺も夕立もビクリと震える。

「ぽ、ぽい。春雨、いたっぽい?」

「はい。今日は春雨が秘書艦なんです」

「そ、そうだったんだ……」

いまになつて春雨の存在に気づいたらしき夕立は、まるで出くわしてはならない存在と出くわしてしまったときのような怯え方をする。わからなくもない。

だって俺もいま似たように怯えているから。

え? 何この春雨。めっちゃ怖いんですけど……。

「夕立姉さん……またそうやって、司令官を独り占めするんですか?」
「は、春雨、違うつぽい。まさか秘書艦しているとは思わなかつたから

「デ、デレデレはしていなかったかと……」

「してましたよね？」

「はい……」

ダメだ。いまの春雨の前では嘘をつくことは許されない。そう本能が訴えている。

「やっぱり春雨じゃ魅力が足りないんですか？　姉さんたちみたいに綺麗でもスタイル抜群でもないし……」

「そ、そんなことはないんじゃないか？」

春雨は綺麗系というよりキュート寄りだし、スタイルだって他の駆逐艦たちや龍嬢と比べれば発育良好なほうだし。

こんな状況で真面目に言うことじゃないかもしれないが、身の安全のためにも思ったことを直球で伝えるべきだと感じた。

「……春雨、魅力的ですか？」

「お、おう。もちろんさっ」

さつきまで「こんな妹が欲しい」と考えるぐらいには魅力を覚えていたからな。

うん、さつきまでは。

「じゃあ……春雨に甘えてみたいと思いますか？」

「え？」

「春雨、司令官のお役に立ちたいんです。だから今日秘書艦に選ばれて本当に嬉しかったです。いっぱい頼って、甘えてほしいんです……」

そう言つて春雨は両腕を広げる。

不穏な笑顔はいつのまにか消えている。いま目の前にあるのは期待を滲ませて頬を赤く染める少女としての顔だった。

「司令官……」

切なさを含んだ声で俺を呼ぶ春雨。

いまここで俺が断ればどうなるか。春雨が大いにショックを受けることは容易にわかる。

……もしかして不知火が言う『危険』とはこういうことだったのだろうか？

いかなる経緯があつたのかは想像できないが、いまの春雨は精神的にとても不安定だ。それは間違いない。こういうときは感情を自分でもコントロールできないものだ。

確かに、こんな状態では何をしだすか、春雨本人だってわからないだろう。

ならば俺がすべきことはひとつ。

その不安を埋めるために、いまここで春雨を頼ることだ。

思わず安堵する。

ひよつとしたら手の施しようがないほどの緊急事態が起こつてい
るのかと思つたが、これならいつもどおり俺が素直になれば解決する
ことだ。

「……よし、わかつた。今日一日は、春雨の厚意にたくさん甘えること
にするよ」

「司令官！」

不安げだつた春雨の顔がパアツと輝く。

そこにはいつもどおりの愛らしい春雨の笑顔があつた。

どうやら、ひと安心か。

いきなり小動物っぽい印象から豹変して心配したけど、もう問題な
ささうだ。

まったく、不知火も大袈裟だな。鬼気迫つて忠告するもんだから必
要以上に警戒してしまつたぞ。

春雨はやつぱり春雨だ。根は純粹無垢な『いい子』なのだ。

怯えたりしてすまなかつたな、と心の中で詫びつつ俺はさっそく春
雨に何かお願い事をしようとした……そのときだつた。

視界が、グラツと傾いた。

「ん？ あれ？ ……なんか、急に眠く……」

とつぜん強烈な眠気に襲われ、カラダがフラつく。

そんな俺の様子を春雨は……

「……うふふ♪」

恍惚と悶えるように笑いながら見つめていた。

「嬉しいです。やつぱり司令官は『春雨に甘えたい』って考えてくれて

いたんですね？」

「は、春雨、お前、まさか、コーヒーに……」

「心配いりませんよ？ 口にしないでいいんです。司令官の望んでいることは、春雨ぜんぶわかっていますから。司令官はただ春雨に身を任せるだけがいいんです」

「くっ、あっ……」

自力でカラダを支えることもできず、俺はそのまま春雨の胸元へと倒れる。

春雨の小振りながらも柔らかな胸元で受け止められると、そのままぎゅっと抱きしめられる。絶対に、離さないとばかりに。

「春雨、もう我慢しなくてもいいんですよ？ 司令官のこと、独り占めしてもいいんですよ？ だって、司令官が『甘える』って言うてくれたんですね……うふ、うふふふ♪」

少女は嗤う。

無垢とは程遠い、魔性を孕みながら。

「司令官♡ いっぱい、いっぱい春雨に甘えてくださいね♡ 司令官がしたいこと、春雨がぜんぶ叶えてあげますから♡ そう、ぜんぶ、ぜんぶぜんぶぜんぶ……ふふ、うふふ、あははははははは♪」

きつと不知火がこの場にいれば「だからあれほと言ったのに……」と呆れ顔を浮かべることだろう。

うん、ごめんよ不知火。完全に油断していました。どうしましやう、これ。

己の不甲斐なさへの恨みと深い後悔に苛まれながら、意識は眠気に従って闇へ落ちていった。

魔性の春雨 後編

認めよう。俺は少し調子にのっていた。

これまでの過保護艦娘たちによる試練をなんやかんやで解決してきた経験が、自信というよりも慢心と化していたことに俺は気づかなかった。

その結果、いま俺はこんな目にあっている……

「うふふ……それじゃあ司令官、そろそろ入れちゃいますね?」

「あ、ああ、やめるんだ春雨。そんなことしちゃいけない……」

「でも司令官、とっても物欲しそうな顔をしていらっしやいますよ?」

「そ、それは……」

「あはっ、司令官かわいい♡ ほら、もうこんなにトロトロになっちゃっているんですよ?」

春雨は蠱惑的な笑顔を浮かべて『蕩けたソレ』を見せつける。

俺はゴクリと喉を鳴らす。

口では言いつつも誘惑に揺らいでいる俺の様子を見て、春雨は「クスリ」と嬉しそうに嗤う。

「司令官、春雨にはわかっていきますよ? 本当はこれが欲しくて欲しくてたまらなかつたんですよ?」

春雨の言うとおりであった。もう、抗えない。こんなものを見せつけられてしまった以上……

「さあ、司令官。遠慮しないでください。たとえ召し上がれ♡」

「ああっ、春雨!」

俺の絶叫に合わせるように、春雨は『蕩けたソレ』をグチュグチュと掻き混ぜ、そして……

「はい♪ このチョコレートパフェにさらにトロトロに溶けたチョコレートソースを入れちゃいます♪ えーい♪」

「ああっ！ 春雨！ なんてことを！ 滅茶苦茶おいしそうじゃないか！」

目の前で広がる夢のような光景に俺は感動を抑えることができなかった。

「うふふ♪ 春雨、知ってるんですよ？ 司令官こういう甘いものが大好きなのに、恥ずかしくて艦娘の皆に隠していたこと」

「ぐっ……しよ、しようがないじゃないか。いい歳した男が女子みたいにスイーツが好きなんて知られたら上官としての威厳がなくなってしまうじゃないか」

「そうですか？ 春雨はとってもかわいいと思いますけど？」

そういつて春雨は今日何度目かの男心をくすぐる流し目を向けてほほ笑んだ。

「司令官？ 今日一日、春雨はあなただけのメイドです。精一杯ご奉仕しますから、我慢なさらずに何でもお願いしてくださいね？」

その言葉どおり、メイド服に着替えた春雨はニコリとスカートの裾を持ち上げて恭しくお辞儀をした。

コーヒーに一服盛られて、一時はどうなることかと思っただが……幸い、地下に監禁とかベッドに拘束されているとかいったお約束の状況には陥っていない。

というか春雨はただ純粹に寝不足気味の俺を気遣っただけらしい。確かに最近は不知火の夜這いの影響で満足に睡眠時間を確保できているとはいえない。そんな俺を心配したらしき春雨は無理やりでも寝かせたかったようだ。

目が覚めると、いつのまにかメイド服に着替えていた春雨はずっと寝床の横で添い寝をして、俺をあやしてくれていた。

『司令官、いつもお疲れ様です。今日ぐらいはゆっくりして疲れを取ってくださいね？ よしよし♪』

という具合に俺を^{ねぎ}勞いながら頭を撫でるぐらいで、貞操を危うくするような行為にはいたらなかった。

睡眠薬を盛ったのはさすがにやりすぎとは思ったが、おかげで久しぶりに快眠らしきものができた。

そしていま、春雨は俺のためにお手製のチョコレートパフェを食べさせてくれている。

「はい、司令官。あ〜ん♡」

照れくささを感じつつも、文字どおり甘い誘惑には逆らえない。差し出されたスプーンをパクリと頬張る。

うまい。

子どもの頃大好きだった極甘チョコレートパフェを再現したかのような味に、思わず懐かしさで涙が出そうだ。

周りの目を気にして日頃から食べることを我慢していたスイーツ。そしてそれをメイド服の似合う美少女に食べさせてもらえる二重の幸福で、俺の心は感激で満たされる。

春雨が危険、と不知火は忠告した。

しかし、このとおり彼女は俺を気遣って健気にお世話をしてくれる。さらには口にしてこなかった願望にも敏感に気づいて、それを叶えてくれている。

まさにそのメイド姿にふさわしい献身さでもって、俺に癒やしを与えているのだった。

春雨に対して恐れるようなものは、何もないように思える。

ただ……

「司令官、おいしいですか？」

「あ、ああ。こんなにもうまいパフェは久しぶりに食べたぞ」

「そうですか。よかったあ、ふふふ♪」

春雨はそうしてひとしきり喜んだあと……

「で、それって白露姉さんの作る料理よりもおいしいってことですか

「？」

瞳孔から光を消してそう尋ねた。

至福の感覚も一瞬で消え失せる、背筋が凍りつくような眼差しだった。

「……お、おう、もちろんさ」

「本当に？」

「ほ、本当さ」

冷や汗をかきながら俺は答える。

白露はお転婆少女の印象が強いが、絶品の鍋料理を作れたりと意外と女子力が高かったりする。しかし、あの鍋の味といま食べているパフェの味を比べたところで評価するには部門違いなところがあるし、正直「甲乙つけがたし」と言いたいところだったが……いまの春雨相手にヘタなことを言うわけにはいかない。そう本能が警告を発している。

「そうですか、白露姉さんよりも……うふふ。嬉しいです」

機嫌をよくした春雨はそのまま俺にキュッと抱きついてくる。

子どもが甘えるようにするハグとは違う。まるで誘惑するように絡みつく抱擁だ。

「お、おい、春雨」

「司令官、遠慮なさらず春雨にもっと甘えてくれていいですよ？」

「い、いや、そうじゃなくて胸が当たって……」

「あ、当ててるんですよ」

照れくさそうに言っつて、春雨はぶにゅと押し返してくる可愛らしい胸元で俺の顔を包み込む。

なんと大胆な。以前の春雨なら決してこんな真似はしなかっただろう。

どうやら春雨は本気で俺を喜ばせるためいろいろご奉仕してくるつもりらしい。乳房の感触を堪能させるように一層強めに押しつけ

てくる。

「司令官、おっぱい好きですよね？」

「ま、まあ、嫌いな男はいないかと……」

「春雨、あれからちよつと大きくなったんですよ？」

「なん、だと？」

思わず食いつくように反応する。

確かに、メイド服を押し上げる乳房は前よりも大きくなっていてるよ
うな気がする。

とはいえ姉たちの発育ぶりが異常なだけで春雨も決して小さいワ
ケではなかった。いわゆる成長中というやつだ。現にあてがわれて
いるふたつの膨らみは、順調に育っていることを物語るように俺の顔
面を柔らかく包み込んでいる。

「司令官、春雨の胸、好きですか？」

なんとも答えにくい質問をしてくる春雨だったが、いまさら誤魔化
せるようなものでもないので素直に頷く。彼女の胸の感触にときめ
いたのは事実だ。

俺の答えを聞くと春雨は……

「……村雨姉さんの胸よりも、好きですか？」

またもや瞳孔から光を消して鬼気迫るように聞いてきた。胸のド
キドキは、別の意味でのドキドキに変わる。

これである。

先ほどから春雨はやたらと姉たちを引き合いに出して、春雨のほう
が上かどうかと尋ねてくる。

俺に対してお世話したい気持ちは紛れもない本心なのだろうが、し
かしそこには『自分が一番でないイヤ』という拘りがあるようだっ
た。まるで長女の性格が伝染してしまったかのようである。

「ねえ、司令官。どうなんですか？」

春雨が急かすように聞いてくる。

だんまりは否定と同義だ。このままだと良からぬことが起こると予感した俺は咄嗟に答える。

「お、大きさとかは関係なく俺はおっぱいならどんなものでも……」

「司令官……春雨は、村雨姉さんよりも好きですかと聞いてるんです……」

恥を忍んだ答えのつもりだったが、春雨はお気に召さなかったようだ。

「……春雨ぐらいの程良いサイズが好きです」

刃物のように鋭い剣幕で聞かれたら、こう答えるしかない。

「よかったあ♪ 春雨嬉しいです♪」

またもや上機嫌になる春雨。なんとまあ、コロコロと態度が豹変する娘さんである。俺も激しい温度差の変化で天国と地獄を同時に味わっている。寒暖差で風邪ひいちまいそうだ。

とほほ。いったい、なんでこんな目に……

「……それじゃあ、司令官にもつと喜んでもらえるように春雨、勇気を出しますね?」

「はい?」

なにやら意を決したらしき春雨は顔を真っ赤にしながらメイド服の胸元に手をかけ始めた。

シユルシユルとリボンを解いて、プチプチとボタンを外していき……つてちよつとちよつと!?

「司令官のためなら、私こういうことだつて……」

いまにも泣きそうな潤んだ瞳で、熱い眼差しを向ける春雨。

やがて黒いメイド服から生白い谷間が現れ……

「司令官、どうか春雨を、もつと味わってください……」

「ストップ! それ以上は怪しいメイド喫茶みたいな感じになっちゃうからやめるんだ!」

とんでもない過剰サービスをしようとしたす春雨を慌てて制止させる。

こればかりは素直に受け入れるわけにはいかない!

「離してください司令官！」

春雨はイヤイヤといいながら、俺の両手で拘束された腕を振り解こうとする。

「これぐらいしないと春雨は司令官の特別になれないんです！」

「何をワケのわからないことを言ってるんだ！」

「だ、だって……じゃないと、また姉さんたちに司令官を取られちゃいますー！」

「え？」

白露たちに取られる？ いったい、どういうことだ？

「春雨はもうイヤなんです。聞き分けのいい子を演じて姉さんたちに遠慮するのは。だからワガママになるって決めたんです。司令官の特別な存在になって、ずっとお傍にいられるように……」

春雨はこの経緯を語り始めた。

どうやら春雨はこれまで、ずっと姉たちを気遣って自分の気持ちを押し殺してきたらしい。

「秘書艦としてお傍にいられるときは、本当に幸せでした。……でも、姉さんたちがいるときは、春雨はいつも我慢しなくちゃいけなかったんです」

仲睦まじいと思っていた姉妹の間で、まさか春雨がそんな気持ちを抱えていたとは……。

だが過去の記憶を掘り起こしてみると、確かに思い当たる節はいくつもある。

他の白露姉妹といるとき、春雨はいつも姉たちの影に隠れていた。

たとえば白露といるとき。もともと自己アピールの強い長女だ。一番上の姉ということもあって、大人しい春雨は頭が上がりず白露に遠慮するほかなかった。

たとえば時雨といるとき。物静かで穏やかな時雨だが、そのぶんその空気を壊してはならないような雰囲気生まれ、消極的な春雨は沈黙を決め込むしかなかった。

たとえば村雨といるとき。姉妹の中でも特に春雨をかわいがっている姉だ。きつと多少ワガママを言っても村雨はかわいい妹の希望

を聞いただろう。だがそれと同じくらい春雨は村雨を尊敬している。姉の威厳をたもつためにも、春雨は一步引くしかなかった。

たとえば夕立といるとき。とにかく自由奔放にふるまい、自分の欲求に忠実な夕立の前では、春雨はいつもストツパーにならざるを得なかった。そこに自分の気持ちを打ち明ける暇などあるはずもなかった。

春雨のそういう性格は知っているはずだった。

けれどそれによって、ここまで深い鬱憤を溜め込んでしまうことになるとは想像できなかった。

そして、その鬱憤が爆発した原因はいうまでもない。

「司令官が死にかけて、二度と会えないかもしれないって思ったとき、決めたんです。もう我慢しないって。姉さんたちには負けないって。私だって、姉さんたちに負けないくらい司令官のこと大す……大切に思っているんですから！」

滅多に主張をすることのなかった春雨がここまで強い主張をするだなんて……

いや、そうでもなかったか。言葉にはしなくても、春雨は前から主張を続けていたんだ。

あれはいつのことだったか。

確か大雪の日に限って軍の会議が行われたときだ。

帰りは遅くなるだろうから先に眠っているようにと艦娘に言い残して俺は大本営に向かった。

会議は夜遅くまで続き、やっと解放されて鎮守府に帰る頃には、雪はますます強まっていた。

そんな寒い中で……

『司令官、お帰りなさい』

傘をふたつ持った春雨が笑顔で出迎えてくれた。

いま思えば、あれは春雨なりの訴えだったんだな。

もっとあなたの役に立ちたい。もっと自分を頼ってほしい。だから姉たちだけでなく自分にも構ってほしいと。

「司令官……お願いです。どうか春雨を、司令官の『一番特別な女の

子』にしてください……」

そしていま、我慢の限界を超えた春雨は、そうして切なる思いを伝えるのだった。

俺は一人っ子だから、春雨のように姉妹間で抱えるコンプレックスを理解しきれぬわけじゃない。

だが、本来なら大人しい春雨をここまでらしくない行動に駆り立ててしまった責任は取るべきだろう。

覚悟は決まった。

「……春雨、俺もお前のことを大切に思っている」

「司令官……」

「でもだからってお前を一番鼻屑するわけにはいかない」

春雨の顔がショックで彩られる。

だが予想していた答えでもあったのか、はつきりと言われてしまったぶん錯乱する素振りは見せなかった。昏い瞳にも、徐々に理性が戻りつつあるようだった。

提督である俺にとって艦娘はみな平等に大切な部下だ。誰が一番という例外はない。そのスタンスは今後も変えるわけにはいかない。ならば……

「だが春雨……兄としてならお前を全力で大切にするぞ！」

「……はい？」

「つまり春雨！俺を独り占めしたいのなら俺の妹になってしまえばいいんだよ！」

ポカンと呆然とする春雨に俺はそう提案する。

提督として、ひとりの艦娘だけを特別扱いすることはできない。だがそれでは春雨は傷ついてしまう。

だから考えた。

ない知恵を絞って必死に考えた。そして思った。

上官と部下とは関係のない、擬似的な兄妹になればいいんじゃないかと。

学園では教師と生徒。家では仲良し兄妹……みたいな、よくあるあのシチュエーションだ。『妹枠』という、ある意味で特別扱いみたいな例外を設けることにはなるが……これが一番平和的な解決法であるように思われた。

「まあ有り体いつてしまうとだ……一人っ子である俺は春雨みたいなかわいい妹がずっと欲しかったんだ！」

「え、ええ〜!？」

素っ頓狂な提案に困惑しているのか、かわいいという言葉に照れているのか、春雨は顔を真っ赤にして目に見えて慌て出す。

「さあ、春雨！俺を兄だと思って存分にこの胸に飛び込んでこい！兄である俺がいくらでも妹のワガママを聞いてやろうじゃないか！」

「そ、そんなこと急に言われましても……あうあう〜！」

どうした春雨！ さっきまでのちよつとエッチで余裕ある魔性の女っぽい雰囲気が無塵もないじゃないか！

はは〜ん？ さては攻撃ステータスに全振りした結果、防御がペッラペラに薄いというアレだな？

ならば好都合。

こっからは、ずっと俺のターンだ！

「来ないならばこっちから行くぞ春雨！ 兄である俺が抱きしめてやる！」

「ふえええええ!! しししし司令官〜!!」

「辛い思いをさせてすまなかつたな！ 鈍い兄を許してくれ！ お詫びとしてたくさん構ってやるからな！」

ぎゅつと春雨を抱きしめ、その頭をよしよしと撫でる。

なんてサラサラで触り心地のいい髪！ ずっと撫でていたい！

「ひゃああああん！ し、司令官、そんな、春雨まだ心の準備が〜！」

「心を開くんだ春雨！ 生粋の妹キャラであるお前ならばできるはずだ！」

「な、なんですかソレ〜!!」

「俺を兄と思え！」

「ふああああん！ 違うのにい！ 春雨が司令官になりたいのはそういう関係じゃなくて〜！」

「……俺が兄じゃイヤか？」

「ふえ？ い、いえ、そういうわけでも……。ときどき『司令官がお兄さんだったらなく』って想像したことはありますけれど……」

「なら呼んでくれ」

「あう……」

「春雨が呼びたいように、俺を呼んでくれ！」

しばしの沈黙。

赤くなつた顔を俯かせていた春雨だったが、やがてゆつくりと顔を上げると……

「……さん」

「ん？ 何だつて？」

もじもじとしながらも、か細い声ながらも春雨は……

「お兄、さん」

と、甘えるように呼んだ。

瞬間、俺の中で理性の糸が切れた。

「かわいいぞ春雨！ もう二度と悲しい思いなんてさせてたまるか！」

「ひゃああああん！ し、司令官!？」

「司令官じゃなくてお兄さんだろ!？」

「お、お、お兄さん？」

「うおおお！ お兄さんだぞ！」

「ひゃん！ お、お兄さん、強く抱きしめすぎです♪ あうう、春雨、恥ずかしいです♪」

「無理だ！ 春雨がかわいい過ぎるのが悪い！」

「そ、そんなあ♡」

「ああっ！ なんでこんなにかわいいんだ春雨！ そのメイド服も滅茶苦茶似合ってるぞ！ 食べちゃいたいぐらいだ！」

「ほ、本当に食べちゃっても……いいんですよ?」

「小生意気なことを言うんじゃない! そんなおしやまな子はナデナデの刑だああ!」

「ひやううん♡ お、お兄さんの頭ナデナデ、気持ちいいですうう♡
♡ こんなのただの♡褒美ですうう♡」

「んう、それは困った! でもかわいい妹にヒドイことはできないから仕方ないな!」

「し、仕方ないですね♡」

「というわけで、もつとかわいがられる春雨えええ!」

「はい♡ わわいがられちゃいます♡ お兄さあああ♡」

「春雨えええ!」

「お兄さあああ♡」

「ぽいぽい! 夕立やっぱり提督さんが心配だから戻ってきたっぽい! 春雨! 早まるなっぽい! いくら提督さんが大好きだからって監禁なんて……」

「クンカクンカ! 春雨の髪、なんていい香りなんだ! いつまでも嗅いでいたいぞ! クンカクンカ!」

「あん、嬉しいです♡ お兄さんなら、いつまでも嗅いでてもいいですよ♡」

「なんて兄想いの妹なんだ! 愛しているぞ春雨!」

「は、春雨も愛しています♡」

「お前のかわいい顔をもつと見せてくれ!」

「はい、お兄さん♡ もつと春雨のこと見て♡ 姉さんたちよりも、いつぱいかわいがって♡」

「いくらでもかわいいがつてやるさー！」

「ん、あつ♡ お兄さんのナデナデ、好き♡ はう、お兄さあん♡

チューしてください♡ 春雨にチューして♡」

「おう、してやるとも！ チュツチュツとなー！」

「あん、お顔じゃなくて唇に……でも幸せだからいいです♡ お兄

さん♡ もっと、もっとお♡ 妹の春雨を、いっぱい愛してえええ♡」

「望むところだあああ！ 春雨えええー！」

「お兄さあああん♡」

「……見なかったことにしよう、っばい」

途中から誰かが来た気がしたが、疑似兄妹として絶賛愛を育んでいる俺たちの耳には届かなかった。

なにはともあれ。

春雨の悩みは無事に解消され、鎮守府に再び平和が戻ったのだ。た。

後日。

なぜかやたらと俺のことを『お兄ちゃん』とか『お兄様』とか『兄くん』とか呼ぶ艦娘が増大した。

駆逐艦のみならず、いい歳した戦艦や空母までもがだ。艦娘の間でシスプリでも流行ってるんだろうか？

しかし生憎、妹枠の艦娘はひとりだけと『彼女』と約束したのだ。

「お兄さん♡ はい、あくんしてください♡」

チョコフォンデュしたイチゴを輝かんばかりの笑顔で食べさせてくれる我が妹……もとい大天使春雨。

「おいしいですか？」

「もぐもぐ……おう、もちろんさー！」

かわいい妹が食べさせてくれるから2倍うまく感じるぞー！

「えへへ♪ 司令官……じゃなくて、お兄さんとうこうなれて、春雨は幸せです♡」

春雨に持ちかけた提案は現在も継続中だ。

執務以外の時間帯で基本的にふたりきりのときは、こうして春雨と兄妹のように触れ合うようにしている。

春雨はそれで満足しているらしく、あの不穏な雰囲気もすっかり消え失せた。気まづくなっていた姉たちとの関係もどうやら修復したらしい。

春雨の豹変から一時はどうなることかと思ったが……今回もなんとか無事に問題を切り抜けられたようだ。

いやあ、しかし。ほんと妹的存在がいるってのはいいものだな。

こんなかわいらしい妹分を持って、俺は心底幸せ者だと思う。

「あつ……くすくす、お兄さんたら♡ 口元にチョコがついてますよ？」

「ん、(こ)か？」

「いいえ、こっちですよ。ん……ちゅっ」

「っ！」

唇と唇が触れ合うスレスレのところ、春雨はチョコレートを舐め取った。

「べろっ。ん……ふふ、とっても、甘あい♡」

舐め取ったチョコを味わうように、春雨はペロリと唇に舌を這わせ……

あの魔性にあふれた流し目を俺に向けた。まるで、獲物を狙う蛇のよう。

「どうかされましたか？ お兄さん？」

「え？ いや、なんでもないぞー！ はははー！」

「そうですか？ じゃあ、もうひと口どうぞ召し上がれ？ はい、あーん♡」

き、気のせいだよな。

春雨の悩みは解決したんだから、もうあんな男を誘惑するような妖しい表情を浮かべるはずが……

「お兄さん？」

「ん？」

呆然とする俺を愛おしむかのように、春雨は「クスリ」と笑いながらチョコでコーティングされたイチゴを差し出す。

「これからも、春雨を末永くかわいがってくださいね？ 妹として……くすくす♪」

甘いはずのチョコフォンデュは、どこかほろ苦く、アダルティな味がした。

鈴谷のおしやれ講座

世間だと『艦娘たちは軍に属する屈強な女傑』、という印象が強いらしい。

確かにそういう一面があることは否定できない（俺の身に危険が起きたときとか凄い剣幕になるし）

とはいえ、彼女たちも人並みにおしやれに気を遣う乙女である。

その中でもひと倍、流行に敏感なのは間違いなく鈴谷すずやだった。

「じゃーん♪ 見て見て提督う♪ これいま流行りのコーデなんだよお。どうどう？ 似合う〜？」

司令室にやってくるなり、そういつて俺に私服を見せつける鈴谷。

女性のファッションにはあまり詳しくないので正式名称はわからないが、肩出しのトップスにフワフワとしたミニスカートと、全体的に可憐な印象が強めの服装だ。

普段の快活で軽めな性格の鈴谷とはギャップがあつて、もともと高い魅力をさらに引き立てている。

渋谷に遊びに行くJKたちに混ぜつてもまったく違和感がない艦娘だけあつて、素人目に見てもそのセンスが抜群だとわかる。

「ほらほら、提督う。素直な感想言つてもいいんだよ〜？ ん〜？」

鈴谷本人もその服装のチョイスにはだいぶ自信があるらしい。ヒラヒラとスカートを揺らしながら挑発的な笑みを向けては、なやましいポーズを取つたりしてその魅力を強調してくる。

ふむふむ。素直な感想をご所望か。

なら率直に伝えるとしよう。

「ふくん、エッチじゃん」

「うりや」

脳天にチョップをされた。

「ないわ〜提督〜。そのコメントないわ〜」

「なんだよ。『素直に言え』つて言つたじゃないか」

え？ だつて肩丸出しなんだぜ？

屈んだときとか、おっぱいの谷間とか丸見えなんだぜ？

白く眩しい太ももとか見放題なんだぜ？

だだでさえドスケベなボディをしている鈴谷がそんな露出の多い格好してるんだぜ？

エッチじゃん。

「……というか、ちよつと露出が多すぎやしないか？」

目の保養としてはたいへん素晴らしいが、そのぶん際どいあまり、まるで娘の身を案じる父親のようなことを言ってしまう。

「ええ〜これぐらい普通っしょ。それに、この組み合わせいちおう『清楚系』ってコンセプトなんだから」

なるほど、これがいわゆる『清楚ビッチ』ってやつか。

とか言ったらまたチョップされそうなので口を噤んだ。

「けどなく。街中でそんな格好で出歩いたら、変な男にからまれそうで心配になるっつうか……」

「……ふくん、そういう心配してくれるんだ？」

「当たり前だろ」

「そうなんだあ〜……えへへ♪」

先ほどとは打って変わって急にご機嫌になる鈴谷。

もみあげをクリクリと弄りながら、意味ありげな流し目を向ける。

「ふふん、だーいじょうぶだよ。どうせ提督以外の男の人には、こういうの見せないし……」

「まあ、確かに鎮守府には俺しか男いないからな。見せようもないよな」

「……」

「けど街に行くときは頼むからもうちよつと大人しめのにしてくれよ？ 大事な部下になにかあったら気が気でないからな。提督として」

「……提督のバーカ」

「なんで心配しているのに怒る？」

褒め方といい、心配の仕方といい、JK然とした娘さんのご機嫌の取り方はたいへん難しい。

世のお父さんたちの苦勞が忍ばれる。

「はあ〜。おしやれ下級者の提督にはこの服の良さはわからないかな

」

そう呆れ気味に鈴谷は言う。

むむ、聞き捨てならんな。

「失敬な。俺だつてファッションには気を遣うほうだぞ？」

「え〜本当かな〜？」

当たり前前だ。将来、素敵な嫁さんと巡り会うためにも身嗜みには気をつけなさいといけないからな。

「なんなら、いまから私服に着替えてきてやつてもいいぞ」

「え？ 提督、その軍服以外に服持ってたの？」

「あるさ普通に。俺をなんだと思つてんだ」

アニメのキャラクターみたいに着た切りスズメじゃねえんだぞ。

「ふくん、なら見てみたいかな。提督の外行きの格好とか見たことなかったし」

「そうだったか？」

そういえば鈴谷が着任する頃には戦況も深刻化していて、休暇を取つて出かけるような暇もなかったからな。

「ねえねえ、見せてよ見せてよ♪ 提督のし・ふ・く〜♪」

「まあまあ焦るな焦るな。ちよつと着替えてくるから待つてろ」

爛々と目を輝かせる鈴谷の期待にこたえるべく私服を取りに向かう。

思えば外行きの服を着るなんて何年ぶりだろう？ 一応服屋で気に入ったものは購入していたが、けつきよく多忙のせいですっかり着る機会がなかったからな……。

どれ、せつかくだし、ここは気合いを入れてみるか。

俺は早速、将来の嫁さんとのデートのためにと厳選した勝負服を着込む。ワックスで髪型をしつかり整えてから姿見の前でポーズを取る。

「……ふっ、完璧だぜ」

どこからどう見ても男前。これにときめかない女子はいなからう。我ながら自分のセンスが恐ろしいぜ。

パーフェクトスタイルに着替えた俺は自信満々に鈴谷のもとへ戻った。

「待たしたな鈴谷！ どうだこのファッションは！」

「お帰り〜。どれどれ、鈴谷さんが見てあ、げ……」

俺を見るなり鈴谷の笑顔が硬直する。

ふっ、言葉を失うほどに惚れ惚れとしてしまったか。

「ほら、鈴谷。素直な感想を言ってくれてもいいんだぞ？」

答えなんてわかりきっているが、おしやれ上級者の鈴谷からは非とも率直な意見を聞くとしようじゃないか。

「……さっ……」

「ん？ 『さっ』、なんだって？」

わなわなと震えながら何事か呟く鈴谷。

もしかして『さっ』いこうにカツコイイじゃん提督！』とか？ ま

いったなくそんなに褒めないでくれよ〜。

「ださっ！ うわ、ださッ！ 提督の私服だっつつさ!!」

「……え？」

「ちよっ、待って！ 提督それ冗談でしょ!? ふざけて着てるんだよね!? え？ マジなの!? ネタとかじゃなくて!? まさかそれカツコイイって思ってるの!? え!? 嘘でしょ!」

信じられないものに遭遇したように鈴谷は狼狽している。

「え？ す、鈴谷？ この服、ダメだった？」

「ダメ以前の問題なんですけど!? なにその組み合わせ!」

え？ ドクロの絵と最高にクールな英文がプリントされたTシャツにテツカテカに光る黒の革ジャンのこと？

「最高の組み合わせだろ？」

「いやいや！ 最悪だよ!? オヤジくさい革ジャンもありえないけど柄Tとかもつとありえないから！ 『F○c k Y o u』とか『K○ I I Y o u』とか意味わかって着てんのソレ!?」

「いや、なんとなく英文ってイカすって思ってたただけでなにが書かれてるかはチェックしてなかったや。そんなヤバいの書かれてたのか……」

「バカなの!?!」

「い、いや、でも高かったんだよコレ?」

「高いとか安いの問題じゃないから！ つうかなんで全体的に黒い!?! なんでズボンまで革製の黒なの!?! ブーツまで黒じゃん！ まっくろくろすけか!?!」

「そ、そんなに俺の服ヤバい?」

「服どころじゃないよ！ なにその髪型!?! 寝癖!?! なんでトゲみたいにツンツン生やしてんの!?!」

「いや、ワックスってこう使うんじゃないの?」

「ぜんぜん違うし！ ワックスって髪をそうやって逆立てるためのものじゃないから！ うわっ、しかも指とか腕になに着けてんの!?!」

「え? ドクロのリングと蛇のバンクルに剣のアクセサリーだけど……ワイルドだろ?」

「ダサイよ！ いらないから、そんな中二病全開な装飾!」

「え!?! じゃあこのサングラスもダメ!?!」

「それが一番いらないから！ ねえなに!?! なにを指摘してるの提督!?! なにを思ってたそんなダメの見本みたいな格好したの!?!」

「ダメの、見本……?」

「ヤバっ！ もう全体的にヤバっ！ ちょっ、やめ！ 来ないで！ 近づかないで！ 周りから知り合いつて思われたくない!」

「……そこまで言う?」

悲鳴を上げて涙まで流すほどに?

そんなに俺の服ヤバいの?

え? かつこよくないのコレ?

「シヨックだ……自分の上官がこんなにセンスのない人だったなんて

……」

そう言いながら『OTL』の姿勢で落ち込む鈴谷。
奇遇だな、俺もいま同じことしたい気持ちだ。

「そうか……俺は、センスがなかったのか……」

俺がカッコイイと信じてきた美学とはいったいなんだったのか！

こんななんじゃ……こんなんじや素敵な嫁さんと巡り会うことがで
きないじゃないか！

「諦めるのはまだ早いよ提督！」

「鈴谷？」

鈴谷はガシツと俺の手を包み込み意気込んだ顔を向ける。

「こうなったら鈴谷が提督にファッションのことを教えてあげる！」

「鈴谷！」

「私が提督のことを文明人にしてあげる！」

「鈴谷……」

「安心して！ きつと治るから！ 絶対に鈴谷が提督を救ってみせる
から！」

「そこまでひどいかい？ 俺のファッションセンスは？」

「察して！」

「ア、ハイ……」

「がんばろう提督！ 鈴谷がついてるからね！」

ははは、優しいな鈴谷は。嬉し涙で前が見えねえや……。

かくして、おしゃれ下級者の烙印を押された俺は、おしゃれ上級者
の鈴谷先生のファッション授業を受けることとなった。

鈴谷先生の授業……なんかエツチな字面だね！（現実逃避）

「いい提督？ 洋服にはいろんな種類があるけど、大別すると『キレイ
め』と『カジュアル』の二種類しかないの」

「そうなのか？」

「うん。一覧にしたのがこれね」

鈴谷はタブレットに表示された画像を使って説明する。

・キレイめ

ジャケット

シャツ

スラックス

スキニーパンツ

革靴

キャンバスシューズ

主に大人っぽいイメージの服がキレイめ。一方……

・カジュアル

デニムシャツ

パーカー

ワイドパンツ

デニムパンツ

スニーカー

等々、若者が着るようなリラックスしたタイプの服がカジュアル。ほうほう、こうしてしっかりとジャンル分けされた一覧表があると、なにを選べばいいかわかりやすくていいな。

「なるほどなるほど。となると俺は『キレイめ』の服で固めればいいわけだな?」

もうカジュアル系一色で着飾るほど若々しいとはいえないし、どうせなら大人っぽい服装でダンディな男の印象を作りたい。

「はいブツブブー。提督、さっそくNGです」

「え? なんで?」

「いい提督? ファッションってのはね、同じ系統で固めちゃうと逆におしゃれっぽくなくなっちゃうものなの」

「なに!?!」

「上も下もキレイめの服装だと堅苦しかったりキザっぽい感じになって、他人の目からだあまり印象はよくないの」

「そ、そうなのか?」

「逆にカジュアル系一色だと子どもっぽい感じになったり、チャライ感じになっちゃうの」

し、知らなかった。

服って似た系統で固めればおしゃれになると思ってた……。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「簡単だよ。『キレイめ』と『カジュアル』を5:5でバランス良く着込めばいいんだよ。つまりミックスさせちゃうの」

「ミックス？」

「ほら見て、このモデルさんたち、『キレイめ』と『カジュアル』を両方着てるでしょ？」

確かに。

系統の違う服を合わせたところでバランスが悪くなるんじゃないかと思っていたが、モデルの彼らは見事にそれらを着こなし、非常におしゃれな印象を与えていた。

「ちなみにさっきの提督みたいに黒色の服ばかり選ぶのはオススメしないな。無難な感じはするけど黒って実は上級者向けの色でね。他の服と組み合わせたりして着こなすの、けっこう難しいんだよ」

なんと?! それは意外だった！

「あとね、装飾品とかそういうのはあまりつけないほうがいいの。むしろシンプルなほうがサッパリしてて印象がいいから」

「え？ でもこのチェーンとか気に入ってんだけど……」

「あのね、そのたつたひとつの余計なものでせつかくの服装が台無しになっちゃうの。それぐらい装飾って存在感強烈なの」

「うう、そ、そうか……」

「装飾品で気にするならむしろ腕時計とかだね。あとは靴。むしろ、このふたつが一番重要」

「腕時計と靴が一番重要なのか？」

「特に男の人はね。いくら服装は立派でも腕時計が安物だったり、オモチャみたいなのだったり、靴がボロボロで汚かったりすると、一気に女の子の好感度は下がると思っているよ？ 『ああ、そこまで気にかけない適当な人なんだなあ』って」

「マ、マジか」

男の格式はそういう細かいところで診断されてしまうのか。

肝に銘じよう。

「ついでに細かい点言うなら髪型もそう。清潔に整えてて、伸びっぱなしになっていないようにすること。これはさすがに提督もわかるよね?」

「ま、まあさすがにな……」

そこはもう一般常識だからな。

特に俺の場合は軍人なので散髪は常に心がけなくちゃいけない。伸びてきたらすぐに短めに切るようにしているが……ただひとつ不満を言うなら、世間の男性陣みたく『遊び』ができないのが残念なことかな。

「最近フワフワって感じに自然な流れにした髪型が流行りだけど……でも、鈴谷は提督のその短い髪型も好きだよ? 男らしい感じがして」

「お、そ、そうか?」

「うん♪ 提督はその髪型が一番似合ってる♪」

ここにきて初めて鈴谷にお褒めの言葉を貰えた。

おしゃれな美少女にこう直球に褒められるとなんだかめっちゃ嬉しいものだな。

「でも……ひとつ難点を言うなら眉毛をちゃんと整えたら、もつといいのにな、つてことかな」

「え!? 眉毛も整えるもんなの!? 女の人だけじゃなくて男も!」

「うん、いまどきは男の人も眉毛には気を遣うよ? なにしる異性に一番最初に見られるのは顔だからね」

い、言われてみればそうだな。

でも、まさか眉毛にまで気を遣わないといけないとは……。

「美容室とかに行けば髪だけじゃなくて眉毛もきれいにカットしてくれるけど、最近じゃ男性向けの眉毛専門サロンもあるんだよ? お願いすればちゃんと店員さんがやり方を指導してくれるし。ほら、眉毛なんてすぐに生えてくるから定期的に通ってたらすごいお金かかったちゃうでしょ?」

「まあ、そうだな……」

「それが面倒で疎かにしちゃう人が多いけど……でもそういう細かいところも整えてないと『おしやれな人』とは思われないんだからね」
「なんとというか、おしやれって大変だな……」

「そらそうだよ！ 自分を素敵に見せるには凄い努力が必要なんだから！ みんな時間かけてお金をかけて自分の魅力を磨いてるんだよ!？」
ものすごい気迫で鈴谷は言う。

「ファッション誌とか読んでると、みんな浮かれてるって言うけど……でもあれは『世の中の人をもっと魅力的になりますように』ってコンセプトで作られたものなんだよ？ 流行のファッションだつてその手の業界の人たちが必死に考えて『これだ!』って導き出したものなんだから。『流行りに頼ってて頭空っぽだ』なんて言う奴もいるけど、そうやって服飾関係たちの人たちが頑張って築き上げたものをバカにする奴が一番非常識なんだから！ 一生モテないんだから！」
鈴谷の言葉から、いかに普段からおしやれに気を遣って、それらに関わる業界の人々に敬意を表しているかがよく伝わってくる。

うん……確かにこの話を聞いたあとだと、さっきの俺の鈴谷の服装へのコメントも、ファッション業界を侮辱するような俺の格好も、実にひどかったことがわかる。

「なんか、悪かった。いろいろ無神経なことやって……」

「やっとわかってくれた？」

「ああ、ファッションも礼儀作法のひとつなんだなって思わされたわ」
「うむむむ。わかればよろしい♪」

俺の言葉に鈴谷は満面の笑みを浮かべた。

「それじゃ講義が済んだところで、さっそく提督のイメチェン始めてみよっか！ 鈴谷さんがしっかりコーディネートしてあげるね♪」

「おう、頼む。悪いな、なにからなにまで」

「いいっていいって。だつてさ……」

もじもじと髪を弄りながら鈴谷は赤くなった顔を向ける。

「提督にはさ、いつまでも、かっこよくいてほしい……」

「鈴谷……」

「提督……」

「そうだな！ 上官がちゃんと身嗜みを整えてないとお前たちに恥をかかせてしまうからな！ そういうわけだから、かつこよくコーディネートトしてくれよ鈴谷先生！」

「……提督はおしゃれしてもモテないかもね……」
「なんで!?!」

そんなこんなで、改めて鈴谷に私服を物色してもらおうこととなった。

「なくんだ提督、けっこう流行りの服持ってんじやーん」

「おう、ずいぶん前に艦娘たちと街に出かけたときに服屋で『お願いしますからそっちよりもこっちを選んでください！』というかもう買ってあげますから！』って押しつけられる感じに渡されたものだ」
「なんとなく、その場の状況が手に取るようにわかるわ……」

思えばあの時点から俺のセンスは壊滅的と艦娘たちに思われていたわけか……。

「……で、提督？ その一緒に出かけた艦娘って誰のこと？」

え？ なんか鈴谷の目がめっちゃ怖い……。

今度一緒に出かけるという約束をしたことで機嫌を直した鈴谷は、『これがベストかな？』と言ってシンプルな組み合わせを選んでくれた。

ついでに眉毛も整えてもらい、ワックスの正しい使い方を教えてもらった。

すべての行程を終えて、姿見の前に立ってみる。

そこには、まるで別人の俺がいた。

「お、おう!?! これが俺か!?!」

さつき見たモデルの男たちと似たような格好を着込んだだけなのに、まるで印象が違う。

生まれ変わったような気分とはまさにこのことを言うのだろう。

いかに俺がパーフェクトフアッションだと思いついていたあの格好が最悪のゴミだったかが、いまならよくわかる（涙目）

「ありがとう鈴谷！ これなら外に出ても恥ずかしくないぜ！」

見事なコーディネートをしてくれた鈴谷に熱い礼を述べる俺だったが……

「……あ、うん」

鈴谷は心ここにあらずな感じで呆然としていた。

まるで高熱が出たかのようにボケつとした顔で頬を紅潮させている。

「どうした鈴谷？ もしかして、想像してたよりも似合ってたか？」

「え？ う、ううん！ そんなことない！ めっちゃ似合ってるし！ 想像してたよりも、似合ってたか、かつこ……いから、あう……」
なんだ？

せつかく鈴谷のおかげで前よりもいい男になれたのに、肝心な功労者が目を逸らしてしまっている。

もつとコメントとかほしいのだが……

「まあ、いいか。じゃあ他の艦娘たちにも見せに行くかなつと」

「え？」

「せつかくだからな。もつとたくさんコメント貰って次のおしやれに活かしてみるよ。ありがとな、鈴谷」

改めて礼を言って司令室を出ようとすると……

「ダ、ダメー！！！」

「ぬう!？」

いきなり背後から鈴谷に抱きしめられた！

必然的に背中にもむにゅうううんと密着する鈴谷の特大JK風おっぱい！

でつか！ 柔らかか！ あのサラトガさんにも勝るとも劣らぬ爆乳サイズ！ 重巡のくせになんてものを持ってやがる！

……じゃなくて！

「な、なにすんだ鈴谷！ 離せよ！」

「ダメ！ 絶対に行かせない！　いまの提督を他の艦娘に見せたら絶対にヤバいから！」

「なにがヤバいんだよ!？」

「提督がパパになっちゃう！」

「なぜに!？」

わけのわからないことを言う鈴谷とモミクチャともつれ合う。

背中でも文字通りモミクチャとボヨンムニヨンともつれ合う！

このままでは俺の理性が！

「なんなんだよ鈴谷！　せつかくコーデイネートしてくれたんだから他の艦娘に見てもらおうぜ!？」

「絶対にダメ！　絶対に見せない！　鈴谷だけ！　いまの提督は、鈴

谷しか見ちゃダメなの！」

「だから、なん、でっ」

「あくもう！　察してよこの鈍感く！」

「うわっ！」

激しくもつれ合うことで足下のバランスを崩し、そのまま床に倒れる。

「イテテ……あのな鈴谷、お前いい加減に……っ!？」

気づけば俺は鈴谷に押し倒されるような態勢になっていた。

緊張した面持ちで、しかし覚悟を決めたような真つ赤な顔で、鈴谷はこちらに熱い視線を注ぐ。

「……ダメだもん。他の艦娘には見せないもん。鈴谷が……鈴谷だけが独り占めしちゃうんだから」

荒い吐息をこぼしながら、鈴谷が間近に迫ってくる。

露出の少ない服から見える白い胸の谷間が、身動きするたびに蠱惑的に波打つ。

短いスカートは倒れた拍子で捲れてしまったようで、ミントグリーンショーツがうつすらと見えている。

そんなことも気にならず、鈴谷は目の前のことにしか眼中にしかないかのように身を寄せてくる。

「ねえ、提督……」

甘くからみつく蜜のような声色で鈴谷は囁く。

「あのさ……このまま女の子のことも教えてあげよつか？」

扇情的にカラダを震わせながら、鈴谷は妖しい笑みを浮かべる。

「いいよ？　鈴谷のこと、本当の恋人みたいに思っ、好きなこととして……」

淫らな雌としての毒と、初心で可憐な少女の甘みをない交ぜにしたかのような艶を放つ鈴谷。

心許ない衣服は、いよいよ乱れ、見えてはいけないものまでが果実の皮を剥くようにまろび出ようとしていた。

「提督。鈴谷と一緒に、もっとも……お勉強しよ？」

視界いっぱい、鈴谷のあどけなくも美しい顔で満たされ……

ようとした間近で、グイツと鈴谷の肩を押して一緒に起き上がる。

「いやいや、いくらなんでも、そこまでは面倒見て貰うわけにはいかな
いよ鈴谷さん」

「……は？」

「お前が意外と気遣いのできる優しいやつなのは充分承知だが、でも
嫁入り前の娘がそんなこと言っちゃいかんよ」

やはり鈴谷も過保護になってしまっているようだな。

おしやれの仕方を教えてもらったことは素直に感謝するが……でも
もだからって恋人の練習までしてもらおうわけにはいかない。

鈴谷の優しさにつけ込んでそんなことをしたら、男が廃るつてもん
だ。

「気を遣わせてすまなかったな鈴谷。確かにお前の目から見れば、
さつきまでおしやれ下級者だった俺にちゃんと恋人ができるか不安
なのも頷ける……だが心配は無用だ！　今日教わったことをきつか
けに俺は立派なおしやれ上級者となってモチモチになってみせ……」

「提督の唐変木うううう!!」

「なぜにいいいい!!」

涙目になった鈴谷の本日最大威力のチョップの音が司令室に響き

渡った。

後日……

「はい次！ 女の子がデート中に『お腹すいたね』って言いました！ 提督はどうする!?!」

「えーと、行きつけのラーメン屋に行く!」

「はい失格！ デート中の女の子は本当にお腹がすいてても男の前ではガツガツ食べてるところを見せたくないものなの！ そこは気を遣っておしゃれなカフェに行つて控えめにサンドイッチとか食べるの！ つうかラーメン屋とかマジありえない！ 提督マジでセンスなし!」

「わかんねえよ！ だったら最初からカフェに行きたいって言えばいいじゃん!」

「いい男は女の子が口にしなくても真意を汲み取つてあげるものなの!」

「そ、そんな無茶な……」

「ぐずぐず言わない! 女心がわからない提督は鈴谷がみっちり教育してあげるんだから!」

あれからずっとなぜか機嫌が直らない鈴谷は、こうして俺に『女心をマスターするためのレクチャー』をしてくる。

全問正解できるようになるまで絶対に許さないともしらしい。まるで教育ママである。

とほほ。これもひとつの過保護の形なのでしょうか……。

「ほらボケつとしない! もうぐずぐずつたいぐずつたい鈴谷の気持ちに気づくまで許してあげないんだから!」

ファッションといい、女の子のことといい、モテるつて本当にたいへんな努力が必要らしい。

天国のお父さん、お母さん。俺、無事に素敵なお嫁さん見つけれられるのかな？